

<日本の真相 5>

<日本の真相 4>では、籠神社の海部宮司にお会いしてお教え頂いたことから、古代の様々な真相が見えてきた。特に、天照大神＝神宮の本質に関わる問題に関しては、本来の主神、祀る側と祀られる側の関係、そして系図（皇統）の改竄が大きく影響して真相解明が極めて困難な状態とされていることが解ってきた。前回、これらも合わせてまとめる予定だったが、あまりにも膨大になるので、今回<日本の真相 5>としてまとめることとした。

系図の改竄は多次元同時存在の法則の本質に関わる問題であり、これまでに示してきた“同一”というカラクリを解くものである。また、祀る側と祀られる側の関係は“女帝”問題に大きく関わっており、外宮先祭や天照大神が女神とされてしまった本当の意味もそこに隠されているようである。その根底には、卑弥呼・トヨと天照大神の関係がある。

1：前回の概要

<日本の真相 4>の内容と密接に関わるので、その概要をまとめる。

- ・大物主神は少彦名神と協力して天下を治め、国造りを完成させたが、この話は海部氏・尾張氏（大物主神）と徐福（＝少彦名神）一団が友好を結んで物部氏となり、日本＝ヤマトの根幹を築き上げたことの象徴である。その後、国土を天孫ニニギに譲って杵築の地に隠退したことは、新たに渡来した秦氏一団＝天孫ニニギに物部氏が国を譲らされた、ということの象徴である。
- ・大物主神は蛇神であり、水神でもあるからエンキそのものである。また、雷神としての性格も有するが、これはヤハウエ＝ヤーの性格でもあり、籠神社の祀る海神はヤーであるという極秘伝と一致するので、大物主神は元々海部氏・尾張氏の主神である。
- ・内宮の元伊勢第一号が海部氏・尾張氏の主神を祀る大神神社の摂社、檜原神社であり、外宮の元伊勢は唯一、籠神社だけであることは、海部氏・尾張氏こそがヤマトの基礎を造っていたことの暗示である。また、大神神社が古代日本に於ける最初の神社であり、そこからすべてが始まった、ということを暗示している。
- ・上賀茂は海部氏・尾張氏と同族の賀茂氏（物部氏）であり、山城国葛野を治めていた。後に神武＝応神天皇率いる鴨氏（秦氏）が海部氏・尾張氏の治めていたヤマトを奪い取り、北上して山城国葛野に至り、鴨氏が賀茂氏に取って代わった。
- ・賀茂と伊勢は表裏一体であり、上賀茂は外宮＝籠神社に相当する。葵祭では上賀茂で御阿礼神事が行われるが、籠神社の御生れの神事に対応している。

- ・即位式で使われた黄櫨染御袍は、最後に広隆寺の聖徳太子像に着せられるが、広隆寺の聖徳太子像は海部氏・尾張氏の血統の象徴、秦氏渡来以前のヤマトの王族としての海部氏・尾張氏の象徴である。だから、海部氏・尾張氏が王族＝本来の皇統だったことを今でも認められていることの象徴である。
- ・玉依姫の母は丹波の国の伊可古夜比売であり、海部氏が秦氏に抑えられたことが暗示されている。
- ・古代ヤマトでは、日が昇る東西方向に神殿は向いていた。
- ・尾張氏の神殿である熱田神宮本殿には尾張氏の祖である建稲種命と宮簀媛命が相殿神として祀られているが、上知我麻神社にはこの二方の父である乎止與命が祀られており、乎止與命が祀られている上知我麻神社の方が、尾張氏の神殿建築を表していることになる。また、建稲種命は“稲の種＝粃”で豊受大神を象徴しており、宮簀媛命の“宮簀”は籠神社の鎮座する“宮津”に通じ、建稲種命が豊受大神、宮簀媛命が籠神社の鎮座する宮津を象徴し、豊受大神を本来の主神とする籠神社を象徴している。そして、海部氏と尾張氏は“兄弟”である。
- ・太古の出雲大社で重要なのは中心を貫く宇豆柱であり、宇豆＝ウズ＝ウジ＝ウツで、シュメールの太陽神ウツに因んでいる。
- ・天御量柱の長さは、時の天皇の背丈と同じ長さだった。それは、初代天皇たる神武＝応神天皇のことである。応神天皇は海部氏・尾張氏に婿入りしていたから、海部氏・尾張氏の大王でもあり、心御柱に象徴される“時の天皇”に相応しい。
- ・神武天皇の後の祖父は三嶋溝杭耳神＝大山祇神と同じであり、海部氏の象徴である。
- ・武内宿禰の叛乱討伐は日本武尊と重ねられ、共に“武”の字を有し、倭宿禰＝武内宿禰＝豊受大神で海部氏・尾張氏の象徴である。武内宿禰が海部氏、草薙神剣に関係の深い日本武尊が尾張氏を象徴している。そして、倭宿禰＝武内宿禰が初代天皇を導いて東征したことは、日本武尊の東征に重ねられており、正史としての初代天皇に“武”の字が当てられているのは象徴的である。
- ・古事記では、神武天皇に向かって国神と宣言した珍彦という人物がいる。先代旧事本紀の皇孫本紀には彦火火出見の第二子、武位起命の子が椎根津彦で、その本名が珍彦であり、大和国造の祖、大和直部之始祖となっているので、珍彦はヤマトの祖＝海部氏・尾張氏である。そして、武位起命は海部氏の祖である建位起命と同一である。よって、武内宿禰の伯父、宇豆比古＝珍彦は

海部氏・尾張氏だから、武内宿禰もその一族である。

- ・蘇我氏の祖とされる武内宿禰が海部氏・尾張氏の一族ならば、蘇我氏は海部氏・尾張氏の別名あるいは同族、あるいは婚姻などの極めて血縁の深い一族と考えると良く、“正史”に登場する蘇我氏は海部氏・尾張氏の系譜を象徴している。
- ・尾張氏の初期の祖の母はほとんど葛城氏であり、尾張氏と葛城氏がかなり密接な関係にあったことを示しており、尾張氏と葛城氏は同族とも言える。邪馬台国とは、纏向と葛城が一体となった国だが、“東の纏向”を尾張氏が、“西の葛城”をもう 1 つの国造りの神として象徴される少彦名神＝徐福一団が治めていた。つまり、葛城氏は徐福一団の系統であり、尾張氏に后を出していることからすると、中でも徐福直系あるいは始皇帝の直系あるいは縁者系と考えられる。
- ・蘇我稲目は“稲芽”に通じるから“粃”＝日本の食の根幹を象徴しており、籠神社の祭神である豊受大神と、籠神社ににあったと言われるマナの壺を象徴している。
- ・籠神社に関係の深い塩土老翁、浦島太郎、そして武内宿禰はいずれも異常な長寿で、老人ということが共通である。そして、“童”“鬼”も合わせて、海部氏・尾張氏と徐福の象徴である。
- ・乙巳の変は氣比神宮の謂れを基に創られた、あるいは秦氏によってそれと同時期に創られた創作である。
- ・諏訪大社の神官・守矢氏は海部氏と同族の安曇氏である。安曇は本来“アド”と読み、エフライム族＝海部氏・尾張氏との関わりが深かったフェニキアの言葉で“主＝アドーン”を意味する名称で、イナンナがドゥムジを呼ぶ時の愛称である。それ故、御柱祭はイナンナそのものを象徴するお祭り、イナンナとドゥムジの聖婚を象徴するお祭りである。
- ・天智天皇と中臣鎌足＝秦氏は親百済派、蘇我氏、海部氏・尾張氏と天武天皇は親新羅派である。
- ・海部氏の一族が半島に渡って新羅建国の根幹を成した。中でも、瓠公は新羅の 3 王統の始祖のすべてに関わる最重要人物である。その名に因んで、籠神社の奥宮は吉佐宮＝瓠宮と言われている。
- ・かつての丹波国では、不老不死と生命の再生をもたらすと信じられ、王権の象徴だった玉造りが盛んであり、権力的に最大の王国だった。

- ・現在、マナの壺は外宮に、八尺瓊勾玉は皇居にあるが、外宮の元伊勢は唯一、籠神社だけなので、外宮は海部氏＝古代の皇統を、皇居は現在の皇統を象徴している。
- ・玉の関連では、天児屋根命は秦氏、天太玉命は海部氏・尾張氏の物部氏を象徴し、天岩戸隠れの場面に於いても、海部氏・尾張氏が秦氏によって抑えられたことが暗示されている。
- ・天智天皇の時代まで蘇我氏が実権を握っていたことは、物部氏に代わって蘇我氏が天皇家を思うように動かしていたということではなく、海部氏・尾張氏の真相が隠されただけで、実際には蘇我氏を含めた海部氏・尾張氏一族が天智天皇の時代まで外戚として天皇家を守ってきたことを暗示している。それは、蘇我氏一族の邸宅跡などが物語っている。
- ・田道間守や天之日矛＝天日槍は海部氏の祖であり、天日槍＝天之日矛＝ツヌガアラシトは新羅建国に関わった海部氏縁の脱解王の子孫、田道間守はその子孫である。これは、スサノオが高天原を追放された後、檀国に降臨した逸話に反映されており、海部氏一族の者が新羅に渡って脱解王となり、その子孫である天日槍がヤマトに戻って来たことを象徴している。
- ・田道間守は垂仁天皇の時代であるが、垂仁天皇の後や妃は海部氏系が多い。また、垂仁天皇の時代に纏向＝邪馬台国の本拠地への遷都、新羅王子の天日槍の来朝、倭姫命による天照大神祭祀の開始などがある。つまり、邪馬台国建国をこの時代に反映させている。
- ・籠神社の海の奥宮、冠島と杳島には天火明命と日子郎女神が祀られている。
- ・継体天皇は元々の皇統である海部氏の王である。
- ・大己貴神と少彦名神による国造りは、出雲との関わりを暗示している。
- ・海部氏・尾張氏の物部王国で祭祀を司っていた神官家の中臣氏は鎌足によって乗っ取られた。
- ・天武天皇は海部氏によって養育された海部氏の王である。
- ・不比等が命じて作らせた日本書紀には、大海人皇子が天武天皇となるきっかけとなった壬申の乱に於ける尾張氏の活躍を黙殺しており、海部氏・尾張氏の真相を隠している。
- ・神別系図には二大系図があり、天神系神別系図（天孫本紀の尾張連等系図）と地祇系神別系図（地祇本紀）であるが、天神系神別系図は一大本宗系図と

も言うべき基本系図＝大倭王の伝系であって、邪馬台国の王族が海部氏・尾張氏であり、本来の皇統である、ということに他ならない。

- ・女性天皇のほとんどが孝謙天皇＝称徳天皇までの時代である。
- ・男系男子で見れば第47代・淳仁天皇までは確実に天武天皇＝海部氏・尾張氏の血統だが、第49代・光仁天皇からは天智系となっている。第45代・聖武天皇は不比等の娘を后とし、実質的にこの時点から鎌足－不比等という表の秦氏が外戚として権力を握っていった。
- ・持統天皇は天武系を謀殺しており、天智系と天武系の対立が見て取れる。
- ・天武系天皇は皇室の菩提寺・泉湧寺で祀られておらず、平安時代、天武系の天皇陵に対しては奉幣の儀も行われていない。これなども、海部氏・尾張氏の血を引く天武系天皇と、天武系と婚姻関係を結んでいた天皇が無視されていることの一例である。
- ・天武系男系の最後の天皇、聖武天皇は藤原氏に抵抗し、東大寺に行幸して大仏に北面して頭を垂れた。これは、不比等らが創作した新生・中臣神道を否定したことを象徴する。
- ・熱田神宮、源氏、信長、秀吉など、海部氏・尾張氏系が台頭してくるたびに潰されている。
- ・鹿児島島の島津氏は海部氏・尾張氏と同族である。それは、住吉大社にある誕生石のいわれが物語っている。また、熊本、宮崎も関係が深い。
- ・“熊”は敵対する勢力を示唆するが、海部氏の祖に建振熊宿祢という“熊”の字が入った人名があり、その元は、最後まで抵抗していた海部氏・尾張氏を象徴している。
- ・天火明命とその子の天香語山命は最初からヤマトの地に降臨したが、天火明命の孫である天村雲命は最初に日向国に降臨し、それから丹波、ヤマトへと降臨した。
- ・神宮の元々の神官・渡会氏は海部氏・尾張氏と同族で、天牟羅雲命＝天村雲命を祖に持つ。天村雲命は日向国の高千穂に降臨し、阿俣良依姫を娶ったが、神武天皇の妃は日本書紀では吾平津姫、古事記では阿比良比売であり、阿俣良依姫の名を基にして神武天皇の妃の名を秦氏が創作したことが伺われる。
- ・天村雲命は天祖から授けられた天押穂井の水を高千穂の御井に崇め置かれたが、それを丹波の真名井（籠神社奥宮）に遷されたことは、豊受大神を丹波

国真名井の原へ遷し祀られたことになる。この逸話は三種の神器の1つ、マナの壺の移動経路を象徴していると考えられる。

- 高千穂にある天逆矛は「生命の樹」の象徴だが、天之日矛＝天日槍、天村雲命と大きな関連がある、あるいは同一人物とも言える。
- 日本書紀では天之日矛＝都怒我阿羅斯等は但馬国の出石に至って定住したされているが、天村雲命に葛木出石姫という子がおり、天之日矛と天村雲命の共通点が見出せる。そして、出石姫の母は、籠宮祝部氏の伝に依ると伊加里姫と言ひ、丹波の生まれとされている。これからも、葛木氏＝葛城氏は海部氏・尾張氏と同族的と言える。
- 住吉大社には海神と神功皇后が祀られており、御紋が神宮と同じ花菱紋である。この御紋は神功皇后の新羅出兵の際、皇后が身に付けられていた鎧にあった御紋、ということだが、神宮＝天照大神に隠された秘密が卑弥呼とトヨ、籠神社に大きく関わっていることが暗示されている。また、三海神が縦一列にまとまって海神を、その横に日神＝天照大神を象徴する神功皇后を配置することによって「合わせ鏡」を示唆しており、それは両者の性質を併せ持つスサノオに他ならない。
- 天照大神の日本書紀に於ける別名は大日靈貴神であるが、真意は“大いなる日神が降臨する巫女”という意味であって、“日神である女神”ではない。
- 記紀と第7代・孝靈天皇の皇女、倭迹迹日百襲姫命の逸話から、倭迹迹日百襲姫命＝天照大神、天照大神＝卑弥呼、倭迹迹日百襲姫命＝卑弥呼という関係が成り立つ。
- 倭迹迹日百襲姫命が大物主神＝蛇神と結婚したこと、蛇に関わるスサノオによって天照大神は陰部を突いて傷付いた（死んだ）ことは、蛇神とそれに仕える巫女との聖婚を象徴している。ならば、スサノオにも日神としての性質が隠されていることになる。そして、これら聖婚の大元はイナンナである。
- 籠神社の奥宮本殿裏の磐座主座には豊受大神が祀られており、その御魂は宇迦御魂で亦名が鹽土老翁＝塩土老翁＝塩椎神、大綿津見神、住吉同体（住吉大社）である。つまり、これら海に関わる神々はいずれも豊受大神であり、豊受大神＝天照国照彦火明命＝日神だから、海神には日神としての性質が備わっている。
- 熊野大神の亦名は須佐之男神であり、その原型はイナンナである。スサノオが祀られている京都の有名な神社は八坂神社だが、八坂＝弥栄＝ヤーで、スサノオ＝ヤーとなり、ヤーは籠神社の主神だから、実はスサノオも籠神社の主神となる。

- 大国主神の前に現れた“海を照らしながらやって来て国をも照らした”大物主神は“海照国照彦（火明命）＝天照国照彦（火明命）”となり、籠神社の主神となる。
- 大国主神の和魂が大物主神であり、“国津神＝最初にヤマトの地を治めていた神は物部氏由来”ということを象徴している。
- 出雲国造家が当初に祀っていたのは出雲杵築大社でも神魂神社でもなく、意宇川上流の熊野大社であり、籠神社奥宮の重要な磐座主座の後ろ＝天香語山の麓の石碑に書かれて祀られている熊野大神こそが、出雲の根源である。
- “香語＝カゴ、カグ、カガ”は古代朝鮮語で鉾山の“鉾”を意味するので、鉾石から作られる剣が象徴となり、出雲と尾張で草薙神剣という共通の剣が登場する。
- 少彦名神＝徐福が常世国へ去ったのは熊野からと言われているが、籠神社の海の奥宮、冠島と杳島は常世島であり、少彦名神が常世国へ去った根源の話と思われる。
- 出雲では月の名称、神事、注連縄の向きなど、他とは逆で「合わせ鏡」になっている。
- 出雲大社の拝殿は南向きだが、その中の神座は西向きであることが隠されている。西向きは住吉大社と同じ向きで、住吉では実はスサノオを祀り、本来の出雲は熊野大社で、籠神社の極秘伝から熊野大神＝スサノオである。そうすると、“裏で”スサノオを祀る両社の神座が西を向いていることは、スサノオが檀国＝新羅に関わりが深いことを象徴しており、それが隠されているという意味である。出雲大社の御紋は神宮と住吉大社の花菱が物部氏の象徴の亀甲紋に囲まれた形状であり、このような関係を暗示している。
- 卑弥呼、トヨ、天照大神、スサノオが密接に関わり合い、更にシュメールが関わって、古代史の複雑な謎を解く鍵を示唆している。
- 豊受大神は真名井の水に関わり水徳だから陰徳、天照大神は日神で火徳だから陽徳である。しかし、豊受大神を根源神の天之御中主神として崇め祀るならば、天神で陽徳となり、対する天照大神は地祇の第一の大神で陰徳となるので、どちらも陽となり陰となり得る。
- イザナギが禊で左目を洗った時に生まれた神が天照大神、右目の時に月読命、鼻の時にスサノオが生まれたが、イザナギの顔がこちら側を向いていれば、中心がスサノオ、向かって右が天照大神、向かって左が月読命となる。スサノオの原型はイナンナだから、ヤマトの根幹は海部氏・尾張氏によってイナ

ンナを中心にして行われた、ということを示している。天照大神は太陽神としての性質で、ウツが相当する。月読命はエンキである。

- “天照国照彦（火明命）＝天を照らし国をも照らす男神”の性質は猿田彦のものであり、猿田彦にはニンギシュジツダの象徴も重なること、そして人類創成、ピラミッドやストーンヘンジ建造、カッパーラ創作、蛇としての象徴、マヤ文明の創成などから、天照国照彦はニンギシュジツダとも言える。
- 大地に打ち込まれる柱は神殿の原型で、大地にそびえ立つ御神体の山と共に神が降臨する依り代である。神は天から降臨するので“陽”となり、それを受ける依り代は“陰”となる。そして、柱はイナンナを象徴し、天神としての根源、天照国照彦火明命が太陽神ウツの象徴ならば、心御柱と太陽神で陰陽を成す。あるいは、ニンギシュジツダの象徴ならば、柱（陰）に巻きつく蛇（陽）となり、天照国照彦火明命＝大物主神では山（陰）に住まう蛇神（陽）となり、陰陽を成す。
- 大嘗祭では“真床御襖の秘儀＝最後の晩餐→死→復活を象徴する秘儀”は行われず、天皇御親らが神になる作法ではない。丁重に神迎えして天照大神をおもてなしする天皇一世一代の秘儀であり、現在の神道祭祀の作法に通じている。そして、真床御襖は神が降臨する場であり、神ではない天皇は入ってはならない、触れてはならない神聖な場所である。
- “888”の並びはギリシャ語で“キリスト”を意味するが、1つはニビルの象徴としての八角星、1つはイエスの原型となったイナンナの星・金星を象徴する八角星、そして、もう1つはイエスが誕生した時に天空に輝いた八角形のベツレヘムの星（実はニビル）である。しかし、必ずしもイエスが必要というわけではなく、アヌーエンキーニンギシュジツダでも良いし、アヌーエンキーイナンナ、エンキーニンギシュジツダーイナンナなどでも良いわけで、“降臨する神々”という広い見方が可能である。特に、海部宮司はイナンナとヤー、太陽神ウツを重要視されており、スサノオ、天照大神、月読命の関係からも、復活と不老不死の原型となったイナンナ、彼女と双子の太陽神ウツ、そして地球の主で海神ヤーであるエンキという解釈が妥当だろう。

2：系図の改竄

古代史解明がこれほど混乱しているのは、解明の基となる系図が混乱していることに依るが、これは系図が改竄されているためである。それを明らかにしたのが、海部光彦宮司の義理の父、海部毅定氏である。（海部宮司は宇佐神宮から海部家に婿入りされた。）ここでは、氏の著書「元初の最高神と大和朝廷の元始（桜楓社）」をまとめ、系図がどのように改竄されているのか明らかにする。

他にも、伝承・逸話に隠された古代史の真相、秦氏渡来以前からヤマトで祀られていた神や邪馬台国の女王、卑弥呼とトヨに関する記述もあるので、それ

らもまとめる。

(1) 先代旧事本記

これまでに、秦氏によって海部氏・尾張氏は抑えられ、真相は隠されてしまったことは述べてきたが、海部毅定氏も著書の中で次のように強調されている。

“（籠神社は）豊受大神奉祭の本地ではあっても、雄略天皇以前の祭祀と同様の祭祀を続けることはできなくなった。これには、中央集権的・政治的意図が感じられる。”

ここでは、中央集権的・政治的意図が成されたのは大化の改新以後、とされているのだが、大化の改新については<日本の真相 4>で記したように、架空の可能性が高いので、表向きは革新が成された大化の改新ということにして、実質は鎌足一不比等の時代からだろう。それは、日本の正史とされる記紀がその時代に編纂されたということからも伺える。

記紀が編纂されるに於いて、各豪族は資料をすべて没収された。そこには当然、古代の真相や正しい系図があった。その後、戻されて公開された資料は、当然のことながら“公開しても差し支えない”ものであり、改竄が成されているのである。その代表的なものが先代旧事本記である。海部毅定氏も先代旧事本記を基に考察されているので、まずは先代旧事本記について概略を記す。（以下、「古代物部氏と「先代旧事本紀」の謎（安本美典著、勉誠出版）」参照。）

先代旧事本記は、秦氏渡来以前の物部氏の傳承を記紀よりも遙かに詳しく伝えた、平安初期頃に成立したと考えられる歴史書とされている。序文には“推古天皇 28 年（AD620 年）に、勅によって聖徳太子が蘇我馬子とともに撰定した”と記され、近世になるまではそのように信じられていた。しかし、本文の大部分が記紀や古語拾遺からの引用で成っていることや、天皇諡号など、後代になって出現したことに關する記載があることなどから、現在では聖徳太子らが編纂に携わったことはあり得ないと否定されている。また、古事記、続日本紀、弘仁格式（こうにんきやくしき）などと比べて、序文の形式が当時のものと異なっていることも指摘され、日本書紀推古 28 年の条に“皇太子・嶋大臣、共に議りて、天皇記及び国記、臣連伴造国造百八十部并て公民等の本記を録す”という記事があることから、先代旧事本紀はこれに付会して成立年代を遡らせた“偽書”であるという意見も根強い。また、推古天皇が史書の編纂を命じた年月日が本文と序文の両方に記載されているが、双方で日付が異なっている。序文では、暦の干支の扱いも誤りがある。同一の著者が書いたのであれば、このようなことは起こらないはずで、明らかに序文は本文とは別人の作と思われ、これらも偽書説を補強する材料となっていた。

しかし近年、作為的な部分は序文など一部分だけで、記紀に準じる史料価値を認めても良いのではないか、という意見もある。内容自体は古事記、日本書紀と同じような事績が綴られていて、神代から推古天皇に至るまでの内容が、記紀、古語拾遺などを参考にして書かれているのだが、“偽書”とされるのは上

記の“聖徳太子の撰”を騙ったと見られているため、内容的には、全体に物部氏に関する独自の伝承が織り込まれており、これには拠るべき古伝があったのではないかとする見解である。先代旧事本紀の物部氏の伝承や国造関係の情報は、他では得られない貴重なもので、推古朝遺文のような古い文字の使い方があるので、相当古い資料も含まれている可能性がある。

本居宣長は古事記伝・巻一で、「(先代旧事本紀)の巻三の饒速日命が天から降るときの記事と、巻五の尾張の連、物部の連の世継ぎ(系譜)と巻十の国造本紀などは、他のどの書物にも見えず、新たに造作した記事とも思えないので、然るべき古書があって、そこから採ったものだろう」と述べているが、現代でもこの意見に賛成する研究者は多い。特に、巻五の天孫本紀、巻十の国造本紀は尾張氏・物部氏の伝承等古い資料に依っているとわれ、記紀には無い記述が見られる。

平安時代以前の文献と成立時期、平安時代初期の文献と成立時期は次のようになる。

- ・古事記 AD712 年、日本書紀 AD720 年、出雲国風土記 AD733 年、万葉集 AD770 年頃、続日本紀 AD797 年、古語拾遺(こごしゅうい) AD807 年、新撰姓氏録(しんせんしょうじろく) AD815 年、先代旧事本紀?

先代旧事本紀は全 10 巻から成っており、次のような構成である。

- ・第 1 巻：神代本紀(かみつみよのもとつふみ)、陰陽本紀(あめつちめおのもとつふみ)
天地の始まりから天照大神ら三貴子の誕生まで。
- ・第 2 巻：神祇本紀(あまつかみくにつかみのもとつふみ)
天照大神とスサノオの誓約(うけい)から、スサノオの高天原追放まで。
- ・第 3 巻：天神本紀(あまつかみのもとつふみ)
物部氏の祖神である饒速日尊(ニギハヤヒノミコト)の天孫降臨から出雲国譲りまで。
- ・第 4 巻：地祇本紀(くにつかみのもとつふみ)
スサノオ、大己貴命ら出雲神の神話。
- ・第 5 巻：天孫本紀(あめみまのもとつふみ)
ニギハヤヒの後裔とされる尾張氏と物部氏について。
- ・第 6 巻：皇孫本紀(すめみまのもとつふみ)
ニニギの天孫降臨から神武天皇東征まで。
- ・第 7 巻：天皇本紀(すめらみかどのもとつふみ)
神武天皇の即位から神功皇后まで。
- ・第 8 巻：神皇本紀(かみつすめろぎのもとつふみ)
応神天皇から武烈天皇まで。
- ・第 9 巻：帝皇本紀(すめらみかどのもとつふみ)
継体天皇から推古天皇まで。

・第10巻：国造本紀（くにのみやっこのもつつふみ）

大倭国造から多ネ嶋国造まで、124の国造の由来について。

先代旧事本紀の中で、天孫本紀、国造本紀と並んで重要視されるのが、ニギハヤヒの降臨伝承が載っている天神本紀である。32人の武将、5人の随行者、5集団の供、25の軍団、船長・楫取など6人の名前も見え、日本書紀・神武即位前紀にある“昔、天神の子・ニギハヤヒが天磐船に乗って天降った”という記述を具体的なものにしてしている。なお、旧事紀には72巻本と30本のものなどもあるが、両書は江戸時代に創られたもので10巻本旧事紀とはまったくの別物である。

物部氏の祖神・ニギハヤヒについて、古事記は神武天皇の東征に続いてニギハヤヒが天降って来たと記し、日本書紀は神武天皇の東征以前に大和に天降り、“天神の子”を称して、神武天皇もそれを認めたとしているが、ニギハヤヒがいつ降臨し、神々の系譜上どこに位置するのかについてはまったく触れていない。しかし、先代旧事本紀では神代本紀に於いて、中臣氏や忌部氏、阿智祝部氏らを、皇室に連なる神世七代天神とは別の独化天神の後裔として、皇室と距離を取らせる一方、天神本紀などでは、ニギハヤヒを尾張氏の祖神である天火明命と同一神にして、ニニギと同じ天孫に位置付け、物部氏の格の高さを主張している。また、物部氏の人物が“食国（おすくに）”の政を申す大夫、大臣、大連といった執政官を多く輩出し、代々、天皇に近侍してきたことを強調している。先代旧事本紀はその取り扱いに注意を要するとは言え、文献の絶対数が少ない古代の研究のためには、貴重な資料の1つであることは間違い無い。

天孫本紀の尾張氏系譜、物部氏系譜、地祇系譜、大歳神系譜、大己貴神系譜をまとめて別添付する。また合わせて、国宝に指定され、古代史の謎を解く鍵となる海部氏系図・勘注系図も示す。

(2)天孫本紀と海部氏系図（勘注系図）

記紀以外の重要な資料、天孫本紀については前述の通りであるが、海部毅定氏に依ると、天孫本紀に於ける尾張氏連等世系は単に尾張氏の伝系と言うべきものではなく、皇統の一大本宗系図とも言うべきもので、一部分は本来の皇統を示しているという。それが、このような系図として改竄されているのだが、どのように改竄が成されているのかを考察する。

系図の各世代について文章で詳しく記しても、何のことが解らないと思われるので、まずは略式系図を示す。本来、各系図を参照する必要があるが、すべてを記していると煩雑になってしまうので、ここでは皇統、天孫本紀の尾張氏系譜、海部氏伝系の1つ、国造本紀の2伝系を主とし、一覧表にまとめる。詳細は別添付資料参照のこと。

天孫本紀に於ける年代移動の一例

	皇統	天孫本紀尾張氏	海部氏伝(1)	神武=天村雲命	神武=彦火明命	国造本紀伝系(1)	国造本紀伝系(2)	記紀への変遷	邪馬台国の鍵
	瓊瓊杵尊	饒速日尊	彦火明命		天御蔭命	彦火明命	彦火明命		
	火遠理命 (彦火火出見)	天香語山命	天香語山命	彦火明命	笠水彦命	天香語山命	天香語山命		乎縫命
	鵜草葺不合命	天村雲命	天村雲命	天香語山命	筥津彦命	天村雲命	天村雲命		建稻種命
第1代	神武	天忍人命	天御蔭命	天村雲命	彦火明命	天忍人命	天忍人命	天戸目命	笠水彦命
第2代	綏靖	瀛津世襲命	笠水彦命	天忍人命	天香語山命	天戸目命	天戸目命	建斗米命	筥津彦命
第3代	安寧	建筒草命	筥津彦命	天戸目命	天村雲命	建斗米命	建斗米命	建田背命	川上真稚命
第4代	懿德	建田背命	建田勢命	建斗米命	天忍人命	建田背命	建田背命	建諸隅命	大倉岐命
第5代	孝昭	建諸隅命	建諸隅命	建田背命	天戸目命	建諸隅命	建諸隅命	倭得玉彦命	彦火明命
第6代	孝安	倭得玉彦命	倭得魂命	建諸隅命	建斗米命	倭得玉彦命	倭得玉彦命	意富那比命	天香語山命
第7代	孝靈	弟彦命	意富那比命	倭得玉彦命	建田背命	意富那比命	意富那比命	乎縫命	天村雲命
第8代	孝元	淡夜別命	乎縫命	弟彦命	建諸隅命	(乎縫命)	乎縫命	天御蔭命	天忍人命
第9代	開化	乎止與命	小登與命	乎止與命	倭得玉彦命	乎止與命	天御蔭命	笠水彦命	天戸目命
第10代	崇神	建稻種命	建稻種命	建稻種命	弟彦命	建稻種命	笠水彦命	筥津彦命	建斗米命
第11代	垂仁	尾綱根命	志理都彦命	笠水彦命	乎縫命	笠水彦命	筥津彦命	乎止與命	建田背命
第12代	景行	尾治弟彦連	川上真稚命	筥津彦命	乎止與命	筥津彦命	乎止與命	建稻種命	建諸隅命
第13代	成務	尾治金連	丹波大矢田彦	川上真稚命	建稻種命	川上真稚命	建稻種命	大倉岐命	倭得玉彦命
第14代	仲哀	尾治坂合連	大倉岐命	大倉岐命	大倉岐命	大倉岐命	大倉岐命		弟彦命
第15代	応神								乎止與命

重要

重要

重要

国造本紀伝系(1)
の変形

国造本紀伝系(2)
の変形

建稻種命の代数と
して天孫本紀へ
(建稻種命は
彦火明命から12世
天孫本紀では
ニギハヤヒ
=彦火明命

建稻種命と
大倉岐命の
間にプラス

乎縫命を入れれば
建稻種命は
彦火明命から12世
古伝では乎止與命
が10世
(乎縫命は無し)

海部氏伝(2)

乎止與命と
建稻種命の

上にプラス

弟彦の兄弟姉妹に
日女命
乎止與はトヨを
暗示

海部氏・尾張氏の祖は天火明命だが、天孫本紀に於ける天火明命の伝は、物部連等の祖であるニギハヤヒの伝と習合されている。天孫本紀では、天火明命はニニギの兄とされている。その末裔である建稲種命は12世孫であるが、新撰姓氏録に依ると15世孫とされており、3代の差が生じている。新撰姓氏録に従えば、建稲種命は第13代・成務天皇の御代に該当する。(子が1世孫、孫が2世孫、曾孫が3世孫、…と言う。)

天孫本紀では火明命7世孫・建諸隅命(タケモロスミノミコト)について第5代・孝昭天皇の御代の人と伝えている。そうすると、天火明命から天村雲命に至る3代は神代に該当し、建稲種命は第10代・崇神天皇の御代に相当する。しかし、天孫本紀の別の一伝に依ると、4世孫・瀛津世襲命(オキツヨソノミコト)が孝昭天皇の御代に該当していると伝える。そうすると、建稲種命は第13代・成務天皇の御代に該当する。

天孫本紀と新撰姓氏録だけではなく、天孫本紀内での別伝でも、3代の相違が発生しているが、これは、天火明命から天村雲命に至る3代を神代とするか人代とするかに依っており、場合によって末代の3代を系図上で削除するという操作が成されている。その操作は、建稲種命が火明命の12世孫である場合でも、15世孫である場合でも、およそ成務天皇及び日本武尊の御代に該当するように操作してある。すなわち、天火明命から天村雲命に至る3代を神代としている場合が15世孫であり、人代として、後の方の3代を省略してある場合が12世孫となるのである。

このように、天孫本紀の伝系には、各世代の年代に移動が見られ、このような年代の移動は少々には止まらない。しかし、天村雲命に着目すると、天村雲命は阿多君(アタノキミ)の一族、阿俣良依姫を后とされ、阿俣良=阿比良で日向国の地名であり、天忍人命、天忍男命が誕生したという天孫本紀の伝と、神武天皇が日向にいた時に阿多の小椅君(オハシノキミ)の妹、阿比良姫を娶り、多芸志美美命、岐須美美命が誕生したという古事記の伝は非常に類似しており、神武天皇が日向からヤマトへ遷ったように、天村雲命も日向から(丹後を経て)ヤマトへ遷ったことも一致している。よって、天村雲命の年代が神武天皇の年代に該当することが基本となる。(表中の「神武=天村雲命」。)

そうすると、建稲種命が第11代・垂仁朝時代となり、前述の内容とは矛盾が発生する。これは、乎止與命が実は乎縫命(淡夜別命と同時代)と同一であるという海部氏伝系に依れば、年代が一代繰り上がって建稲種命は崇神朝となるわけである。

以上、天孫本紀に於ける年代は全面的に大移動を生じているが、最も基本となるのは、天村雲命、天忍人命を神武朝、建諸隅命を孝昭・孝安朝、弟彦命を孝霊・孝元朝、淡夜別命と乎止與命を孝元・開化朝、建稲種命を開化・崇神朝とする年代である。このような伝系を無視しては、神武天皇以降崇神天皇以前史を考察することは、極めて困難となり、故に、学会では古代史が混乱しているのである。

ここから、更に詳しく考察する。まずは、1代の年代操作についてである。海部氏伝系の大矢田宿祢命（オオヤタノスクネノミコト）と大倉岐命（オオクラギノミコト）は異名同人とされている。大矢田宿祢命は火明命の15世孫、大倉岐命は16世孫だが、両者が同一ならば、ここでも1代の年代操作が見られる。このような1代の年代操作は、火明命をニニギの子で彦火火出見命の弟とする日本書紀に対して、天押穗耳命の子でニニギの兄とする古事記を比較した場合のような相違となる。つまり、記紀はこのような操作が行われていることを暗示している。

大倉岐命の亦名で尊称が倭宿祢命（ヤマトノスクネノミコト）であり、火明命の14世孫・川上真稚命（カワカミマワカノミコト）も亦名が倭宿祢命である。倭宿祢命は景行天皇の皇子とされているが、大和国造の祖でもある。また、丹波国造海部直氏の伝系に依ると、彦火明命の3世孫とする古伝が存在していて、この伝では火明命は彦火明命と記されて正哉吾勝勝也速日天押穗耳尊の第三子と伝えられ、記紀とは相違している。古事記では天火明命と記され、父神は正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命と言い、第一子となっているが、日本書紀ではニニギの子となっており、名も火明命とされている。一伝に依ると、彦火明命の亦名が彦火火出見命であり、その子は武位起命、孫は宇豆彦命、3世孫は倭宿祢命とされている。

火明命の相関

古事記	天照大神	天忍穗耳命	天火明命 ニニギ	
日本書紀	天照大神	天忍穗耳命	ニニギ	火闌降命 火明命 彦火火出見尊
日本書紀一書	天照大神	天忍穗耳命	火明命 ニニギ	
勘注系図	天照大神	天忍穗耳命	杵火火置瀬命 彦火明命 彦火耳命	武位起命

天孫本紀の伝系は日本書紀の伝系、すなわち、火明命をニニギの子とする伝系に比せられ、乎止與命を11世孫とする場合は、古事記に於けるニニギの兄である火明命の伝系と比せられた場合に合致する。つまり、天孫本紀では火明命を天押穗耳尊の子と記しながら、実はニニギの子としての伝系に合致することになっており、考慮を欠くと、そこに1代の錯誤が生じ、乎止與命が10世孫となったり11世孫となったりする。本来、乎止與命は10世孫である。

海部氏伝系以外の伝系で乎止與命と建稻種命の上下にあるいは加わり、あるいは削除されている3代を、一伝では天御蔭命（アメノミカゲノミコト）、宇介美都彦命（宇介水彦命、笠水彦命、いずれもウケミズヒコノミコト）、宇介津彦命（笠津彦命、ウケツヒコノミコト）と言い、一伝では宇介美都彦命（宇介水彦命、笠水彦命）、宇介津彦命（笠津彦命）、川上真稚命と伝えられている。前

者は乎止與命及び建稻種命の2代上に（表中の「国造本紀伝系(2)」）、後者は建稻種命と大倉岐命の間（表中の「神武＝天村雲命」、「国造本紀伝系(1)」）に加わっているが、いずれにしても、建稻種命から大倉岐命に至る5代は成務朝に該当する。

宇介津彦命＝笠津彦命はウガヤフキアエズ（神武の父）あるいは武位起命の異名とされている。海部氏の勘注系図では、武位起命は彦火明命の子だから天香語山命に相当することになり、その子、天村雲命はウガヤフキアエズの子、神武天皇に相当することになり、前述のように、天村雲命の年代が神武天皇の年代に該当することが基本となる、ということと矛盾しない。

しかし、新撰姓氏録では、宇介水彦命は天火明命あるいはニニギを、宇介津彦命は火明命あるいは彦火火出見命を意味しているとされ、倭宿祢命は宇介水彦命の4世孫、宇介津彦命の3世孫とされている。また、国造本記では倭宿祢命は宇介水彦命の3世孫ということになっており、その子は宇介津彦命、孫は宇津彦命（宇豆彦命）となっており、ここでも系図の改竄により世代の相違が見られる。

なお、海部氏伝では宇介水彦命の4世孫は倭得魂命で亦名が川上真若命＝川上真稚命であり、川上真若命は彦火明命の8世孫、川上真稚命は14世孫である。そうすると、8世孫＝14世孫となり、いわゆる多次元同時存在となる。更に、倭宿祢命の亦名とされる天御蔭命は彦火明命の3世孫だが、倭宿祢命は宇介水彦命の3世孫＝建諸隅命という新撰姓氏録、あるいは4世孫＝倭得魂命という国造本記の伝承を合わせてしまうと、海部氏伝に於ける天御蔭命から建諸隅命あるいは倭得魂命まで同一人物ということになってしまい、これも多次元同時である。

実は、天孫本紀伝系は11世孫から15世孫に至る5代（表中「海部氏伝(1)」の小登與命～丹波大矢田彦）の内、3代（志理都彦命、川上真稚命、丹波大矢田彦）が削除され、実際は16世孫に当たる世代（尾綱根命）が13世孫になっている。記紀は、この削除伝系を基に構成されている。（表中の「記紀への変遷」。）蘇我氏の祖、武内宿禰が成務・仲哀・応神朝の3代にわたる人と伝えられていることは、このような伝系の年代操作に依るものである。

また、例えば6世孫以下8代が省略され、そのまま6世孫が14世孫の位置にシフトされた場合、その上の空いた部分に省略された8代を加えると、世系の代数上ではまったく同じ形になるのだが、移動させられた分は年数の上では8代分だけ上昇することになり、そのような操作が行われている部分もある。

以上のように、年代移動のカラクリにより、年数だけが吊り上げられてしまったのである。それは、伝系としての世代ではなく、歴史的年代・歴史的逸話に於いてでも、ということである。特に6世孫・建田背命並びにその世代の人たち、中でも海部氏伝系の傍系に当たる天造日女命（アマツクルヒメノミコト）、大倭姫、竹野姫、大海靈姫命（オオアマヒルメヒメノミコト）、日女命（ヒメノミコト）などの逸話や業績が垂仁朝に該当する場合、7世孫・建諸隅命から10世孫・乎止與命までの4世代は、大方、景行天皇から神功皇后・応神天皇まで

に該当する。とりわけ、9世孫の弟彦命と10世孫の乎止與命の9代は、神功皇后時代の前期に該当することになる。(表中の「邪馬台国の鍵」。)この2代は、天孫本紀尾張氏伝系、海部氏伝系、天村雲命を神武朝に該当すると見なした最も基本となる伝系のいずれに於いても、孝元・開化朝に該当することになる。すなわち、架空とされている神功皇后の時代は、実は孝元・開化朝に相当する=年代を上昇させているということを暗示している。

その孝元朝に於いては、卑弥呼を象徴している倭迹迹日百襲姫命がいる。日本書紀では明らかに神功皇后が倭の女王的存在として描かれており、如何にも卑弥呼であるかのような注釈が書かれているが、年代的に合わないので、神功皇后が卑弥呼であるということは学会でも否定されている。しかし、倭迹迹日百襲姫命が卑弥呼その人ではないとしても、卑弥呼の象徴であって、卑弥呼が存在していた大方の年代は倭迹迹日百襲姫命の時代に匹敵すると考えられる。あたかも、その時代まで神功皇后の年代を上昇させていることは、そこに相当の理由が必要なはずである。考え方に依ると、倭の女王・卑弥呼に関する魏志倭人伝の記述が事実に適していないため、神功皇后という女王的存在を創り上げ、この女王に当てはめることにより、倭人伝の記述を抹消することを目的の1つとして、年代をここまで上昇させたとも考えられる。

9世孫・弟彦命の兄弟姉妹には日女命がおり、名称として卑弥呼を象徴しているし、卑弥呼を補佐していたのは男弟であったことは、まさに弟彦命のことを暗示していると言える。また、10世孫の乎止與命という名称は、卑弥呼の後を継いだ女王トヨを象徴しているとも見なせる。そして、倭迹迹日百襲姫命は<日本の真相4>で記したように、天照大神に重ねられ、天孫本紀には9世孫・日女命が倭迹迹日百襲姫命に該当するという一伝が存在する。これは、象徴として倭迹迹日百襲姫命=日女命=天照大神であることを裏付ける。

天孫本紀の物部氏伝系を見ても、ニギハヤヒ10世孫が応神、仁徳、履仲、反正、允恭朝と続き、16世孫が孝徳、天智朝、17世が天武朝ということになっており、一世代に何人かの兄弟を含めたとしても、各世代が異常に長い。これは、世系は正しくとも、年代は文字通りに解釈してはならない、ということである。しかし、注目すべきは武諸隅連公(=建諸隅命)で、景行朝から仲哀朝になっているが、これは本来の天孫伝系(海部氏・尾張氏)の彦火明命を孝昭朝に当てた場合(表中の「邪馬台国の鍵」)に相当している。

天孫本紀10世孫以往の伝系は極めて簡素で、その歴世の事歴も良く解らない場合が多い。しかし、見方を変えれば、ヤマトの国々が統一国家としての形態を備えておらず、百余国があり、その大倭王が邪馬台国にいたと言われた時代の、いわゆる大倭王の伝系であったとも見られなくはなく、統一国家の大成は、日本武尊及び成務天皇の御代にあったと考えられる、と海部毅定氏は言われる。また、こうも言われている。

“崇神天皇の御代は神人分離の時代と言われている。神武天皇の諡号は始駆天下之天皇、崇神天皇は御肇国天皇で、どちらもハツクニシラススメラミコトと

一致している。神武、崇神、応神の三天皇と神功皇后の諡号に“神”の字が当てられている方々と、聡明神武と崇められた景行天皇並びにその皇子である日本武尊は、日本の古代史上に於いて、格別の意義を持たれる方々と考えなければならぬ。”

どうやら、倭王と大倭王を分けて考える必要があり、卑弥呼の時代が倭王、その後の崇神～成務朝に掛けて、卑弥呼の後のヤマトを統一した時代が大倭王の時代と言えそうである。

これまでは飛鳥氏流の多次元同時存在の法則の解釈により、神武＝崇神＝応神と見なしてきたが、史実はそんな単純なものではないようである。

(3) 乎止與命と尾張氏

ここまで見てきたように、9世孫、10世孫の時代までは様々な伝系があるが、11世孫以降では僅かに乎止與命、建稲種命の一系になり、その末裔は尾張と丹後に本拠を持つに至っている。これは、神代には遠い方の神代と近い方の神代があつて、10世孫はその境界に相当し、本拠がヤマトから他地方へ遷り始めたことを意味している。言い換えれば、遠い方の神代とは海部氏・尾張氏の伝系による神代であり、近い方の神代とは秦氏の伝系による神代、応神天皇に始まる皇統であろう。

天孫本紀では、乎止與命は11世孫で尾張の大印岐（オオイキ）の女子、真敷刀俣（マシキトヘ）を妻として一男を産む、とあるが、誰の子であるかは記されていない。国造本記（12 ページ系図の「国造本紀伝系(1)」）では（乎縫命を除外して）10世孫とされ、尾張の国造に任じられたとされているが、10世孫は古伝だとしても、この時代はまだ国王の時代で、国造時代ではなかった。つまり、乎止與命は尾張国造丹波国造共通の祖だが、その子孫の誰の代に初めて国造に任じられたのかは、実は史的には明瞭とは言えない。ここでは、国造に任じられたことは、ヤマトから出されて尾張に移動し、尾張氏となったことを暗示する、と考えなければならぬ。

しかし、海部氏・尾張氏が最終的に国譲りしたのは乎止與命の年代であることが、熱田神宮朱鳥会（しゅちょうかい）記念誌編集委員会編纂の「朱鳥（あかみとり）」で仄めかされている。天智天皇の時代、熱田から草薙神劍が盗まれ、一時的に御所に置かれたが、天武天皇が原因不明の病気となり、劍が熱田の地から離されたことが原因と判明したので、即刻、劍は熱田に戻された。この年の元号を、瑞兆である赤い色を取り入れ、朱鳥とした。この時、劍を護持して熱田神宮までお供して来たのが社家の中の7名で、後に熱田での祭祀に専任することになった。それに因んで、社家の末裔で結成された会が熱田神宮朱鳥会である。

その内容とは、天火明命は大和国葛城郡高尾張邑を中心に勢力を持っていたが、11世孫・乎止與命＝乎止與命が尾張国造に任命され、尾張の氷上邑（ひかみむら、現在の緑区大高）へ氏族と共に移り住み、その地を統治してきた、と

いうことである。これは、国造本紀で10世孫が尾張の国造に任じられたとされていることに合わされた作為である。なお、熱田神宮でも天火明命が祀られている。境内の孫若御子（ひこわかみこ）神社である。孫若御子＝日子若皇子だろう。

尾張氏と関係が深い大海人皇子は壬申の乱の際、赤い色を旗印とした。これは、秦を滅ぼし、楚の王となった項羽を更に破って天下を取った漢の高祖に倣ったものと言われている。この赤い色はその後瑞兆として尊ばれ、赤い鳥や朱色の雀が用いられた。そして、天武15年には、朱鳥という元号が立てられた。赤い鳥を瑞兆として尊ぶことは、古代に僅かに見られるだけで、それ以外は白い雉や白い雀、白を瑞兆としていた。壬申の乱をバックアップしていたのは尾張氏で、大海人皇子は海部氏の王だから、元々赤は海部氏・尾張氏を象徴する色なのである。そして、古代に僅かに見られ、赤い鳥や朱色の雀が瑞兆の象徴ならば、それは火の鳥＝フェニックス＝不老不死を象徴することに他ならない。

(4) 多次元同時存在の法則と天照国照尊

以上のような系図に於ける年代移動のカラクリにより、同年代での人物名が異なっているにも関わらず、あたかも異名同人（神）のように見えるのは、多次元同時存在の法則の1つの重要な意味である。しかし、それ以外にも重要な意味がある。それは“神々の習合”である。

天孫本紀物部氏伝系に依ると、第一の祖神はニギハヤヒである。この尊はニギよりも先に降臨していて、天磐船から地上を見て虚空見日本国（そらみつやまとのくに）と名付け、現在の“日本”という国名の由来となっているが、海部氏・尾張氏の天火明命と同一視され、天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊（アマテルクニテル・ヒコホアカリ・クシタマ・ニギハヤヒノミコト）とされている。しかし、極秘伝としては別神であり、この国に於けるニギハヤヒの降臨は天火明命の降臨よりも年代が少々後になっているのである。

ヤマトに於いて、天神の降臨が相次いで二度あった。最初の降臨は天火明命、天香語山命、天村雲命であり、少々経ってからニギハヤヒが降臨した。これは、古代に於いて、両氏族が相当深い関係にあったことを暗示しているが、祖神の降臨年代には明確な差があり、その発祥を異にしているのであって、混同、同一視することはできない。

しかし、資料としてこのように同一視されていることは、天村雲命の本来の伝を抹消すると同時に、天村雲命を祖とする大氏族＝海部氏・尾張氏の発祥を厳秘とするためである。これは、本来の伝承が書かれた資料を不比等らが没収して改変し、先代旧事本記としたのである。それにより、天火明命の神名はニギハヤヒの裏に隠れて名目だけになり、すべて物部氏の神という一括りにされてしまったのである。これこそが、異名同神＝多次元同時存在の大元であり、飛鳥氏が言うような、すべて同じで唯一神、という意味とはまったく異なるのである。それは、海部宮司が多神教のシュメールこそすべての根源である、と言われていることが証明している。なお、異名同神もあれば同名異神もあることに注意しなければならない。それは、秦氏によって「神々」が乗っ取られた場

合であり、同じ神名でも、元が異なっている場合である。

天火明命の亦名は天照国照尊（アマテルクニテルノミコト）であるが、その大神は天香語山命の祖神として、天孫本紀伝系の太祖神たる大神である。火明命という神名としての天照国照彦火明命の伝名の初めは単に彦火明命であり、天照国照の四字が無かった。彦火明命という神名と天照国照尊という別の大神の神名の、二神合一に因るものである。天照国照尊という大神と火明命とは本来別神であり、記紀編纂に於いて、天照国照尊が火明命と称されることになり、それに伴って（女神としての）天照大神の孫神の位置に変えられた。そのため、本来の御名である天照国照尊と、日本書紀の天押穗耳命の子・彦火明命、古事記の天火明命、更に物部氏伝系の櫛玉饒速日尊と合わされて、天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊となったのである。櫛玉饒速日尊も櫛玉命と饒速日尊が合わされたものと考えられ、櫛玉命は高御産巢日神の子とも伝えられている。その中で、“天照国照”という大神こそが、天孫本紀伝系本来の大御名であり、太祖神名なのである。

日本書紀ではニニギの子で彦火火出見命の弟であり、名は火明命となっているが、その際には、子の天香語山命はウガヤフキアエズ朝に、孫の天村雲命は神武朝に該当する。書記の一書には、天忍穗耳尊＝天押穗耳命の第一子、天照国照彦火明命で、弟がニニギとなっている。古事記ではニニギの兄として天火明命となっているので、1代上昇する。丹波国造氏伝系では天忍穗耳尊の第三子、彦火明命となっている。

天照国照尊という神名は絶対至貴至尊の意義を含むところであって、容易に他神の尊称、冠称として用いられる御名ではない。つまり、“天照国照”という御名は尊称ではなく、天照大神の古神名“天照国照尊”であり、最も高貴な神格と廣大無辺の神徳を具えていた大神、大元の神である。これは日神、月神顕現以前の大元霊を示す大御名であって、その神格、神徳は、神代系紀に見られる大元神霊、天譲日天狭霧国禪月国狭霧尊（アメユズルヒアメノサギリクニユズルツキクニノサギリノミコト）と同神と見なされる。日神は天を、月神は地（国）を照らし、その本体は宇宙と共に存在する大霊（サギリ）なのである。なお、“天照”と“国照”、“天譲日天狭霧”と“国禪月国狭霧”は相對一神の神名であり、秦氏渡来以前から道教的思想があったことを裏付ける。

このように、天照大神は本来“天照国照尊”で、天神第一の大神であるが、記紀に於いてのその役目は天之御中主神、天常立神、国常立神などの元初の大神に変えられてしまった。そして、いわゆる女神の天照大神は、日神あるいは人格神としての天照大神の一面を強調しているに過ぎないのである。

ならば、天照国照尊こそが海部氏の祀る天神第一の大神で、天村雲命の本来の伝を抹消すると同時に、天村雲命を祖とする大氏族＝海部氏・尾張氏の発祥を厳秘とするために、天照国照尊と物部氏の大王ニギハヤヒが習合されてしまったことは、極めて納得できることである。＜日本の真相4＞まではニギハヤヒ

＝彦火明命と見なしてきたのだが、それは誤りである。では、ニギハヤヒとは誰なのか。

＜日本の真相 4＞で記したように、徐福率いる一団が渡来し、徐福あるいは始皇帝縁者の王族クラスが同じイスラエル人ということで海部氏・尾張氏と婚姻関係を結ぶことにより、物部王国となった。これは、海部毅定氏が言われる、両氏族が相当深い関係にあった、ということと同義である。そして、神話では少彦名神＝徐福が大己貴神＝大物主神＝海部氏・尾張氏と共に国造りを行った、という話で象徴されていたが、最初から渡来していた海部氏・尾張氏が天照国照尊で象徴されるのなら、天村雲命降臨から少々経ってからニギハヤヒが降臨したから、ニギハヤヒとは徐福（一団）の象徴である。

(5) “熊” との関わり

天照、国照と相当深い関係と思われる御神名に、日前（ヒノクマ）、国懸（クニカカス）大神がある。明文抄に依ると、日前大神は天懸（アマカカス）大神であり、天照大神の御霊である由が見られ、古語拾遺に依ると、日前大神は日像之鏡（ひがたのかがみ）を祀られ、その次に造られた鏡が神宮に祀られているという。そして、日前（天懸）国懸大神が日前大神、あるいは天懸大神と言われ、天照国照尊は天照大神と言われる。

ここで、日前の“前”は“クマ＝熊”となり、海部氏・尾張氏を象徴していることになる。だから、秦氏に対して敵対する“熊襲”や“熊野”などの勢力は、“熊”として象徴されていることが多い。その元は日前の“前”であり、日神の前に跪くこと、すなわち、日神を祀ることを暗示していたのである。

また、天懸・国懸の“懸＝カカス”は“カカシ”に通じ、田を守る案山子に通じる。案山子は秦氏によるカッパーラではイエスを表すことは＜日本の真相＞で記した。しかし、案山子の“かか”とは古語で“明けの明星”を意味し、イエスの象徴でもあるが、他にイナンナも象徴している。“クマ＝熊”も天を見上げるならば大熊座となるが、大熊座は北極星の周りを周回する御者である。北極星は神宮の象徴“太一”だから、神宮を護る役目が“熊”なのである。

(6) 天香語山命と天村雲命

古代史の謎を解くために、天照国照尊と同じぐらい重要なのが、天香語山命と天村雲命である。天香語山命が紀伊国熊野邑に入ったという伝が天孫本紀にあるが（ここでも“熊”）、本来の伝とは認め難く、実は主として物部連等の祖、ニギハヤヒ及び高倉下についての伝と見られる。天香語山命と高倉下との間には、特に注目しなければならないほどの必然性は無く、丹波国造氏の伝では別神とされている。しかし、熱田神宮文書（熱田神宮宮庁）の田島氏系譜にある天火明命の子、高倉下命＝一名・天香語山命とあるので、この熱田の系譜は改変である。この文書の購入には住所・氏名等を記載しなければならないが、それでも公にすることができるわけだから、核心は隠されているのである。

また、天孫本紀ではニギハヤヒ降臨の際に供奉 32 人と言われる中に“天牟良雲命 度会神主等祖”と記され、天村雲命の伝が度会氏の祖の伝に変えられている。変えられてはいるが、天牟良雲命＝天村雲命であり、度会（渡会）氏と

海部氏・尾張氏は同族であることを示唆している。このように、公にされている“秘伝”は、やはり何らかの改変・改竄が見られる。

さて、天香語山は天香具山と同じで、高天原にある山の名称である。天上に輝く山、天上のカグ土の山で、その中には木あり、火あり、土あり、金あり、水ありで（木火土金水）、その周辺には天照国照尊を主神とし、カムロギ、カムロミの尊をはじめ、高貴な神々の御座所があると信じられていた山である。つまり、須弥山である。この天香語山を中心とする神々の宮殿、元初最高の神々の宮殿は天の少宮（わかみや、小宮）とも日の少宮とも言われ、“少=小=わか”という言葉はこれに由来する。そして、天照国照尊は元初最高の尊神であり、相当の上古に豊受大神とも、天之御中主神とも、御祖の神とも言われた時代があった。

丹波国の所伝（丹後風土記）では、天香語山命が天村雲命と共に丹波国の伊去奈子嶽（いさなごだけ）に降臨し、豊受大神を与佐郡久志備浜に遷し祀られた由が伝えられ、その際、天村雲命が真名井の水を汲んで、神饌としたと言われている。この真名井の水は、逸文風土記に見られる豊宇賀能売神（トヨウカノメノミコト）が天女となって丹波に天降り、この水から酒を醸して住まれることとなり、この酒を飲むと万病に効くと記されていることは、明らかに真名井の水の霊能を酒に移したものである。籠神社の住所は宮津市大垣であり、岐阜県大垣は名水の産地で、大垣の近くの養老の滝には孝行息子が汲んで酒になった伝説が伝えられ、関連性が伺われる。

火明命、天香語山命、天村雲命のヤマト降臨伝は、その伝が最初からのものではなく、丹波国への降臨から、次にヤマト国への降臨となっていたことは、丹後風土記から察することができる。中でも、天村雲命は最初に日向国に降臨し、次に丹波国、そしてヤマト国へ降臨した。天村雲命が最初に日向国に降臨したことは、そこで生まれた、成人した、あるいは日本以外の国からやって来たということの意味し、海部氏に婿入りし、王権の象徴としてのマナの壺を婿入りの印として海部氏に渡した真沸流＝応神天皇を象徴しているであろうことは、＜日本の真相4＞で記した。しかし、必ずしも実際の人物として天村雲命＝応神天皇とは限らないことに注意しなければならない、ともした。

後述するが、海部氏伝系に依れば、火明命から見て天村雲命は孫だが、応神天皇の時代に18世孫・建振熊宿祢が若狭の木津高向宮で海部の姓を賜り、以降は海部直となった、という。ならば、天村雲命＝応神天皇と見なすことは、年代的に相当無理があるから誤りである。解釈としては、火明命から見て孫、天孫の天村雲命が日向に降臨したことと、秦氏の初代・応神天皇が日向の高千穂に降臨したことが象徴的に合わせられているのである。これを、同一人物だから、と解釈してはならない。このような事例が、多次元同時存在の法則の落とし穴である、と言うよりも、飛鳥氏流の解釈の根本的な間違いなのである。そして、前述のような神武天皇＝応神天皇が天村雲命に該当するような系図の年代操作が行われていることは、更にこのような傾向を助長してしまう。象徴として事績を当てはめた、ということである。

さて、その天村雲命は日向国から丹波国へ遷り、その後、子の天忍人命と天忍男命と共に大和国に遷った。それと共に、真名井の水も日向国から丹波国、大和国に遷され、元初の大神を祀っていた。それは、大元霊としての天照大神と豊受大神を一所に御座を設けて執り行われてきた。天の少宮に於ける大神の奉斎は天照国照尊＝天照大神＝豊受大神＝天之御中主神の奉斎であり、伊勢の伝には、天照は二宮の通称であり、また豊受大神宮を天照坐豊受大神宮（あまてらしますとようけだいじんぐう）と言うのはこのためである。これはまた、“天照は豊受大神宮に坐す”とも読め、“天照大神＝天照国照尊は豊受大神宮＝外宮にいらっしやいます”という暗示でもある。

宮の千木が内削ぎ（水平）であるのは“地”を意味し、外削ぎ（垂直）であるのは“天”を意味する。つまり、内宮は内削ぎだから陰＝大地の神で国津神、外宮は外削ぎだから陽＝天の神で天津神であることを示している。これは、外宮こそ本来の太陽神で根源神でもある天照国照尊（陽＝男神）を祀り、内宮はその根源神を祀った大地の神もしくは巫女（陰＝女神）であることが暗示されているのである。それ故、外宮先祭であり、お祭りの数も圧倒的に外宮の方が多い。そして、内宮の天照大神が女神とされていることは、女神としての天照大神は太陽神ではなく、太陽神を祀る巫女だったということを暗示している。

古事記では豊受大神について、外宮（とつみや）の度会に坐す神、とあるが、本来外宮とは朝廷内に祀られた宮に対して外に祀られた宮、という意味であり、外宮の中に度会宮＝豊受大神宮と五十鈴宮＝皇太神宮があった次第で、五十鈴宮が内宮と言われるようになったのは、比較的後のことである。

伊勢の所伝には、天照大神の御神霊が与佐宮へ遷られた時に、豊受大神が天降られて御饌を奉られた由が記されているが、古い記述に於いて、神が天降られて祀られた、とある場合は、人間の立場からは神を祀ったことを意味しており、それに応えて神霊が降臨するのである。だから、豊受大神は御饌津神と言われているが、これは“御饌を司る”という意味であって、豊受大神が天照大神に御饌を奉るということではなく、奉る神は他にいるわけである。そもそも、内宮御鎮座後、約 400 年も経過してから食事のために豊受大神を御饌津神として呼んだということ自体おかしな話であり、本来ならば、同時に遷られたと考えるべきであろう。また、毎日の朝夕の御饌では、豊受大神が内宮に御饌を奉るのではなく、内宮から天照大神が御饌殿に来られるという。内宮の方が格が高いのであれば、外宮から内宮に出向くはずだが、逆なのは、外宮こそ本来の太陽神・天照国照尊で、内宮よりも格が高いことを暗示している。（勿論、表向きの格式は内宮の方が高いが。）

また、元々の神宮の神官、度会氏の祖・天牟良雲命＝天村雲命が日向の高千穂の久士布留（くしふる）岳に降臨し、天祖から授けられた天押穂井の水を高千穂の宮の御井に崇め置かれた由が記されている。天孫降臨ではニニギが久士布留岳に降臨したことになるが、＜日本の真相＞で“久士”とは伽耶の建国神話の亀旨峰（くじほう）に由来し、“布留”とは“真沸流の沸流”のことで応神天皇を象徴すると記した。ここでも前述のように、久士布留岳に降臨し

た天村雲命の事績を、応神天皇の事績と重ねているのである。

その後、丹波の真名井石井に遷し置かれたとあるが、これは天村雲命が祀る豊受大神を日向国から丹波の真名井原へ遷し祀られたことと同じである。更にその後、その子孫の本宗は大和国へ遷り、最終的に天照大神と豊受大神は伊勢で祀られるようになったが、それに伴って、天押穂井の水も真名井原から大和国へ、そして伊勢へと遷し祀られたことは、前述の通りである。古来、伊勢の所伝では、真名井の水のことを天押穂井の水と言い、この水を以って朝夕の御饌が外宮で奉られていたのである。(現在でも。)伊勢最奥の重典とされた三部秘書には、丹波の与佐宮の祭祀だけが特に重く記されているが、それはこのような裏事情に依る。

ところで、降臨とはそこで生まれた、あるいは成人した、あるいは他から移動して来たという意味である。天村雲命の上の世代は天香語山命だから、天村雲命の降臨は次のように考えられる。

- ・天香語山命が丹波から日向に行き、天村雲命が日向で生まれた。あるいは、丹波で生まれたが、成人する前に日向に行き、日向で成人した。
- ・王権を有するエフライム族が丹波に降臨して海部氏となった。その後、同族が渡来したが、上陸地点が日向だった。そして、丹波へ行って合流し、天香語山命の養子となった。

真名井の水の観点からすると、天村雲命が日向国から丹波国、大和国に遷したことになっており、真名井の水は元々丹波には無く、天村雲命と共に丹波にもたらされた。そして、真名井の水を汲んで天香語山命と共に豊受大神を祀った。そうすると、天香語山命が日向に行ったことは真名井の水を探しに行ったことになるが、見つけれずに丹波に戻り、子の天村雲命がようやく探し求めた、ということになり、これは納得し難いことである。

よって、天村雲命の日向への降臨とは、海部氏一族(エフライム族)のヤマトに於ける2回目の上陸のことで、その後、丹波へ行って合流し、天香語山命の養子となったのだろう。あるいは、天香語山命が海部氏の最初の大王で、火明命を祀ったとしたら、天香語山命の実子がやや遅れて日向に上陸したという解釈も可能である。あるいは、天香語山命がエフライム族の中の祭司レビで、祭祀基盤を整えた後、大王が渡来したとも考えられる。ここで、これまでの海部穀定氏の説を見直してみると、天香語山命よりも天村雲命の方がより重要であるように思われる。

- ・天村雲命の本来の伝を抹消すると同時に、天村雲命を祖とする大氏族＝海部氏・尾張氏の発祥を厳秘とした。
- ・天村雲命と共に、真名井の水も日向国から丹波国、大和国に遷された。
- ・天香語山命が天村雲命と共に丹波国の伊去奈子嶽に降臨して豊受大神を祀った際、天村雲命が真名井の水を汲んで、神饌の料とした。
- ・度会氏の祖である天牟良雲命＝天村雲命が日向の高千穂の久士布留岳に降臨

し、天祖から授けられた天押穂井の水＝真名井の水を高千穂の宮の御井に崇め置かれた。これは、正史に於ける天孫降臨の地と重なり、極めて重要であることを暗示している。

“村雲”故に水に関連し、真名井の水は陰陽で言うところの陰であり、神器の象徴としては剣である。(陽の神器の象徴は太陽神の依り代の鏡である。)陰の神器が剣ということは、記紀で暗示されている。天照大神とスサノオの誓約の話にはいろいろな異伝があるが、どちらが玉でどちらが剣を使ったのか、一定していない。しかし、天照大神という名称ではなく、“日神”と称している異伝では、すべて日神が剣を使ったことで一致している。そして、日神は陽だから、対する剣は陰となる。その剣の中で最も重要なのは草薙神剣＝アロンの杖であり、元の呼称は“天村雲剣”で“天村雲”を冠する。ならば、天村雲命こそ、アロンの杖を持って来た大王と考えるのが妥当である。陰の剣として象徴されるアロンの杖を持って来たからこそ、陰の水として象徴される真名井の水を授けられたことになっており、剣を持って来た大王が天村雲命とされたからこそ、草薙神剣の元の呼称が天村雲剣だったのである！

日本列島には各地に清浄な水が湧き出しているのも、わざわざ高千穂の天押穂井の水＝真名井の水を持って来る必要は無いし、そもそも、日々神饌として奉る水を日向国から丹波国、大和国に遷すことなど、古代に於いては不可能なことである。神饌として奉る水は、その地で湧き出した清浄な水に他ならないから、それを各地で“真名井の水”と称したのである。

そうすると、エフライム族としての王権の象徴を持っていなかった天香語山命は、祭司レビと考えるのが妥当だろう。すなわち、天香語山命とされるエフライム族のレビが先発隊として丹波に上陸した。そして、適切な山を見出し、それをシュメールの神々の住まう神殿＝須弥山＝天香語山と見なして、太陽神である天照国照尊＝太陽神ウツを祀る準備を整えた。その後、神器としてのアロンの杖を携えた大王が日向に上陸した後、丹波へと移動して合流し、天村雲命となった。こうして陽の太陽神を祀る陰の神器が整い、丹波で本格的な祭祀が始まったのである。

天村雲命は言わば、古代日本に於ける海部氏の初代大王に相当する。だから、天村雲命が重要なのであり、系図の操作に於いても、わざわざ天村雲命の年代が神武天皇の年代に該当することが基本となっているのである。そして、秦氏は天村雲命の本来の伝を抹消すると同時に、天村雲命を祖とする大氏族＝海部氏・尾張氏の発祥を厳秘としたのである。

なお、＜日本の真相 4＞では天村雲命は天之日矛を連想させ、同一人物のようにも考えられたが、天之日矛との関連については後述する。

さて、“真名井”は古くは“魚井”と書かれていた。魚も水も水瓶も、エンキを象徴する。丹後国一宮深秘には、豊受大神が丹後に祀られた際、天真名井の水を天村雲命が汲み、それを神饌に使ったとあり、その後、天香語山命の母、道日女命(ミチヒメノミコト)と宗像三神の内の多岐津姫命が豊受大神に奉仕

されたという。最初は神籬を建てて祀ったということなので、神社や神祀りの原型は神籬であり、神籬は木の柱だから、心御柱の原型に他ならない。その神饌として真名井の水＝アロンの杖＝草薙神剣が奉じられたので、神籬と心御柱の原型はアロンの杖である。だからこそ、来るべき時に、草薙神剣は元々の神宮である伊雑宮の心御柱となり得る。

また、大同本紀に依ると、スサノオと天照大神の天真名井に於ける誓約から生まれた宗像三神と豊受大神は極めて深い関係にあるというのが、それはこの逸話からも伺える。そして、＜日本の真相4＞でも記したように、宗像三神と住吉の海神三神は対になっており、いずれも“水”に関係するから、(日神の天照大神に対して)水神の豊受大神に関係が深いのである。また、多岐津姫命が水の象徴で陰ならば、道日女命は日の象徴で陽であり、ここでも陰陽の対が見られる。そして、道日女命は“日女命＝卑弥呼への道”と読める。

(7) 丹後風土記

丹後風土記には、他にも重要なことが書かれている。＜日本の真相4＞で記した葛木出石姫の父は天村雲命だが、母の伊加里姫は丹波の生まれで、火明命の3世孫・天忍人命の異母妹である。(伊加里姫を母とする葛木出石姫の兄が倭宿祢命。阿俣良依姫命を母とする子が天忍人命、天忍男命、忍日女命。いずれも父は天村雲命。)亦名が豊水富神(トヨミトミノカミ)であり、笠水神(ウケミズノカミ)＝笠水彦命と笠水姫命(ウケミズヒメノミコト)と共に海部直の祖神とされている。つまり、伊加里姫は天村雲命と共に海部氏の祖先である。(天村雲命の子だから当たり前だが、伝承によっては、天村雲命との関係が隠されている場合もある。)豊水富神、笠水彦命、笠水姫命はいずれも“水”が神名に入っており、“水”の重要性を暗示しているが、それは(6)で記した“天押穂井の水”に他ならない。

また、火明命は佐手依姫命(サテヨリヒメノミコト)を娶り、穂屋姫命が生まれたが、佐手依姫命の亦名は市杵嶋姫命、息津嶋姫命、日子郎女神とされている。市杵嶋姫命は天照大神とスサノオが天真名井で行った誓約の際に、スサノオの十握剣を天照大神が噛み砕いて生まれた三女神の内の一柱で、宗像三神でもあるから、宗像大社の沖津宮に由来する“息津”という別名は理解できる。(宗像大社では、実際には沖津宮で田心姫神、中津宮で湍津姫神、辺津宮で市杵嶋姫神が祀られているので、沖津＝息津にはなっていないが。)

日子郎女神は火明命と共に、籠神社の海の奥宮で祀られている。“郎女”は若い女性に対する愛称だが“日子”は“太陽(神)の子”という意味であり、“太陽神を祀る若い巫女”という意味である。そして、籠神社の海の奥宮は常世島と言われ、不老不死を象徴している。

また、邪馬台国は纏向と葛城が一体となった国で、“東の纏向”を尾張氏が、“西の葛城”を徐福一団の系統と思われる葛城氏が治めていたわけだが、祭祀は主に纏向の三輪山で行われており、三輪山には大物主神が祀られていた。(現在でも。)大物主神は大国主神の前に“海を照らしながらやって来て国をも照ら

した”から“海照国照彦（火明命）＝天照国照彦（火明命）”となって籠神社の主神であり、大国主神の和魂が大物主神ということは“国津神＝最初にヤマトの地を治めていた神は物部氏由来”ということ象徴していることは、＜日本の真相 4＞で記した通りである。そして、“天照国照彦火明命＝天照国照尊”だから、三輪山で祀られていたのは結局、天照国照尊であり、その三輪山は尾張氏が治める纏向の祭祀場だったから、尾張氏が天照国照尊を祀る形となっている。その纏向で、後に太陽神を祀ったのが卑弥呼という巫女だから、男神・天照国照尊を祀るのが、太陽神を祀る巫女として象徴される尾張氏という構造にもなる。日本書紀に於ける天照大神の別名・大日靈貴神は“大いなる日神が降臨する巫女”という意味だから、太陽神を祀る巫女とは大日靈貴神＝女神としての天照大神に他ならず、尾張氏は女神・天照大神の象徴とも言える。このような祭祀構造、巫女が男神・天照国照尊を祀るという祭祀構造は、火明命に対する日子郎女神と同じである。

卑弥呼の後を継いだのは宗女のトヨである、と魏志倭人伝には記されている。宗女とは同族のことであるが、娘や孫だけを指すわけではない。卑弥呼は結婚しなかったので、トヨは卑弥呼の娘でも孫でもないことから、同族の女性である。そして、卑弥呼が尾張氏ならば、最も血縁の濃い同族は海部氏であり、トヨは海部氏の女王と言え。だから、籠神社縁の外宮の祭神名が“豊受大神”で“豊＝トヨ”という言葉を含んでおり、いろいろな場面で登場する“トヨ”という名称は、海部氏の女王であるトヨを暗示しているのである。

(8) 天女伝説

(6)では、豊宇賀能売神が天女となって丹波に天降り、万病に効く酒を醸し、明らかに真名井の水の霊能を酒に移したものと記したが、逸文風土記の奈具社条文には次のようにある。

“丹波郡の比治山（ひじやま）頂上に真名井という泉があった。（それは既に沼となっている。）そこに天女8人が天降り、水浴びをしていた。そこに和奈佐という老夫婦がやって来て、天女たちが脱いでいた衣の1つを取って隠してしまった。そのため、1人の天女は天に帰れなくなり、老夫婦の娘として共に十数年過ごした。天女は酒を醸していたが、それは一盃飲めば万病に効くものだった。その酒は評判を呼び、老夫婦の家はその酒で潤った。ある時、老夫婦は天女に出て行くよう告げた。天女は泣く泣く家を出たが、長く人間界にいたため、天には帰ることができず、彷徨った。その時に詠んだ歌。

『天の原 降りさけ見れば霞立ち 家路惑いて 行方知らずも』

最終的に、天女は船木里の奈具村に落ち着いた。そして、天女は豊宇賀能売命として奈具社に祀られた。”

この逸話は“真名井”という名称の起源に触れられておらず、しかも沼と化した水、天女が入浴した水など、酒にすることなどあり得ないので、本質的な所伝とは言えない。これは、天女降下の羽衣伝説に豊宇賀能売命が結合させら

れたものである。他に、丹後国一宮深秘には次のようにある。

“8人の天女が水浴しているところに塩土翁がやって来て、1人の天女の衣を奪った。その天女は天に帰ることができず、翁と夫婦になって酒を造り、それは伊勢の酒殿の明神となった。”

老夫婦が翁に代わり、天女は翁と結婚したことになっているが、天女と酒の関係は変わらない。また、同じような古伝が伊勢にもあるが、そこでは道主貴（ミチヌシノムチ）・八小童（ヤオトメノワラワ）と天日起命が豊宇賀能売命をお祭りしていたことになっており、この“八小童”が“八乙女”となって天女に転じていることが解る。

摂津国風土記では、摂津国の稲倉山に豊宇賀能売命がいて（大神に対して）御饌を奉っていたが、故あって、丹波国比遅乃麻奈韋（たんばのくにひじのまなひ）に遷られたことが記されている。この丹波国比遅乃麻奈韋とは、丹後の伊去奈古嶽が比治山と転じ、かつては丹後も丹波と言ったから、これは籠神社の奥宮、真名井神社のことを言っている。

また、伊勢の御鎮座本縁等には、与佐宮の宮域内で道主貴・八小童、氷沼道主及び豊宇賀能売命が御饌を炊き供え、与佐宮大神（豊受大神）を祀っていた所伝がある。ここで言うところの道主貴は丹波道主命を指していると思われるが、道主貴とは一般的に宗像三神のことを言うので、ここでも市杵嶋姫命と海部氏・尾張氏との関係（特に女神としての天照大神）が伺われる。その丹波道主命は、名を彦田田須命（ヒコタダスノミコト）と言う。“田田須”は“糺”と同じで、糺の森がこの命由来だということである。ならば、通称・蚕ノ社のある広隆寺一体こそ元糺の森だから、そこは元々海部氏が治めていたことの証明でもある。

つまり、真相はこういうことである。摂津国の稲倉山に豊宇賀能売命がいて（大神に対して）御饌を奉っていたが、後に丹後の与佐宮に帰られ（ということは元々海部氏一族）、道主貴・八小童と共に御饌を奉った。また、八小童＝八乙女で、転じて天女8人となり、その中の羽衣を取られた1人が効能のある酒を造ったという伝説ができた。この2つの話が合わさったのが、前述の逸話である。その後、豊宇賀能売命は奈具村に行き、奈具社に祀られることとなり、それは伊勢酒殿明神でもある。そして、伊去奈子はイサナギの転じたものであり、それはイザナギに他ならない。古語的に和奈佐の“和”は“伊”に転じ、“奈佐”はイザナギ＝伊佐奈岐の“佐奈”の「合わせ鏡」になっているから、和奈佐夫婦はイザナギ・イザナミ両神を象徴している。籠神社は天橋立の傍にあるが、これはイザナギがイザナミに会うために渡って来ていた橋とされており、両神に密接な関わりがある。そして、奥宮・真名井神社には天照大神が生まれたという“産（うぶ）たらひ”が存在するので、羽衣を取られた天女は（女神としての）天照大神を象徴していることになる。

羽衣を取られて天に帰ることができなくなったことは単なる創作逸話ではなく、羽衣が天＝政や祭祀に関わる重要なものであることを暗示していると思わ

れる。つまり、羽衣を取られたことは、本来の天照大神＝天照国照尊が女神に変えられ、王権も秦氏に委譲されたことを暗示しているのだろう。

調べてみると、現在でも“天の羽衣”と言われているものがある。それは、大嘗祭に於いて、天皇陛下が着られる湯帷子（ゆかたびら）である。（以下、Wikipedia 参照。）大嘗祭では大変な潔斎が成されるが、当日は大嘗宮（悠紀殿、主基殿）に入られる前に、天皇は沐浴を行う。沐浴用の建物である廻立殿に入られた天皇は、天の羽衣を身に付けたまま湯槽に入り、湯の中に衣を脱ぎ捨てて出る。生の明衣を着用して水を拭い、斎服に着替えて大嘗宮に向かう。これを、小忌御湯と言う。悠紀殿と主基殿で二度儀式があるので、廻立殿での入浴も2回、天の羽衣、生の明衣も2着ずつ用意される。

では、現在の“天の羽衣”は何を意味するのか。これは湯帷子なので、天女の水浴を暗示していることは確かだが、天女は羽衣を脱いで水浴したがために、天上に帰れなくなった。対して、大嘗祭では“天の羽衣”を着て水浴する。水浴は神聖な禊であり、その場で“天の羽衣”をわざわざ身に付けるということは、天上界の力を身に纏うということである。それにより、神と直接対峙して神祭りすることが許される。その後、天子の威霊を体得するのである。

(9) 心御柱

(6)で心御柱の原型は豊受大神を祀った神籬でアロンの杖と記したが、心御柱記に“心御柱は天柱、国柱の表れなり、天柱は天之御中主尊の本源、国柱は国常立尊の道対なり”とあり、宝基本紀（ほうきほんぎ）には天御柱について“一気の起こり。天地の形。陰陽の源。万物の体なり”とある。つまり、心御柱は天地の形、万物の体と言われ、宇宙そのもの、有形・無形の万物を意味し、豊受大神は根源神だから、心御柱は豊受大神を祀る神籬となり得る。そのため、“国生み”という重要な場面で登場し、古事記ではイザナギ、イザナミ両神が回られたのが天御柱、日本書紀では国中柱となっており、天之御中主神の本源、国常立尊の道体と言われている。

天御柱、国御柱の信仰は、天と国の中心の柱、すなわち心御柱としてこのような大元神霊の信仰に関係を持つものであり、神宮に心御柱が祀られているのは、天照大神、豊受大神の御神徳が極めて高く、天之御中主神、国常立尊と一体で等しく大元霊であることに基づく。

そして、神宮本殿の床下に心御柱が存在して、その床上に天照・豊受両大神の御神霊が御座されているのは、両大神の本津大神霊が大元霊神であることを意味すると考えられ、心御柱の上に鎮まっておられるのは、両大神が大元霊神と一体であることを表明していると考えられる。とりわけ日本書紀で、天照大神が誕生して天上へ送り上げられる際に、“天柱を以て天上に上ぐ”と記されていることは、心御柱の上に神が降臨されることを意味していよう。

このように、心御柱の大元は宇宙そのもの、天地陰陽の根源であり、神が降臨する神籬である。では、何故、神が降臨できるのだろうか。

<日本の真相 4>で記したように、大地に打ち込まれる柱は神殿の原型で、大地にそびえ立つ御神体の山と共に神が降臨する依り代だからである、ということは、確かに原型ではある。そして、柱はイナンナの象徴でもある。しかし、ここでは柱そのものに更に深い意味が隠されていると思われる。

神宮では心御柱のことを忌柱、天御柱、天御量柱とも言う、とされているが、<日本の真相>で記したように、八咫鳥に依ると、忌柱は聖十字架の横木、天御柱は縦木、天御量柱は外宮（多賀宮）地下殿に祀られるモーゼの旗竿であった。つまり、いずれも異なるものであり、“心御柱”という言葉で亦名とされるものではなかった。ならば、心御柱とは何なのか、ということになる。

正殿床下に打ち込まれる柱は確かに心御柱である。それは、大元霊が降臨するための依り代なのだが、本物の心御柱の代わりに過ぎない。その原型は地面に打ち込まれた神籬で、アロンの杖である。アロンの杖は、聖書に於ける“族長の杖”に由来している。イスラエル 12 支族の間で諍いが起きた時、主は各支族の族長の杖を契約の箱の前に置かせた。そして、主が選んだ杖には若葉が芽吹き、その族長に従わなければならない、と言われた。選ばれたのはレビ族のアロンの杖だった。それ以降、アロンの杖は契約の箱、マナの壺と共に、ユダヤ三種の神器となった。このように、アロンの杖は主＝唯一神が自ら選ばれたからこそ、大元霊が降臨するための依り代、神が降臨できる神籬となり得たのであり、芽吹いたアロンの杖の姿は、神に捧げる木＝榊の原型で「生命の樹」である。陰陽で言えば降臨する神は陽、神が降臨する神籬は陰だから、その神籬たる柱、アロンの杖は陰となる。そして、アロンの杖は草薙神剣で、草薙神剣は剣の象徴でもあるから、剣は象徴として陰となる。

古代日本では、降臨する神は天照国照尊で男神の太陽神だから、如何様に見ても陽である。そして、天照国照尊が降臨する草薙神剣は陰で、太陽＝日＝火に対しては水となる。故に、太陽神・天照国照尊に神器としては剣を奉じ、神饌としては真名井の水を奉るのである。なお、天照国照尊の陽の面が太陽神、陰の面が水神の豊受大神だが、柱に降臨する豊受大神は陽である。あくまでも、降臨する神は陽、降臨する依り代は陰であり、神の陽的側面や陰的側面と混同してはならない。

ならば、本来の心御柱とは、忌柱と天御柱で構成される聖十字架ではなく、アロンの杖と考えなければならない。アロンの杖こと草薙神剣は、現在、海部氏と同族の尾張氏の神殿、熱田神宮の御神体として祀られている。八咫鳥に依れば、天照大神が降臨する前の徴として、草薙神剣が本来の神宮である伊雑宮に戻され、伊雑宮の心御柱になるという。このことは<日本の真相>で記したのだが、その時には、聖十字架に対する神器という意味で、そして、杖だから柱にもなり得るといようにしか解釈していなかった。しかし、心御柱とは本来アロンの杖のことだから、これこそが本来の神宮＝伊雑宮で祀られるべき心御柱なのであり、大いに納得できる。また、本来の姿からすれば、そうあらねばならない。

ここで、海部宮司が言われていたことが、ようやく理解できた。海部宮司は、飛鳥氏は心御柱を十字架などとしておる、と言われていたが、真相はアロンの

杖＝草薙神劍だからこそ、そのように言われたのである。

このように考えれば、外宮にある天御量柱は元々モーゼの旗竿ではなく、元外宮の籠神社の正殿床下に打ち込まれていた柱である。それは、天御量柱の長さは時の天皇の背と同じ長さだった、と海部宮司が言われていることから伺える。そうすると、＜日本の真相4＞では“時の天皇”とは初代天皇たる神武＝応神天皇のことである、としたが、必ずしもそうとは限らないだろう。大王が変わる度に、その大王の背に合わせて、天御量柱も打ち変えられた可能性は十分考えられるからである。

それが、秦氏がイエスの十字架とモーゼの旗竿を持ち込んだことにより、本来の心御柱＝アロンの杖は封じられ、忌柱と天御柱に分けられ、更に、籠神社の豊受大神を外宮に勧請した時点で、天御量柱をモーゼの旗竿としたのだろう。そして、本来の心御柱は本来の持ち主である尾張氏に預けられた次第である。神器とは、特定の血統にしか扱えないが故に。

(10)内宮所伝本の倭姫命世紀

ここまでに見てきたように、神宮は単に秦氏にとって都合の良いように造られた宮ではなく、海部氏・尾張氏と古代史の真相が隠されている最重要の宮である。それ故、極秘書と言われる所伝本が存在する。内宮所伝本の最極秘書「倭姫命世紀」は元々神宮の禰宜・中川氏が保有していたが、現在は海部氏が所有している。対して、外宮の最極秘書は豊受皇太神御鎮座本紀で、飛鳥記とも言われている。ここでは、倭姫命世紀について考察する。記述に対する私的見解を*で記す。

・天地開闢の時、豊受大神と天照大神は天下を永きにわたって治めることを計画した。

*実際には豊受大神＝天照大神＝天照国照尊だから、これは表向き、外宮と内宮を意識した記述である。

・第10代・崇神天皇（御間城入彦五十瓊殖尊、ミマキイリヒコイニエノスメラミコト）6年、ヤマトの笠縫邑に磯城（しき）神籬を立て、天照大神と草薙神劍を遷して奉り、後に遷した吉備国では吉備都比売（キビツヒメ）が祀った。

*ここでは草薙神劍も共に祀られているが、本来の天照大神である天照国照尊を海部氏の主神と見るならば、草薙神劍は尾張氏の象徴であり、この記述は海部氏と尾張氏が同族であることを示唆している。また、天照大神の大元は天照国照尊だから、これは天照国照尊を劍と共に祀ったということを示唆しており、(6)で記したのと同様に、陽の太陽神を祀るために陰の劍が必要ということを示唆している。

吉備国はかつての丹波王国の一部であり、その国でも比売が祀っていることは、神祭りは特定の血統の女性に限られていたことの証である。何よりも、崇

神天皇の皇女、豊鍬入姫命（トヨスキイリヒメノミコト）こそ、神宮の初代齋宮に他ならず、やはり名前に“豊”が含まれる。

崇神天皇は前述の通り“神”を冠する極めて重要な天皇であり、“御肇国天皇”と称えられるのは、やはり建国に関してとても重要であることを示唆している。その諡号、御間城入彦五十瓊殖尊の“瓊、けい（音）、たま（訓）”は“瓊玉、玉のように美しい”という意味があるので、海部氏との深い関わりが伺われる。因みに、ニニギ＝瓊瓊杵尊にもこの字が使われている。また、“ミマキ”とは“任那＝伽耶の城＝ミマキから入り婿した大王”を意味するとも言われており、応神天皇を暗示しているが、それは応神天皇の事績を崇神天皇あるいは崇神天皇に該当する大王の事績に当てはめたものである。

さて、崇神天皇の時代は注目であり、日本書紀では以下のようなことが成されたとされている。(Wikipedia 参照。)

- 1) 崇神天皇 3 年 (BC95 年) 9 月、三輪山西麓の瑞籬宮 (みずがきのみや) に遷都。
- 2) 崇神天皇 5 年、疫病が流行り、多くの人民が死に絶えた。
- 3) 崇神天皇 6 年、疫病を鎮めるべく、従来宮中に祀られていた天照大神と倭大国魂神 (大和国魂神) を宮城 (きゅうじょう) の外に移した。天照大神を豊鍬入姫命に託し、笠縫邑 (現在の檜原神社) に祀らせ、その後各地を移動したが、垂仁天皇 25 年 (BC5 年) に現在の伊勢神宮内宮に御鎮座した。倭大国魂神を淳名城入媛命 (ヌナキイリヒメノミコト) に託し、長岡岬に祀らせたが (現在の大神神社)、媛は身体が痩せ細って祀ることができなかった。
- 4) 崇神天皇 7 年 2 月、大物主神が倭迹迹日百襲姫命に乗り移り託宣する。11 月、大田田根子を大物主神を祀る祭主とし (現在の大神神社)、市磯長尾市 (イチシノナガオチ) を倭大国魂神を祀る祭主としたところ、疫病は終息して五穀豊穰となった。
- 5) 崇神天皇 10 年 9 月、大彦命を北陸道に、武渟川別命 (タケヌナカワワケノミコト) を東海道に、吉備津彦命を西道に、丹波道主命を丹波 (山陰道) に將軍として遣わし (四道將軍)、従わない者たちを討伐させた。しかし、大彦命だけは異変を察知して和珥坂 (わにのさか、奈良県天理市) から引き返し、倭迹迹日百襲姫命の予言から武埴安彦 (タケハニヤスヒコ、孝元天皇の皇子) の叛意を知ることとなる。武埴安彦は山背から、その妻・吾田媛 (アタヒメ) は大坂から都を襲撃しようとしたが、天皇は吉備津彦命の軍を遣わして吾田媛勢を迎え討ち、一方の安彦勢には、大彦命と彦国葺 (ヒコクニブク、和珥氏の祖) を差し向かわせ、これを打ち破った。10 月、畿内は平穏となり、四道將軍が再び出発した。なお、日本書紀は“吾田媛、ひそかに来たりて、大和の香山 (かぐやま) の土を取りて、領布 (ひれ) に包みて祈 (の) みつらく、これは大和の物実 (ものざね) と云いて、帰りつ”と記されている。
- 6) 崇神天皇 11 年 4 月、四道將軍が地方の賊軍を平定させて帰参。
- 7) 崇神天皇 12 年 9 月、天下平穏となり、御肇国天皇と褒め称えられる。
- 8) 崇神天皇 48 年 1 月、豊城入彦命 (トヨキイリミコノミコト) と活目命 (イクメノミコト、後の垂仁天皇) を呼び、どちらを皇太子にするかについて熟慮

決断した。4月、弟の活目命を皇太子とし、豊城入彦命に東国を治めさせた。
9) 崇神天皇 60年7月、飯入根（イイイリネ）が出雲の神宝を献上。兄の出雲振根（イズモノフルネ）が飯入根を謀殺するも、朝廷に誅殺される。
10) 崇神天皇 68年（BC30年）12月、120歳で崩御。（古事記では168歳とする。）

系図の年代操作が成されているので実年代は別としても、この大王の時代に三輪山西麓へ遷都して大物主神を祀り始め、卑弥呼に重ねられる倭迹迹日百襲姫命が登場し、全国が四道将軍によって平定され、御肇国天皇と褒め称えられたことになっている。

倭国は最初に卑弥呼によってまとめられ、祭祀の原型ができたと思われるが、没後に男王が立つと混乱し、トヨが女王になるまで混乱は収まらなかったため、卑弥呼の時代に完全に国が統一されていたわけではない。倭迹迹日百襲姫命が卑弥呼を象徴しているのなら、1人の男王＝崇神天皇の時代に国土が平定されたことは矛盾している。あるいは、卑弥呼ではなくトヨを象徴しているのなら、その点の辻褄は何とか繕うことができるが、トヨを暗示する豊鍬入姫命、豊城入彦命などが錯綜して登場しており、日本書紀の記述は無理があると言える。

また、崇神天皇に事績が重ねられる応神天皇の誕生は記紀ではAD201年1月5日、在位はAD270年2月8日～310年3月31日とされており、考古学的な調査から卑弥呼の誕生はAD175年頃で、AD248年頃に没したとされている。応神の誕生時、卑弥呼は25歳前後となり、確かに応神の母的位置にあり、神功皇后に重ねられる。しかし、応神の即位は69歳と異常に遅く、109歳まで在位していたなど、あり得ないことである。また、卑弥呼に重ねられる倭迹迹日百襲姫命の登場年代も紀元前となっており、如何にこれらの記述が年代の引き伸ばし（上昇）が行われているのか解るだろう。

つまり、ここから言えることは、三輪山西麓に都が造られ、三輪山で海部氏・尾張氏の祖神である大物主神＝天照国照尊が正式に祀られるようになり（だが真相は隠されて）、その後、ようやくヤマトは平定された、ということである。古代では祭祀が最も重要だったから、祭祀形式が確定しない限り、国は治まらないのである。それは、卑弥呼の後をトヨが継ぎ、その時代によりやうやく祭祀形式が定まることにより、国が治まったのである。その時の大王こそ、崇神天皇＝御肇國天皇に相当するのである。

なお、大和の香山＝天香具山の土が大和の物実とあるが、物実とは、その物の基となる物のことである。だから、ヤマトの国の物実とは、ヤマトの国の魂そのもので、ヤマトの権威そのものということである。天香具山＝天香語山は高天原にある山で、須弥山であり、神々の御座所があると信じられていた山である。このような聖なる土の原型はシュメールにある。＜神々の真相1＞で記したように、シュメールで王権のあった場所は聖別され、そこの土に、エンリルが“天空のように明るい物体”を埋め込んだ。この“天空のように明るい物体”が転じて“輝く玉”となり、玉が王権の象徴となったのだろう。

・三輪山の宮は御室嶺上宮（みむろのみねうわつみや）と言い、日本書紀の一

書に依ると、三諸原の宮＝御室山（三輪山）の宮が最初の宮処となっていた。

*皇太神宮＝内宮は元々三輪山の宮、御室嶺上宮にあったのであり、それは伊勢の神と三輪山の神が同一ということを暗示している。つまり、天照国照尊である。

・倭姫世紀では笠縫邑と言って笠縫宮とは言っていないことは重要であり、最初に“宮”と言われたのは丹波の与佐宮である。

*笠縫“邑”なので神籬を立てて祀ったことになっているのだが、最初の宮が与佐宮＝籠神社ならば、三輪山の次には籠神社で祀られたと考えるべきだろう。

・崇神天皇 60 年には童女（おとめ）を大物忌と定めた。

*大物忌とは、神宮に於いて重要な祭祀を行うために特別に選ばれた少女である。（中世以降は子良（こら）とも呼ばれた。）以下、関裕二氏が「伊勢神宮の暗号（講談社）」の中で物忌について述べているので、それを基に考察する。

外宮禰宜の度会氏＝本来の神宮の祭祀一族から選ばれた童女で、禰宜の娘あるいは分身とされてきた。故に、大物忌は血統が最も重要なのであり、それは海部氏・尾張氏と同族で、天牟良雲命＝天村雲命を祖とする度会氏である。

大物忌に任じられると、正宮近くの子良館に寝起きし、神宮の領域から外に出ることは無かった。大物忌は禰宜と共に、御饌殿に奉仕する。御饌を枚手（ひらて、食器）や土器に盛り、神に供える。最も重要なのは神嘗祭である。まず、度会と多気の神郡（かむこおり）から持って来た榊を供える。その後、心御柱周辺の掃除を行う。正殿周辺は禰宜だが、心御柱の周辺は大物忌だけに関わることができる。これは掃除に限らず、心御柱に関わるすべての祭祀について言えることである。正殿を清めた後、3 人の物忌によって御饌が供えられる。午後 10 時に行われる由貴夕大御饌（ゆきのゆうべのおおみけ）と午前 2 時に行われる由貴朝大御饌（ゆきのあしたのおおみけ）であり、外宮では 10 月 15 日から 16 日に掛けて、内宮では 16 日から 17 日に掛けて行われる。

続く奉幣の儀（外宮は 16 日正午、内宮は 17 日正午）で、ようやく斎王が登場する。斎王は外（との）玉垣内の侍殿（さぶらいどの）に待機し（＝侍り）、大宮司から太玉串（1.5 メートルほどの大きな榊）を受け取ると、内玉垣御門の前で礼拝し、大物忌に渡す。大物忌はこれを正殿に近い瑞垣御門の前に奉る。斎王が侍殿に着座すると、大宮司と 2 人の禰宜がそれぞれ太玉串を持ち、唐櫃に納められた幣帛を持った勅使らと共に、中重（なかのえ）に進み出る。そして、祝詞が奏上された後、太玉串を内玉垣御門の前に立てると、大物忌と禰宜が正殿の扉を開き、大宮司らが内院に参入し、幣帛と御衣（おんぞ）を納める。この間、斎王は侍殿で侍っているのである。

現在では、神嘗祭で大物忌が奉仕することは無く、式年遷宮の特別な御神事の時のみである。大物忌、斎王の代わりに祭主（主に皇族系の女性）が務めるが、ずっと伊勢におられるのではなく、御神事の前に来られるだけである。

このように、最も重要な心御柱を祀ることができ、正殿の扉を開くことができるのは基本的に大物忌であり、特別の血統＝海部氏・尾張氏と同族で、天牟良雲命＝天村雲命を祖とする度会氏に限られるのである。いくら八咫鳥が海部氏・尾張氏を押さえ込もうと、御神事の根幹は揺るがせないのである。

なお、御神事の間、齋王は侍っているが、齋王の役目とはまさしく侍ることにあり、それこそ、元々の天照大神が男神だったことを示している、と関氏は論じているが、その通りだろう。

・心御柱は齋部氏が忌斧で伐採した。

*式年遷宮は心御柱伐採から始まる。現在では、御造営用材を伐採する御杣山（みそまやま、内宮は神路山、外宮は高倉山）の山口に坐す神を祭る山口祭が行われ、その日の深夜、心御柱とされる御料木の木本に坐す神を祭る木本祭（このもとさい）が行われる。深夜に山中で行われる秘祭で、物忌と称する子供が忌斧を執って御料木奉伐の儀を行う。奉伐された御料木は新殿完成時まで内宮は御稻御倉、外宮は外幣殿に安置される。

しかし、大物忌の役目などが現代風に変えられる以前は、祭祀を司る齋部氏が執り行っていた。度会氏ではなく齋部氏なのは、心御柱が如何に特別なものなのか、暗示している。齋部氏＝忌部氏であり、大嘗祭での亀服を献上する阿波忌部氏はおそらくその一派である。海部宮司が四国の重要性を言われているのは、阿波忌部氏と大山祇神社のことである。

・活目命＝垂仁天皇 18 年の記述の中に“中臣大鹿嶋命（ナカトミノオオカシマノミコト）”や“多気連等の祖は宇加乃日子之子吉志比女（ウカノヒコノコヨシヒメ）”という記述がある。

*鹿嶋氏こそは本来の中臣氏であり、故に、乗っ取った藤原氏は氏神の春日大社に鹿島神宮から武甕槌大神を勧請したのである。春日大社の第一殿は鹿島神宮の武甕槌命、第二殿は香取神宮の経津主命、第三、四殿は天児屋根命と比売神（ヒメノカミ）が祀られている。本殿には藤原氏の祖である天児屋根命とスサノオの二神のみが祀られている。この地は古くから和珥氏の本拠地で、後に春日野に移住して春日氏となり、春日氏一族は、布都努斯（ふつぬし）神社の神主だった。

<神々の真相 2>で記したように、布都努斯＝経津主命で、神武東征時に高倉下が持って来た太刀は布都御魂＝布都御魂大神であり、武甕槌命が中洲を平定した時に持っていた神剣と言われ、布都御魂＝アロンの杖＝草薙神剣である。そして、経津主命が祀られる香取神宮には門外不出の神器があり、それは秘祭で使用される 12 個から成る“壺ヤー（ジャー）”であり、マナの壺を象徴していた。そうすると、香取神宮は祭神でアロンの杖、神器でマナの壺を象徴していることになる。

鹿島神宮は前述のようにアロンの杖を象徴するが、祭神名の中に“甕”があり、これは“壺”に他ならない。つまり、鹿島神宮は神器でアロンの杖、祭神

でマナの壺を象徴し、香取神宮と表裏一体の関係なのである。

天兒屋根命は天岩戸隠れの際、祝詞を捧げた神であるが、藤原氏の血統正当化のため、そのようにされている。共に祀られているのがスサノオだけなのは、元がこのように和珥氏＝海部氏・尾張氏の同族の神だからに他ならず、無視するわけにはいかないのである。

他に祀られている比売神だが、これは宗像三神のことである。宗像三神は天照大神とスサノオの誓約の際に、天照大神が噛み砕いたスサノオの十握剣から誕生しており、言わば天照大神の娘である。この三神を1つにまとめて比売神としなくとも、女神らの母で皇祖神の天照大神を祀れば良いわけだが、そうっていないのは、これが“女神としての天照大神”ではなく、“本来の天照大神＝天照国照尊”で、古代ヤマトに於ける最高神を象徴しているからに他ならない。

つまり、中臣氏を乗っ取った藤原氏は崇りを恐れ、重要な神々をすべて祀ることにより、崇りを避けたのである。度重なる遷都や大仏建立などは、すべて崇りを鎮めるために行われたのである。

・現在の五十鈴の宮に落ち着いた時、倭姫命は安倍武渟河別命（アベノタケヌカワワケノミコト）、和珥彦国菴命（ワニノヒコクニフキノミコト）、中臣国摩大鹿嶋命（ナカトミノクニナツオオカシマノミコト）、物部十千根命（モノノベノトオチネノミコト）、大伴武日命（オオトモノタケヒノミコト）、度会大幡主命（ワタライノオオハタヌシノミコト）らに報告のための使いを送った。

*安倍氏、和珥氏、中臣氏（鹿嶋氏）、（狭義の）物部氏、大伴氏、度会氏らに倭姫命が報告したということは、これらの氏族が王家に次いで重要だったということである。ある意味、王家＝海部氏・尾張氏の同族的氏族と言っても良い。

・大鹿嶋命が祭官を定め、度会命を大神主とした。

*神宮が造営された頃には、大鹿嶋命が祭祀を取り仕切っており、度会氏が神宮の神官となったのである。

・丹波の与佐宮から止由気皇太神（トヨケノオオカミ）を山田原（現在の宇治山田）に遷宮し、天衣を奉って日の小宮のような装いとした。

*外宮の豊受大神は籠神社から直接勧請された。そこに奉られた天衣とは、天女の羽衣＝“天の羽衣”である。前述の通り、“天の羽衣”は天上界の力を意味する。

・天照大神の第一摂社、多賀宮を止由気皇太神の宮とした。多賀宮は天照大神の和魂である。

*多賀宮は外宮の第一別宮であり、マナの壺と天御量柱がある宮と推定してい

た。そこが天照大神の第一摂社であることは、女神として祀られている内宮の第一摂社という意味である。また、天照大神の和魂ということは、男神の天照国照尊の本質という意味である。このように記述されていることは、やはり本当の外宮＝豊受大神（＝天照国照尊）が祀られている宮は多賀宮であり、そこにマナの壺と天御量柱があることは、ほぼ確実となったわけである。

・開化天皇の皇孫、丹波道主の一族が御正殿の鑰を持ち、御扉を開く任を負った。また、御炊物忌（みかしきのものいみ）の役目も負った。

*丹波の一族＝海部氏一族のみが御正殿を開き、神撰を奉祭することができたのである。これは、大物忌の役割そのものである。故に、大物忌は海部氏・尾張氏の血統に限られる。

・イザナギの禊で生まれた月天子（右目を洗った時に誕生）は天照大神の和魂である。鼻を洗った際に生まれた神は佐須良比売神（サスラヒメノカミ）で、土蔵の霊であり、スサノオと協力した。また、月天子は天之御中主神であり、豊受大神の荒魂である多賀宮に祀られている。豊受大神宮の相殿は、東に皇孫、西に天児屋根命と天太玉命である。

*何と、月天子＝月読命は天照大神の和魂だった。表向きの天照大神と豊受大神の関係からすれば、天照大神の和魂は豊受大神の荒魂（天照大神の荒魂は豊受大神の和魂）だから、豊受大神の荒魂である多賀宮に天照大神の和魂は祀られることになる。そして、月天子＝天照大神の和魂は天之御中主神だから、天照大神＝豊受大神＝天之御中主神である。

・土御祖神＝土宮には宇迦之御魂神が祀られている。

*土宮にはエンキが該当することは<神々の真相 2>で記した。宇迦之御魂神＝豊受大神であり、豊受大神こそ天照国照尊に他ならないから、それは地球の主エンキということで、まったく矛盾しないどころか、土宮にはエンキが該当することが裏付けられた。

・天太玉命の依り代は剣、天児屋根命は弓である。

*<日本の真相 4>で記したように、天児屋根命は秦氏、天太玉命は海部氏・尾張氏を象徴する。天太玉命の依り代は剣ならば、玉と剣は表裏一体、ということであり、玉が海部氏、剣が尾張氏を象徴する。この関係は、前述の鹿島神宮、香取神宮についても成立している。

天皇陛下崩御後、即座に行われる踐祚式では、剣と八尺瓊曲玉が皇太子に継承されることは、皇居にある剣が本物の草薙神剣の御魂分けとは言えど、玉とは切っても切れない関係にあることを示唆している。

・八咫とは八頭のことである。

*八頭と言って即座に思い浮かぶのは八岐大蛇である。ならば、八岐大蛇の尾から出てきた草薙神剣と八咫鏡も、切っても切れない関係にある。

・月夜見命は馬に乗り、紫の衣を着る。

*紫は最も高貴な色であり、神の中で最も高貴だという意味である。月夜見命＝月読命＝天照大神の和魂＝天照国照尊であり、確かに最も高貴である。

また、ヨハネ黙示録では、白馬に乗った騎手が天から現れるが、その方の衣は血に染まっている。血の赤が濃くなれば、紫っぽくなる。

・嶋国伊雑方上葦原中に真名鶴が稲をくわえていた。

*嶋国伊雑とは、現在の志摩・伊雑宮のことである。そこを“葦原”と形容して葦原中国を象徴していることは、神話上の天照大神という御名として最初に祀られた地は伊雑宮であることを象徴している。そして、鶴を“真名”鶴としていることは、伊雑宮が“真名井”を奥宮とする籠神社と表裏一体であることを示唆している。つまり、本来の天照大神とは、天照国照尊ということである。

・伊雑宮は天牟羅雲命の末裔、天日別命（アメノヒワケノミコト）の子、玉柱屋姫命が祀られている。

*現在の祭神は天照坐皇大御神御魂（アマテラシマススメオオミカミノミタマ）だが、これは“天照（アマテル）＝天照国照尊は皇大御神御魂である”ということであり、皇大御神御魂＝皇祖神は天照国照尊に他ならない、ということである。

天日別命は“日神＝天照国照尊の別名、あるいは分魂”という意味である。その娘が祀られているということは、天照国照尊を祀っていた巫女＝卑弥呼、トヨも祀られているということである。その名の“玉”は王権と海部氏、輝く太陽＝日神を象徴し、“柱”は神の依り代で神籬＝草薙神剣＝アロンの杖と“柱＝ハシラ＝アシラ＝イナンナ”を象徴している。更に、“屋＝や＝ヤー”は籠神社の主神で海神、地球の主エンキを象徴している。日神を太陽神ウツと見なすなら、伊雑宮にはウツ、イナンナ、エンキが祀られていることになり、とても重要な宮である。

・酒殿は天逆太刀、逆鉾を納める。

*酒殿は本来、酒の保管庫ではなく、天逆太刀と逆鉾の保管庫だったのである。ならば、酒殿＝逆殿である。

・御井社（みいしゃ）には天忍石長井水（あめのおしいわながいのみず）が祀

られている。

*御井社とは現在の上御井神社（かみのみいじんじゃ）のことで、外宮御正宮の西の藤岡山の麓にある。また、天忍石長井水とは天忍穂井の水のこと。(6)で天押穂井の水を以って朝夕の御饌が外宮で奉られていた、と記したのはこのことである。

御井社という名称は他の神社にもあり、例えば熱田神宮の境外摂社・高座結御子神社の境内にもある。この御井社の井戸を覗くと“カンシャクの虫封じ”になると言われており、6月1日の例祭には、多くの人々が子供を連れて参拝する。

ところで、“石長=いわなが”と言って思い出されるのが石長比売である。石長比売は大山祇神の娘で、木花開耶姫（コノハナサクヤヒメ）の姉であり、姉と共にニニギに嫁ぐが、妹は美しく、石長比売は醜かったので、大山祇神の下に送り返された。大山祇神は“石長比売を嫁がせたのは天孫が岩のように永遠のものとなるように、木花開耶姫を嫁がせたのは天孫が花のように繁栄するように、という意味だったのだが、石長比売を送り返したことで、天孫の寿命は短くなるだろう”と告げた。ここでは、石長比売の長寿を永遠の命として象徴しているのである。そして、大山祇神を祀る総本山、大山祇神社は祭神の構造からして籠神社の別形態であり、彦火明命の母は大山祇神の娘でもあることは、<日本の真相4>で記した。ならば、石長比売は海部氏が根源となっている不老不死伝説の象徴ということになる。

“醜い”という点では、この字が使われている神に葦原醜男（アシハラシコオ）がある。この神は大国主神=大己貴神=大物主神の亦名であり、“醜男”は“強い男”の意味で、武神としての性格を表すとされている。ならば、海部氏・尾張氏の主神に他ならず、海部氏・尾張氏を暗示する人物や神は“鬼”“童”“熊”など以外に“醜”という字や意味も当てはめられているのである。悲しい物語と共に。

・朝熊神社は櫛玉命と大山祇神が石に坐す。

*朝熊神社は内宮第一の摂社である。“熊”は海部氏を象徴し、重要な大山祇神（彦火明命の母は大山祇神の娘）が石に坐すのだから依り代は磐座であり、籠神社奥宮と同じである。そして、ここには天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊の“櫛玉”命が祀られている。

・天照宮は豊受大神宮と皇大神宮に分かれているが、等しく天照宮である。豊受大神宮を天照坐豊受大神宮とも言う。

*伊雑宮の“天照坐皇大御神御魂”と同じである。また、“天照=天照国照尊は豊受大神宮に坐す”とも読め、外宮に天照国照尊=豊受大神が祀られていることを意味する。

・神代 12 卷之内秘書最極之秘書也と言われる一卷は推古天皇の撰とされているが、天常立尊、天之御中主神、国常立尊は一神三名であり、大元神を御饌津神と言う、とされている。古語では天津御気津国津御気あるいは狭霧と言ひ、神語には義理と言う、とされている。このような御饌津神が止由気大神＝豊受大神とされており、「気」は御饌の「饌」の意味だけではなく、「大気」「水気」「精気」「元気」等の「気」の意味である。

*豊受大神は根源神、ということである。

・下鴨神社の社家の内、上首三家は泉亭氏、鴨脚（イチョウ）氏、梨木氏である。

*ここでの“鴨”とは八咫鳥のことに他ならず、その脚とは 3 本脚のことで、カッパーラの奥義である。ならば、鴨脚氏は八咫鳥に間違いない。その鴨脚氏の顔写真が、あるホームページに載っていたので掲載する。向かって左が下鴨神社の社家で構成する始祖会の世話役、鴨脚光茂氏。右が上賀茂神社の社家、市（イチ）忠顕氏である。鴨脚氏は小学校教員、市氏は大学の化学教授である。両氏が一般的な国民であることからすれば、飛鳥氏の言う、八咫鳥は名も戸籍も無い、というのは嘘である。戦前ならいざ知らず、現代社会に於いて、そのようなことは不可能である。八咫鳥という組織として集まった場合、各自には名が無い、ということだろう。下鴨神社の社家で構成する“始祖会”こそが、八咫鳥集団と思われる。

http://www.kyoto-np.co.jp/kp/special/omoshiro/hito11_02.php

鴨脚氏



市氏



・天之御中主神の神名は、高天の海原に居して天地の間に照臨し、一水の徳を以て万品を利す、とある。つまり、天之御中主神は、元初は海之御中主神であり、上天に天常立、下地に国常立となっていた。それが、海之御中主神から天之御中主神と変わり（変えられ）、元の海の神は大綿津見神あるいは海神とされ、最高神の位置から退かれた形になった。

*やはり、天之御中主神＝海之御中主神だったのであり、＜日本の真相 3＞で推定したことは正しかった。ならば、天橋立も元は“海橋立”だったことになる。

最高神・豊受大神＝天照国照尊＝海之御中主神は藤原氏によって、単なる海神に変えられ（とは言っても、海神の中の最高神）、最高神の位置から退かされたのである。つまり、神の御名を変えるだけではなく、格も落とされたのであり、これが本来の多次元同時存在の法則からすれば、大きな落とし穴になっている。

・天照大神については、豊受大神と同じく大元神霊だったことについての認識が薄くなり、更に亦名が天之御中主神だということについては、一般にはほとんど忘却されてしまった。相当古い時代から大元神という字句が用いられているが、大元神は一面、一神教の“神”に該当する神格である。豊受大神を天之御中主神と伝えているのは、神宮相承の古伝であり、天照大神が大元神であることも、皇大神宮の荒木田神主が宝基本紀に“古人秘伝に云う”と言って、“天照大神 亦名 大元神 亦名 国常立神”と言っているように、皇大神宮神主家で相伝しているところである。

*八咫鳥たる荒木田氏はこのようなことを知っていて、押さえ込んでいるのである。すべてが大元の神に帰結されるならば、その面に於いては“一神教的唯一絶対神”であるが、真相はシュメールの「神々」がまとめられたものである。

・先代旧事本紀神代本紀の神代系紀では、天常立尊と可美葦牙彦舅尊の二伸を、各々の太祖とする二流の伝系を合わせて一代俱生天神とし、その上に天譲日天狭霧国禪月国狭霧尊を置いて天祖としているが、このような構成に至ったのは平安初期のことである。同じく天孫本紀に於いても、天照国照彦火明命を祖とする一流と、ニギハヤヒを祖とする一流の系図を合わせて一神とし、両流の太祖として天照国照彦火明櫛玉饒速日尊としている。このような改変は、明らかに記紀編纂以後の改変である。これは、元の伝系が極めて重要だからこそ、行われたものである。しかし、改変されているにせよ、我が国の古代史や神道史の研究には欠くべからざるものであることに相違ない。

*ここに於いて、不比等らが記紀編纂と同時に系図の書き換えを行っていたことが明らかとなった。古代の伝系とされている天孫本紀ですら、天照国照彦火明命を祖とする一流＝海部氏・尾張氏と、ニギハヤヒを祖とする一流＝物部氏（海部氏・尾張氏を含まない狭義の意味での物部氏）の系図を合わせて一神とし、両流の太祖として天照国照彦火明櫛玉饒速日尊としているのだから、歴史的資料を詳細に調査しても、なかなか真相は見えてこない。

・神武天皇から開化天皇の時代までは史実とは見なされていないが、その時代にも、完全な人間としての歴史があったことは間違いない。最近の説に見られるような伝説上の天皇ではなく、歴史上の天皇（大王）だった。

*記紀が言うところの“歴代天皇”という意味ではなく、それに相当する大王が確実に存在した、ということである。それは、言うまでもなく、海部氏・尾

張氏の血統である。

・伊勢に祀られている天照大神は単に日の神だけではなく、現人神であった頃の天照大神も併せて祀られていると窺われる。

*ならば、卑弥呼とトヨも祀られているということである。一見すると、外宮の方が根源神だから、外宮がトヨの祖先である卑弥呼のように思われる。しかし、外宮は豊受大神宮で豊受大神を祀るので、名称的にトヨとの関係が深い。また、内宮で祀られる天照大神の別名・大日靈貴神は“大いなる日神が降臨する巫女”という意味であり、卑弥呼がモデルになっていることは(7)で記した通りである。そして、卑弥呼はトヨによって祀られたはずだから、“祀られる女神”としてはトヨよりも卑弥呼の方が相応しい。

御神体の観点では、内宮の御神体は八咫鏡であり、鏡との関係が深いのは、前述の通り“八咫=八頭”で8つの頭を持った大蛇、八岐大蛇の尾から出てきた草薙神剣である。草薙神剣は尾張氏が保有しており、尾張氏は女神・天照大神として象徴されることも(7)で記したので、内宮は尾張氏、卑弥呼との相関を暗示している。

宮としての変遷の観点からは、外宮は籠神社から遷されたが、皇大神宮=内宮は元々三輪山の宮、御室嶺上宮にあり、それが遷された。その三輪山は尾張氏の祭祀場だったので、外宮は海部氏、内宮はやはり尾張氏を象徴している。

このように見てくると、外宮はトヨ、内宮は卑弥呼が祀られていると考えるのが妥当である。

これを暗示しているのが御紋である。神宮の御紋は花菱であり、これは住吉大社も同じ御紋で、神功皇后の鎧に付いていた御紋と言われていることは<日本の真相4>で記した。神功皇后は卑弥呼として象徴され、神宮と言えば一般的に皇大神宮=内宮を指すから、内宮の御紋は卑弥呼を象徴しているのである。おそらく、“神宮”を意識して“神功皇后”としたのであろう。

海部毅定氏は、“このような古伝は現在でも偽書扱いされている場合がほとんどだが、既に平安初期以後から古伝を軽視する風潮があったことは、古語拾遺によって明らかである”と述べている。頭から偽書と決め付けていたら、真相は何も見えてこない。

(11) 邪馬台国

a) 邪馬台国の位置

邪馬台国は現在の奈良県、大和国を中心とする地方だった。相当古い時代に於いて、近畿の倭は、九州地方まで延長していたので、倭を九州と間違えられたのである。

b) 箸墓古墳

学説では、卑弥呼は崇神天皇の皇女、豊鋤入姫命、あるいは孝靈天皇の皇女、倭迹迹日百襲姫命に該当するのではないかとされており、いずれも当を得

ているのだが、年代が合致しない。しかし、日本書紀の年代、紀年が改竄されているので、合わないのは当然である。

その倭迹迹日百襲姫命の御陵＝箸墓古墳は卑弥呼女王のそれなのである、と海部毅定氏は言われるが、現当主の海部光彦宮司はトヨの墓ではないか、と言われている。2人の海部氏がこのように言われていることをどう考えれば良いのだろうか。

最近の考古学の調査結果では、箸墓古墳はAD280～290年に築かれたと考えられており、卑弥呼没年はAD247年か248年と考えられるから、卑弥呼の墓にはなり得ず、可能性としてはトヨが相応しい、と石野博信氏は著書「邪馬台国の候補地（新泉社）」の中で述べており、海部光彦宮司の意見と一致している。石野氏に依ると、2世紀末から3世紀前半にかけて三輪山周辺では銅鐸が次々に破壊され、その代わり、鏡が用いられるようになり、大規模な前方後円墳群が3世紀末に一斉に造られた。その間に豪族の首長クラスがまとまって死亡した、あるいは殺されたことは考えにくく、一斉に新たな祖先祭祀が行われるようになったと考えるのが自然であり、先行する王権に対する祭祀、新王権による旧王権への祭祀が始まった、としている。この説ならば、神器の変化と古墳群の一斉建造の辻褄が合う。

卑弥呼は女王となって倭国を治めたわけだが、その後、男王が立つと再び国は混乱し、最終的にトヨが女王となって国が治まった。古代に於いて、最も重要なのは祭祀である。つまり、卑弥呼の時代には祭祀基盤がまだ脆弱であり、全国を統一するまでには至らず、トヨの時代によりやうく祭祀基盤が確立したと考えられる。箸墓古墳が最初期に造られた最大級の古墳であることを考えると、祭祀基盤の確立と国の確立に関わる重要人物と関係が深いことは間違いない。よって、箸墓古墳はトヨの墓と考えるのが妥当だろう。秘伝とは言えど、誰もが知っている卑弥呼に関わる内容であり、このような書物として出版されている以上、核心として言えない部分もあると考えられる。

海部毅定氏は、“卑弥呼女王を皇統の祖神とすることを嫌う傾向にあるが、それは倭人伝の記事があまりにもお粗末だからである。倭人伝では信仰、道義、正しい宗教といった面が伏せられており、支那の国が大きく、倭が小さい国だったため、敬意を忘失した書き方になっている”と言われている。やはり、魏志倭人伝をそのまま信じてはならず、飛鳥氏の言うような、逆転日本列島衝突など、卑弥呼の時代に起きてはいないのである。そして、卑弥呼はれっきとした皇統の祖神である。先行した王権の総括が卑弥呼で、かつ新王権への橋渡しの役割と見るならば、卑弥呼はまさしく女神・天照大神に相当する。

c) 古代資料の改竄

日本上代史上、極めて重要な文献は先代旧事本紀中の天孫本紀そのものである。記紀は、天孫本紀の記文とこれに伴う深秘口伝を中核として編纂されているのだが、天皇記その他の本紀を成立させる過程に於いて、相当改竄されたので、現存する天孫本紀は推古朝以前のもまではない。とりわけ、天火明命とニギハヤヒは別神であって同神ではないのだが、それが同神とされていることは顕著な例である。また、ニギハヤヒの子の宇摩志麻治命が天火明命の子の天香

語山命の弟とされていることも間違いである。これは、ニギハヤヒが徐福（一団）ということを知っていれば、当然、帰結されるべき結論である。

ニニギの兄とされているにも関わらず、天火明命の事歴が古事記に記されていないこと、また、天孫本紀でニニギが九州へ降臨する以前にヤマトに降臨していたのにも関わらず、古事記には記されていないことは、深く仔細があつてのことである。天火明命、天香語山命、天村雲命の三代は、ヤマト降臨天孫氏族の祖神として、我が国の上代史上に於いて極めて重要な位置を占めなければならない。そして、ニギハヤヒの伝系は架空のものではなく、大体に於いて各世代に該当する人物が実在していたのである。

では、その仔細とは何なのか。物部氏がユダヤ教、秦氏が原始キリスト教で、すべて原始キリスト教に変えられていたとしても、その根源はシュメールにあるが、世界中を見ても、根源がシュメールだと認識している者はごく僅かである。ならば、シュメールを知る海部氏・尾張氏の真相であり、完全に抹消するのではなく、いつか“その時”が来たら、公開されるのであろう。

d) 尾張氏伝系

天孫本紀そのものの各世代の年代が大きく揺れ動いていることはこれまでに見てきたが、それはいわゆる尾張氏伝系の場合である。この伝系は単に尾張氏の伝系ではなく、本来の皇統である。

13世孫が尾綱根命（尻綱根命）で以後、尾張氏となっているが、実は誤りで、本来は16世孫が正しい。これは新撰姓氏録に記されているが、新撰姓氏録は記紀よりも後れて成立したにも関わらず、天孫本紀よりも古い伝系が残されている。天火明命の本来の伝はニギハヤヒの伝に隠されてしまい、天香語山命の伝は高倉下の伝と混同されて変貌し、天村雲命に至っては阿比良依姫命を妻となして二男一女を生んだこととされ、この命が九州へ降臨したことになっている。記紀は、一応この命を黙秘して神武天皇とした。そのため、天火明命の8世孫・倭得魂彦命は孝靈天皇に該当し、9世孫・日女命が倭迹迹日百襲姫命に該当しても不思議ではない。（12 ページ系図の「神武＝天村雲命」。）

天孫本紀9世孫・日女命から11世孫の三代は、日本書紀に於いて仲哀天皇・神功皇后の年代に該当している。つまり、魏志倭人伝の卑弥呼、トヨの年代に該当している。これが、国造本紀では“天火明命11世孫の小止与命（乎止與命）が成務朝に国造を賜る（12 ページ系図の「国造本紀伝系(1)」）”とあり、垂仁～成務朝が日本書紀の仲哀天皇・神功皇后の年代に該当しており、年代が移動している。この時代の年代移動こそ、上代国史の形態を大きく左右している。また、この時代にはまだ国造時代ではなく、乎止與命は尾張連だけの祖ではなかった。

実は、この伝系（天孫本紀）の本宗、すなわち、この中に隠されている本来の皇統は倭得魂彦命から建稻種命に至る5代だけであり、建稻種命に尾綱根命が直結されて、あたかも尾張連が本宗であったかの如くに創り上げられ、これこそ、上代史が大混迷している理由なのである。これとほぼ同等の作為が、旧事本記中の他の本紀の中にも存在している。

すなわち、天火明命を祖とする大系図は極秘とされるものであり、天孫本紀に於いては、倭得魂彦命から建稻種命に至る5代だけが原系のままなのである。これは、記紀が歴世の年代を移動させる操作によって成立したためである。本来の総合大系図の本宗は皇統そのものであり、それは12ページ系図の「海部氏伝(1)」に他ならず、それを極秘としているのである。天火明命は皇統の本宗の祖であると同時に尾張連の祖であり、尾張連はいわゆる連枝である。尾張連は4世孫・瀛津世襲命(オキツヨソノミコト)の子孫とされているにも関わらず、尾綱根命を本宗系図に連結していることは、明らかに、この伝系が皇統の本宗系図であることを秘するための作為である。(熱田神宮文書に記載の尾張宿祢田島氏系譜には、瀛津世襲命の名はどこにも記載されていない。)

なお、市杵嶋姫命は天照大神の娘、瀛津嶋姫とも言われており、瀛津鏡=息津鏡は十種神宝の1つで、辺津鏡と共に「合わせ鏡」と“永遠”を象徴すること、そして“瀛”は“瀛州”で“支那の神仙思想に基づく仙人の住む島、東方海上にあるという三神山の1つ”の意味でもあることは、<日本の真相4>で記した。また、“襲(ソ)”=“蘇”でもあるから、“瀛津世襲”とは“永遠の世”を意味し、古くから蓬莱=不老不死の地と言われた熱田の地を祭祀場としていた尾張氏の祖と見なされるに相応しい。

e) 御魂祭り

祖先たちは、各人の靈魂の存在を確信していた。そのため、自己よりも以前に何柱の靈位が存在しているかということについては、後世からは想像も及ばぬほどの関心が持たれており、日夕その祖先を祭ってその加護を信じていたと推察され、それ故に、何世の孫ということは、極めて重要な事項だった。靈位が真実よりも多くて、しかも他の靈も加えられているような場合、当然、曲事を招くこととなり、祀るべきその靈位に漏れ落ちのある時は、祟りを受けることになること信じていた。従って、とりわけ皇統では、極めて大切に継承されなければならないことになっていたのである。

仮に9世孫・日女命及び11世孫・乎止与命(開化~崇神朝)が現人神であるところの天照大神ならば、魏志倭人伝の記事が差し支えて、対外的に威信を保つことが不可能であっただろう。故に、神功皇后の年代が、その時代まで押し上げられた次第である。もし、卑弥呼とトヨの二女王が皇統の祖神でなかったとしたら、正式な国史とされている日本書紀に於いて、何故に卑弥呼が神功皇后であったかのように、その年代を一致させる必要があったのか。皇統の祖神として御魂をお祭りしなければならなかったからこそ、神功皇后の御名としてお祭りしてきた次第なのである。

このように、先代旧事本記の真相が明らかになれば、上代の真相が明らかになるはずである。

最後に言わなければならないのは、人体を具えられた人間神である天照大神が、8世孫・倭得魂彦命以後に実在し、その天孫あるいは皇孫が九州に降臨した事実があったのだが、国史の表面に於いては極秘とされてきた、ということである。その人間神である天照大神とはおそらく9世孫・日女命に該当する卑弥

呼であり、九州に降臨した天孫あるいは皇孫とは、婿入りした秦氏の初代天皇、応神天皇であろう。

(12) 宇佐神宮

応神天皇の話が度々登場しているので、その祖廟たる宇佐神宮について記す。(これは、海部毅定氏の著書とは関係無い。)特に、祭神の比売大神については、藤原氏の氏神、春日大社と同じであり、その点については(10)で触れた。よって、宇佐神宮は別の意味でとても重要である。

①祭神の配置

上宮の一之御殿から三之御殿は南向きで、向かって左が八幡大神(応神天皇)、中心が比売大神(多岐津姫命、市杵嶋姫命、多紀理姫命)、向かって右が神功皇后(応神天皇の母)である。由緒には次のようにある。

“御祭神である八幡大神様は応神天皇の御神霊で、AD571年(欽明天皇の時代)に初めて宇佐の地に御示顕になったと言われます。AD725年、聖武天皇の勅願により現在の地に御殿を造立し、八幡神をお祀りされました。これが宇佐神宮の創立です。

宇佐の地は畿内や出雲と同様に早くから開けたところで、神代に比売大神が宇佐嶋に御降臨されたと言われていると日本書紀に記されています。比売大神様は八幡様が現われる以前の古い神、地主神として祀られ崇敬されてきました。八幡神が祀られた6年後のAD731年に神託により二之御殿が造立され、宇佐の国造は、比売大神をお祀りしました。比売大神は天照大神と素戔嗚尊の誓約によって誕生したとされる神で、筑紫の宇佐嶋(宇佐の御許山)に天降られたと伝えられており、八幡様の現れる以前の古い神様、地主神であるとされています。

三之御殿は神託により、AD823年に建立されました。応神天皇の御母、神功皇后をお祀りしています。神功皇后は母神として神人交歓、安産、教育等の守護をされており、その御威徳が高く現れています。”

社殿の建造は奈良時代で、皇室第二の祖廟とされているのには新しすぎる。それに、何と言っても疑問なのは、八幡大神が中心に配されていないことであり、その中心には比売大神という聞き慣れない女神が祀られていることである。また、ホームページを見ると、普通、神社の御紋は1つなのに、ここは御紋が3つあり、八幡大神は十六弁八重表菊紋、比売大神は三つ巴紋、そして神功皇后が五七の桐である。このように、よく見ると、宇佐神宮は謎を秘めた神社である。では、これらの謎は何を意味しているのか。

八幡大神は応神天皇で実質の初代天皇だから、十六弁八重表菊紋は相応しい。

五七の桐の御紋は古代に於いて天皇家の正式な御紋だったことは<日本の真相>で記した。古代に於ける本来の皇統は海部氏・尾張氏だから、この五七の桐の御紋は海部氏・尾張氏を象徴していることになる。その証拠に、熱田神宮の御紋はこの御紋の下に笹が配された御紋である。また<日本の真相 4>では、

秀吉の印は千成瓢箪で、瓢箪＝瓠瓜は籠神社の奥宮、瓠宮大神宮＝吉佐宮を、秀吉が祀られた豊国神社の“豊”は籠神社の豊受大神の“トヨ”、邪馬台国の卑弥呼の後を継いだ“トヨ”を象徴しており、海部氏・尾張氏一族であることを記したが、秀吉は五七の桐の御紋を許可され、変形させた太閤紋として使用していた。そして、秀吉は実質的に初めて天下を統一したが、大和朝廷成立以前に古代のヤマトを統一したのは卑弥呼だったので、海部氏・尾張氏の中でも特に卑弥呼を象徴する。その卑弥呼を象徴しているのが神功皇后だから、神功皇后の御紋は五七の桐の御紋で象徴される。＜日本の真相 4＞で記した花菱以外にも、五七の桐の御紋が卑弥呼を象徴するのである。神功皇后と海神を祀り、御紋が花菱の住吉大社の神職は代々尾張氏の枝族、津守氏だったことから、やはり花菱と五七の桐の紋は同義なのである。そして、邪馬台国の重要拠点は纏向であり、纏向は尾張氏の拠点だったから、卑弥呼は尾張氏の女王とも言え、それ故に、尾張縁の熱田神宮と秀吉に（変形した）五七の桐の御紋が存在するのである。言い換えれば、熱田神宮と秀吉の御紋から、五七の桐の御紋が誰を象徴するのか考えよ、ということである。

比売大神は多岐津姫命、市杵嶋姫命、多紀理姫命の三柱の女神だから三つ巴紋とも言える。しかし、現在の神社は独自の御紋以外にすべて三つ巴紋を掲げている。また、八幡神が現われる以前の古い地主神とされているが、実はこれら三柱の女神は宗像大社の海上に祀られる宗像三神である。宗像大社では田心姫神＝多紀理姫命、湍津姫神＝多岐津姫命、市杵島姫神＝市杵嶋姫命が祀られており、沖ノ島の沖津宮には田心姫神、大島の中津宮には湍津姫神、田島の辺津宮には市杵島姫神がそれぞれ祀られている。（これら三宮を総称して宗像大社と言う。）これら三柱の女神は住吉大社の海神と対＝「合わせ鏡」になっていることは＜日本の真相 4＞で記した。海神縁ならば、海部氏・尾張氏である。何よりも、八咫鏡の原型であり、物部氏の十種の神宝であり、籠神社の御神宝である息津鏡・辺津鏡に由来する名称は、籠神社を象徴している。

更に、多岐津姫命、市杵嶋姫命、多紀理姫命は天照大神の娘とされているので、1つの御殿の中に三柱の神をまとめて祀らなくとも、女神らの母で皇祖神の天照大神を祀れば良いわけだが、そうっていないのは、これが“女神としての天照大神”ではなく、“本来の天照大神＝天照国照尊”＝籠神社の主神で、古代ヤマトに於ける唯一最高神を象徴しているからに他ならない。だから、最も重要な中心に配してある。向かって右は初めてヤマトの統一を成し遂げた卑弥呼、向かって左は初めて大和朝廷の大王となった応神天皇という構成になっており、日本の根幹の統一は卑弥呼によって成し遂げられたので、その重要度から、向かって右が卑弥呼となる。

そして、最高神・天照国照尊と祖先の卑弥呼を祀ったのがトヨであり、それが比売大神として象徴されている。そのトヨを象徴する御殿が中心だから、この周辺は“豊国”と呼ばれていたのである。

魏志倭人伝に依ると、卑弥呼亡き後、男王が立てられたが人々はこれに満足せず、内乱状態になった。そのため、再び女王が立てられることになり、卑弥

呼の親族である 13 歳の少女、トヨが王となって国は治まった、とある。ここで、トヨは卑弥呼の娘や孫娘とは書かれていないので、卑弥呼の一族である。卑弥呼が尾張氏の女王あるいは尾張氏の治める地での最高祭司の象徴なら、トヨは継体天皇のように同族の海部氏から立てられた女王と考えるのが妥当である。だからこそ、トヨを象徴する比売大神が海神であり、“女神としての天照大神”ではなく、“本来の天照大神＝天照国照尊”を象徴しているのである。

そして、応神天皇が向かって左ということは、海部氏・尾張氏の血族ではなく、婿入りしたためである。

②境内

境内を見ると、御殿と同じ上宮内には西に春日神社、東に住吉神社、西北に北辰神社が配されている。春日は尾張氏を象徴する鹿島神宮の武甕槌命と籠神社を象徴する経津主命を勧請した神社であることは、前出の通りである。

北辰神社は比売大神の脇殿と言われ、本宮の地主神と伝えられる造化三神を祀る。造化三神は「生命の樹」の三柱神だから、根源の天之御中主神に集約され、籠神社の主神である。また、北辰とは北極星のことであり、シナでは“太一”と言った。神宮で天照大神を象徴する“太一”は陰陽道としてこれを持って来たのだが、実は“太＝太秦のウズ＝光”で“太一＝唯一の光”だから、本来は天照国照尊を象徴するので、籠神社の主神である。

そして、住吉は籠神社と深い関係にあることは<日本の真相 4>で記した通りである。

他に、境内の亀山神社の“亀”は物部氏の亀甲紋を、八坂神社は物部氏の主神であるスサノオを、黒男（くろお）神社は大黒主＝大国主＝スサノオを象徴し、いずれも海部氏・尾張氏縁のものばかりである。そして、黒男神社の祭神は海部氏・尾張氏を象徴する武内宿禰である。

また、拝礼は二礼四拍手一礼で出雲と同じであり、出雲は海部氏・尾張氏と深い関係にあることも<日本の真相 4>で記した通りである。更に、宇佐神宮の謂れには次のようにある。

“欽明天皇の 29 年 (AD569 年)、宇佐神宮境内の菱形池のほとりの泉の湧くところに、1 つの身体に 8 つの頭という奇異な姿の鍛冶をする翁が現れて、この姿を見た者はたちまち病気になったり死んだりしました。

大神比義（オオガノヒギ）が見に行くと老人の姿は無く、代わりに金色の鷹が見えました。比義が「誰かによって鷹に変えられたのか、自分の意志で鷹になったのか」と問うと、鷹は金色の鳩となって比義の袂の上に留まりました。

神が人を救済されようとして自ら変身されたことを知った比義が、3 年余り断食をして祈り続けたところ、ついに鉄明天皇 32 年 (AD571 年) 年 2 月の初卯の日に、この泉のかたわらの笹の上に光輝く 3 才の童子が現れ、「我は誉田天皇広幡八幡麿（ホンダノスメラミコトヒロハタノヤハタマロ）なり。我が名は護国靈験威力神通大自在王菩薩で、神道として垂迹せし者なり」と告げられました。

そして、たちまち黄金の鷹になって駅館川（やっかんがわ）東岸の松の上に

留まったと言われます。そこに、和銅元年（AD708年）に鷹居社を造って八幡様を祀り、霊亀2年（AD716年）に小山田の林に移られ、ここに小山田社を造営。神亀2年（AD725年）に現在の社地、亀山（菱形山、小椋山）に移されて八幡大神様が鎮座されたのが宇佐神宮の創立です。”

“1つの身体に8つの頭”は八岐大蛇と同じであり、“鍛冶”は草薙神剣のような刀や武器を製作し、“翁”は<日本の真相4>で記したように、塩土老翁や武内宿禰、浦島太郎のような籠神社に関係の深い人物が老人だから、いずれも海部氏・尾張氏を象徴している。“卯の日”の“卯”は方角で言うと真東で、太陽の昇る方角、古代の神社の向いていた方角を示し、太陽神の天照国照尊を象徴する。

他のいわれとして、神仏習合も興味深い。神仏習合の歴史は、隼人との戦いで殺生の罪を悔いた八幡神が仏教に救いを求めたことに起因しており、これを契機に、宇佐での神と仏が習合した先進的な思想が成立したという。

“宇佐での神仏習合を考える上で注目されるのが、7世紀の末頃に建立されていた古代寺院です。託宣集には、隼人征討には八幡神と共に、虚空蔵寺と法鏡寺の関係者も加わっていたことが記されています。また、放生会（ほうじょうえ、宇佐神宮でのお祭り）では、下毛郡の古要（こひょう）社（大分県中津市）と上毛郡の古表社（福岡県吉富町）が傀儡子舞（くぐつのまい）を奉納し、更に田川郡からは、香春岳（かわらだけ）（福岡県香春町）の銅で作った鏡が奉納されていました。8世紀の豊前風土記には、昔、新羅の神が渡って来て、この河原に住んだので鹿春郷（かわらのさと）と名付けたことなどが記されています。つまり、田川郡には銅を産する香春岳があったので、新羅国の神を祀る技術集団が住んでいたことが分かります。八幡神の誕生伝説に見える「辛（韓）国の宇豆高島」や「鍛冶翁」との関係で注目されています

宇佐宮関係の史料に依ると、神亀2年（AD725年）に宇佐宮を現在の小倉山に移した際、東方の日足の地に弥勒禅院を建立しています。そして、天平9年（AD737年）年には宇佐宮社殿の西に移し、天平10年（AD738年）に金堂・講堂を建立しました。この事業には聖武天皇の大きな援助がありました。以後、弥勒寺は宇佐宮とともに、神仏習合の輝かしい歴史を続けることとなります。”

ここで注目すべきは“新羅の神が渡って来た”ことである。新羅は海部氏が建国に関わっているから、これは新羅に渡った海部氏一族の末裔が帰国して、一部あるいは大部分がこの地に住み着いたということの意味する。それが、“宇豆＝ウズ”や“翁”で象徴されている。“神亀2年”は“神の亀”で海部氏に関係し、“弥勒”は“復活”＝不老不死を象徴して、やはり海部氏・尾張氏が基になっている。

また、八幡神が仏教に救いを求めたことは、現実的に聖武天皇が不比等らへの反逆の意として大仏に頭を垂れたことに対応しており、海部氏・尾張氏の神道が藤原系の“新生神道”に変えられたことに対する、海部氏・尾張氏の抵抗であることは、<日本の真相4>で記した通りである。

このように、宇佐神宮は御殿、摂社、末社、各いわれも海部氏・尾張氏と極めて関係が深い。そのため、宇佐神宮の社家だった海部宮司が籠神社に婿入りできたのである。そして、何故か、海部宮司の実父はシュメールについて良く御存知なのだが、それにはこのような真相が隠されていたからである。

秦氏の拠点、とばかり思っていたが、そうではなく、本来の皇統である海部氏・尾張氏が深く関わっていたからこそ、皇室第二の祖廟なのである。ならば、皇室第一の祖廟、伊勢神宮は言わずもがな、である。

(13)まとめ

系図の込み入った話で、内容が極めて幅広く難解なので、ここまでの重要事項をまとめる。

- ・天照大神は本来、男神の“天照国照尊＝天火明命”で大元の大神であり、海部氏・尾張氏の主神である。しかし、記紀では天之御中主神、天常立神、国常立神などに変えられてしまった。いわゆる女神の天照大神は、日神あるいは人格神としての天照大神の一面を強調しているに過ぎない。そして、天之御中主神＝海之御中主神なので、改竄後、天照国照尊は単なる海神の地位に落とされてしまった。
- ・記紀編纂に於いて、天照国照彦火明命を祖とする一流＝海部氏・尾張氏と、ニギハヤヒ＝徐福一団を祖とする一流＝物部氏（海部氏・尾張氏を含まない狭義の意味での物部氏）の系図を合わせて一神とし、両者を合わせて天照国照彦火明櫛玉饒速日尊とされた。これこそ、多次元同時存在の法則に於いて、すべて同一、とされてしまった根源である。そのため、天火明命の本来の伝はニギハヤヒの伝に隠されてしまい、子の天香語山命の伝は高倉下の伝と混同された。記紀は、天村雲命を黙秘して神武天皇とした。
- ・記紀は人物移動、年代移動の操作により創作されている。
- ・天火明命を祖とする大系図は極秘であり、天孫本紀に於いては、倭得魂彦命から建稻種命に至る5代だけが原系のみである。本来の皇統は12ページ系図の「海部氏伝(1)」である。天火明命は皇統の本宗（皇統）の祖であると同時に尾張連の祖であり、尾張連はいわゆる連枝である。天孫本紀では建稻種命に尾綱根命が直結されて、あたかも尾張連が本宗であったかの如くに創り上げられ、これこそ、上代史が大混迷している理由である。
- ・乎止與命は尾張氏の祖だけではなく、海部氏の祖でもある。
- ・統一国家の大成は、日本武尊及び成務天皇の時代にあった。また、ハツクニシラススメラミコトと称される神武天皇と崇神天皇、“神”の字を冠する神武、崇神、応神の三天皇と神功皇后は日本の古代史上に於いて、特別な意味がある。つまり、倭王と大倭王を分けて考える必要があり、卑弥呼の時代が倭王、

その後の崇神～成務朝に掛けて、卑弥呼の後のヤマトを統一した時代が大倭王の時代と言えそうである。

- 火明命、天香語山命、天村雲命のヤマト降臨伝は、その伝が最初からのものではなく、丹波国への降臨から、次にヤマト国への降臨となっていた。
- 天香語山を中心とする神々の宮殿、元初最高の神々の宮殿は天の少宮（小宮）とも日の少宮とも言われ、“少＝小＝わか”という言葉はこれに関連する。天の少宮に於ける大神の奉斎は天照国照尊＝天照大神＝豊受大神＝天之御中主神の奉斎である。
- 天村雲命は最初に日向国に降臨し、次に丹波国、そして子の天忍人命と天忍男命と共にヤマト国へ降臨した。それと共に、真名井の水も日向から丹波、ヤマトに遷され、天照大神と豊受大神を共に祀った。その真名井の水とは、アロンの杖のことである。天村雲命こそ、アロンの杖を持って来た大王で、陰の剣として象徴されるアロンの杖を持って来たからこそ、陰の水として象徴される真名井の水を授けられたことになっており、剣を持って来た大王が天村雲命とされたからこそ、草薙神剣の元の呼称が天村雲剣である。
- 天香語山命は天村雲命に先立ってヤマトに渡来し、祭祀基盤を整えた祭司レビである。
- 神籬と心御柱の原型はアロンの杖であり、アロンの杖こそ、本来の心御柱である。だからこそ、来るべき時に、草薙神剣は本来の神宮である伊雑宮の心御柱となり得る。主が自ら選ばれた杖故、神が降臨できる神籬であり、芽吹いたアロンの杖の姿は、神に捧げる木＝榊の原型で「生命の樹」である。天照国照尊が降臨する草薙神剣は陰で、太陽＝日＝火に対しては水となる。故に、太陽神・天照国照尊に神器としては剣を奉じ、神饌としては真名井の水を奉る。
- 三輪山西麓に都が造られ、三輪山で海部氏・尾張氏の神である大物主神＝天照国照尊が正式に祀られるようになり、その後、ようやくヤマトは平定された。
- 天香具山＝天香語山の土はヤマトの国の物実で、ヤマトの国の魂そのものである。原型はシュメールで、王権のあった場所は聖別され、その土に、エンリルが“天空のように明るい物体”を埋め込んだことである。この“天空のように明るい物体”が転じて“輝く玉”となり、玉が王権の象徴となった。
- 月読命は天照大神の和魂で、天照大神＝天照国照尊＝豊受大神＝天之御中主神である。天照大神の和魂は豊受大神の荒魂、天照大神の荒魂は豊受大神の和魂だから、豊受大神の荒魂である多賀宮に天照大神の和魂は祀られている。

つまり、本当の外宮＝豊受大神（＝天照国照尊）が祀られている宮は多賀宮であり、そこにマナの壺と天御量柱がある。

- 皇太神宮＝内宮は元々三輪山の宮、御室嶺上宮にあり、それは伊勢の神と三輪山の神が同一ということを示している。つまり、大物主神＝天照国照尊＝天照大神である。
- 外宮の土御祖神＝土宮には宇迦之御魂神が祀られており、海神で地球の主エンキが祀られている。
- 八咫とは八頭のことであり、八岐大蛇の象徴で、八岐大蛇の尾から出てきた草薙神剣と八咫鏡は、切っても切れない関係にある。そして、王権（＝海部氏・尾張氏）の玉を象徴する天太玉命の依り代は剣だから、祭祀には剣が必要だったことが伺える。これらで三種の神器を構成する。
- 伊雑宮は天村雲命の末裔、天日別命の子、玉柱屋姫命が祀られており、海部氏・尾張氏との強い関係が伺われる。
- 鹿嶋氏こそは本来の中臣氏であり、故に、乗っ取った藤原氏は氏神の春日大社に鹿島神宮から武甕槌大神を勧請した。
- 安倍氏、和珥氏、中臣氏（鹿嶋氏）、（狭義の）物部氏、大伴氏、度会氏は王家に次いで重要な氏族であり、ある意味、王家＝海部氏・尾張氏の同族的氏族と言っても良い。
- 天の羽衣は天＝政や祭祀に関わる重要なものであることを暗示している。
- “熊野”や“熊襲”などの“クマ＝熊”は海部氏・尾張氏を象徴しているが、その元は日前の“前”であり、日神の前に跪くこと、すなわち、日神を祀ることを暗示している。
- 邪馬台国は現在の奈良県、大和を中心とする地方だった。
- 邪馬台国で祭祀を司っていた有名な女王・卑弥呼は海部氏・尾張氏の祖だが、象徴として尾張氏に重ねられる。
- 伊勢に祀られている天照大神は単に日神＝天照国照尊だけではなく、現人神であった頃の天照大神も併せて祀られている。つまり、外宮がトヨ、内宮が卑弥呼と考えられる。
- 人間神である天照大神が、8世孫・倭得魂彦命以後に実在し、その天孫あるいは皇孫が九州に降臨した事実があったのだが、国史の表面に於いては極秘と

されてきた。9 世孫・日女命が卑弥呼、11 世孫・日女命がトヨを象徴し、現人神としての天照大神と考えられる。このような事実が隠されたのは、魏志倭人伝の記事が差し支えて、対外的に威信を保つことが不可能であり、故に、神功皇后の年代が、その時代まで押し上げられた。正史である日本書紀に於いて、卑弥呼が神功皇后であったかのように書かれているのは、皇統の祖神として御魂をお祭りしなければならなかったからに他ならない。なお、九州に降臨した天孫あるいは皇孫とは、婿入りした応神天皇であろう。

- ・春日大社、宇佐神宮では比売大神＝海神の宗像三神（多岐津姫命、市杵嶋姫命、多紀理姫命＝女神としての天照大神の娘）が祀られている。単純に皇祖神で女神としての天照大神を祀っていないのは、“女神としての天照大神”ではなく、“本来の天照大神＝天照国照尊”＝籠神社の主神で、古代ヤマトに於ける最高神を象徴しているからに他ならない。その天照国照尊と祖先の卑弥呼を祀ったのがトヨであり、それが比売大神として象徴されている。

3：邪馬台国について

邪馬台国は奈良県の大和にあり、卑弥呼とトヨが女神としての天照大神であることが判明した。邪馬台国を含んだ古代日本について更に考察するため、海部氏系図をより詳細に検討したいところだが、その前に、一般的に言われている邪馬台国の概要について紹介する。

邪馬台国については、纏向が最有力候補と言われている今でも、頑なに九州説を唱えたり、卑弥呼などはいなかった、と主張する学者もいる。ここでは、遺跡の面から大和説に立ち、祭祀等を考察している 2 人の著書を紹介し、それに対して考察する。

(1) 石野博信著、「邪馬台国の候補地（新泉社）」

① 土器と祭祀、古墳

纏向遺跡は AD180 年から 350 年にかけて突然現われ、突然消滅した、特異な遺跡である。出土した土器としては、東海 49%、山陰・北陸 17% であり、尾張・伊勢系の土器が大半を占め、九州系の土器は極めて少ない。そのため、九州から王朝が移動してきたとは考えにくい。東海・山陰・北陸は、まさしく海部氏・尾張氏の領地に他ならない。

土器と共に大量の粃殻や儀礼用用具などが見つかっており、現在の新嘗祭の原型に当たる儀礼が行われていたことが示唆される。また、2 世紀末から 3 世紀前半に掛けて、三輪山周辺では銅鐸が次々に破壊された。その代わり、鏡が用いられるようになった。これは、鏡、息津鏡・辺津鏡が基となり、卑弥呼という共立女王によって、ようやく国の祭祀基盤が整ったことを意味するだろう。つまり、新たな連合国家を造り上げるため、従来の祭祀から新たな祭祀に移行したということである。

その卑弥呼没年は、AD247 年か 248 年と思われる。箸墓古墳は AD280～290 年に築かれたと考えられるので、邪馬台国の卑弥呼の墓にはなり得ず、可能性と

してはトヨが相応しい。これは、海部宮司が言われていることと一致する。

ヤマトには無数の古墳群が見られ、大規模な前方後円墳群は 3 世紀末に一斉に造られていることが判明している。しかし、その間に豪族の首長クラスがまとまって死亡した、あるいは殺されたことは考えにくい。つまり、一斉に祖先祭祀が行われるようになったと考えるのが自然であり、先行する王権に対する祭祀、新王権による旧王権への祭祀である。その時代とは、2 回目にハツクニシラススメラミコトと呼ばれたミマキイリヒコ＝崇神天皇の時代と考えられる。

埼玉県の埼玉（さきたま）稲荷山古墳から出土した鉄剣の銘文に刻まれた各世代の王の伝承には、オワケノオミから 7 代遡る王の名前があり、その初代がオオビコノミコトとなっている。日本書紀にもオオビコノミコト＝大彦命（四道將軍の 1 人）の名が見られるが、両者が同一人物ならば、銘文の辛亥年（AD471 年）から 8 代遡った段階がハツクニシラススメラミコトの在位期間と推定できる。一世代の在位年数は明らかではないが、倭の五王の在位年数の平均（15 年）からすれば、4 世紀中葉であろう。その段階が纏向 5 類の段階であり、崇神天皇が即位したであろう纏向 4 類末、同 5 類初の時に、先行する王権に対する祭祀が一斉に行われたのではないかと考えられる。それは、倭国を治めていた 2 人の女王＝卑弥呼、トヨの後、ハツクニシラススメラミコトという男王が立ち、新たな政権を担当する王による、先行する王権への祭祀と考えることができる。つまり、前述の大倭王に相当する。古代では政治よりも祭祀が最も重要視されていたから、このような、先行する王権に対する祭祀、新王権による旧王権への祭祀が一斉に行われるようになったという点で、国の統一を考察することは正しい見方と言える。

②纏向周辺での興味深いお祭り

纏向のすぐ西の江包（えつつみ）地域で奇祭がある。毎年旧正月 10 日に行われるお綱祭である。江包と大西の村人が大和川を挟んで分かれ、一方には藁で造った大きな女性のシンボルがあり、もう一方には蛇のような巨大な藁造りの男性のシンボルがあって、その 2 つを両方の村から川を渡って運び、合体させる。仲人が立ち、女綱が男綱を誘うが、男綱が七度半断った後で合体させる。

尾張・二ノ宮の大縣神社では大きな女性のシンボルを象った山車などを、田縣神社では男性のシンボルを象った神輿を担いで練り歩く。年によっては、両社のお祭りが同じ日となり、藁で作った女性のシンボルに男性のシンボルを合体させる。これは、纏向周辺から一族が尾張地方へ移動してきたことを物語っている。

(2) 仁藤敦史著、「卑弥呼と台与（山川出版社）」

①魏志倭人伝

魏志倭人伝（三国志・魏書烏丸鮮卑東夷伝倭人条）は外国史料という意味に於いて、当時の倭国について古代支那の人々が記述することは、稀に使者などが往来する程度だから、伝聞的なものが多い。それに、“東夷伝”という名称自

体が、周辺諸民族に対して差別的な古代支那人の考えを反映している。中原（ちゅうげん、世界＝支那の中央）から地理的に離れるほど、野蛮人が住んでいると考え、これを中華思想と言う。東方は“夷”、南方は“蛮”というように、方位毎に異なる種類の野蛮人がいると考えた。

また、風俗記事や方位記事で注意すべきは、倭国が現在の台湾や中国東南海上に位置すると誤解していたことである。例えば、“倭の地は温暖にして、冬も夏も生菜を食らう”とある。また、魏と対立していた呉に倭国が隣接し、南方海上に位置する大国という魏の認識が、魏王朝からの異例とも言える、倭国に対する丁重な外交方針を決定する要因にもなっていた。

故に、邪馬台国九州説が主張の根拠としている距離の矛盾は、史料としての信憑性に欠ける。

三国志の原本は 3 世紀には成立していたが、現在、倭人伝が記されている三国志のテキストは宋代までしかルーツを遡れず、写本ではなく、木版印刷の形で伝えられている。それ以前の伝来は、紙に墨で書写した写本という形、更に以前は木簡や竹簡であり、“原”三国志が 3 世紀に成立していたとしても、現在のテキストと同じものであった保証は無い。仏教と同様に、伝来の中にテキストの改変・削除など、多様な変化が想定される。三国志で“倭国伝”ではなく“倭人伝”となっているのは、倭王たる卑弥呼がすべての倭人・倭種全体を掌握していなかったためである。（狗奴国など。）

梁書（りょうじょ）倭伝では“卑弥呼の宗女（一族）である台与を立てて王と為す。その後、また男王を立て、支那の爵命を受く”とあり、台与と倭の五王（AD413 年から 502 年にかけて南朝に朝貢した五人の倭国王、讃・珍・済（せい）・興・武で、武は通説では雄略天皇に比定される）を連続的に記す。

随書・倭国伝には“邪馬堆に都す。即ち、魏志の謂う所の邪馬台（やまと）なるものなり”として、邪馬台国はヤマト王権がある大和に存在していたとする。これからも、邪馬台国大和説は確実であり、“やまたいこく”と読んでいるが故に、真相を理解できないとも言える。

②邪馬台国と外国との関係

倭国内部に於ける政治的統一には支那王朝の支持が必要であり、倭国内部の諸王たちは、それぞれが歴史的に支那王朝あるいは半島の王朝と関係を持った時期があった。しかし、それでは常に大国の支那に対する恐怖というものがある。

遼東半島は絶域であり、そのため、その地を支配した公孫氏は漢王朝から権限を委任されていたが、公孫氏の存在を度外視しては、卑弥呼の外交交渉は成立しなかった。当時、公孫氏と魏、呉は微妙なバランス関係にあったので、倭国は公孫氏とも良好な関係を維持する必要があった。魏が倭国との連帯を重視したのも、そのような背景がある。卑弥呼の王としてのランクは次のように三段階ある。

- ・邪馬台国の女王＝女王国。

- ・狭義の倭国（邪馬台国連合）の女王＝（倭の）女王。
- ・広義の倭国（倭人・倭種全体）の女王＝親魏倭王、倭王。

親魏倭王の金印を授かったものの、狗奴国などが従っていなかったことから、実質的には卑弥呼は邪馬台国連合の女王に留まったことになる。金印には、魏が倭国と呉の連帯を危惧し、牽制する意味が込められていたのである。

この時期、大陸では大月氏が力を持っていたので、大月氏も親魏大月氏の称号を授与されている。大月氏は BC2 世紀から AD1 世紀頃にかけて中央アジアに存在した遊牧民国家である。月氏は匈奴との戦いに敗れ、その中の西に移動した部族が大月氏である。言わば、柵の祖との“秦人”であり、秦氏との深い関係が伺われる。

卑弥呼は見えない聖王だったが、これは性差に因るものではなく、倭王としての属性だった。後の男王もまた、外国使者に対しては接見しないのが普通だった。推古天皇の外交儀礼なども、このような考えで位置付けるべきものである。資料に接見したことが記載されていなくとも、それは当時の常識として当然だったからであり、その人物が存在していなかったことにはならない。

③祭祀

銅剣・銅鐸などの青銅器を用いた祭祀は旧来の祭祀であり、卑弥呼の時代からは鏡を用いた祭祀が始まった。（銅剣は九州、中国、四国に分布するのに対し、銅鐸は近畿、東海地方に多く分布する。）支那に対する小さな倭国内での共倒れを防ぐという意味に於いて、これまでの諸国で成されていなかった新たな祭祀の仕方を創始し、その偉大な創始者が卑弥呼である。そして、その鏡とは息津鏡・辺津鏡に他ならない。

古墳時代以前は女性首長の存在は珍しくなく、男王のみ、女王のみの場合もあり、いろいろなパターンがあった。そして、同じ血を引く兄妹・姉弟のペアが、聖俗に依る明確な分業ではなく、男女間で祭祀と政治を共有していた。卑弥呼の場合も、証書・印綬が男弟ではなく“倭王に拝仮”されたから、卑弥呼が“鬼道”だけではなく、政治も担当していたことは明らかである。鬼道＝祭祀は“祭りごと”であり、政治の“政”を“まつりごと”というのも、祭祀が基本だったことに由来する。

首長権の継承儀礼が前方後円墳上で行われていたとしたら、倭人伝に依る限り、トヨの時代まで祭祀形態は安定しなかったと推測される。もし、前方後円墳が卑弥呼の時代に存在したならば、後に擁立された男王の地位が不安定で、倭国内部が混乱したことは説明しにくい。

前方後円墳の成立年代が卑弥呼・台与の時代まで遡るに連れ、文献解釈からは、卑弥呼の“共立”の意味を深く考えなければならない。つまり、卑弥呼の時代に築かれた安定的秩序を次世代に伝えていくシステムが、確立の段階まで至っていなかったことが、卑弥呼王権の限界だったと考えられる。

倭国に於いて、純化した王系が安定するは、継体～欽明天皇以降である。それ以前は、男王への収斂はあるものの、王系の交替は潜在的には可能だった。

通説では、日本書紀の神功紀 66 年条所引の晋起居注（しんききょちゅう）に“武帝の泰初 2 年 10 月、倭の女王、訳を重ねて貢献せしむ”とあり、トヨによる遣使を伺わせる。しかし、晋書・武帝紀には倭王の性別記載は無く、トヨとは明記されていない。また、文脈としては、倭の女王＝卑弥呼が AD266 年の朝貢まで連続して朝貢していたと解釈できるような記載となっている。これは史実とは異なり、短絡的な書き方である。だから、日本書紀の場合も、晋書に倣って女王を卑弥呼と見なし、卑弥呼と神功皇后を重ねる目的で、このような記載をしたと考えられる。そのため、晋書にある倭の女王を短絡的にトヨと限定することは自明のことではなく（卑弥呼にも重ねられるので）、トヨの没年を遡らせて箸墓の被葬者に想定することも可能である。前述のように、卑弥呼の没年と箸墓古墳の建造推定年代からして、卑弥呼の墓にはなり得ない。

なお、宗像大社の沖津宮、“海の正倉院”はヤマト王権による朝鮮半島への航海安全を願って手厚く祀られた。沖津＝息津で息津鏡を象徴し、この鏡によって、古代の祭祀構造は一変したのである。

ここの海底遺跡からは、<神々の真相 5>で記したアダムとイブを象徴する真鍮の 2 体の金属像が発掘されている。アダムとイブを創造したのはエンキとニンギシュジツダ、ニンフルサグだが実質的に生殖能力を持たせたのはニンギシュジツダであり、縄文人はカ・インの末裔で、カ・インの子孫は主に中南米で発展した。そして、中南米ではニンギシュジツダがケツアルコアトルとして崇められた。よって、海底遺跡はニンギシュジツダによるものと思われる。

2 人の著書の内容をまとめると、次のようになる。

- ・邪馬台（ヤマト）国は大和にあった。
- ・卑弥呼の没年と箸墓古墳建造年代から、箸墓の埋葬者はトヨの方が相応しい。
- ・卑弥呼の時代に築かれた安定的秩序を次世代に伝えていくシステムが、確立の段階まで至っていなかったことが、卑弥呼王権の限界だった。
- ・卑弥呼の時代には、銅剣・銅鐸などの青銅器を用いた祭祀が終わり、鏡を用いた祭祀が始まった。その鏡とは息津鏡・辺津鏡に他ならない。
- ・倭国を治めていた 2 人の女王＝卑弥呼、トヨの後、ハツクニシラススメラミコトという男王＝大倭王が起ち、新たな政権を担当する王による、先行する王権への祭祀、新王権による旧王権への祭祀が一斉に行われるようになった。

4：海部氏の系図について

ここまでは海部毅定氏の著書をまとめて考察し、天照大神は本来、男神の“天照国照尊＝（天）火明命”で、大元の大神で海部氏・尾張氏の主神であったこと、記紀編纂に於いて、天照国照彦火明命とニギハヤヒの系図を合わされて一神とされたこと、その記紀は人物移動、年代移動の操作により創作されていること、天孫本紀に於いては、倭得魂彦命から建稻種命に至る 5 代だけが原系のままであり、本来の皇統は海部氏の系譜にあること、統一国家の大成は日本武尊及び成務天皇の時代に成されたことなどが判明した。それ故、海部氏の系譜にある各人物（神）を更に詳細に調査し、正しい年代を推定する必要がある。

ここでは、海部氏の系譜について研究した金久与市氏と伴とし子氏の研究内容を、主に人物（神）についてまとめる。参考文献は、金久氏は「古代海部氏の系図（学生社）」、伴氏は「卑弥呼の孫トヨはアマテラスだった（明窓出版）」「ヤマト政権誕生と大丹波王国（新人物往来社）」である。いずれの引用かは特に記さないが、両氏の考察を基に自説を加えた形である。なお、年代については別途、考察する。

伴氏に依ると、隋書には“倭国の王は阿每（アマ）＝阿每多利思比弧（アメリシヒコ）”とある、ということなので、海部氏が倭国の王だったことが、当時の外国文献によって明らかにされている。

(1)系図上の人物あるいは神

2：で海部氏の系図を見てきたが、海部氏の系図には 2 系統あり、共に国宝で 1 つは本系図、もう 1 つは勘注系図である。本系図は直系の宮司のみの系図であり、勘注系図は詳細な説明の付いた系図である。国司の印が押されているため、秘伝とは言っても、ある程度公にできるよう、情報が錯綜しているように見られる部分もある。つまり、文字として公開できることには限度がある、ということである。勘注系図は、実は江戸時代に丹波国造本紀を基に編纂されている。

- ・丹波国造本紀：推古天皇の約 AD620 年頃。
- ・古事記：AD712 年。
- ・丹後国風土記：AD715 年。
- ・日本書紀：AD720 年。
- ・籠宮祝部氏之本紀：AD721 年あるいは 722 年。
- ・海部氏系図：AD871～877 年。上古は省略。
- ・海部氏勘注系図：江戸期。

このように、江戸期に編纂されてはいるが、古事記よりも古い丹波国造本紀を原本としている。古事記、日本書紀という“正史”が創り上げられてしまったので、それに抵触する史料や記録といったものは、偽書とされるようになってしまった。勘注系図に於いても、錯綜している情報が記されているのは、真相を明確に指摘することを避け、記紀との整合性をある程度考慮してのことである。

①珍彦（ウズヒコ）

<日本の真相 4>でも記したが、武内宿禰の母、山下影日売（ヤマシタカゲヒメ）の兄が宇豆比古（ウズヒコ）で、宇豆比古＝珍彦は海部氏・尾張氏だから、武内宿禰もその一族ということになる。

<日本の真相 4>では、火明命の孫が宇豆彦命（＝珍彦）だった。しかし、丹波国造海部直氏の伝系に依ると、火明命の3世孫が宇豆彦命（＝珍彦）である。古事記では神武天皇に向かって国神と宣言した人物、日本書紀では神武天皇に倭国造と任命された人物で、海上の案内をした漁師とされ、椎根津彦の名を賜っている。国（津）神とは、神武天皇＝秦氏渡来以前からヤマトを治めていた海部氏・尾張氏の象徴である。

先代旧事本紀の皇孫本紀には彦火火出見の第二子、武位起命の子が椎根津彦で、その本名が珍彦であり、大和国造の祖、大和直部の始祖となっている。2：(2)で記したように、勘注系図の一伝に依ると、彦火明命の亦名が彦火火出見命であり、その子は武位起命、孫は宇豆彦命、3世孫は倭宿祢命とされている。このように、珍彦については混乱しているように見えるが、どのように考えたら良いのだろうか。

籠神社の秘伝では、当初は天照国照尊を彦火火出見として祀っていたが、記紀変遷に伴って火明命に変えられた、とされている。また、大和国造の祖となった倭宿祢命は、丹波国造海部直氏の古伝に依ると、彦火明命の3世孫である。そこで、秘伝と古伝に従って、次の系図を大元と考える。

- ・彦火火出見＝彦火明命－天香語山命－天村雲命－倭宿祢命。

そうすると、前述の各伝系に於ける宇豆彦命＝珍彦は次のように対応する。

- ・火明命の孫が珍彦＝宇豆彦命：天村雲命。
火明命－天香語山命－天村雲命より。
- ・火明命の3世孫が珍彦＝宇豆彦命：倭宿祢命。
火明命－天香語山命－天村雲命－倭宿祢命より。
- ・先代旧事本紀の皇孫本紀：天村雲命。（武位起命を天香語山命と見なして。）
彦火火出見＝彦火明命－武位起命－椎根津彦＝珍彦より。

火明命の孫が宇豆彦命という海部氏の伝は勘注系図に依るものであるが、同じ海部氏の系図として、火明命の3世孫が宇豆彦命という伝は丹波国造海部直氏の伝系に依るもので、両者が矛盾している。しかし、古伝の方が真相を伝えていられるので、宇豆彦命＝珍彦は倭宿祢命が有力であり、実際、倭宿祢命の別名を椎根津彦、珍彦（宇豆彦）とする伝も見られる。

皇孫本紀では武位起命を天香語山命と見なした結果、天村雲命に対応するが、天村雲命の亦名が天五十楯天香語山命（アメノイタテアメノカゴヤマノミコト）あるいは天五多底命（アメノイタテノミコト）であり、“イタテ＝位起”を含む。そこで、武位起命を天村雲命と見なすと、椎根津彦＝珍彦は倭宿祢命となる。つまり、皇孫本紀では実は（彦）火明命－彦火火出見命－武位起命－椎根津彦

＝珍彦のように彦火火出見命が火明命の子となっており、彦火火出見＝彦火明命という事実を改竄した結果なのである。そうすると、火明命の孫が宇豆彦命という勘注系図の伝は、それに合わせた作為と言える。

よって、珍彦＝宇豆彦命＝椎根津彦＝倭宿祢命である。

②倭宿祢命（3世孫）

その倭宿祢命の父は天村雲命で、亦名は天御蔭命である。これは12ページで記した系図の中で「海部氏伝(1)」に相当する。倭宿祢命は丹波からヤマトへ入ったとされ、その経路は丹後の舞鶴から若狭の北川・遠敷川へ出て、近江の安曇川に沿って山城国の高野川へ、それより木津川、そして大和川と川岸を歩いて大和国に至ったと思われる、と金久氏は言っているが、これは海部宮司から直接伺った経路と一致しており、氏も海部宮司から直接伺ったと思われる。

2：(6)では、天村雲命が日向国から丹波国へ遷り、その後、子の天忍人命と天忍男命と共に大和国に遷って、それと共に、真名井の水も日向国から丹波国、大和国に遷され、元初の大神を祀っていた、と記した。ならば、天忍人命と天忍男命以外の子が倭宿祢命に相当する。では、実質的にヤマトに入って国造りを始めたのは天村雲命なのか、それとも倭宿祢命なのだろうか。

倭宿祢命は天照大神の5世孫とされており、古事記での5世孫は神武天皇である。

- ・海部氏：天照大神－天忍穗耳尊－彦火明命（彦火火出見命）－天香語山命－天村雲命－倭宿祢命＝珍彦＝宇豆彦命＝椎根津彦。
- ・古事記：天照大神－天忍穗耳尊－ニニギ－火遠理命－ウガヤフキアエズ－神武。

つまり、正史では神武天皇がヤマトに入って国造りを始めたことになっているが、倭宿祢命がその神武天皇に相当することは、倭宿祢命こそ、実質的にヤマトに入って国造りを始めたことの暗示である。倭宿祢命が“倭”を冠しているのは、その象徴である。天村雲命は吉野に入って真名井の水を祀ったが、本格的に進出の目的でヤマトに入ったのは倭宿祢命なのだろう。

籠神社には、亀に乗った倭宿祢命の像がある。ここでは、倭宿祢命は海部宮司家の4代目の祖、天忍人命とされているが、それは表に公開しているための作為である。倭宿祢命と天忍人命は天村雲命の子で兄弟である。しかしながら、このように倭宿祢命の像があるということも、倭宿祢命こそ、実質的にヤマトに入って国造りを始めたことの暗示である。

なお、2：(2)で大倉岐命の亦名で尊称が倭宿祢命であり、火明命の14世孫、川上真稚命も亦名が倭宿祢命であり、倭宿祢命は景行天皇の皇子とされているが、大和国造の祖でもあることを記した。これは、すべて同一人物という意味ではなく、ヤマトで重要な働きをした人物を“倭宿祢命”と名乗らせているためと考えられる。12ページ系図の「海部氏伝(1)」では川上真稚命が景行朝に相当しており、川上真稚命を“倭宿祢命”と名乗らせることにより、記紀では景

行天皇の皇子とされてしまったのだろう。

a) 導きの神

倭宿祢命＝珍彦は、古事記では神武天皇に向かって国神と宣言した人物で、日本書紀では神武天皇に倭国造と任命された人物で、海上の案内をした漁師とされている。倭宿祢命こそ、実質的にヤマトに入って国造りを始めたから、秦氏の初代天皇（実は神武ではなく応神）に向かって、当初からヤマトを治めていた国神だ、と宣言し、“倭国造と任命された（実は当初からヤマトにいた）”のである。しかし、本来の天神系だった珍彦は、記紀では国神や導きの神に降格され、真相を隠されてしまったのである。

導きの神と言え、倭宿祢命＝珍彦以前、天孫降臨で導きの神とされている猿田彦である。では、猿田彦との関係はどのようなのだろうか。猿田彦の妻は天宇受売命で、“宇受売＝ウズメ＝ウズの女”だから、猿田彦はウズ彦とも言われる。よって、猿田彦＝珍彦である。

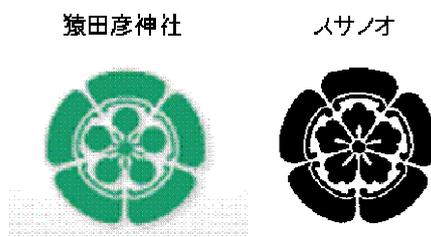
また、“ウズ＝ウツ＝太陽神”だからシュメールの太陽神ウツが原型である。太陽神ウツの王位継承数字は20、双子のイナンナは15で、両者は王位継承数字としては夫婦と見なせ、天宇受売命の原型はイナンナである。しかし、＜日本の真相3＞で記したように、ニンギシュジツダも原型である。ニンギシュジツダはドゥムジをニビルから導いた神だから、導きの神の原型である。また、光り輝くケツアルコアトルという点で太陽神的であり、エジプトではマルドゥクのいない時期に太陽神として祀られていた。そして、海神エンキの息子で、海神的要素も併せ持つから、太陽神と海神の両方の要素を併せ持ち、天照国照尊に相当する神である。

猿田彦は口と尻が光って天と地を照らし、大神と呼ばれている。“大神”という名称は非常に少なく（日本書紀では6柱、古事記では3柱）、とても重要であり、無視できない存在であることを暗示している。（関裕二著、「伊勢神宮の暗号（講談社）」参照。）天と地を照らすことは天照国照尊と同義である。また、猿田彦は目が八咫鏡のように輝いていたとされるが、八咫鏡の原型は息津鏡・辺津鏡で、八咫鏡は太陽神・天照国照尊の依り代だから、猿田彦はやはり天照国照尊と同義である。故に大神で、シュメールの原型とも矛盾しない。

他にも、猿田彦には海神的側面があり、これは記紀にも記されている。猿田彦は天孫降臨後、伊勢に去って行ったが、漁をしていたら比良夫貝（ひらぶがい）に手を挟まれ、海に沈んで溺れてしまった、と古事記にある。底に沈んだ時の名は底度久御魂（ソコドクノミタマ）、海水が泡立った時の名は都夫多都御魂（ツブタツノミタマ）、泡が弾けた時の名は阿和佐久御魂（アワサクノミタマ）と言った。住吉大社の海神は3柱、宗像三神も3柱で、猿田彦にも明らかに海神的側面がある。

現在、その伊勢で猿田彦を祀っているのは、宇治浦田にある猿田彦神社である。“宇治＝ウジ＝ウツ”で、やはり太陽を象徴する。そして、猿田彦の子孫は宇治土公（ウジノツチギミ）と名乗り、神職を世襲していることは籠神社と同様である。また、神社の御紋はスサノオの御紋とそっくりである。これは、海

神スサノオに太陽神としての性格が隠されているように、太陽神的性格を有する猿田彦に海神としての性格もあることを物語っている。このように、猿田彦は太陽神であるのと同時に海神でもある。これはやはり、太陽神でありながら、海神的側面を有する天照国照尊＝海照国照尊と同義である。



よって、猿田彦の亦名はウズ彦ではあるものの、真相は天照国照尊である。故に、“大神”と称せられ、実在した大王や人物に重ねられるものではなく、導きの神でもない。これは、秦氏の最高神が女神の天照大神とされたので、導きの神に降格させられたのである。また、倭宿祢命こそ、実在の大王として初めて本格的にヤマトに進出したが、それを神武天皇とされたことにより、同様に神武天皇を導いたことに降格させられたのである。そして、猿田彦大神＝天照国照尊の海神的側面が倭宿祢命に反映され、神武天皇東征時に海上を案内した漁師とされたのである。このようなことが、“珍彦＝宇豆彦＝ウズ彦”という名で象徴されている。これを、同じ“珍彦＝宇豆彦＝ウズ彦”という名を冠するから同一だ、と見なすことは、多次元同時存在の法則の落とし穴である。神あるいは人物の、ある側面が投影されている、ということであって、必ずしも同一ではないのである。

天照国照尊の海神的側面は、海部氏がフェニキア人と共に海を渡って渡来して来たこと、主エンキ＝ヤーが海神であることが反映されている。そして、秦氏によって本来の天神族である天部（アマベ）氏は降格させられ、海部（アマベ）氏とされた。

なお、猿田彦は目が八咫鏡＝息津鏡・辺津鏡のように輝いていたとされるが、正史では天之日矛が息津鏡・辺津鏡を持って来たこととされ、猿田彦は天之日矛をも連想させる。また、天之日矛は“比売許曾”を追ってヤマトに来たが、猿田彦は出雲の許曾志（こそし）神社が生誕地として祀られており、ここでも両者の深い関係が読み取れる。更に、猿田彦は様々な祭礼に於いて、矛をささげて行列を先導することが多いが、その“矛”は“天之日矛”に通じる。

しかし、これらも猿田彦が降格されて導きの神にされてしまったからであり、ヤマトも出雲も古代丹波王国だったから、天之日矛も猿田彦も海部氏由来、ということを示しているだけだと考えられる。天之日矛の真相については後述する。

b) 吉野との関係

倭宿祢命について、“ヤマトの国に遷座の時、白雲別神（シラクモワケノカミ）

の女、豊水富命を娶り、笠水彦命を生む”と勘注系図にある。(2:(7)でも記載。)豊水富命の亦名は井比鹿(イヒカ)、井光の女(イヒカノムスメ)、水光姫(ミヒカヒメ)で、倭宿祢命の母は伊加里姫命であり、“イカリ”“イヒカ”に関係する社が2箇所ある。1つは奈良県吉野郡川上村字井光(いかり)に鎮座の井光神社である。日本書紀では、神武軍が吉野で“井の中”から出てきた人物が“井光”で、古事記では、神武軍が吉野川の川上で、尾がある人が井戸から出て来て、その井戸が光っていた、とある。そして、誰かと問えば、「僕(あ)は国神、名は井氷鹿(イヒカ)」と言ったといい、吉野連等の祖とされている。新撰姓氏録では、井光にいた女が神武天皇に“豊御富”と名乗り、天皇は“水光姫”と名付けた、とある。もう1つは奈良県北葛城郡当麻(たいま)町長尾字木身屋代(きみやしろ)に鎮座する長尾(ながおの)神社である。祭神は水光姫と白雲別命であり、長尾神社の伝に依ると、神武軍が吉野郡川上村井光を通った時、井戸の中から水光姫が現れ、尾が光っていたとされる。そして、豊かな吉野川の水神であり、井戸の神とされている。いずれも、逸話として“水”と“光”に関わっている。

2:(6)で記したように、天村雲命は子の天忍人命と天忍男命と共に大和国に遷り、真名井の水も日向国から丹波国、大和国に遷され、元初の大神を祀っていた。“水”は天村雲命が真名井の水を汲んで神饌の料とし、それを遷し祀った“天押穂井の水”であり、それに因んで“井=井戸”となっている。丹後国風土記に依ると、“笠水は宇介美都(ウケミズ)と読む。一名は真名井。これは豊宇気大神降臨の時に湧き出した泉である。伊加里姫と笠水神(笠水彦命と笠水姫命)は海部直等が斎き祭る祖神である”とあり、“水”とは“真名井の水=天押穂井の水”である。また、“光”は太陽神の“天照国照尊”を象徴する。

つまり、豊水富命=イヒカ=ミヒカ=水光姫は吉野で“天押穂井の水”と豊受大神(天照国照尊)を祀った巫女であり、故に、吉野が聖地とされているのである。井光郷土史に依ると、吉野の山中で道に迷った神武一行を道案内したのが井光族だったとされているが、神武天皇は天村雲命に相当するので、天村雲命を吉野で案内したのが井光族ということである。

そして、このように“水”が重要視されていることは、それは取りも直さず、アロンの杖の象徴だからに他ならず、天村雲命がアロンの杖を持って大和国に入って元初の大神を祀ったことを象徴している。

ここで“長尾”という言葉が出てきたが、大物主神の逸話でも“長尾”が登場する。大物主神が、子の大田田根子に祀らせれば国は平穏になるという逸話に於いて、大田田根子が大物主神の、長尾市(ナガオチ)が倭大国魂神(ヤマトノオオクニタマノカミ)の祭主となることにより、国は平穏となった。長尾市は長尾神社の祭神、水光姫を象徴し、大田田根子と共に、特定の血統にしか神祭りは許されないことを暗示している。つまり、海部氏の血統である。

大物主神は太陽神の象徴、長尾市は水神の象徴だが、海部毅定氏が“真名井”や“天押穂井の水”に関して述べている場合は豊受大神と言われていることから、天照国照尊=豊受大神の特に日神としての側面を強調する場合は天照国照尊、水神としての側面を強調する場合は豊受大神だろう。

ここにも出てきた、長い尾を持っていたとか、尾が光っていたとか、他には鬼や熊や土蜘蛛など、朝廷＝秦氏に従わない者はいずれも異形の者として描かれている。

③笠水彦命（4世孫）

笠水彦命は倭宿祢命の子である。従兄に当たる天登目命（アメノトメノミコト）は母が葛木出石姫であり、葛木避姫（カツラギサクヒメ）を妃としている。また、天登目命の従弟に当たる武額赤命（タケヌカガノミコト）の母は葛木加奈良知姫であり、葛城氏との関係が深い。

海部氏伝では宇介水彦命＝笠水彦命の4世孫は倭得魂命で亦名が川上真若命＝川上真稚命とされている。川上真若命は彦火明命の8世孫、川上真稚命は14世孫なので、8世孫＝14世孫となり、いわゆる多次元同時存在となる。しかし、これもヤマトで重要な働きをした人物を暗示するのだろう。倭得魂命が“倭”を冠し、川上真稚命の亦名が倭宿祢命でやはり“倭”を冠しているからである。

また、倭宿祢命は宇介水彦命の3世孫＝建諸隅命という新撰姓氏録、あるいは4世孫＝倭得魂命という国造本記の伝承もある。12ページの系図を見ると、新撰姓氏録の伝は「邪馬台国の鍵」の欄にある建諸隅命が「海部氏伝(1)」の欄にある川上真稚命に相当し、川上真稚命の亦名が倭宿祢命ならば、建諸隅命＝倭宿祢命となる。国造本記の伝は、海部氏伝を基に倭得魂命＝川上真若命＝川上真稚命とし、更に川上真稚命＝倭宿祢命と見なして倭宿祢命＝倭得魂命となっているのである。あるいは、系図の「神武＝天村雲命」の欄の建諸隅命は「海部氏伝(1)」の倭得魂命に相当し、倭得魂命＝倭宿祢命ならば建諸隅命＝倭宿祢命となる。

このように、系図の年代移動と亦名を合わせることにより、様々な異名同人のパターンが発生するので、大混乱を生じている。

また、別添付の勘注系図と天孫本紀を比較すると、天孫本紀の3世孫から5世孫までは海部氏の傍系に変えられていることが一目瞭然である。このように、傍系への入れ替えや兄弟姉妹の入れ替え操作などが、系図に成されている。2：(11)dで記したように、隠されている本来の皇統は倭得魂彦命から建稻種命に至る5代だけであり、建稻種命に尾綱根命が直結されて、あたかも尾張連が本宗であったかの如くに創り上げられているのである。

④建田勢命（6世孫）

笠水彦命の子が笠津彦命で、その子が建田勢命＝建田背命である。大日本根子彦太瓊命（オオヤマトネコヒコフトニノミコト）＝第7代・孝霊天皇の時代に山背（やましろ）国久世郡水主（かこ）村に移り、山背直等の祖となる、とされている。水主村は現在の京都府城陽市であり、水主とは水軍を率いた長のことである。海部氏は海人でもあり、尾張氏縁の名古屋にも水主という地名が残っており、深い関係を伺わせる。この水主神社の祭神は天照国照尊、天香語山神、天村雲神、天忍男神、建額赤命、建筒革命、建多背命、建諸隅命、倭得

玉彦命、山背大国魂命であり、山背大国魂命以外に海部氏系譜に於ける天照国照尊から 8 世孫の倭得玉彦命までの祖神が祀られ、この地が確実に海部氏の重要な領地だったと言える。そして、海部氏が丹波から入って行った木津川の辺にあり、古代から朝廷の雨乞いが行われていた。雨は天の恵みの水＝御神水であり、御神水＝“天押穂井の水、真名井”は海部氏一族しか扱えなかったから、海部氏の治めるこの地で、海部氏の祖神が勢ぞろいしているこの神社で、朝廷の雨乞いが行われたのである。建田勢命は丹波で宰相として奉仕し、後に山背の水主村からヤマトに入った。

また、“天御蔭之鏡と天村雲之刀を二璽神宝とする”とあるが、この“天村雲之刀”とは草薙神劍の元の名称だから、天村雲命が天忍人命と天忍男命と共に大和国に遷る際、持って来たことが裏付けられる。ならば、“天御蔭之鏡”は太陽神の依り代となる鏡であり、鏡と劍が一体で、祭祀にとって不可欠であることを示している。それは、天村雲之刀＝天村雲劍＝草薙神劍＝アロンの杖が、太陽神＝天照国照尊が降臨する神籬だからに他ならない。

建田勢命の元の名は笠水彦命とされ、亦名は高天彦命（タカアマヒコノミコト）、大海宿祢命、大己貴命、天御蔭命、建日瀉命、清日子（キヨヒコ）とされている。まず笠水彦命の場合だが、12 ページ系図の「神武＝天村雲命」あるいは「国造本紀伝系(1)」と「邪馬台国の鍵」の関係から建田勢命＝笠水彦命と言え、その笠水彦命は「邪馬台国の鍵」と「海部氏伝(1)」から天御蔭命と言える。これは、前述の“天御蔭之鏡”からも伺える。建日瀉命の亦名は建諸隅命なので、「神武＝天村雲命」と他の伝系から建田勢命＝建諸隅命＝建日瀉命と言える。しかし、いずれの場合も同一人物ではなく、系図上に於ける年代移動・人物移動の影響に因るものである。

次に高天彦命だが、遠祖とされる高御産巢日神と市杵嶋姫命を祀る高天彦神社を創祀した。奈良県御所市に鎮座するが、昔の地名は高天村字高尾張で、社の裏山を高天山と言ひ、付近は台地状であることから、古くから高天原の故地ではないか、と伝えられる土地である。言い換えれば、この命の時代に“高天原”と名付けられたとも言える。そこは“尾張”に深く関わる。

次に大海宿祢命だが、建田勢命は山背国で山背直等の祖となった。この“山背”は“山城”に通じ、“山城”から入った“鴨＝八咫鳥”が本来の“賀茂”である海部氏を乗っ取った。そういう意味で、“山背”は“本来の賀茂”にも通じるから、“大海”となる。更なる亦名が大宇那比命（オオウナビノミコト）だが、“オオウナ”は“大海原”の“大海”でもあり、同義である。

大己貴命はスサノオの子とも 6 代後とも言われているが、“天御蔭之鏡と天村雲之刀を二璽神宝とする”ことから草薙神劍に関係し、それはスサノオそのものである。また、スサノオは海神だが太陽神的性格も併せ持つので、やはり鏡と劍が一体であることを象徴する。

清日子は古事記では天之日矛の子孫とされ（日本書紀では曾孫の清彦）、海部氏の子孫であることを暗示している。つまり、天之日矛は建田勢命以前の人物である。

他にも、建田勢命の亦名は玉手見命とも言われている。これは、安寧天皇の

和風諡号でもあり、12 ページ系図の「記紀への変遷」に相当する。通常使われる〇〇天皇という御名は漢風諡号である。諡号の起源は持統説、欽明説などがあり確定していないが、記録に残る限り、第41代・持統天皇が最初である。以来、先帝の崩御後に行われる大葬の一環として行われてきた。従って、諡号は天皇の崩御後に奉られる諱（いみな）である。だから、初代・神武天皇から第40代・天武天皇までは諡号なのかも知れないが、生前からの別名あるいは尊称である可能性もある。（Wikipedia 参照。）ところが、勘注系図にはこのような和風諡号が他にも見られる。

- ・9世孫・意富那比命（乙彦命）：
彦国玖琉命（ヒコクニクルノミコト）＝8代・孝元天皇。12 ページ系図の「神武＝天村雲命」に相当。
- ・11世孫・小登与命：
御間木入彦命＝10代・崇神天皇。12 ページ系図の「神武＝天村雲命」で省略された乎縫命を弟彦命と乎止與命の間に追加することに該当。
- ・12世孫・建稻種命：
彦大毘毘命（ヒコオオヒヒノミコト）＝9代・開化天皇。12 ページ系図の「天孫本紀尾張氏」で淡夜別命を、「海部氏伝(1)」「国造本紀伝系(1)」で乎縫命を省略、あるいは「神武＝天村雲命」で彦火明命から建稻種命までを丸ごと1代ずつ上昇させることに該当。
- ・13世孫・志理都彦命：
大足彦命（オオタラシヒコノミコト）＝12代・景行天皇。12 ページ系図の「海部氏伝(1)」で彦火明命から建稻種命までを丸ごと1代ずつ降下させることに該当。

このように、必ずしもすべてが同じ規則性ではない。これは、ヤマトに於ける元々の大王の系統（皇統＝海部氏の系譜）を基に創作された天皇に対して、元々の大王の事績あるいは諡号を当てはめたことを裏付けている。ここで重要なことは、年代操作云々ということではなく、通説では持統以後と言われる諡号が、実は海部氏の系譜の中に存在しているということである。この節の(1)で記したように、江戸時代に編纂されたとはいえ、古事記よりも古い丹波国造本紀を原本としているので、古代の真相が隠されているのである。

⑤建諸隅命（7世孫）

建田勢命の子が建諸隅命で亦名が建日瀉命（タケヒガタノミコト）である。妹に大海姫命（オオアマヒメノミコト）がおり、亦名は豊玉姫命である。

この亦名、豊玉姫命と言えば、海幸彦・山幸彦の話を出す。それは<日本神話>で記した。

“火遠理命こと山幸彦は塩椎神の助言により、海神、綿津見神の宮に行き、海神の娘・豊玉毘売＝豊玉姫と結婚した。3年後、山幸彦は事の次第を話して地上に帰ったが、その時、豊玉姫は身籠っており、月日が満ちたら地上に行くこと

を約束した。

約束通り、豊玉毘売が大亀に乗り、妹の玉依毘売＝玉依姫を伴って地上にや
って来た。出産の場を見ないように豊玉毘売は山幸彦に頼んだが、山幸彦はそ
の禁を破ってしまった。そこには、八尋の大きさのワニザメがはいずり回って
出産していた。恥じた豊玉毘売は海の宮に帰り、残された子は波限建鵜葺草葺
不合命と名付けられ、地上に残った玉依毘売が母代わりに育てた。そして、波
限建鵜葺草葺不合命は後に玉依毘売と結婚し、神武天皇を産んだ。”

建田勢命の元の名は大海宿禰命ともされていることは前述の通りだが、娘の
大海姫命の亦名が豊玉姫命ならば、大海宿禰命は海神の中の海神、綿津見神と
見なすことができる。故に、“大海”である。

ここで、波限建鵜葺草葺不合命は豊玉毘売の子なのだが、玉依毘売と結婚し
て神武天皇を産んだ。その玉依毘売は豊玉毘売の妹で、豊玉毘売とは同世代だ
から、勘注系図に於ける豊玉姫命の次の世代は、神武天皇の世代に比較するこ
とができる。つまり、波限建鵜葺草葺不合命を介すことにより、勘注系図の次
の世代（8世孫）を神武天皇のモデルとした、というわけである。

⑥倭得魂命（ヤマトエタマノミコト、8世孫）

建諸隅命の子が倭得魂命である。“倭得魂”という名は“ヤマトの中樞（魂）
を得た”という意味なので、この命の時代に国家としての基盤が整ったと思わ
れる。それ故、“ハツクニシラス”を諡号とする崇神天皇の時代に合わせられて
いるのだろう。12ページの系図では、「神武＝彦火明命」の開化～崇神朝に該当
する。そして、神話上、初めてヤマトを統一したのは神武天皇だから、前述の
推察（波限建鵜葺草葺不合命を介すことにより、勘注系図の次の世代を神武天
皇のモデルとしたこと）が正しいことを裏付けている。

勘注系図には“崇神天皇の時、日子坐王（ヒコイマスオウ、開化天皇の第三
皇子、崇神天皇の異母弟）の命により、倭得魂命たちは土蜘蛛を退治した”と
あり、“倭得魂命の妹、大倭姫命は崇神天皇の御代に大神宮を拝察する”とある。

日子坐王は“土蜘蛛を退治した”が、この逸話の土蜘蛛とは、丹波地方で朝
廷に逆らっていた一族のことであり、海部氏のことである。しかし、日子坐王
という名が暗示するように、日子坐王は本来の太陽神を祀る海部氏一族だった
と考えられる。神武軍は最後まで抵抗していた葛城山の土蜘蛛を征伐している
が、これは尾張氏に他ならず、それになぞらえているのである。そして、あた
かも朝廷側の日子坐王が征伐したかのように変えているわけであり、まったく
同じ構造なのが、武内宿禰と日本武尊である。これだけの功績を挙げておきな
がらも天皇になれなかったのは、やはり日本武尊の征伐伝説と重なり、それで
も無視できなかつたのは、日子坐王が本来の皇統だからに他ならない。

しかし、ここでは実質的な年代として大和朝廷や邪馬台国成立以前なので、
このように単純な話では収まらない。古代物部王国は多数の小国が競い合っ
ていたが、天村雲命がヤマトに入り、建諸隅命の時代までに中枢部の基盤を確立
してきた。そして、ようやく倭得魂命の時代になって、ヤマトでの祭祀基盤を

掌握できるようになったのだろう。それが、海部氏の血統である日子坐王の命により、同じく海部氏の血統である倭得魂命が土蜘蛛を退治した、ということになっているのだろう。この場合の土蜘蛛はヤマトの地に於ける抵抗勢力ということになるが、海部氏は秦氏への国譲りに於いても徹底抗戦せず、ほぼ無血譲渡しているので、ここでも平和的解決によって和平がもたらされたと考えられる。しかし、全国的にはまだ統一国家とはいかず、卑弥呼の登場までは度々混乱が生じたのである。

また、妹の大倭姫命が崇神天皇の御代に大神宮を拝察したというのだが、正史上、正式な神宮の遷座・建立は垂仁天皇の時代に倭姫命によって行われており、その一世代前の崇神朝に大神宮を拝察することはあり得ない。そもそも、神宮には卑弥呼とトヨが祀られているはずだから、それ以前のこの時代には、あり得ないのである。

このように、勘注系図に“崇神天皇の時”とはあるが、正史上の崇神天皇はBC148年～BC29年1月9日であり、卑弥呼の没年はAD247年か248年とされているから、卑弥呼誕生までに200年ほど間がある。また、正史は年代の操作が成されていることは、これまでに記した通りである。よって、実年代としてどうこう、ということではなく、ある時代の投影、として考えなければならない。言い換えれば、大元の大王系図を基に、人物移動や年代移動を施して創作された正史上の天皇の御名と事績を、大元の大王系図に当てはめている、ということである。だから、本来の大王としては例えば倭得魂命だが、そこに正史の崇神天皇時代のある側面を当てはめているのである。また、12ページ系図の「邪馬台国の鍵」の倭得玉彦命＝倭得魂命が、正史上、大和朝廷成立時の成務～応神朝に相当していることは、倭得魂命の時代によりやく国家の最低基盤（祭祀基盤）が整ったことを暗示しているのだろう。

⑦意富那比命（オオナビノミコト、9世孫）

亦名は大海宿祢命（オオアマノスクネノミコト）、大宇那比命であり、建田勢命と同じである。これは、意富那比命が建田勢命と同一人物ということではなく、建田勢命のある側面が、この命にも反映されているということである。

弟には乙彦命（オトヒコノミコト）、玉勝山背根子命（タマカツヤマシロネコノミコト）、若津保命（ワカツホノミコト）、置津世襲命（オキツヨソノミコト）、妹には日女命（ヒメノミコト、ヒルメノミコト）、葛木千名姫命（カツラギチナヒメノミコト、亦名は屋乎止女（ヤオトメ））を挙げている。

ここで最も重要なのは日女命である。日女命は亦名を神大市姫命（カミオオイチヒメノミコト）、倭迹迹日百襲姫命、“日神”であり、日本書紀では“倭迹迹日百襲姫命は大市＝箸墓に葬られた”とある。これまでに述べてきたように、この日女命こそ、卑弥呼を象徴していると考えられる。亦名で“神”を冠する以上、国にとって最重要であることを暗示しているので、それは倭国がようやく治まったことを象徴している。歴史的に明らかになっているその人物こそ、卑弥呼に他ならない。つまり、この大王の時代が卑弥呼の存在したAD200年前

後、ということである。何よりも、亦名の“日神”が象徴的で、女神としての天照大神の原型になっている。倭迹迹日百襲姫命は孝霊天皇の娘であり、孝元～開化朝に相当するが、これは12ページの系図では「神武＝天村雲命」に相当し、弟彦命が世代として一致している。

そして、卑弥呼には弟がいて、彼が人々に御神託を伝えていたとされるが、単純に見れば、乙彦＝弟彦と思われる。しかし、意富那比命の亦名が大海宿祢命である以上、弟とは意富那比命（実際には兄）と見なした方が良いだろう。

ならば、意富那比命に反映されている建田勢命のある側面とは祭祀である。卑弥呼によって鏡による祭祀が始まり、それは息津鏡・辺津鏡である。建田勢命の時代、天御蔭之鏡と天村雲之刀を二璽神宝とし、太陽神の依り代である鏡に剣が奉じられたが、その天御蔭之鏡こそ、息津鏡・辺津鏡に違いない。すなわち、6世孫・建田勢命が息津鏡・辺津鏡を持って来た、あるいは献上されたのである。そのことが卑弥呼＝日女命と兄弟の意富那比命に投影されている。つまり、それまでの銅鐸による祭祀を廃止し、単なる鏡ではなく、“不老不死、永遠”を象徴する息津鏡・辺津鏡が太陽神の依り代とされ（陽）、そこに草薙神剣＝アロンの杖が奉じられ（陰）、新たな祭祀が始まったのである。そして、天御蔭之鏡は息津鏡・辺津鏡だからこそ、葵祭りを取り仕切る下鴨神社では、5月15日の葵祭りに先駆けて、12日に御蔭神社で御蔭祭（御生神事）が執り行われるのである。6世孫には宇那比姫命（？）とされる人物もいるが、亦名が日女命で9世孫・日女命を連想させる。これなども、卑弥呼が鏡を使った神事を始めたことを暗示しているのであろう。

また、海部直千嶋祝は籠神社祝部の祖とされ、AD722年8月に熱田大神を三輪社に祀った、としている。三輪社と言え、普通は大和の大神神社のことだが、ここでは、籠神社祝部とされてしまった後なので、大和の話ではない。若狭湾を挟んだ向かい側に石崎坐三輪社があって、現在は八幡社に合祀され、祭神は誉田別尊、大物主命、菅原道真である。近くには大丹生という地名があり、“丹生”とは不老不死の妙薬である。おそらく、このことだろうと思われるが、そうでないとしても、“三輪”を冠する限り、祭神の中に大物主神が含まれる（隠されている）ことは確実である。

熱田大神とは、熱田神宮の由来では草薙神剣を依り代とされる天照大神となっている。ならば、直接、天照大神とすれば良いものを、そうなのではないのは、草薙神剣こそが熱田大神なのである。熱田神宮で聴講した熱田神宮文化講座資料「日本武尊－白鳥伝説－（辻村全弘氏）」の中に、「信長記（しんちょうき）」が紹介されており、そこには

“熱田大明神は、人王12代・景行天皇、第二の皇子、日本武尊と申し奉りし。今此の御神に頭はれ給へり。御兄・成務天皇に皇子おはさぬに依って、14代・仲哀天皇は、此の尊の御子にておはす。去れば其の後より代々の天子は、皆此の明神の御末なり。尊、勅命に依って東征の後、江州（近江）千の松原にして失せ給ひしに、白鳥と成り給ふて、始めは紀伊国に落留まり玉ひしが、いかが

神慮やおはしけん。又飛び返らせ給ひて、此の所に迹を垂れ給へり。”

とあり、日本武尊のことだと言っている。日本武尊の象徴は草薙神劍だから、やはり熱田大神とは草薙神劍の象徴である。更に、熱田神宮の資料、熱田皇太神宮御託宣紀にも熱田大神は日本武尊と記されており、しかも、日本武尊はスサノオの生まれ変わりということになっているから、尚更、草薙神劍の象徴である。

そして、2：(10)で記したように、内宮は元々三輪山にあったから、依り代としての神器は八咫鏡であり、三輪社に於ける依り代も鏡となる。そこに、熱田大神＝草薙神劍を祀ったのだから、鏡と劍による祭祀である。

そのような祭祀という意味では、玉勝山背根子命の“玉”が勾玉を表し、この世代で三種の神器が揃っていることになる。山背は元々海部氏の領地だったが、6世孫・建田勢命の方が元祖と思われるので、建田勢命の後を受け継いだ、ということなのだろう。

また、置津世襲命は瀛津世襲命とも書ける。“瀛津＝息津”で息津鏡・辺津鏡（太陽神）を象徴しているが、“瀛”は<日本の真相 4>の天武天皇の諡号でも記したように、“瀛州”で“支那の神仙思想に基づく仙人の住む島、東方海上にあるという三神山の1つ”の意であり、始皇帝と徐福の姓“嬴”にさんずいを付けた字で、彼らが求めた“不老不死、永遠”をも象徴している。これは、息津鏡・辺津鏡が「合わせ鏡」であり、「合わせ鏡」の中の像は無限に続くような錯覚を引き起こし、“不老不死、永遠”をも象徴していた。また、“世襲”は“世蘇、余蘇”とも書け、“永遠の世”あるいは“余＝私（海部氏・尾張氏）は蘇る”と解釈できる。

つまり、永遠で不老不死の太陽神を象徴する鏡と祀るための劍が神宝とされ、玉が王権の象徴の勾玉となって三種の神器が揃い、“不老不死、永遠”を願う祭祀基盤が、この世代に整えられたことになる。

なお、置津世襲命は天孫本紀の尾張氏系譜に於ける4世孫・瀛津世襲命と同一と思われるが、実は熱田神宮所蔵の尾張宿禰田島氏系譜（熱田神宮文書、熱田神宮宮庁）には、置津世襲命の名は記されていない。この点については、11世孫・小登与命の項で考察する。

一方の女性方では、葛木千名姫命の亦名は屋乎止女だが、彦火明命が娶った天道日女命の亦名も屋乎止女命で同じである。これも両者が同一人物ということではない。まず、天道日女命の中にも“日女命”があり、卑弥呼＝巫女を意識している。天女伝説でも“八乙女”＝八小童が登場するが、この八小童は天日起命と共に豊受大神を祀っていた。だから、日女命が天照国照尊を祀ることを象徴するのに対して、葛木千名姫命＝屋乎止女は豊受大神を祀ることを象徴するのだろう。

⑧10世孫

10世孫として乎縫命（亦名は小止与命）、安波夜別命＝淡夜別命（アワヤワケ

ノミコト)が挙げられている。12 ページの系図考察と巻末添付の勘注系図から考えて、直系は乎縫命、傍系の乙彦の子が安波夜別命と考えられ、淡夜別命は見方によっては、海部宮司が重要視されている阿波忌部氏の系統なのかもしれない。

12 ページの系図では、乎縫命が抜けている欄(「神武=天村雲命」)もあるが、それは存在しなかった、ということではなく、省略され(あるいは彦火明命の上に持ってきて)、最終的な帳尻合わせが成されているのである。

乎縫命の亦名が小止与命というのは、世代的に巻末添付の勘注系図で9世孫・置津世襲命の子とされている小止与命のことであり、亦名にはならない。ここでの乎縫命の子は小登與命であり、読みは“オトヨ”で、古代に於ける漢字は当て字だから、漢字による区別はできない。その“オトヨ”が11世孫でもあり10世孫の亦名ということはある得ない。

乎縫命の妹は大倭姫命で、8世孫・倭得魂命の妹と同じ名で、亦名は倭迹迹姫命あるいは豊鍬入姫命である。豊鍬入姫命は父、崇神天皇の命により、天照大神を宮中から笠縫邑に遷し祀り、以後、垂仁天皇の御世に倭姫命と交替になるまで祭祀を続けた。そして、8世孫・倭得魂命の妹、大倭姫命は崇神天皇の御代に大神宮を拝察したが、同じ“大倭姫命”という名前である。だから、同一人物だ、ということではなく、8世孫に対して10世孫は孫の世代に当たるから、この世代差で神宮の神祀りの原型が整った、ということであろう。豊鍬入姫命は名前に“豊”を冠してトヨを思わせ、“倭迹迹姫命”は卑弥呼を象徴している“倭迹迹日百襲姫命”に類似しているので、いずれの亦名も卑弥呼の宗女トヨを象徴していると考えられる。

阿波忌部氏が登場したので、蛇足ながら、阿波忌部氏直系の三木氏と、関東に渡った阿波忌部氏の末裔の写真が掲載されたホームページを示す。四国の吉野川流域一帯を開拓したのは阿波忌部族だが、神武天皇の時代、東国開拓の命を受けたとされる天富命と阿波忌部の一部が吉野川を出発し、紀伊水道から黒潮ルートに乗って房総半島に到着し、関東一円を開拓したという。向かって左が三木家28代当主の三木信夫氏、右が徳島から千葉に渡った勝占(かつうら)忌部84代の吉野愛氏である。

<http://www.awagami.jp/gynet/bulletin/Genki0503.pdf#search='三木信夫'>

三木氏



吉野氏



⑨11 世孫

11 世孫は小登與命＝小止与命＝乎止與命、阿多根命、建稻種命、その妹は日女命である。

阿多根命の亦名は天香語山命とあるが、天香語山命は彦火明命の子なので、これはあり得ない。12 ページ系図の例えば「海部氏伝(1)」の小登與命の“世代”は「神武＝彦火明命」の倭得玉彦命に相当するが、「国造本紀伝系(1)」の倭得玉彦命は「邪馬台国の鍵」の天香語山命に相当する。あるいは「“記紀への変遷”の笠水彦命と「神武＝彦火明命」を比することによって、同様なことが言える。このようにして、小登與命の亦名が天香語山命となり得るが、何度も示してきたように、これは系図での年代移動・人物移動の結果、そのように見ることができるといっただけで、実質的には違う。

建稻種命は小登与命の子(12 世孫)のはずなので、小登与命と同じ世代にはならず、別添付の勘注系図に於ける 9 世孫・置津世襲命－小止与命－建稻種命のことである。あるいは、乎縫命＝小止与命と見なした場合、それに続く世代ということで、建稻種命が挙げられているのだろう。その建稻種命の亦名が須佐之男命とされている点は暗示的であり、それについては後述する。

ここでも日女命が登場するが、これは 9 世孫の日女命とは異なる。世代的には祖母－孫の関係であり、先ほどの“大倭姫命”が暗示する世代間と同じである。つまり、9 世孫の日女命が卑弥呼、11 世孫の日女命がトヨを象徴しており、“日女命”とは個人の名称ではなく、“日神を祀る巫女”という職種の呼称とも見なせる。海部氏の秘伝には、トヨは卑弥呼の孫、とあるが、卑弥呼は結婚していなかったもので、孫の世代ということである。

この 11 世孫・日女命の亦名は稚日女命(ワカヒルメノミコト)、小豊姫命、豊受姫命、豊秋津姫命、宮簀姫命、日神荒魂命(ニッシンアラミタマノミコト)、玉依姫命である。

稚日女命は、日本書紀では女神としての天照大神の侍女の名ともされ、共に神に捧げる機織をしている最中、スサノオが皮を剥いだ馬を投げ入れたことに驚き、梭(ひ)で陰部を突いて死んでしまい、天照大神自身が傷ついたことになっている場合もある。そこで、両者を合わせると、天照大神自身が陰部を突いて死んでしまったことと同意であり、天照大神の別名“大日靈貴神”が“大いなる日神が降臨する巫女”という意味であることから、天照大神の姿が、完全に倭迹迹日百襲姫命に重ねられることは<日本の真相 4>で記した。ここで、“稚日女命”は“日女命よりも若い＝世代として下の日女命”と解釈することもできる。そうすると、卑弥呼＝日女命、天照大神＝倭迹迹日百襲姫命、卑弥呼＝倭迹迹日百襲姫命だから、“日女命よりも世代として下の日女命”とはトヨに一致して矛盾しない。

小豊姫命は小止与命とトヨを象徴している。

豊受姫命、豊秋津姫命は豊＝トヨを象徴し、豊受姫命は豊受大神をも象徴している。豊秋津姫命は天押穗耳尊の妻であり、彦火明命の母とされる。

宮簀姫命は建稻種命と共に祀られる熱田神宮の祭神だが、建稻種命は“稲の

種＝粃”で“稻目”と同義で豊受大神を象徴し、宮簀媛命の“宮簀”は籠神社の鎮座する“宮津”に通じ、豊受大神を主神とする籠神社を象徴していることに他ならないことは<日本の真相 4>で記した。

11 世孫・日女命が日神荒魂命ならば、その和魂は 9 世孫の日女命＝卑弥呼である。大元が和魂として象徴されるので、荒魂は卑弥呼の後を継いだトヨを象徴している。

玉依姫＝玉依毘売は、海幸彦・山幸彦の話では、海神・綿津見神の娘で神武天皇の母である。朱塗り矢伝説の山城国風土記バージョンでは、八咫鳥命＝賀茂建角身命（カモタケツヌミノミコト）と丹波国の伊可古夜比売（イカコヤヒメ）の娘で、火雷神（ホノイカツチノカミ）が変身した朱塗り矢により妊娠し、賀茂別雷命（カモワケイカツチノミコト）＝彦火明命を産んだ。綿津見神と丹波国の伊可古夜比売は海部氏を象徴するから、いずれの話も海部氏一族の娘ということで一致している。そして、神武天皇は神話上の初代天皇、彦火明命は海部氏の祖だから、いずれも第一の祖神を産んだことになっている。つまり、この玉依姫の代、あるいは次の代あたりから、ヤマトに於ける本格的な統一が成されたことを暗示しており、これはトヨによってようやく国が 1 つにまとまったことを象徴しているに他ならない。

ここで、下鴨神社の八咫鳥と上賀茂神社の賀茂別雷命が登場したが、両社が執り行う葵祭りでは氏人の中から選ばれた巫女が神職として仕える習慣があり、葵祭りの御阿礼（みあれ）の神事に関わることから、“阿礼乎止売（あれおとめ）”とも呼ばれていた。御阿礼の神事は葵祭りに先駆けて行われる籠神社の藤（＝不死）祭りが起源であり、その御阿礼＝御生まれ＝復活の神事に携われるのは特別の血統の巫女に限られることは、元々が海部氏の血統の巫女ということを示唆している。だから、この場合の氏人とは、海部氏と同族である賀茂氏＝上賀茂である。

さて、小登与命の亦名は象徴的である。御間木入彦命（ミマキイリヒコノミコト）とされ、崇神天皇と同じである。そして、12 ページの「天孫本紀伝系」「海部氏伝(1)」「神武＝天村雲命」「国造本紀伝系(1)」のいずれに於いても、小登与命が開化～崇神朝に相当していることは、記紀では小登与命のことを崇神天皇とした、ということをも物語っているように思われる。

また、崇神天皇の時代に天照大神の祭祀が宮中以外の場所で行われるようになったが、ある意味、それまでは大物主神の崇りなどの話ばかりで、天照大神の神祭りはほとんど出てこない。言わば、ここで初めて、天照大神の神祭りが正史の表舞台に登場し、ここから本格的な祭祀が始まったとも見なせる。それに関わるのが日女命＝トヨである。トヨが祀ったのは大元神の天照国照尊と、祖先で祭祀基盤を整えた卑弥呼である。そして、建稲種命の亦名を須佐之男命とすることにより、天照国照尊と卑弥呼を合わせて正史に於ける女神の天照大神が誕生したことを暗示しているのである。（よって、建稲種命の亦名が須佐之男命というのは本来の伝ではなく、記紀神話創作後の挿入ということになる。）また、卑弥呼の時代に祭祀基盤が整えられ、トヨの時代に完成したからこそ、その時の大王の名前に“トヨ＝登与＝止与＝止與”を冠するとも考えられる。

なお、2:(3)で記したように、乎止與命は尾張国造丹波国造共通の祖であり、尾張連だけの祖ではなかったことからすると、少なくとも乎止與命の時代までは、海部氏と尾張氏は分家していなかったと言える。ならば、別添付の勘注系図に於ける9世孫・置津世襲命—小止与命—建稻種命は作為と言え、天孫本紀尾張氏系図に於いて4世孫・瀛津世襲命が尾張氏の祖として入っていることに、辻褃を合わせようとしたと考えられる。(それでも、年代的に合っていないが。)それは、⑦意富那比命(9世孫)でも記したように、熱田神宮所蔵の尾張宿祢田島氏系譜(以下、田島氏系譜)に置津世襲命の名が記されていないことで暗示されている。参考として、その田島氏系譜を天孫本紀尾張氏系譜と比較して示す。色付きの人物がその代に於ける継承者(王)で、田島氏系譜を基本(赤色)としている。天孫本紀がそれとは異なる場合、緑色で記した。直系とは必ずしも長兄とは限らず、ある代では兄が継承したが、子が無く、次の代は弟の子が継承した、という例もある。(天孫本紀の7世孫など。)兄弟姉妹は直系に対する兄弟姉妹であり、傍系は兄弟姉妹のいずれかの子である。

祖	天孫本紀尾張氏系譜			尾張宿祢田島氏系譜		
	直系	兄弟姉妹	傍系	直系	兄弟姉妹	傍系
祖	ニギハヤヒ			天火明命		
1世孫	天香語山命	宇摩志麻治命		高倉下命 (手栗彦命 天香語山命)		
2世孫	天村雲命			天村雲命 (伊多互命 天白雲別命)		
3世孫	天忍人命	天忍男命 忍日女命		天忍人命 (高倉下命)	天忍男命	
4世孫	天戸目命	天忍男命	瀛津世襲命 建額赤命 世襲足姫命 (3世・天忍男命の子) 建筒草命 (建額赤命の子)	天戸目命 (天戸國命)	天忍男命 (天五百原命)	建額赤命 (3世・天忍男命の子)
5世孫	建斗米命	妙斗米命		建斗米命	妙斗米命	建筒草命 (建額赤命の子)
6世孫	建田背命	建宇那比命 他5名		建田背命		
7世孫	建諸隅命 (建宇那比命の子)	大海媛命		建諸隅命	大海媛命 (葛城高名媛命)	
8世孫	倭得玉彦命			倭得玉彦命 (市之大稻目命)	葛城高千那毘命	
9世孫	弟彦命	日女命 他4名		弟彦命		
10世孫	淡夜別命	大縫命 小縫命 他2名		小縫命	淡夜別命 大縫命	
11世孫	乎止與命			乎止與命		
12世孫	建稻種命			建稻種命	宮實媛命	
13世孫	尾綱根命	尾綱眞若刀禰命 金田屋野媛命		尻調根命	眞若刀禰命 金田屋野媛命	
14世孫	尾治弟彦連	尾治針名根連 意乎日連		尾治弟彦連	尾治針名根連 意乎日連	
15世孫	尾治金連	尾治岐間連 尾治知々古連		尾治金連	尾治岐間連 尾治千知古連	
16世孫	尾治阪合連	尾治多與志連 他5名		尾治阪合連 (狹加阿比彦 五襲連)	尾治多與志連 (手好連)	
17世孫	尾治佐迷連	尾治兄日女命		尾治佐迷連	兄日亮 (色媛)	
18世孫	尾治乙訓與止連	尾治栗原連 他2名		尾治栗原連	尾治牧夫連	

まず祖が異なる。天孫本紀では子を天香語山命と正しく表現しているが、田島氏系譜では高倉下命とされている。これは、海部毅定氏が言われている作為である。話題としている4世孫・瀛津世襲命は3世孫・天忍男命の子とされ、3世孫・天忍男命に天戸目命と天忍男命という男子が2人いるにも関わらず、何故か、傍系継承になっている。その瀛津世襲命に子が無かったためか、5世孫も更に傍系継承（瀛津世襲命の弟の建額赤命の子）が続く。そして、傍系で子が無かったので、ようやく直系に戻り、6世孫から9世孫までは田島氏系譜と同じである。10世孫は継承者の名前が異なる。11世孫、12世孫は同じだが、天孫本紀では宮簀媛命の名が無い。13世孫は亦名であり、同一人物である。その後、14世孫から17世孫までは、兄弟数に違いがある場合もあるが（16世孫）、基本的に同じである。しかし、18世孫では名前と兄弟数が異なり、田島氏系譜では直系が尾治栗原連と“栗（くり）”になっているが、天孫本紀では兄弟として尾治栗原連と“栗（あわ）”になっている。

このように、いずれもが12ページ系図の「海部氏伝(1)」とは異なる系譜となっている。天孫本紀の本来の伝は8世孫から12世孫の5代だけだとしても、天孫本紀と「海部氏伝(1)」あるいは別添付の勘注系図とは9世孫と10世孫が異なる。これは、海部毅定氏が箸墓古墳を卑弥呼の墓だと言われているが、考古学的にはトヨの方が適切と思われることと同じように考える必要がある。つまり、真相は書物として出版している以上、言えない部分もある、ということであり、明らかにされている天孫本紀の系図の方が誤りを含んでいる＝勘注系図の方が正しい、ということである。そして、田島氏系譜についても、天香語山命が高倉下命と同一とされているなどの作為があつて正しい系譜を表していないのであり、やはり正しいのは、勘注系図と考えるべきである。

⑩13世孫

13世孫には志理津彦命をはじめ何人か挙がっているが、“亦云、彦坐王”であり、天皇家に関わる“命”とはなっていない。彦坐王とは古事記の日子坐王、日本書紀では彦坐王である。日本書紀では崇神天皇の兄に当たり、8世孫・倭得魂命が日子坐王の命により、土蜘蛛を退治した。そうすると、時代的に前後して矛盾するが、ここでは、9世孫・日女命と11世孫・日女命による祭祀基盤確立と、11世孫・小登与命による政治基盤確立後、最終的にヤマトの地を平定したことを、彦坐王による土蜘蛛征伐逸話に重ねているのだろう。

別添付の勘注系図を見ると、ここで連枝として尾張連等の祖、尻綱根（志理都名根命）が登場する。隠されている本来の皇統は倭得魂彦命から建稲種命に至る5代だけであり、建稲種命に尻綱根命が直結されて、あたかも尾張連が本宗であったかの如くに創り上げられていること、乎止與命は尾張国造丹波国造共通の祖であり、尾張連だけの祖ではないこと、そして、熱田神宮の本殿では建稲種命が、別宮の上知我麻神社では乎止與命が祀られていることからすると、この志理津彦命の代から海部氏と尾張氏に分家したと考えられる。その分家の祖が、尾張氏では尻綱根＝志理都名根命＝志理津名根命である。

a) 日本武尊の真相

しかし、ここで重要なことに気付かねばならない。それは、東国を平定し、三種の神器と尾張氏、神宮との関わりが深い日本武尊である。天孫本紀にも海部氏系譜にも、そして熱田神宮にある田島氏系譜にさえ、日本武尊が宮簀姫命と結婚していたことが記されていないし、それらしき人物も見られない。

手掛かりとなるのは、1つは勘注系図に於いて、小止与命＝小登與命－建稻種命が直系の10世孫・乎縫命に続いているのと同時に、傍系の9世孫・置津世襲命にも存在して作為が見られること、もう1つは天孫本紀の4世孫・瀛津世襲命が勘注系図の置津世襲命と思われるが、3世孫・天忍男命の子とされ、その3世孫・天忍男命に天戸目命と天忍男命という男子が2人いるにも関わらず、何故か、傍系としての継承者になっていること、そして、肝心の熱田神宮の田島氏系譜には瀛津世襲命が記載されていないことである。これらは、置津世襲命＝瀛津世襲命が尾張氏に関わるとても重要な人物で、海部氏の出自であり、故あって隠されていることを物語っていると思われる。“武”という字は海部氏に関わることも（＜日本の真相4＞）、それを暗示していよう。歴代天皇の大喪では、必ず日本武尊の死を悼む歌が詠われ続けたほど、日本武尊は最重要の祖の一柱なのだが、本来の出自が隠されているのである。ならば、この9世孫・置津世襲命＝瀛津世襲命（以下、瀛津世襲命）こそ、日本武尊ではないのか。

ヤマトの基盤が整ったのが8世孫・倭得玉彦命の時代で、9世孫・意富那比命＝大海宿祢命の時代に9世孫・日女命＝卑弥呼による、鏡（息津鏡・辺津鏡＝八咫鏡）と草薙神劍＝アロンの杖による祭祀が始まった。そして、11世孫・小登与命の時代に11世孫・日女命＝トヨにより豊受大神と卑弥呼（日神）を祀る祭祀基盤が完成し、ようやく国家が統一された。だから、9世孫あるいは11世孫の時代が日本武尊の時代に適切であり、瀛津世襲命は9世孫で、これに該当する。

日本武尊は草薙神劍を叔母の倭姫命から授かったことになっているが、8世孫・倭得玉彦命の妹、天豊姫命の亦名・大倭姫命は倭姫命の名前の元と思われ、9世孫・瀛津世襲命の叔母に相当し、矛盾しない。

瀛津世襲命は前述の通り、息津鏡・辺津鏡＝“不老不死、永遠”を象徴し、“永遠の世”あるいは“余＝私（海部氏・尾張氏）は蘇る”と解釈できた。そして、太陽神を象徴する鏡と祀るための劍が神宝とされ、王権を象徴する玉が勾玉となって三種の神器が揃い、“不老不死、永遠”を願う祭祀基盤がこの時代に整えられた。熱田の地は古くから蓬莱＝不老不死の国と言われていたので、瀛津世襲命は蓬莱の地に相応しい。また、2: (11)で記したように、海部直千嶋祝はAD722年に熱田大神を三輪社に祀り、この熱田大神とは、熱田神宮の由来では草薙神劍を依り代とされる天照大神であるが、信長記や熱田皇太神宮御託宣紀に依れば日本武尊のことであり、結局は草薙神劍の象徴と考えられる。その三輪社に於ける依り代は鏡であり、熱田大神＝草薙神劍を祀ったのだから、鏡と劍は一体である。その三輪社の大元、大神神社では大物主神＝天照国照尊を祀るから、天照国照尊と草薙神劍は一体である。

瀛津世襲命の“瀛津”は鏡で日神＝天照国照尊＝陽を象徴するのなら、“劍”

は陰を表す水として象徴される。その水の根源は天村雲命が祀った“天押穂井の水”であり、それは豊受大神を祀るための御饌だった。つまり、瀛津世襲命が草薙神剣で象徴される日本武尊ならば、1人の人物で天照国照尊と豊受大神の二柱を象徴することになり、天照国照尊＝豊受大神と矛盾しない。そして、草薙神剣が天村雲命を象徴していることとなり、天村雲命が草薙神剣＝アロンの杖を持って来たことと矛盾しない。また、熱田大神は草薙神剣を依り代とした天照大神とされているが、草薙神剣が陰で水に関わり豊受大神を、天照大神は実は男神で本来の天照国照尊を暗示するから、主神とされている熱田大神一柱で、やはり天照国照尊と豊受大神の二柱を象徴し、天照国照尊に奉じる剣をも象徴している。つまり、一説では熱田大神が日本武尊とされていることに矛盾せず、実は暗に日本武尊が瀛津世襲命だということを物語っていたのである。

他にも、日本武尊の逸話から、日本武尊が瀛津世襲命であることが言える。日本武尊は草薙神剣を宮簀姫命の下に置いて伊吹山に行き、神の毒気に当たり、死んでしまった。これは、神に対峙する（祀る）には草薙神剣が必要だったことを暗示しているが、それ以外に、日神及び不老不死を象徴する瀛津世襲命と草薙神剣を象徴する日本武尊が同一人物＝一体であり、その中の草薙神剣が離されたために、不老不死ではなくなったことを暗示している。言い換えれば、日神として象徴される瀛津世襲命と草薙神剣として象徴される日本武尊は切っても切れない関係であり、同一人物だということである。更に言うならば、草薙神剣が日神の依り代である八咫鏡と共になる時、すなわち、神宮に戻される時、日神が不老不死となって“復活”することを意味する。草薙神剣はそれほど重要なものなのであり、本来の心御柱なのである。

よって、わざわざ勘注系図で瀛津世襲命の後に熱田神宮の祭神、小登與命と建稻種命が直結されていることは、瀛津世襲命が尾張氏に関わる最重要人物であることを象徴し、それは日本武尊に他ならず、天孫本紀では4世孫として傍系継承者として挿入され、謎を解く鍵とされている。だが、田島氏系譜では天香語山命が高倉下命と同一視されているような作為と同様、ここでは日本武尊共々抹消されているのである。

では、次に東国平定（東征）について考える。古くから鈴鹿に関があるが、これより東を“関から東”という意味で関東、西を関西と言うようになった。だから、東国とは現在の静岡や東京、もっと広い関東地方を考える必要は無く、尾張地方や伊勢地方もヤマトから見て十分、東国なのである。

瀛津世襲命は9世孫だが、その時代は卑弥呼の時代で、銅鐸の信仰から鏡への信仰という極めて大きな祭祀形態の変化があり、ヤマトという1つの国としての祭祀の基礎がようやく整った時代である。しかし、まだ、それに納得できない人たちがいて、故に、トヨの時代まで祭祀形態は安定しなかった。3：(2)で記したように、当時の邪馬台国とは狭義の倭国という意味の邪馬台国連合であり、卑弥呼はその共立女王にすぎず、安定的秩序（祭祀・政治）を次世代に伝えていくシステムが、確立の段階まで至っていなかった。ならば、この時代

の東国とは、静岡や関東まで含めた広い地域ではあり得ず、ヤマトに近い尾張地方や伊勢地方のことを指していると考えなければならない。

そうすると、日本武尊の東征とは、9世孫・瀛津世襲命が尾張地方や伊勢地方に行ったことを象徴している。そして、日本武尊が尾張の建稲種命の妹、宮簀姫命と結婚したことは、先住民と戦いではなく、和平を結んだことを表している。（なお、東征伝説は秦氏による神話なので、そこには作為があり、それが土着の民族を尾張氏の祖である建稲種命としているのである。この時代以前に、尾張氏はまだヤマトから移動していない。）つまり、邪馬台国連合とは、尾張・伊勢地方まで含んだヤマトということである。では、この時に瀛津世襲命と共に、一団が尾張地方に移動したのだろうか。

勘注系図の13世孫は“亦云、彦坐王＝日子坐王”であり、神話では、日子坐王は四道将軍を派遣して、従わない者たちを討伐させた。つまり、東征と見なせる。そして、この世代で初めて勘注系図に尾張連等の祖、尻綱根（志理都名根命）が登場し、この志理津彦命の代から海部氏と尾張氏に分家したと考えられ、その分家の祖が、尾張氏では尻綱根＝志理都名根命＝志理津名根命であることは前述の通りである。ならば、9世孫・瀛津世襲命（と僅かな家臣）がまず尾張・伊勢地方に偵察に行き、そこで和平を結び、その後、尻綱根＝志理都名根命＝志理津名根命以降のどこかの時代で一団が移動したと考えるのが妥当である。（詳細については後述する。）勘注系図に於いて、9世孫・瀛津世襲命には明らかに尾張氏の祖である小登與命－建稲種命が続くだけで、後が続いておらず、13世孫の尻綱根＝志理都名根命＝志理津名根命でようやく“尾張連等の祖”が登場するのは、このことを暗示していると思われる。

つまり、11世孫・乎止與命の時代に国譲りしたのではなく、そのような話にされていること、本来の尾張氏の神殿である上知我麻神社で小登與命が、熱田神宮の本殿で建稲種命が祀られていることは、勘注系図の9世孫・瀛津世襲命に続くのが小登與命－建稲種命と記載されていること、言い換えれば、尾張地方をヤマトの統括地とした本当の尾張氏の祖と言えるのは、9世孫・瀛津世襲命であることを暗示しているのである。そして、尻綱根＝志理都名根命＝志理津名根命の次が知加麻彦命であり、知我麻神社の由来と思われる。

b) 武内宿禰の真相

この瀛津世襲命＝日本武尊の東征は、後に秦氏によって神武東征に重ねられ、更に、武内宿禰の東征にも重ねられた。武内宿禰は日本武尊と同時代人であり、景行25年に武内宿禰は北陸と東国に遣わされ、その直後に、日本武尊の熊襲征伐と東征の話が続く（武内宿禰も熊襲征伐していた）、日本武尊と武内宿禰は同一人物だと思わせるが、真相はこのような瀛津世襲命の東征なのだろう。

正史では、日本武尊は景行天皇の子とされ、弟の成務天皇が即位したことにされているが、これは海部氏の血統の日本武尊の真相を隠すためである。その成務天皇と武内宿禰の誕生日は同じ日とされているが、これは成務天皇のモデルが武内宿禰であることを暗示している。ならば、武内宿禰に相当する人物が日本武尊＝瀛津世襲命よりも優先して王位に就いたことになり、それに該当す

る人物を勘注系図で見ると、同じく 9 世孫の意富那比命が相当する。この命の亦名は大海宿祢命であり、系図上で“宿祢=宿禰”を冠している。そして、“大海”で海部氏の大頭領であることを示唆し、何よりも、卑弥呼=9 世孫・日女命の共立により邪馬台国連合ができた世代の大王である。その卑弥呼を示唆している神功皇后と武内宿禰が三韓征伐など行動を共にしていることは、武内宿禰が卑弥呼=9 世孫・日女命と同時代人であることを暗示し、その真相が 9 世孫・意富那比命=大海宿祢命であれば、まったく矛盾しない。よって、武内宿禰は 9 世孫・意富那比命=大海宿祢命である。この最も重要な時代の大王だったからこそ、その投影の武内宿禰は絶対に無視できない重要人物として正史にも登場する。そのような重要人物を、正史では“武”の字を冠して“武内宿禰”“日本武尊”“神武天皇”などと称しているのである。そして、“意富那比=オオウナビ=オオナビ=大いなるナビ”で、“ナビ”がナビゲーター（本来の意味は預言者）由来だとすると、まさしく、意富那比命は“導く者”という意味で、武内宿禰に相応しい。＜日本の真相 4＞では武内宿禰を倭宿祢命と見なしたが、そうではなかったのである。

なお、この命は王位を継承しているからおそらく長兄であり、そうすると、意富那比命（兄）=武内宿禰=成務天皇と瀛津世襲命（弟）=日本武尊との兄弟関係が「合わせ鏡」により、日本武尊が兄、成務天皇が弟と逆転されている。

c) 白鳥（しろとり）と朱鳥、日の丸

熱田神宮の本殿では建稲種命と宮簀姫命を、上知我麻神社では小登与命を祀ることにより豊受大神とトヨを象徴することはこれまでに記してきたが、それだけではなく、ここで明らかになったことは、本殿の主神、熱田大神は草薙神剣を依り代とした天照大神あるいは日本武尊とされ、天照国照尊と豊受大神の二柱を象徴しており、暗に日本武尊の真相が瀛津世襲命だということを物語っていた。ならば、その近く、熱田の白鳥にある断夫山古墳はどうか。

断夫山古墳は宮簀姫命あるいは尾張氏の祖神の誰かの墓ではないか、と言われているが、＜日本の真相 3＞では卑弥呼を象徴していると記した。瀛津世襲命は 9 世孫で、卑弥呼は 9 世孫の日女命だから、“断夫山”で結婚しなかった女王・卑弥呼を象徴すると同時に、卑弥呼の時代にこの地方にやって来て和平を結び、邪馬台国の一部とした瀛津世襲命を象徴しているのである。これならば、尾張氏の祖神の墳墓と言うに相応しい。

また、断夫山古墳の近くには日本武尊縁の白鳥古墳がある。日本武尊は能褒野での死後、白鳥に姿を変え、飛んで行った。その白鳥は様々な場所に舞い降りたという伝説があり、熱田の白鳥もその 1 つである。熱田の地は古くから蓬莱=不老不死の地と言われ、死んだ人間が鳥となって復活することは、フェニックス伝説に由来する。その根源はフェニキアにあることは＜神々の真相 4＞で記した。故に、海部氏・尾張氏はフェニキア人との関わりが密接で、草薙神剣は実はアロンの杖だから、北イスラエル王国の王族エフライム族であることが、ここからも裏付けられる。

そのフェニックスは火の鳥だから、元々は赤い鳥である。2：(3)で記したように、それに因んだ“朱鳥”という元号を付けたのは天武天皇で、熱田神宮社

家の末裔は朱鳥会を結成している。ここからも、天武天皇は海部氏・尾張氏の王で、海部氏・尾張氏はフェニキアと最も密接に関わっていたエフライム族と言える。

このように、古代は不死鳥“火の鳥”に因んで赤が吉兆だったが、秦氏によって、光輝く白へと変えられた。それが“白鳥”である。“朱鳥”ではなく“白鳥”となっているのは、秦氏による改竄である。日本武尊はヤマトに戻れなかったから、ある意味、この白鳥古墳が瀛津世襲命のもう 1 つの側面である日本武尊を祀る墳墓であるとも言える。

ならば、“日の丸”の元々の解釈も次のようになる。赤は不死の太陽で天照国照尊を象徴する。丸は 1 画だから、漢字のカッパラーでは陽であり、日神に一致する。周辺の四角は 4 画だから陰であり、白は“輝き”という陽の要素ではなく、この場合は陰の要素である水を意味することになるから、豊受大神を象徴している。つまり、日の丸の大元の意味は、天照国照尊と豊受大神を祀る国、という意味である。それは、陰と陽が一体となった大元の神、地球の主ヤー＝エンキに他ならない。そこに、更に秦氏によるカッパラーが加えられたのである。

不死鳥フェニックスはイナンナを主神としていたフェニキアで聖王の象徴であり、学名としてはナツメヤシのことで「生命の樹」の原型であり、イナンナの好物だったことは<神々の真相 4>で記した。シュメールの粘土板には、鷲の姿をした「神」の使いが「生命の樹」に「生命の水」をやっている姿が描かれているが、「生命の樹」が神の樹の象徴＝榊ならば、それに捧げる水は御神水で“天押穂井の水、真名井”である。イナンナ自身も“冥界”で木に掛けられて仮死状態になった時、エンキの使者が持って来た「生命の水」で息を吹き返したが、イナンナが掛けられていた木が「生命の樹」、ここで掛けられた「生命の水」が“天押穂井の水、真名井”の原型である。そして、天照国照尊は太陽神ウツの象徴だから、天照国照尊と真名井の水の関係の原型は、「合わせ鏡」となっている双子のウツとイナンナである。

⑪14 世孫

14 世孫は川上真稚命（川上麻須命）で、亦名は（丹波）道主命である。川上真稚命の子が丹波大矢田彦命、川上出石別命、川上日女命である。また、妹として竹野姫命が挙げられているが、日本書紀では垂仁天皇の妃として姉たちは後宮に留まっていたのに、竹野姫だけが故郷の丹波に戻された。これは、木花開耶姫と共にニニギに嫁いだ石長比売が、醜いという理由で父の大山祇神の下に返された話とそっくりである。その場合、石長比売は長寿の象徴で、大山祇神は籠神社＝海部氏を象徴していることは、2：(10)で記した。ここで、記紀の系図と比較すると興味深い。

記紀に於いて、丹波道主王はいずれも河上摩須郎女と結婚している。丹波道主王＝丹波道主命が川上真稚命ならば、妻の名が河上摩須郎女＝川上麻須の女（妻）、という意味は納得できる。しかし、勘注系図では妹となっており、その

亦名が竹野姫命、大倭姫で、大比昆命＝開化天皇の妃である。

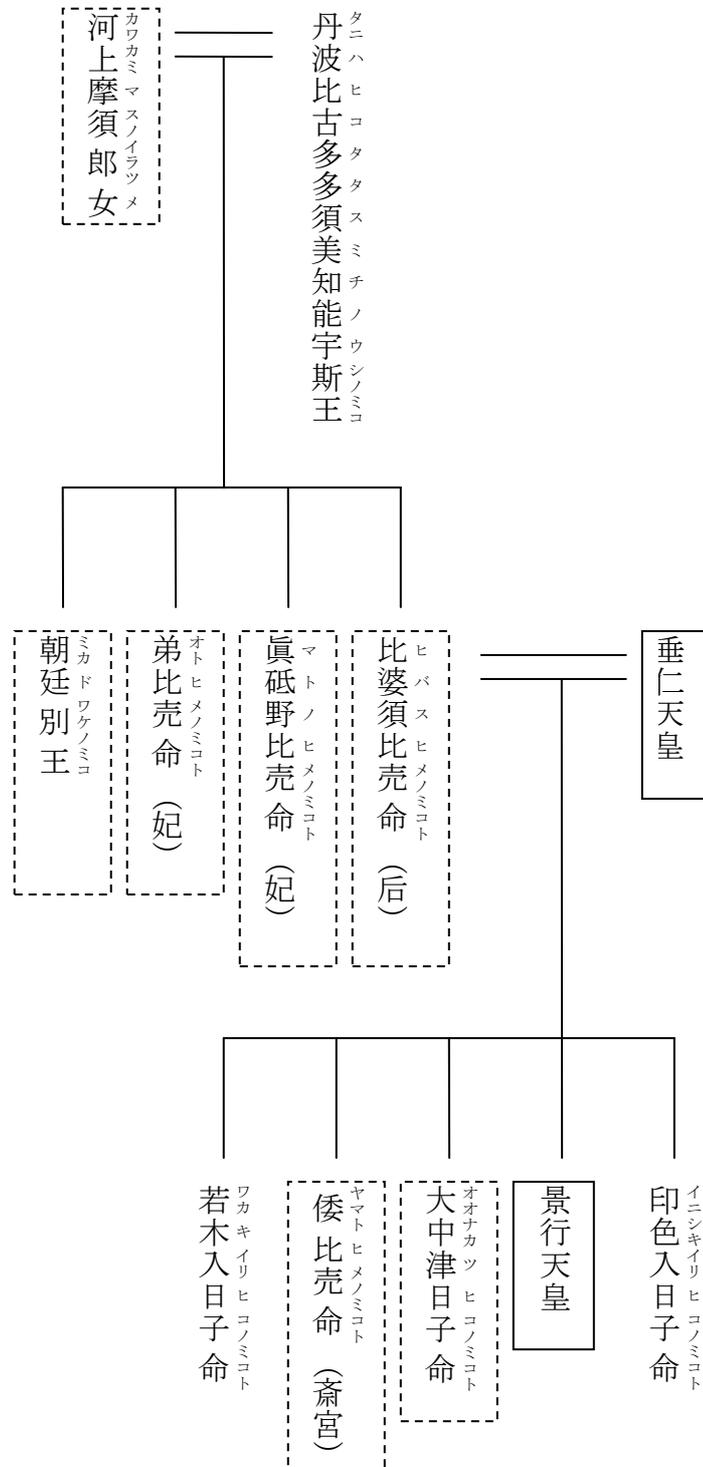
その竹野姫命は、記紀では丹波道主王の娘になっている。そして、年老いてから実家（丹波）に帰され、竹野神社を創設して天照大神を祀ったことになっているが、年老いたことは醜さを暗示するので、これは石長比売の話の焼き直しである。古事記では系図や姫の名前が異なり、美知能宇斯王（ミチノウシノウ）の娘たち、比婆須比売命（ヒバスヒメノミコト）、弟比売命（オトヒメノミコト）、歌凝比売命（ウタゴリヒメノミコト）、円野比売命（マトノヒメノミコト）を妻としたが、歌凝比売命と円野比売命はとても醜かったため、生まれ故郷に送り返されたことになっており、はっきりと“醜かった”ことが書かれている。

川上真稚命は 12 ページ系図の「海部氏伝(1)」では垂仁天皇の子、景行天皇の時代に相当するが、記紀では垂仁天皇の一代代上になっており、ここでも紀年の操作が伺える。また、竹野姫命は大比昆命＝開化天皇の妃で、開化天皇は垂仁天皇の祖父だから、これも年代操作である。おそらく、勘注系図に登場している大比昆命（④建田勢命で記した 12 世孫・建稲種命の諡号“彦大毘毘命”）を、記紀では開化天皇としたのだろう。

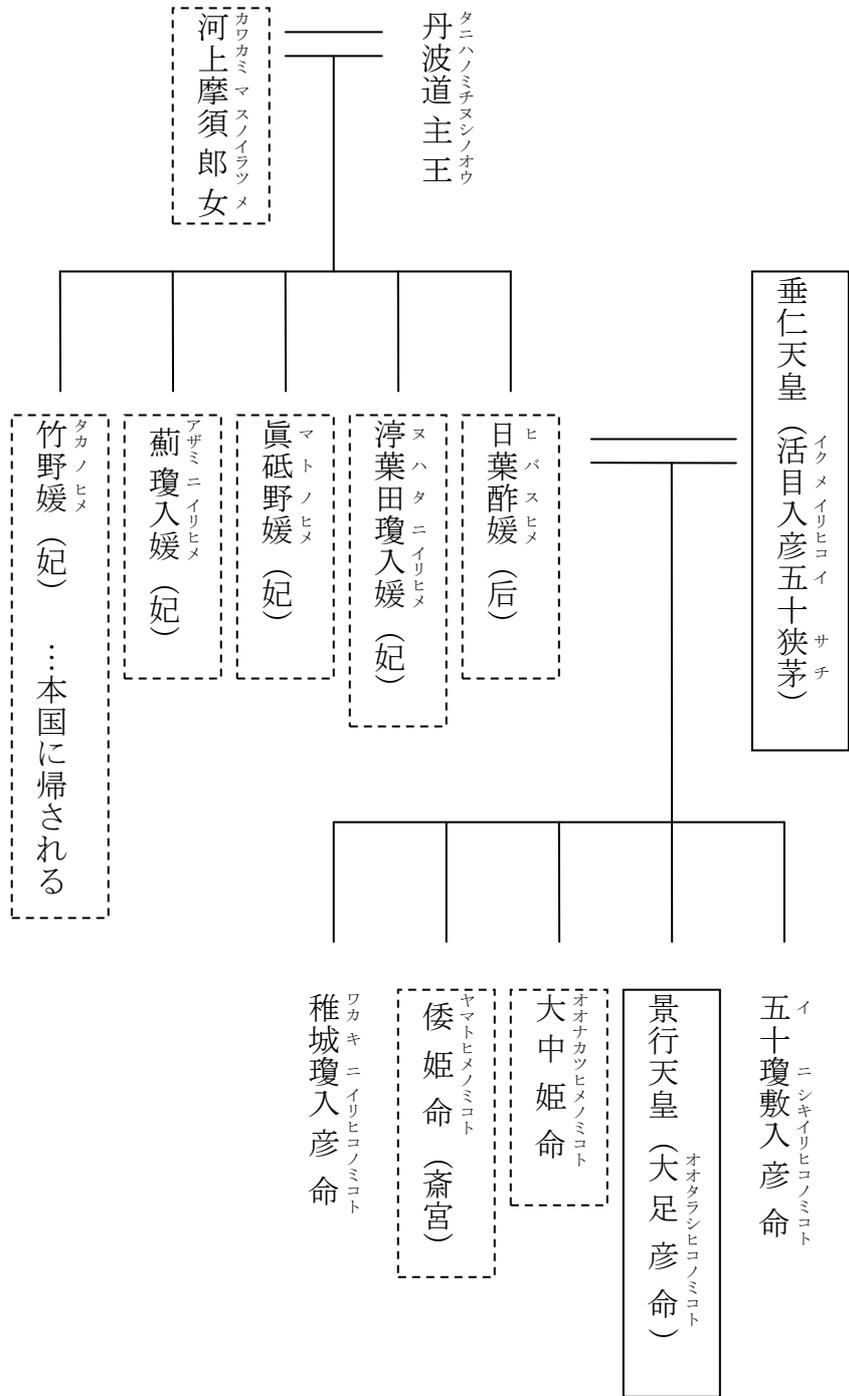
それはそうと、川上真稚命の子が丹波大矢田彦命、川上出石別命、川上日女命で、ここでも“日女命”を冠する名前が登場する。該当する名前は記紀には無いが、日葉須媛がそれだと推察される。“日”を冠する正妻（后）で、景行天皇を産んでいるが、何よりも、天照大神祭祀を始めたとされる倭姫命を産んでいる。ヤマトに於ける日神の本格的祭祀は卑弥呼とトヨによって成されたので、2 人を象徴する“日女命”という名称は、正史上で天照大神祭祀を始めたとされる倭姫命の母に投影されて然るべきである。現に、勘注系図での亦名は大中日女、竹野日女（タカノヒメ）命、八小止女（ヤオトメ）、大海（オオアマ）姫、日葉酢姫であり、“日葉酢姫”と明言されている。“日”と“海”を象徴する 2 つの亦名で“大”を冠していることは、日神と海神を祀る巫女としてとても重要であることを示唆している。

八小止女は天女伝説で登場した八小童と同じであり、与佐宮の宮域内で道主貴＝丹波道主王と共に豊受大神を祀っていた。彦火明命が娶った天道日女命の亦名も屋乎止女命だが、豊受大神を祀ったということの暗示である。だから、天道日女命の中にも“日女命”がある。その丹波道主命は彦田田須命と言い、“糺”の原型であったが、この命が川上真稚命なのか、その子の丹波大矢田彦命なのか、あるいは両者なのかは不明だが、川上真稚命の亦名が道主命である以上、川上真稚命が丹波道主命・彦田田須命と考えられる。古事記では丹波比古多多須美知能宇斯王となっているが、近江の天御蔭神の娘、息長水依姫（オキナガミズヨリヒメ）と日子坐王との間に生まれたとされる。天御蔭神は倭宿祢命の亦名なので、息長氏は海部氏の同族と言える。そして、日子坐王の 4 世孫が神功皇后であり、その亦名は息長足姫で、父は息長宿祢王（オキナガノスクネノミコ）、母は天之日矛の末裔とされる葛城高頼媛（カツラギノタカヌカヒメ）であり、海部氏と同族の息長氏と葛城氏の血統である。（実は卑弥呼だが。）

古事記の系図



日本書紀の系図



なお、川上麻須郎女と同じ亦名“タカノヒメ”があるが、これは“日女命”と同じく、同一人物を表すわけではなく、丹波の竹野で神祭りを行っていたことの象徴と考えられる。

子の丹波大矢田彦命の亦名は朝廷別王であり、古事記の系図と一致する。川上出石別命の子孫は但馬国造となっているから、これが吉備氏の祖だろう。

他にも、14世孫・川上真稚命の亦名は大難波宿祢ともされ、難波との深い関わりが伺える。

また、天之日矛は但馬に行く前に、丹波の熊野郡川上荘馬次（まじ）の里（現在の須田）にしばらく滞在したという伝も残されている。“川上荘馬次”は“川上馬次”で“川上真稚（カワカミマワカ）＝カワカミマチ”を連想させるので、おそらく、丹波の熊野郡川上荘馬次は川上真稚命に因むものであろう。しかし、それでは年代が錯誤する。実質的には、熊野郡川上荘馬次とされる場所に天之日矛が一時滞在し、それに因んで川上真稚命なのだろう。そうすると、海部氏の本宗はヤマトから丹波へと移動して来たことになる。“川上”という姓を名乗っているのも、それを暗示していると思われ、丹波の大縣主となったことと熊野郡甲山に葬られたことが記されている。亦名は大難波宿祢命だから、難波の方へも分かれて移動したのだろう。

その移動した時代は、勘注系図に依れば“稚足彦天皇（成務天皇）御宇 乙亥年秋九月”となっている。この成務天皇乙亥年は、日本書紀に依ると AD135年だが、記紀は年代操作が成されているので、このまま信用するわけにはいかない。乙亥年の候補は AD195、255、315、375 年だが、伴氏による推定年代は AD315年とのことである。（記紀の年代操作方法については後述する。）

しかし、姓を名乗らされ、ヤマトではなく丹波に葬られたということは、大王から格下げされたことを伺わせる。また、妹の竹野姫命の逸話については、日本書紀では垂仁天皇の妃として姉たちは後宮に留まっていたのに、竹野姫だけが故郷の丹波に戻されたが、この話は、木花開耶姫と共にニニギに嫁いだ石長比売が、醜いという理由で父の大山祇神の下に返された話と同義である。この場合のニニギを、初期に渡来した秦氏の象徴と見なせば、既に 14 世孫・川上真稚命の時代に秦氏が渡来して来ていたことを暗示していると言える。

川上真稚命の子の 15 世孫・丹波大矢田彦命は八咫鏡を連想させる“矢田”を冠し、しかも“大”が付いており、正史では“朝廷別王”とされているほど重要な人物である。つまり、それまでヤマトで祀られていた八咫鏡＝息津鏡・辺津鏡が、丹波大矢田彦命の時代から丹波で祀られるようになったのであろう。

しかし、この場合は単なる姓ではなく“丹波”という地方名を冠せられ、亦名が“朝廷別”で朝廷よりも格下であることを暗示しており、川上真稚命よりも一段と格下げされたように思われる。降格により、祭祀もヤマトから丹波へと遷された可能性が極めて高い。

また、14 世孫・川上真稚命の亦名が大難波宿祢であるにも関わらず、15 世孫・丹波大矢田彦命の亦名は難波根子建振熊命で“難波の大元”という意味なのはおかしい。実は、難波根子建振熊命というのは丹波大矢田彦命の亦名ではなく、

難波を手中にした秦氏の象徴なのかもしれない。“振”は応神天皇の本名“真沸流（マフル）”に通じ、秦氏は“フル”と密接な関係がある。（その源流は、冶金と馬術に優れたフルリ人由来の可能性はある。）古代に於いては祭祀が最重要だが、丹波大矢田彦命の時代にその祭祀が秦氏によって纏向から丹波へと移動させられたことを、“振”という字で象徴しているのだろう。

さて、日葉酢姫については興味深い逸話が残されている。日葉須姫は垂仁天皇の最初の後ではなく、それは狭穂姫（サホヒメ）である。この狭穂姫に関する逸話である。

“ある時、姫の兄、狭穂彦が謀反を起こし、姫に小刀を渡し、天皇を暗殺するように仕掛けた。しかし、姫は実行できず、真相を天皇に語ると、天皇は狭穂彦を征伐するために軍勢を仕向けた。姫は兄を思い、宮中から逃げ出して兄の下へ行った。しかし、姫が妊娠していたことを知り、天皇軍はすぐには攻めず、その間に皇子が生まれた。天皇はいまだに後のことを思っていたので、母子共に取り返そうとした。その子は天皇軍の兵士にかくまわれたが、母の方は駄目だった。そこで天皇は、皇子の名を何と名付けたら良いのか姫に問うたところ、誉津別皇子にして下さい、とのことであった。更に、次の后として誰を迎えたら良いのか問うと、且波比古多多須美智能宇斯王（タニハノヒコタタスミチノウシノミコ）の娘、兄比売（アニヒメ、エヒメ）、弟比売（オトヒメ）です、と答えた。そして、狭穂姫、狭穂彦共に死んだ。”

死んで行く妻が、次の妻は誰某が良い、などと提言することはあり得ない。且波比古多多須美智能宇斯王は名前からして丹波道主王である。ここで“比古多多須＝彦田田須”が登場した。古事記なので日葉酢姫とは書かれていないが、兄比売がそれに相当すると考えられる。丹波道主王の娘を後にせよ、ということは、垂仁朝には丹波系后・妃が必須であり、古代の祭祀を掌握していたのが海部氏だったことを暗示している。特に、古事記、日本書紀共に共通している子の倭姫命が伊勢の斎宮となったことが、何よりも物語っている。

その狭穂姫の父は開化天皇の皇子、日子坐王で、狭穂姫の遺言に従って垂仁天皇の次の皇后となった日葉酢媛命も彦坐王の子である丹波道主王の娘で、狭穂姫の姪に当たる。だから、狭穂姫も実は丹波系であり、故に、天皇は狭穂姫の言うことに従ったのである。系図的には春日建国勝戸売（カスガノタケクニカツトメ）の娘、沙本之大閼見戸売（サホノオオクラミトメ）の子だが、春日氏＝和珥氏は海部氏と同族である。

なお、日葉酢媛は“氷羽州比売”とも書くが、この名称は朝鮮語での解説に依ると、氷羽（ひの）国＝日の国で、日輪の霊と海の霊を併せ持つ大変な意味を持った巫女王である、という説がある。（畑井弘氏、「天皇と鍛冶王の伝承」。）海部氏の天照国照尊はまさに太陽神かつ海神だから、氷羽州比売命に巫女王だった卑弥呼が投影されていてもまったくおかしくない。そして、新羅は海部氏が建国したに等しいから、（古代）朝鮮語での解説が可能で、それでこそ、真意

が解る場合もあるだろう。

⑫16 世孫

16 世孫は丹波国造大倉岐命で、初の丹波国造であり、子の 17 世孫は丹波国造明国彦命である。大倉岐命の弟の尾綱志理都岐根命（尾綱根命）の子がわざわざ 17 世孫として尾張連弟彦と書かれている、と金久氏は言っているが、別添付の系図では、弟ではなく尾張系になっている。では、どちらが正しいのだろうか。

前述のように、志理津彦命の代から海部氏と尾張氏に分家したと考えられ、その分家の祖が、尾張氏では尻綱根＝志理都名根命＝志理津名根命だから、系図的には別添付系図の方が辻褃が合い、正しいと思われる。尾綱志理都岐根命が大倉岐命の弟とされているのは、同族故に、兄弟のように仲が良かったことを象徴しているのか、あるいは、尾張氏の系統の古利命に子が無く、実際に大倉岐命の弟だった尾綱志理都岐根命＝尾綱根命を養子として迎えたのかの、どちらかと思われる。金久氏の主張と別添付の系図が一致するのは後者の場合だから、古利命に子が無かったので、大倉岐命の弟だった尾綱志理都岐根命＝尾綱根命を尾張氏が養子として迎えた可能性が高い。

その尾張氏に関しては、日本三代実録の巻九に“姓を高尾張宿祢を賜う天孫火明命の後なり”とあり、葛城の高尾張邑に移住して高尾張を名乗っていたという。その後、尾張に移動したのだが、金久氏は、4 世紀頃に尾張へ移動したのだろう、と推定している。

13 世孫で見たように、13 世孫・尻綱根＝志理都名根命＝志理津名根命が尾張連等の祖で、この志理津彦命の代から海部氏と尾張氏に分家したと考えられるが、それはまだ分家の段階で、移動まではしていなかったと考えられる。というのも、海部宮司に依ると、海部氏・尾張氏は最後まで秦氏に抵抗していたが、纏向を譲った尾張氏は近江から美濃を経て、尾張の地へ至ったというから、尾張氏の移動は 13 世孫の時代では早い。また、記紀に於いて、葛城が抵抗勢力として描かれているが、神武軍がヤマト（葛城の高尾張邑）に於ける抵抗勢力“赤銅（アカガネ）ヤソタケル”を討伐しようとした際、天香具山の土を取ると、敵は自ずと降伏した。この場合は、“荒ぶる”という意味で“タケル”であり、尾張氏が元々いた地“高尾張”であり、尾張氏の元々の姓でもある。また、神武東征で最後まで抵抗していたのは高尾張邑の土蜘蛛ともされており、この赤銅ヤソタケルのことでもあるが、ここでも“高尾張”で尾張氏である。やはり、尾張氏の移動は、神武軍に象徴される応神天皇渡来前後と見なすべきである。

そこで、尾張氏の名前を見ると、13 世孫・尻綱根＝志理都名根命＝志理津名根命が尾張連等の祖だが、まだ“尾張連”ではなく、17 世孫・尾張連弟彦が初の尾張連である。“尾張連”を名乗るからには、既に尾張地方に移動していたはずである。（葛城の高尾張邑では高尾張氏だったように。）つまり、16 世孫・尾綱志理都岐根命＝尾綱根命の時代に移動が始まったのだろう。だからこそ、天孫本紀尾張氏系譜に於いて、尾綱根命＝尾綱志理都岐根命が皇統の本宗である建稲種命に直結されているのであり、それ故、本来は 16 世孫・尾綱志理都岐根

命のはずが、13 世孫・尾綱根命とされているのである。尾綱志理都岐根命は一団を率いて尾張に到着すると（ここまでは高尾張氏）、王の座を弟彦に譲り、新たに尾張氏という大豪族が誕生したのである。よって、13 世孫・尻綱根～16 世孫・尾綱志理都岐根命の時代は高尾張氏だが、17 世孫・尾張連弟彦から尾張氏となったのである。

海部毅定氏は、天孫本紀尾張氏系譜に於いて、実際は 16 世孫に当たる尾綱根命が 13 世孫になっている、と言われていたが（2：(2)）、“実際は 16 世孫に当たる尾綱根命”の真意とは、このようなことだったのである。なお、尾張連弟彦は尾綱志理都岐根命の子とされているが、“弟彦”という名前から、弟だった可能性もある。

さて、大倉岐命は成務天皇の時代、桑田郡の大蛇を退治した。勘注系図には“大倉岐命、成務天皇癸丑夏五月、桑田郡大枝山邊に、大蛇有り。これを斬る”とあり、伴氏は成務天皇癸丑年を AD353 年と見なしている。その時に手助けしてくれたのが大山咋命（オオヤマクイノミコト）＝大山祇神で、海部氏縁である。大倉岐命の亦名は大楯縫命（オオタテヌイノミコト）であるが、この名に因んでいると思われる地名が出雲にある。それは楯縫郡である。

ここで、大蛇退治の話が出てきたが、大蛇と言えば出雲の八岐大蛇が思い浮かぶ。しかし、出雲の逸話を記した出雲国風土記には、八岐大蛇退治の話は無い。意図的に隠されたとしても、出雲地方に古くから伝わる話なら、どこかの地名譚になっていたりしても良いはずだが、それすら見られない。ということは、出雲地方の伝承としては存在しなかったと考えられる。だが、出雲国風土記には参考になる話がある。“意宇郡 母理郷 大穴持神 越の八口（やくち）を平（ことむ）け賜いて還りますとき”とある。“越”とは北陸地方で海部氏の領地であり、“大穴持神”＝大己貴命で出雲のスサノオ系、“八”は八岐大蛇の八岐、“口”は口なわのことで蛇でありオロチを意味する。

つまり、古代丹波王国での出来事を、出雲という狭い範囲に限定して創作されたのが八岐大蛇の話と推測される。元は大倉岐命による桑田郡の大蛇退治の話だったのである。出雲はかつて投馬国と呼ばれ、古代丹波王国の一部だった。また、八岐大蛇の逸話は斐伊（ひい）川沿いの話だが、「合わせ鏡」で“いひ”とすると揖斐川となり、尾張地方との関わりを暗示させる。何よりも、八岐大蛇の尾から取り出された剣が草薙神剣であり、熱田神宮の御神体である。そして、大倉岐命と同世代の尾綱志理都岐根命＝尾綱根命が草薙神剣を持って尾張へと移動を開始した時代と年代的な辻褄も合う。この移動推定年代は、大蛇を退治した推定年が AD353 年だから、それよりもやや後ということになり、4 世紀頃に尾張へ移動したのだろう、という金久氏の説と一致する。おそらく、金久氏は海部宮司から直接聞かれたのだろう。他にも、日本書紀には出雲に関する事件が書かれている。

“崇神天皇は出雲大神の宮に納められている神宝を確かめさせるため、武諸隅命を出雲に派遣した。神宝は出雲振根（イズモノフルネ）が管理していたが、丁度この時は筑紫に行っていたので、弟の飯入根（イイリネ）が対応し、弟

の甘美韓日狭（ウマシカラヒサ）と子の鷗濡淳（ウカヅクヌ）に神宝を持たせて献上してしまった。帰って来た振根は怒り、いつか弟を殺そうと考えた。振根は密かに刀とそっくりな木刀を作り、腰に掛け、水浴びに誘った。振根は先に上がり、弟の刀を身に付けると、弟は驚いて兄の木刀を取ったが、振根に切り殺されてしまった。”

これと良く似た話が古事記にある。倭建命＝日本武尊の出雲征伐の話である。

“景行天皇の命により、倭建命は出雲建（イズモタケル）を征伐しに行った。倭建命は木刀を作って身に付け、一緒に川に入り、倭建命が先に上がって出雲建の刀を取った。驚いた出雲建は上がって来て倭建命の刀を取ったが、抜くことができず、倭建命に切り殺されてしまった。”

日本書紀は、古事記の話を登場人物と時代を変えて焼き直したに過ぎないことが解る。古事記では、日本武尊が横暴な人物として描かれている。

この出雲振根の逸話は物部氏の中の権力闘争を思わせる。古事記は日子坐王の存在を強調しているが、日本書紀ではまったく無視されている。この日子坐王の勢力範囲は天之日矛のそれと良く一致しており、海部氏を意識していることは間違いない。そこで、日子坐王周辺の系図を見てみる。

日子坐王と袁祁都比売命との間に伊理泥王がおり、丹波比古多多須美知能宇斯王＝丹波道主命＝川上真稚命とは異母兄弟である。伊理泥王の娘は丹波阿治佐波比売命（タンバアジサワヒメノミコト）と言ひ、大筒木真若王と結婚して、その何代か後には神功皇后がいる。正史上、娘の名に丹波を冠し、後の子孫に神功皇后がいることにされているということは、海部氏と同族である。また、神功皇后は三韓征伐に赴いたが、日本武尊は西の方面には熊襲征伐や出雲征伐に赴いており、西国征伐という構造が正史に於いて同じということは、神功皇后と日本武尊が同じ氏族であることを暗示している。このことから、神功皇后の祖とされる伊理泥王も明らかに日本武尊と同族、すなわち、海部氏一族と言える。

この場合、日子坐王に天之日矛が投影されているが、ならば、この場合の御神宝とは、天之日矛が持って来たと言われる鏡、現在では海部氏が持っている息津鏡・辺津鏡と推察される。また、海部宮司は、出雲は容易に国譲りしたので扱いが格別である、と言われている。かつて、出雲は投馬国と呼ばれる大丹波国の一部であり、容易に国譲りした功績により、伊理泥の実際の子孫（正史に於ける系図ではない）は後に出雲を与えられたのだろう。それを、記紀では「合わせ鏡」により、最後まで抵抗していた出雲、という構図に書き換えたのである。そうすると、伊理泥王の血統は同族とは言いながら、母の血統が婚姻関係を結んだ同族なのではないか、とも疑われる。

伊理泥王の母、袁祁都比売命は日子坐王の妻だが、日子坐王の母、意祁都比売命と読みが同じだから（たった1字違い）、両者は同一人物と見なすべきである。日子坐王系譜に依れば、袁祁都比売命の姉が意祁都比売命で、兄弟（一説には父となっている）に日子国意祁都命（ヒコクニオケツノミコト）がいるが、古代に於いて漢字は当て字だから字による区別はできず、また、日子国意祁都命が袁祁都比売命の兄弟なのか父なのか定かではないことは、袁祁都比売命の存在自体が怪しまれる。正史では日子国意祁都命が姥津命（ハハツノミコト）、意祁都比売命が姥津媛（ハハツヒメ）とされ、姥津媛が開花天皇の妃となっており、やはり袁祁都比売命の記述が見られず、存在が怪しまれる。

ここで、姥津命と姥津媛は和邇（珥）氏系図にも登場する。（Wikipedia 参照。）考昭天皇と尾張の瀛津世襲命の妹、世襲足媛命（ヨソタラシヒメノミコト）の子に天足彦国押人命（アメタラシヒコクニオシヒトノミコト）がおり、同母弟に日本足彦国押人命（ヤマトタラシヒコクニオシヒトノミコト、孝安天皇）がいる。日本武尊の場合のように、ここでも弟の方が皇位を継承しているが、それはさておき、天足彦国押人命の子が和邇日子押人命（ワニヒコオシヒトノミコト、母は不明）で、この日子押人命の子に彦国姥津命と姥津媛（いずれも母は不明）がいる。更に彦国葺命—大口納命—難波根子武振熊命と続き、難波根子武振熊命が和邇氏の祖とされている。（武振熊命については次項で記述。）

つまり、和邇氏の祖とも言える日子押人命の母、そして、その後について不明、などというのは、和邇氏系図としては、極めて不本意とも言うべきものである。言い換えれば、古代に於ける皇統＝海部氏を象徴する考昭天皇と、同族の尾張氏を母とする天足彦国押人命は海部氏・尾張氏を象徴していることは明らかだが、その後が不明とされ、更にその子（日子押人命）の後まで不明とされていることは、後の血統が純粋な海部氏・尾張氏ではないが、極めて重要な一族であることを暗示していると考えられる。つまり、意祁都比売命＝袁祁都比売命という伊理泥王の母方の血統、すなわち、海部氏の外戚となる重要な血統が隠されているのである。では、その血統となるのはどの一族なのか。

これまでに見てきたように、海部氏と婚姻を結んでヤマトの国造りを行ったのは、少彦名神こと、徐福一団である。だから、徐福あるいは始皇帝縁者の血統、と言いたいところだが、海部氏と共に渡来してきたフェニキア人も忘れてはならない。どちらが適切なのかは後述する。

なお、他にも出雲に関わる話として、日本書紀に丹波の氷上（ひかみ）の人、氷香戸辺（ヒカトベ）という巫女が登場する。

“丹波の氷上の人、氷香戸辺が、皇太子・活目命（垂仁天皇）に言います。「私に子供が言います、出雲人の祈り祭る本物の見事な鏡、力強く活力を振るう立派な御神の鏡をもって祭れ、出雲人よ」と。これは、私の子に神が乗り移って言うのであろう。このことによって、出雲人は神祭りを許した。”

氷上は現在の丹波市のことで但馬のことだが、古代は但馬も丹波に含まれて

いた。垂仁天皇の妃は丹波の娘の日葉酢媛命で、氷香戸辺も丹波人である。正史としては、垂仁天皇の時代、海部氏一族の天之日矛が渡来して息津鏡・辺津鏡を含む神宝を奉じ、天照大神の本格的祭祀が始まった。その天照大神の象徴が八咫鏡だから、ここで言う見事な鏡とは、息津鏡・辺津鏡であることに間違いなく、卑弥呼が祭祀で扱っていた鏡に他ならない。

つまり、海部氏一族の話が、正史たる記紀の中ではヤマトと最後まで敵対していた出雲として表現されていることが窺い知れ、“出雲”と記されていても、島根県の出雲というように狭義の意味で考えてはならないのである。

⑬18 世孫

18 世孫は丹波国造建振熊宿祢（タケフルクマノスクネ）である。勘注系図では、息長足姫（神功皇后）が新羅を征伐した時に丹波・但馬・若狭の海人 300 人を率い、水主となって奉仕した、とある。“熊”とは 2：(5)で記した通り、日神の前に跪くこと、すなわち、日神を祀ることを暗示しており、神宮を護る役目が“熊”である。

古事記では、新羅征伐の将軍の名を難波根子建振熊命とし、丸邇（ワニ）臣の祖としており、日本書紀では、武振熊＝難波根子建振熊命と武内宿禰に命じて忍熊王（オシクマノミコ、仲哀天皇の皇子、母は彦人大兄の女・大中姫）を征伐させ、和珥（ワニ）臣の祖としている。

勘注系図に於いて、15 世孫・丹波大矢田彦命の亦名が難波根子建振熊命なので、“建振熊”という共通名で括り、記紀は真相を改竄している。しかし、いずれも神功皇后が共通となっており、神功皇后は卑弥呼を象徴しているが、そうすると年代がおかしい。ならば、この場合は神功皇后～応神天皇の時代のことと考えなければならない。つまり、丹波国造建振熊宿祢は正史に於ける神功皇后～応神天皇の時代に該当するのである。

そこで、興味深い記述が勘注系図にある。それは、応神天皇の時代に 18 世孫・建振熊宿祢は若狭の木津高向宮で海部の姓を賜り、以降は海部直となった、ということである。若狭は越の国であり、丹波王国であった。“木津”は海部氏が丹波からヤマトへ入る重要地点と同名であり、“高向”はヤマトの“纏向”に通じる名称で、いずれもヤマトの祭祀場、纏向を意識した重要な宮名＝王宮と思われる。18 世孫・建振熊宿祢の代になって姓を賜ったということは完全な臣籍降下である。建振熊宿祢は丹後の水軍を率いた王で、丹波に移動して来ていたとはいえ、まだ皇位は丹波にあった。しかし、応神天皇の時代に皇位継承権を奪われて完全に臣下に落とされた、ということを示している。伴氏に依ると、それは戦いではなく、無血譲渡である。

応神天皇は海部氏に婿入りしたが、改宗して秦氏の大王となったから、この時代＝大和朝廷成立時から秦氏が日本の歴史を本格的に動かし始めた。しかし、前述のように、14 世孫・川上真稚命の時代に海部氏が降格されてヤマトから移動させられ、その後の 15 世孫・丹波大矢田彦命の時代には祭祀もヤマトから丹波へと遷され、同族の尾張氏は 16 世孫・尾綱志理都岐根命＝尾綱根命の時代（AD353 年よりもやや後）に尾張に移動させられたことからすると、既に 14 世

孫の時代には徐々に秦氏が渡来してヤマトに入って来ていたのである。天孫本紀尾張氏系譜の本来の皇統が12世孫・建稻種命で切られていることは、本来の皇統はそこまでで、13世孫・尻綱根＝志理都名根命＝志理津名根命の時代に秦氏が渡来し始めて、影響を与え始めたということを示しているのだろう。

そして、最終的に秦氏への権力移譲は丹波国造建“振”熊宿祢の時代に達成された。これは、出雲“振”根が管理していた神宝が朝廷に渡された逸話に象徴されている。

伴氏に依ると、このような皇位継承の悲しい歴史は神話でも暗示されている。イザナギとイザナミの神産みでは、骨の無い水蛭子（ヒルコ）が生まれたので、流している。日女命を“ヒルメノミコト”と読むのなら、日は“ヒル”と読み、ヒルコ＝日子と解釈することが可能である。つまり、流したことは、本来の皇統＝海部氏が皇位を継承できなかったことの象徴である。

また、籠神社では火火出見命を祭神としていたのに、大化の改新後、火明命に変えさせられたことは前述の通りだが、現在では、境内にある蛭子神社に祀られている。“蛭子”は“水蛭子”を象徴しているので、祖神である火火出見命が海部氏を象徴する蛭子神社に祀られ、謎を解く鍵とされているのである。そして、“ホホデミ”は神武天皇の亦名であり、その祖父も“ホホデミ”とされている。つまり“ホホデミ”とは、ヤマト政権にとって、とてつもなく重要な意味を持つ名前であり、本来の皇統＝海部氏と、祖神＝天照国照尊を象徴するのである。

この蛭子＝恵比須は海部氏と同族の尾張氏の熱田神宮にも存在する。それは、別宮のある上知我麻神社で、正月の初恵比須は有名である。そして、熱田神宮でも、火明命は天火明命として、境内の孫若御子神社でひっそりと隠されるように祀られており、この神社の存在すら知らない人が多い。

(2) 同族

金久氏は著書の中で、海部氏に匹敵する大豪族として挙げているが、以下の内容から、いずれも同族あるいは婚姻関係を結んだ同族と言えるだろう。また、海部宮司から直接伺わないと知り得ないこともあるので、金久氏も海部宮司から秘伝を聞かれたのだろう。

・安曇氏

安曇氏の代表的な定住地は丹後、但馬、若狭である。金印が出土した有名な福岡の志賀島には志賀海（しかうみ）神社があるが、大綿津見神を祀り、阿曇氏＝安曇氏が奉仕する。大綿津見神は籠神社でも祀られている、海神の中の海神である。故に、安曇氏は海人族を支配する。新撰姓氏録では、次のような祖となっており、勘注系図と比較すると、共に建位起命＝武位起命を祖に持つ。

新撰姓氏録：綿積豊玉彦命－振魂命－武位起命－椎根津彦命。

勘注系図：彦火明命－彦火火出見命－建位起命－倭宿祢命。

いずれに於いても、崇神天皇の妃、大海姫命は、勘注系図では天火明命から7世孫の建諸隅命の妹とされ、その兄の名が和多津美命であり、ここでも“和多津美＝綿津見”である。

海部毅定氏に依ると、“同じ海神を祀ると言っても、安曇氏と海部氏は異なる氏族である。これは、海部と言えど海に関係があり、いわゆる職種による姓（かばね）であって、血統上の系統は別である。海部氏は海神族ではなく、神別氏姓に属している”ということである。

あくまでも王族は安曇氏ではなく海部氏であり、同じ祖を持つということは、おそらく婚姻関係を結んだ一族なのだろう。故に、海部氏は天照国照尊を祖とする王族、安曇氏は海神を祀る海人族である。

しかし、真相は<日本の真相4>で記した通りである。すなわち、安曇＝アドで、ヘブライ語での主の別名アドナイ、フェニキア語ではアドーンであり、これはイナンナが愛するドゥムジを呼ぶ時の言い方が基となっていたので、安曇氏は航海術に長けていたフェニキア人で、隣接する北イスラエル王国の王族であるエフライム族＝海部氏・尾張氏と共にヤマトの地にやって来たのである。そして、安曇氏が治めていた地でイナンナそのものを象徴するお祭り、イナンナとドゥムジの聖婚を象徴するお祭り、御柱祭が行われる。

・伊福部（イフキベ）氏

伊福部氏は火明命を祖とする。故に、海部氏・尾張氏と同族である。愛知県海部郡七宝町伊福には伊福部神社が鎮座する。やはり、愛知県の海部郡（現あま市）と海部氏とは直接の関係があった。

・尾張氏

13世孫・尻綱根＝志理都名根命＝志理津名根命の時代に尾張氏に分家した。葛城にいる間は高尾張氏だったが、秦氏に権力を奪われた以後、16世孫・尾綱志理都岐根命＝尾綱根命の時代に尾張地方への移動が始まった。だからこそ、天孫本紀尾張氏系譜に於いて、尾綱根命＝尾綱志理都岐根命が皇統の本宗である建稲種命に直結されている。尾綱志理都岐根命は一団を率いて尾張に到着すると、王の座を弟彦に譲り、新たに尾張氏という大豪族が誕生した。

・和珥氏

和珥氏は天皇家に多くの妃を輩出している。後に春日に移ってからは春日臣となる。古事記では孝安天皇の兄が、日本書紀では孝昭天皇の子、天足彦押人命が和珥臣の祖とされている。

和珥氏＝和邇氏の名は若狭が発祥である。応神天皇の時代に18世孫・建振熊宿祢は若狭の木津高向宮で海部の姓を賜り、以降は海部直となったから、若狭は海部氏の領地で、海部氏と同族である。ワニカイトという集落があり、現在も玉造り（メノウ）の生産をしている。玉は王権の象徴であり、海部氏と同族だからこそ製造を任せられ、中でもメノウは最高の玉とされている。

この付近から近江に入る道があり、若狭街道と呼ばれているが、ここから北

川・遠敷川を下り、近江の安曇川、山城の高野川より木津川に沿って大和に入る。これも、直接、海部宮司から伺った内容と同じである。

若狭と言えば東大寺のお水取りに関してお水送りがあるが、古代から丹波、若狭、大和の間に深い関係があった。それについては<日本の真相 3>で記した通りであり、“不老不死、復活”を象徴したものである。また、水と言えば“天押穂井の水、真名井”であり、それは「生命の水」である。つまり、お水取りの原型は海部氏にある。

また、近江へ入って繁栄し、更に山城に勢力を扶植した和珥氏があった。ならば、近江も元々、海部氏・尾張氏の領地であることが、ここでも裏付けられる。その高島郡の小野神社は和珥氏の祖、天足彦国押人命を祀る。この南は大津である。後に、鎌足の傀儡である天智天皇が宮を大津に構えたが、“津”とは湊のことで、大津は“大きな湊”という意味になるから、大津が丹波ーヤマトー尾張を結ぶ海上交通の要衝だったからである。そこを封鎖すれば、この流れが途切れ、丹波と尾張の連絡が取りにくくなり、物流も滞る。すなわち、海部氏・尾張氏封じである。

・葛城氏

葛城には重要な神がいる。古事記では、雄略天皇が葛城山に登った時、天皇の行列と同じ行列で登る人がいた。天皇が名を名乗るよう言うと、「私の一言で吉事と凶事も決まる葛城の一言主（ヒトコトヌシ）大神だ」と言い、天皇は臣下の刀や矢、衣服を献上して拝んだ、とある。天皇が拝んだということは、それ以上の格だ、ということである。つまり、秦氏系天皇の渡来する以前の国津神で、邪馬台国の王族ということである。醜聞だったとされ、竹野姫などと同じ扱いであり、スサノオの子とされているから、海部氏との関わりが深いことを暗示している。また、“一言で吉事と凶事も決まる”とは、大物主神が崇っていたことと類似しており、何よりも“大神”を冠している以上、大物主神の亦名である。大物主神にも“大神”が含まれており、“大いなる、物部氏の主神”と読め、それは天照国照尊に他ならない。

<日本の真相 4>では、海部氏・尾張氏の象徴である大己貴神と徐福の象徴である少彦名神の逸話、そして、葛城は月に生える空想上の木、“桂木”とも書け、月を象徴する弓月君は支那の西域にいたユダヤ教徒のことから、葛城氏は始皇帝の血縁も含む徐福一団の象徴である、と記した。そして、尾張氏に后を出していることから、中でも徐福直系あるいは始皇帝の直系あるいは縁者系と考えられ、海部氏・尾張氏と婚姻関係を結んだ一族であろう。そして、“東の纏向”を尾張氏が、“西の葛城”を葛城氏が治めていたのである。なお、纏向は祭祀場と考えられ、実際に（高）尾張氏がいたのは葛城の高尾張邑である。

また、武内宿禰を祖とするとされており、武内宿禰は実は 9 世孫・意富那比命＝大海宿禰命だから、海部氏と同族ということになるが、実際には婚姻関係を結んだ徐福系の子孫だろう。

葛城襲津彦（カツラギソツヒコ）は 4 世紀前後に実在していた将軍と考えら

れ、仁徳天皇の皇后、磐之媛（イワノヒメ）の父とされている。勘注系図では4世孫・天登目命の母は葛木出石姫、5世孫・建登米命の母は葛木避姫、7世孫・建諸隅命の母は葛木高田姫命、9世孫・意富那比命の妹は葛木高千名姫とあり、海部氏と葛城氏の密接な関係が伺われる。

5：年代操作のカラクリ

4：では海部氏の勘注系図を基に、各世代の特徴と隠された真相を考察した。しかし、実質的な年代については論じていない。ここでは、年代がどのように操作されているのか、伴とし子氏の「卑弥呼の孫トヨはアマテラスだった（明窓出版）」を基に考察するが、それに先立って、伴氏が指摘している、日本史に於ける真相隠しについて考察する。氏の記述に対する私的見解を*で記す。

(1) 日本史に於ける真相隠し

・ニニギを真床覆衾にくるめて地上に降ろすという行為は、皇位継承権を持っていた他の者を黙殺して、ニニギの系統だけが唯一正統の皇位継承者であることを、神話の中で、動かし難い状況として設定している。

*黙殺されたのはニギハヤヒ（ここでは海部氏を含めた広義の物部氏）であり、それ以前では、流された水蛭子＝彦火火出見である。

・日本書紀の垂仁紀に依ると、丹波国のミカソという人が飼っていた犬がムジナという獣を噛み殺したところ、その獣の腹から八尺瓊勾玉が出てきたという。つまり、勾玉は丹波由来である。そして、もう1つの神器、草薙神剣は八岐大蛇から出てきたもので、どちらも異形の獣から出てきたものとされている。

*鬼、大蛇、土蜘蛛、長い尾、光っている尾、老人、醜い顔など、海部氏・尾張氏に関わることは、異形として象徴されている。

・日本武尊は宮簀姫の下に三種の神器の1つ、草薙神剣を置いて伊吹山に行ったが、これは、三種の神器が尾張氏に渡された、ということで、主体は尾張氏にあり、入り婿とも解釈できる。

*確かに、入り婿と見なすことができる。海部氏が古代日本に渡来した際に先住民と友好を結んだが、それはおそらく入り婿で、ニギハヤヒが長髓彦の妹、登美夜毘売（トミヤヒメ）あるいは三炊屋媛（ミカシキヤヒメ）と結婚したことで象徴されている。この場合のニギハヤヒは徐福ということではなく、習合された物部氏の祖神、天照国照彦火明櫛玉饒速日尊のことである。この逸話には“炊屋”という名称があり、御撰に関わるから、豊受大神をも象徴する。そうすると、徐福一団が海部氏に入り婿して和平を結び、物部氏となったことも象徴していると言える。このように見れば、確かに古代では、入り婿は和平を結ぶ有効な手段で、氏は、古代は女系社会だったと推定している。それは、祭

祀を司る役目が、卑弥呼やトヨといった、特定血統の女性にしか許されていなかったこと、そして、時には女王として君臨したことなどからの推定だが、王の基本は男王で、卑弥呼の後に男王を立てたり、トヨ以後は男王だったことからすると、やはり基本的には、政治を司る王は男で父系社会だった、と考えられる。また、田嶋氏系譜、天孫本紀尾張氏系譜、勘注系図にすら、日本武尊の名は無い。本当に入り婿したのなら、古代に日本に於ける日本武尊の功績は絶対に外せないものであり、田嶋氏系譜の中でも誇らしげに記録されるはずであるが、そうではないので、一概に女系社会だった、とは言えない。日本武尊の真相については、4: で記した通り、9 世孫・瀛津世襲命であり、海部氏一族である。

・“女”という字は“女性が手を前で交え、裾を押さえるようにして神に対して跪く姿”の象形文字である。また、“箒(ほうき)”という字は“香り酒を注ぎ、宗廟内を清める玉ははきの”の意味であり、これに女偏の付いた“婦”は、その清める役割を担っていたのが一家の婦人、主婦だったことを意味する。つまり、神祭りは元々女性の仕事だったのである。そして、宗廟に於いて聖なる器だった“鉞(まさかり)”の略字“戊”という字の中に“女”を入れると“威”となり、“鉞によって清め、威儀を正す”という意味である。これに携わるのも女性だった、ということである。

*漢字の根源を基にした素晴らしい解釈である。皇帝の専制とばかり思われている古代の支那でさえ、女性が神に仕えていたのである。つまり、仕えていた神は男神ということである。

神宮という最大・最高の宗廟内を清めていたのは、外宮禰宜の度会氏＝本来の神宮の祭祀一族から選ばれた童女で、禰宜の娘あるいは分身とされてきた大物忌である。神祭りには特別な血統の女性が必要であり、童女とされているのは、祭祀基盤が完成したのはトヨの時代で、トヨは13歳で女王となったからだと思われる。

・天照大神を祀ったのが倭姫命で、豊受大神も祀ったのが倭姫命である。しかも、吉佐宮(籠神社)で4年間天照大神を祀っている。倭姫命は垂仁天皇と日葉酢媛命の間に生まれた子だが、日葉酢媛命は丹波道主命の娘であり、丹波道主命は丹波系の象徴的人物である。つまり、倭姫命を挟んで、神宮と丹波は結ばれている。

*その通りである。その倭姫命は4: で記したように、8世孫・倭得玉彦命の妹、天豊姫命(大倭姫命)がモデルと思われる。

・神宮は皇室の祖とされているにも関わらず、持統天皇が最初に参拝した後は明治天皇までの間に誰一人として参拝していない。

*天皇の代わりに斎王が祀っていた。しかし、外宮には豊受大神とトヨが、内

宮には卑弥呼が祀られている。皇統は応神天皇の時代から秦氏に移動しており、直系の祖とは言えないので、天皇が直接参拝することは無かったのだろう。

神宮は鈴鹿の関の外＝東国にあり、事あれば関は閉められた。朝廷を守るはずの神宮が、いざという時には、締め出される格好となっていたのは、皇統の直系の祖ではないことの証明でもある。

・神功皇后は卑弥呼に比せられているが、記紀で卑弥呼を誇らしげに祖として語っていない。卑弥呼とトヨの存在は、古代史に不可欠の事柄だったが、それを得意げに正史に明記できなかつたのは、8世紀以後の支配層が卑弥呼とトヨに直接繋がる一族ではなかつたためであろう。

*卑弥呼とトヨは直系の祖ではないが、絶対に無視できない存在なので、神功皇后に比せることにより、皇統の祖として祀っているのである。

(2) 年代操作のキャラクリ

日本に於いて最も重要なのは、神宮に於ける神祭りである。神話上は垂仁 26 年 (BC4 年) に伊勢国渡会宮に遷されている。外宮は女神・天照大神のお告げにより、吉佐宮から直接、雄略 22 年 (AD478 年) に伊勢に遷された。しかし、約 480 年間離れ離れだったのに、食事がままならないから、とって、急に豊受大神を呼び寄せたことはおかしいことである。よって、本来の遷宮は豊受大神の遷座の時、国家の総氏神たる内宮の創始を古くするために、内宮遷座の時代が繰り上げられたと考えられる。

また、外国の史書にも載っている倭の女王、卑弥呼とトヨが正史たる記紀に掲載されていないのはおかしい。わずかに日本書紀の神功皇后紀のところに、注釈として簡単に、卑弥呼かもしれない、と触れているだけである。これは、神功皇后とは卑弥呼の象徴であり、神功皇后が 3 世紀に存在したと思わせた、すなわち、紀年の引き伸ばしに一役買ったのである。そして、暗に卑弥呼がれっきとした皇統の祖 (ただし直系ではない) であることを示している。卑弥呼とトヨは神宮で祀られているから、神宮創祀の実年代は、魏志倭人伝等の記述を参考に割り出す必要がある。

日本書紀の神功皇后紀には、次のようにある。いずれも、魏志にいわく、として、魏志を引用している。

- ・神功摂政 39 年 (AD239 年)、倭の女王、朝貢す。
- ・同 40 年 (AD240 年)、詔書印綬を奉りて、倭国に詣らしむ。
- ・同 43 年 (AD243 年)、倭王、また使い等 8 人を遣わして上献す。

日本書紀の紀年は、辛酉 (しんゆう) の年を基にしている。これは西暦を 60 で割って 1 余る年のことだが、この年は天命が改まり、王朝が交代する革命の年とされ、政治的変革が起こるのを防ぐ目的で、日本の平安時代には三善清行の提唱で、AD901 年の辛酉の年を“延喜”と改元したことから始まった。そこに干支を組み合わせ、60 年を 1 元、21 元＝1260 年を 1 部 (ぼう) とし、大革命が

起こるといふ讖緯（しんい）思想（支那の予言）を取り入れた。推古天皇 9 年（AD601 年）がその年に当たり、この年の 1260 年前である BC660 年に神武天皇が即位したこととされた。このようにして、紀年は意図的に引き延ばされた。そのため、正しい年代の割り出しには、日本書紀を外国の書と照らし合わせなければならない。以下、年代の出ている日本書紀の記述である。

①AD247 年、百済の王、久氏、彌州流・莫古を遣わして、朝貢らしむ。
百済本紀では AD367 年である。

②AD255 年、百済の近肖古王、薨せぬ。
三国史記では AD375 年である。

③AD256 年、百済の王子、貴須、立ちて王となる。
実際は AD376 年である。

④AD264 年、百済国の貴須王薨りぬ。王子、枕流王、立ちて王となる。
三国史記では AD384 年である。

⑤AD265 年、百済の枕流王薨りぬ。
三国史記では AD385 年である。

いずれも、日本書紀では 120 年遡らせていることが解る。だからと言って、すべて 120 年遡らせているわけではない。

最も肝心の神功摂政紀について見てみる。神功摂政紀は神功摂政元年から始まり、69 年までとなっている。魏志倭人伝の紀年を参考にする、すなわち、神功摂政 39 年を AD239 年とすると、神功摂政元年は AD201 年となる。また、支那の史書を参考にすると、神功摂政 65 年は AD385 年だから、神功摂政 69 年は AD389 年となる。よって、神功摂政紀は AD201 年から 389 年までの 189 年間というあり得ない長期間となってしまふ。

また、天皇一代一代の暦になっているので、1 元 60 年という観念で、干支を同じにして操作する方法が採用されている。つまり、遡らせるのは 1 元 60 年の倍数となってくる。“60” という数字の大元はシュメールでの基本数であり、大神アヌの王位継承数字であり、支那独自のものではない。

このように、日本書紀の編纂者は神功皇后を卑弥呼に仕立て上げたかったが、年代的にそのようにはできず、それとなく卑弥呼ではないか、というような記述に留めたのである。

ここで、注目度は卑弥呼が大きいのが、実はトヨの方が存在年代がはっきりしているの、以下、トヨで考察する。

- ・卑弥呼が死んだのが AD248 年である。
- ・その後、男王が立ったが治まらず、卑弥呼の宗女で 13 歳のトヨが女王となつ

て国は治まった。

男王の統治が1年前後、つまり、トヨがAD249年に女王になったとする。(トヨがAD236年に誕生したと見なす。)

★魏志倭人伝等

- ・AD237年丁巳：(トヨ1歳)
- ・AD239年己未：卑弥呼、親魏倭王の金印を授かる。(トヨ3歳)
- ・AD247年丁卯：卑弥呼が狗奴国の卑弥弓呼と交戦。(トヨ11歳)
- ・AD248年戊辰：卑弥呼死ぬ。(トヨ12歳)
- ・AD249年己巳：トヨが13歳で女王となる。
- ・AD266年丙戌：倭の女王、西晋に遣い貢ぐ。(トヨ30歳)
- ・AD297年丁巳：(トヨ61歳)

★日本書紀

- ・垂仁25年(BC5年)戊午：天照大神を倭姫命につけ、伊勢に至る。
- ・垂仁26年(BC4年)丁巳：伊勢の渡会宮に遷りたもう。

★倭姫命世紀、太神宮諸雑事紀

- ・雄略22年(AD477年)丁巳：天照大神が丹波の豊受大神を呼び寄せるようにお告げ。

ここで注目すべきは、いずれも丁巳の年に遷宮や豊受大神御遷座のお告げが成されていることである。特にAD297年は、トヨが還暦を迎えた年でもある。還暦とは、60年を一巡りとする考えで、60年を1つの年の単位とする1元と同じである。そして、AD297年丁巳から5元=300年遡らせると垂仁26年丁巳の年となり、内宮御鎮座の年となるわけである。“60”はシュメールの基本数であり、大神アヌの象徴でもある。そして、“5”は知恵の象徴だから、まさしくシュメールの真相を知る知恵が無ければ、このような謎を解くことはできない。さもなくば、何故“60”なのか、何故“5”なのか、という疑問について答えることはできない。このような、神武即位をBC660年に遡らせることに合わせて、トヨが祭祀を司っていた時代も繰り上げられたのである。そして、トヨが神祭りする姿は倭姫命に投影された。また、神武即位がこの年代ならば、北イスラエル王国が崩壊したBC722年よりも後になっており、ヘブライ人渡来年代と矛盾しない。

では、実際に神宮が建立されたのはいつなのか。基準としたトヨ61歳のAD297年丁巳では古すぎる。ならば、本来の祖神である豊受大神と、秦氏が創り上げた女神の天照大神を同時に祀ることにより、新たな国家の神祭りが始まったと考えるのが妥当であり、秘伝とされる倭姫命世紀に記載されている外宮遷宮の宣託があった雄略21年丁巳の年(AD477年)に、外宮と同時に内宮も祀られたと考えるべきである。これは原伊勢神宮と言うべきものであり、3宮ずつ並び立

っていたことは<日本の真相>で記した。その後、天武・持統天皇の時代になって、現在の姿に造り変えられたのである。

つまり、新たな皇統と正史を創り上げた秦氏により、正史に矛盾しないように、日神の女神で邪馬台国の女王の卑弥呼を象徴する女神の天照大神の祭祀は、実際の神宮鎮座のAD477年から8元=480年遡らせたBC4年の丁巳の年とされたのである。ただし、神祭りは特定の血統の女性に限られるという必然に従い、卑弥呼とトヨの姿を投影した“倭姫命”という人物を創作した。とりわけ、祭祀基盤を確立したトヨの姿を。

このように、卑弥呼とトヨが古代日本に於いて女王かつ巫女として実在し、トヨが最高神（天照国照尊、豊受大神）と日神としての祖先・卑弥呼を祀った3世紀の歴史的事実をベースとし、神宮創祀の逸話も創られたのである。実際の神宮創祀は雄略21年丁巳の年（AD477年）と思われるが、神話では、それよりも8元=480年遡らせたBC4年の丁巳の年とされたのである。

“8”はイエスを象徴する数字でもあるが、元はイナンナを象徴する数字であり、大神アヌに愛されていたイナンナという話を象徴している。海部宮司がイナンナを重視されている理由が、ここにも見出せる。

日本書紀に於ける操作年代は、百済王などの記述については120年、神宮創祀については480年など、60年を1単位とすることは基準になっているものの、それ以外に規則性は見られない。そのため、各場面に於いて、適切な年代を推定しなければならず、これも古代史に於ける年代不一致という大混乱をもたらしている大きな要因である。

(3) 古代史真相まとめ

① 本来の皇統と年代

ここまで、本来の皇統考察と古代史に於ける年代操作を考察してきたが、特に人物については“本来の”多次元同時存在の法則の解釈もあり、混乱を引き起こしている可能性もある。そのため、本来の皇統と年代を一覧表にまとめる。赤字は重要人物、青字は正史と本来の皇統での同一名であり、緑字の神武と天村雲命は神武を天村雲命に比定していることを表す。また、ピンク字の応神元年は正史と実年代で120年の差があることを示す。実年代は約100年単位で区切っており、およそ3代の人物が該当する。これは厳密な区切りではなく、前後の人物が重なってくることは言うまでも無い。また、正史の年代は創作であり、およそ実年代のその時期に相当する、と見なすべきである。

なお、ここでの実年代は基本的に伴とし子氏の「ヤマト政権誕生と大丹波王国」に従ったが、疑問がある部分は一部、修整してある。

正史に於ける皇統			本来の皇統=海部氏系譜				
代数	直系	年代(誕生-崩御)	実年代	代数	直系	兄弟姉妹	傍系
-	瓊瓊杵尊	-	-	-	-	-	-
-	火遠理命 (日子穗穗手 見命 山幸彦)	-	BC300年以 前?	祖神	天照国照尊 (豊受大神 天之御中主神 国常立神 彦火火出見 彦火明命=天火明命 大物主神 天照大神 スサノオ 一言主大神 建甕槌大神) 天香路山命 (武位起命)	-	-
-	波限建甕槌 誓不合命	-	BC200年 代?	1世孫	建甕槌命 可美真手命	-	-
初代	神武	BC711- BC585	BC200年 代?	2世孫	天村雲命 (天五十桶 天五十多麻命) 倭宿禰命 (天御降命 珍彦=宇豆彦 權根津彦)	熊野高倉下	-
第2代	綏靖	BC632- BC549	BC100年代?	3世孫	-	葛城山石姫命	天忍人命 天忍男命 忍日女命
第3代	安寧	BC577- BC511	紀元元年~ 100年	4世孫	笠水彦命 (字介水彦命)	-	天壹目命 (天忍人命の子) 建甕赤命 (天忍男命の子)
第4代	懿德	BC553- BC477	紀元元年~ 100年	5世孫	笠津彦命 (字介津彦命)	-	建甕赤命 (天壹目命の子) 建甕草命 (建甕赤命の子)
第5代	孝昭	BC506- BC393	紀元元年~ 100年	6世孫	建田勢命 (建田背命 清日子 玉手見命)	宇那比姫命? (天造日女命 大倭姫 竹野姫 大海靈姫命 日女命)	建田小利命 (建甕赤命の子) 葛木高田姫命 (建甕赤命の子)
第6代	孝安	BC427- BC291	100~200年	7世孫	建甕間命 (建日瀨命)	大海姫命 (豊玉武尊) 大倭久邇阿禮姫命)	-
第7代	孝靈 (大倭根子 彦太瓊尊)	BC342- BC215	100~200年	8世孫	倭得魂命	大倭姫命 (倭速速日女千々姫 天壹姫命)	-
第8代	孝元 (大倭根子 日子国玖琉命)	BC273- BC158	240年 身歿時没	9世孫	意富那比命 (大海宿禰命 意字那比命 彦国玖琉命 武内宿禰)	葛木高千名姫命 (速真若姫命 屋乎止女 八坂振天伊呂逸命) 乙彦命 口女命=卑弥呼 (倭速速日百襲姫 日神) 玉勝山背根子命 若津保命 速津世襲命 (日本武尊)	-
第9代	開化	BC158- BC98		10世孫	乎織命	大倭姫命 (倭速速姫命 豊鎌入姫命 八坂振天基津命)	安波根別命 (乙彦命の子) 大原足尼 (速津世襲命の子?)
第10代	崇神 (御間城入彦 五十瓊瓊 御肇命)	BC148- BC30	237年~ 297年	11世孫	小壹與命 (御間木入彦命)	日女命=トヨ (稚日女命) 小壹姫命 豊受姫命 豊秋津姫命 宮寶姫命 日神荒魂命 玉依姫命)	-
第11代	垂仁	BC69-AD70	237年~ 297年	12世孫	建甕稚命 (彦太毘毘命)	(宮寶姫命)	-
第12代	景行 (大足彦忍代 別)	BC13- AD130	237年~ 297年	13世孫	志理都彦命 (彦坐王 大足彦命)	尻網根命 (志理都名根命) 尾根志里都岐刀邊命 高尾根氏	-
第13代			300年~ 413年	14世孫	川上真稚命 (川上麻須命 道主命 彦田田須命 大難波宿禰) AD315:丹波へ移動	竹野姫命 (川上麻須郎女 大倭姫)	知加麻彦 (尻網根命の子)
第14代	成務 仲表	AD84- AD190 (成務) AD?- AD200 (仲表)	300年~ 413年	15世孫	丹波大矢田彦命 (朝廷別王)	川上出石別命 川上日女命 (日粟許姫 竹野日女命 大中日女 八小止女 大海姫)	古利命 (知加麻彦の子)
			300年~ 413年	16世孫	丹波国造大宮岐命 (大桶縫命) AD353:大船運治	-	尾根志理都岐根命 (大宮岐命の弟) 尾根へ移動
第15代	応神 (実質の素戔 初代天皇)	AD200- AD310	413年~ 428年	17世孫	丹波国造明国彦命	-	尾根連弟彦、他 (尾根志理都岐根命の 子 or 弟) 尾根氏
			428年~ 451年	18世孫	丹波国造建甕熊宿禰 海部氏へ降格 玉穂移譲	-	尾根金連、他 (尾根連弟彦の子)

神武天皇を天村雲命に比定することにより、重要な意富那比命（彦国玖琉命）が孝元天皇（大倭根子日子国玖琉命）に、小登與命（御間木入彦命）が崇神天皇（御間城入彦五十瓊殖）に、志理都彦命（大足彦命）が景行天皇（大足彦忍代別）に諡号で一致している。更に、“ヒコホホデミ”という神名も正史と本来の皇統で一致している。このような諡号の一致は、その天皇もしくは命の時代に、ヤマトの歴史に於いて極めて重要なことが起きたことを暗示していると考えられる。

最初にヤマトの基盤を固めた倭得魂命には孝霊天皇が該当し、孝霊天皇の諡号が大日本根子彦太瓊尊で、“大いなるヤマトの基盤を整えた日子、大王”という意味で一致している。その孝霊天皇の娘が倭迹迹日百襲姫だが、倭迹迹日百襲姫＝卑弥呼の時代に邪馬台国が初めて統一され、それが次の孝元天皇の諡号にも“大倭根子日子”を入れることによって暗示されている。そして、倭迹迹日百襲姫は倭得魂命の次の世代となっており、矛盾しない。その孝元天皇の正体は、同じ諡号“彦国玖琉命”を有する卑弥呼＝日女命の兄、意富那比命＝武内宿禰に他ならない。

小登與命とトヨの時代によろやく古代ヤマトが統一されたわけだが、該当する正史の天皇は崇神天皇となり、諡号が“御肇国（ハツクニシラス）＝初めて国を統一した”で相応しい。そして、別の諡号は御間城入彦五十瓊殖で、小登與命の御間木入彦命と一致して矛盾しない。

また、もう 1 人、諡号が一致しているのは景行天皇と志理都彦命で、この時代に海部氏から（高）尾張氏が分家した。その尾張の基礎を造ったとされるのは正史では日本武尊であり、日本武尊は景行天皇の子とされているから、時代的にも矛盾しない。

以上のことから、ここに記した本来の皇統と正史の比較は正しいと判断できる。これ以前の詳細な考察が理解できなくとも、この比較表はここまでの内容をまとめたものなので、この比較表を理解できれば良いだろう。

②息津鏡・辺津鏡と天之日矛

息津鏡・辺津鏡は、6 世孫・建田勢命が二璽神宝とした天御蔭之鏡のことである。この表に従えば、建田勢命は紀元元年～100 年に相当するが、学術的に辺津鏡は前漢時代（BC206－AD8）、息津鏡は後漢時代（AD25－220）のものということが判明しており、年代的に矛盾しない。

続く 7 世孫・建諸隅命も重要である。亦名が建日瀉命で“日”を冠し、日本書紀では、出雲大神の宮に納められている神宝を、飯入根、甘美韓日狭、鷗濡滄が崇神天皇の使いの武諸隅命に渡してしまった、とある。4：(1)で記したように、この話は丹波王国に於ける逸話であり、この神宝を息津鏡・辺津鏡と推察した。ここに、武諸隅命＝建諸隅命が登場し、神宝を崇神天皇の下に持って行ったとされる。しかし、崇神天皇は小登與命に他ならず、建諸隅命と小登與命が同時期に存在することになり、矛盾する。よって、神宝を得たのは建諸隅命、と判断するのは早計である。

建諸隅命の亦名は建日瀉命だが、日瀉＝日像で、“日神を像る”と解釈できる。すなわち、日神の象徴あるいは依り代が決められたのがこの命の時代と見なせる。

つまり、こういうことである。6世孫・建田勢命の時代に2枚の大きさの異なる鏡を得た。この時点では、まだ鏡は日神の象徴・依り代ではなかった。次の7世孫・建諸隅命の時代に、2枚の鏡が「合わせ鏡」の関係になること、「合わせ鏡」の中の像は無限に続くような錯覚を引き起こし、海部氏が大元である“不老不死、永遠”を象徴することができること、“不老不死”の大元はイナンナだが、双子の兄の太陽神ウツは言わばイナンナと「合わせ鏡」の関係にあることから、この2枚の鏡が日神の象徴とされたのだろう。そして、“不老不死、永遠”を求めた始皇帝と徐福の姓は“嬴”であり、海部氏と友好を結んだ彼らの姓に因んで“瀛”の字を当てて“瀛津＝息津”とし、読みでは“おきつ”で“(支那の)沖の果ての船着場”という意味で、“瀛”は“うみ”とも読むから、“沖＝海原”という意味を当てるのは妥当である。もう1枚は“(イスラエルから見て)果ての船着場”という意味で“辺津”としたのだろう。

これが、飯入根の逸話に於いて“神宝を渡した”ということで象徴されている。つまり、実際に神宝＝息津鏡・辺津鏡を渡したのではない。息津鏡・辺津鏡は海部氏が代々手渡しで継承してきた御神宝故、一時的にでも、秦氏に渡しているはずはないからである。

ところで、息津鏡・辺津鏡は天之日矛が持って来たと言われるが、天之日矛は系図の中の誰に相当するのだろうか。正史では、天之日矛が渡来したのは垂仁天皇3年だが、垂仁天皇の生没年はBC69年～AD70年で、垂仁天皇3年はBC27年となり、辺津鏡は存在しても、息津鏡は存在し得ない。よって、息津鏡・辺津鏡は天之日矛が持って来たという正史の記述は作為であり、これが何かを暗示しているとしたら、実年代としてのBC30年頃に天之日矛に該当する人物が渡来した、ということだろう。また、6世孫・建田勢命の項で記したように、建田勢命の亦名が清日子で、古事記では天之日矛の子孫とされ、日本書紀では曾孫の清彦とされている。つまり、建田勢命以前の人物で、表中では天村雲命もしくは倭宿祢命の時代に相当する。天之日矛に該当する人物がその時代に渡来しただけであって、息津鏡・辺津鏡を持って来たわけではないのである。

天之日矛は新羅の王子とされ、その子孫に田道間守がいた。その田道間守は不老不死の妙薬を求めたが、実際に不老不死の妙薬を求めたのは徐福であり、田道間守には徐福が投影されている。故に、田道間守の祖先とされている天之日矛も徐福と関連があると思われるので、天之日矛に該当する人物については後で詳しく考察する。

(4) 倭の五王とアメタリシヒコ

① 倭の五王

本来の皇統と年代が解ったので、それに近い年代の、謎とされる倭の五王について考察する。宋書の倭国伝には、朝貢した倭の五王が記されている。それ

は讚、珍、濟、興、武である。五王が朝貢した年代は明らかなので、どの天皇に該当するのを見てみる。正史に於ける各天皇の生没年と即位年から算出した場合と、推定実年代から算出した場合の2通りである。推定実年代は更に2通りあり、1つは、応神天皇の即位年が120年ずらされていることから、各天皇の即位年を単純に120年ずらした場合（実年代+120）、もう1つは、応神天皇の即位年だけを120年ずらし、それを基準にして各天皇の代は3：(1)で記したように平均15年と見なした場合（実年代+15、正確には14.3年）である。ここではもう1つ付け加え、各天皇の代を更に短く平均10年と見なした場合である。

正史と朝貢年の比較

天皇		生没年(AD)	即位年(AD)	朝貢年(AD)	倭王	該当天皇
第15代	応神	200-310	270	421	讚	允恭
第16代	仁徳	257-399	313	438	珍	允恭
第17代	履中	?-405	400	443	濟	允恭
第18代	反正	?-410	406	462	興	雄略
第19代	允恭	?-453	412	478	武	雄略
第20代	安康	401-456	453			
第21代	雄略	418-479	456			
第22代	清寧	444-484	480			
第23代	顕宗	450-487	485			

推定実年代と朝貢年の比較(1)

天皇		実年代 +120(AD)	実年代 +15(AD)	朝貢年(AD)	倭王	該当天皇
第15代	応神	390	390	421	讚	履仲
第16代	仁徳	433	405	438	珍	反正
第17代	履中	520	420	443	濟	反正
第18代	反正	526	435	462	興	允恭
第19代	允恭	532	450	478	武	安康
第20代	安康	573	465			
第21代	雄略	576	480			
第22代	清寧	600	495			
第23代	顕宗	605	600			

推定実年代と朝貢年の比較(2)

天皇		実年代 +120(AD)	実年代 +10(AD)	朝貢年(AD)	倭王	該当天皇
第15代	応神	390	390	421	讚	反正
第16代	仁徳	433	400	438	珍	允恭
第17代	履中	520	410	443	濟	安康
第18代	反正	526	420	462	興	清寧
第19代	允恭	532	430	478	武	顕宗
第20代	安康	573	440			
第21代	雄略	576	450			
第22代	清寧	600	460			
第23代	顕宗	605	470			

正史との比較では允恭と雄略のみになってしまう。つまり、正史は元々が創

作だから、宋書の倭国伝まで考慮して年代創作が成されなかった、ということである。すなわち、AD478年に朝貢できるのは、それ以前に即位した雄略天皇に該当するが、五王の朝貢年からすればAD421年から478年に掛けて朝貢できた倭王は允恭と雄略の2人だけになってしまい、正史の天皇系図は作為ということであり、少なくとも雄略天皇の代までは実在しなかったと言える。

対して推定実年代では、即位年を単純に120年ずらした場合は478年の朝貢でも仁徳になってしまうので、ここでは応神天皇の即位年だけを120年ずらし、それを基準にして各天皇の代は15年と見なした場合で見ると、それでも履仲、反正、允恭、安康の4人である。10年と見なせば、ようやく反正、允恭、安康、清寧、顕宗の5人となるが、実際にこの5人が該当するならば、最初からそのように正史の系図年代（生没年、即位年）を創作しておけば良いはずである。そうしていないのは、やはり、真相が記された宋書まで考慮されなかった、ということである。

また、宋書では讚の弟が珍、済の子が興と武とされ、珍と済の関係は記されていないが、正史に於いて、そのような血縁となっている天皇は仁徳～雄略あたりが該当するものの、このように年代的に辻褄が合わない。よって、正史に於ける天皇名では、対応する五王は存在しないと言える。では、どのように考えたら良いのか。

応神天皇の時代に秦氏が海部氏から王権を奪ったと言えども、応神が新たな倭王として朝貢していなければ、大陸は未だに丹波王国の王を倭王と見なすことは当然である。また、即座に応神系に変わったのではなく、海部氏の中にはなおも抵抗していた者もあろうから、応神系と海部氏系の両統が並立していたのだろう。それは、天智・天武に至る時代まで、鎌足―不比等の秦氏系大王と、海部氏系の大王の継承争いがあったことから裏付けられる。また、4：で記したように、隋書には“倭国の王は阿每（アマ）＝阿每多利思比弧（アメタリシヒコ）”とあり、海部氏が倭国の王だったことが、当時の外国文献によって明らかにされているが、宋書は支那南朝の宋について書かれた歴史書で、隋はその後の王朝である。つまり、かなり時代が経過してからでも、倭国の王は丹波王国の海部氏だ、と大陸では認識されていたのである。

伴氏の推定年代が正しいとしたら、応神元年（即位年）がAD390年（推定没年はAD430年）でも、それは16世孫の時代であり、故に、16世孫以降は“丹波国造”を名乗らされたことは辻褄が合う。仮に応神が朝貢したとした場合、即位年がAD390で没年が430年だから、讚に相当するAD421年は即位から30年以上経過しており、応神よりもその子の方が適切である。しかし、応神が即位したとは言え、18世孫まで王権は海部氏にあった。だから、AD421年朝貢の讚は17世孫、AD438年朝貢の珍は18世孫に相当すると見なした方が年代的にも合っており、共に即位から約10年後の朝貢ということにもなり、妥当である。

その後の済、興、武もやはり海部氏系だったと見なすことは可能である。しかし、AD438年の珍の朝貢に続くAD443年の済の朝貢は、まだ18世孫（珍）の

在位期間である。また、宋書の記述に依れば、讚の弟が珍、済の子が興と武とされ、珍と済の関係は記されていない。ならば、讚－珍の系統と済－興－武の系統は別系統と見なした方が良いだろう。(なお、讚の弟が珍という記述が正しいければ、18世孫は17世孫の子ではなく弟だったということになる。)

そうすると、済－興－武の系統は応神系である。応神は海部氏に婿入りし、王権の移譲はヤマトではなく、若狭の木津高向宮で行われたから、応神系も丹波王国(丹後)にいたと考えられる。応神は即位した年(AD390年)には后がいたはずだから、その2年後(AD392年)に長子が誕生したとする。済の朝貢年はAD443年だから、その長子は51歳でかなり遅い。よって、済は更にその子、応神の孫と見なせば年齢的に妥当である。(応神の長子が20歳で即位して、その2年後に長子が誕生したとすると、誕生年はAD414年となる。その後、20歳で即位したとすれば即位年はAD434年、朝貢はその9年後ということになり、17世孫と18世孫の、即位から約10年後の朝貢とほぼ一致して妥当である。)

武の朝貢はAD478年だが、これに近い年代に即位したとされるのが、第26代・継体天皇(AD450～531年、即位507年)である。武烈天皇崩御後の皇統危機に際し、越の国から応神天皇の5世孫とされる継体天皇が担ぎ出されたが、真相は海部氏の王の血統だった。記紀の年代操作や人物改竄はどの時代まで行われているのかは不明だが、明らかになっている第33代・推古天皇(AD554～628年、即位592年)の年代からすれば、継体天皇の年代には120年などという大きな操作は成されていないはずである。そして、わざわざ海部氏を暗示させる継体天皇を皇統にしているということは、正史に於いても、継体天皇を無視して外すことができないからである。

ここで、朝貢年が平均15年ということからすれば、即位も約15年毎に行われたと見なし、朝貢は即位から約10年後に行われたと見なす。即位が約15年毎ということは、直系で見ると15歳で子をもうけていなければならないが、実際には兄弟間や海部氏系と応神系の間での継承が行われているので、このような短い期間でも問題無い。武の朝貢年から即位年をAD468年とすると、次の代の即位年はAD483年、その次の代の即位年はAD498年、その次の代の即位年はAD513年となる。系図の年代操作は年代を遡らせているから、継体天皇にも年代操作が成されているとすれば、即位年はAD507年よりも前となるから、武の次の代のAD483年と、その次の代のAD498年が該当する。そして、仮に朝貢したとすれば、武の次の代の朝貢年はAD493年、その次の代はAD508年となる。どうやら、継体天皇の即位年AD507年というのは、このような実際の即位年と朝貢年から割り出して推定した年代を当てはめて創作されたように考えられる。すなわち、武の2世代後に相当する大王が継体天皇であり、推定朝貢予定年付近を即位年とした、ということである。武の推定即位年AD468年からすれば、継体の即位年(AD507)までの間は40年弱、即位年の操作が成されているとしても30年程度(継体推定即位年AD498より計算)の間があり、やはり間が1代よりも2代と考える方が妥当だろう。

つまり、応神即位年から見ると、応神の次の代に相当するのは17世孫＝讚で、

次いで18世孫＝珍である。（しかし、正史の時代としては応神朝である。）その後、応神系に移動して済一興一武となり、武の2代後が継体となった。これを、正史に合わせてすべて応神系と見なせば、世代的に武は応神天皇の5世孫、継体天皇は7世孫となるわけであり、応神天皇を正史に合わせて第15代とすれば、継体天皇は第22代となる。よって、正史に於ける第16代・仁徳天皇～第25代・武烈天皇も秦氏による創作である。

なお、第21代・雄略天皇の諡号は大泊瀬幼武尊（オオハツセワカタケルノミコト）であり、江田船山古墳（熊本県）や稲荷山古墳（埼玉県）から出土した武の時代の鉄剣に「獲加多支鹵大王（ワカタケル大王）」と刻まれていたことから、雄略天皇を武と見なすのが定説である。しかし、これも実在のワカタケル大王を基にして雄略天皇を創り上げ、諡号をワカタケルとしたならば、矛盾は無い。

正史では応神天皇から見て傍系とされるのが5代なのに対して、直系が10代もあること、また、明らかな皇統の祖と思わせるような応神天皇の後の世代でも、誕生年が不明となっているなどおかしなことであり、これが謎を解く鍵となっている。また、皇統＝体（たい）は継いでいくものだから、わざわざ“継体”と名付ける必要は無いが、敢えてそうしているのは、秦氏が創作したそれまでの皇統（初代・神武～第25代・武烈）とは異なるからである。そして、継体天皇は皇位に就く前に、尾張氏の女（目子郎女）を妻とし、継体天皇の子、第27代・安閑天皇の諡号は勾大兄皇子（マガリオオエノミコ）であり、勾は当然、勾玉を意味する。玉造りは古代・丹波王国で盛んで、古代の皇統は海部氏・尾張氏だから、子の安閑天皇の諡号に“勾”を含ませることにより、父の継体天皇の出自を暗示しているのである。

②アメタリシヒコ

では、隋書に登場する“アメタリシヒコ”を諡号に持つ王族は誰なのか。4：でも記した天足彦国押人命（生没年不詳）が名称的にそれに該当するが、正史では第5代・孝昭天皇の第一皇子とされ、かなり年代を遡らせている。だから、“生没年不詳”とされているのであろう。隋はAD581年に建国されて618年まで続いたが、隋書の記述は次のようになっている。

（<http://members3.jcom.home.ne.jp/sadabe/kanbun/wakoku-kanbun9-zuisho.htm> 参照。）

“開皇二十年、倭王姓阿每、字多利思比孤、號阿輩雞彌、遣使詣闕。”

“開皇20年（AD600年）、倭王、姓は阿每（アメ、アマ）、字は多利思比孤（タリシヒコ）、号は阿輩雞彌（アハキミ、オオキミ）、遣使を王宮に詣でさせる。”

つまり、倭王アメタリシヒコとはAD600年の時点での倭王である。この時に即位していたのは、正史に於いては第33代・推古天皇（AD554～628年、即位592年）である。推古天皇は継体天皇の孫の世代に相当するので、継体天皇から代数的に7代後でも、年数的にはそれほど離れているわけではない。（括弧内は

即位年。)

- ・第26代・継体 (AD507年)。
- ・継体の子：第27代・安閑 (AD531年)、第28代・宣化 (AD535年)、第29代・欽明 (AD539年)。
- ・欽明の子：第30代・敏達 (AD572年)、第31代・用明 (AD585年)、第32代・崇峻 (AD587年)、第33代・推古 (AD592年)。

ところが、アメタリシヒコは“ヒコ=彦=日子”を冠するので男王であり、推古はトヨ以後、初の女帝だから矛盾する。しかし、3：(2)で記したように、邪馬台国の卑弥呼やトヨがそうであったように、倭王としての属性は見えない聖王であり、外国使者に対しては接見しないのが普通だった。故に、推古天皇の外交儀礼などもこのような位置付けであり、資料に接見したことが記載されていなくとも、それは当時の常識で、その人物が存在していなかったことにはならない。だから、アメタリシヒコは推古天皇以外の男性高官である。

それに相当する重要人物として真っ先に思い浮かぶのは、何と云っても聖徳太子である。太子は推古の甥で (父は推古の兄の用明天皇、母は推古の兄、欽明天皇の皇女・穴穂部間人皇女で推古の異母妹)、推古の摂政となって実際の政治を司っていた。しかし、<日本の真相4>で記したように、聖徳太子は秦氏による創作人物と考えられる。聖徳太子という架空の偶像を登場させることによって、当時の改革派である蘇我氏の功績を、一旦秦氏側の聖者である聖徳太子に預け、その上で蘇我氏=大悪人という図式を画策した。しかし、実際には聖徳太子 (とその末裔) は存在しないので、歴史上の辻褄を合わせるためには、斑鳩の地で全員が消えて無くならなければならなかったのであり、蘇我氏を貶めるための秦氏による陰謀的創作である。

ならば、他に相当する人物としては、聖徳太子の名、厩戸皇子が暗示する蘇我馬子である。馬子の名前は象徴的で、“我、馬屋の子として蘇る”である。馬子は敏達天皇の時代に大臣に就き、用明、崇峻、推古の4代に仕えた。そして、推古の母は蘇我稲目の娘で馬子の姉の堅塩媛で、推古天皇と馬子は極めて密接な関係にあり、ある意味、馬子ほど重要な人物は他にいない。また、聖徳太子の妻とされた人物は、推古と敏達 (推古とは母違いの欽明の子) の子のウジノカイダコノヒメミコ、尾張皇子 (ウジノカイダコノヒメミコの兄) の子のイナベタチバナノヒメミコ、そして、馬子の娘のトジコノイラツメであり、尾張氏、蘇我氏との深い関わりを暗示している。特に“ウジ=太陽神ウツ”で、タチバナは田道間守が持ち帰った不老不死の妙薬とされており、海部氏と徐福系の葛城氏をも象徴している。

そして、蘇我氏と海部氏・尾張氏・葛城氏は深い関係にあった。蘇我氏は海部氏・尾張氏の別名あるいは同族、あるいは婚姻などの極めて血縁の深い一族と考えて良く、正史に登場する蘇我氏は海部氏・尾張氏の系譜を象徴しており、蘇我氏は海部氏と婚姻関係を続けていた徐福あるいは始皇帝縁者の末裔と考えられた。

よって、馬子は血統的にも“アメタリシヒコ＝天足彦”に相応しい人物である。外国から倭王と見なされたアメタリシヒコは、見えない聖王、推古天皇を補佐していた蘇我馬子であり、それは聖徳太子という架空の人物に重ねられた。だから、広隆寺にある聖徳太子像に、陛下が即位式に召された黄櫨染御袍が着せられるのは、海部氏・尾張氏が王族＝本来の皇統だったことを今でも認められていることの象徴だけではなく、外国からは当時の倭王と見なされていたからである。その実態は、蘇我馬子である。聖徳太子を補佐したとされる秦河勝も候補にはなるが、聖徳太子が架空であること、秦氏の表のトップであり、聖徳太子の補佐という最重要の要職に就いていたのにも関わらず生没年が不詳なことからすると、秦河勝も架空の可能性が高く、“アメタリシヒコ＝天足彦”としては相応しくない。

なお、推古天皇の“第 33 代”というのは、「生命の樹」に於ける隠されたセフィラ“ダアト”も含めたセフィロトとパスの数の合計数であり、そのように系図を創作したと思われる。応神天皇を正史に合わせて第 15 代とすれば、継体天皇は第 22 代となるから、継体天皇から推古天皇に至る代数も、推古天皇を第 33 代にするために創作されたと言え、正確な代数の推定は難しい。

6：女帝

前項では古代から推古天皇に至るまでの話になってしまったわけだが、卑弥呼、トヨ、推古天皇に続いて数代は女帝となったものの、以後、江戸時代まで女帝は登場しない。これは、女帝そのものが特殊な存在だったことを伺わせる。特に、“推古”は“古を推し量る”という意味で、卑弥呼とトヨが原型にあって、祭祀に深く関わっていることを暗示している。また、日本書紀も古事記も何故か女帝の時代までの編纂で、日本書紀は持統天皇まで、古事記は推古天皇までである。そこで、関裕二氏の「「女帝」誕生の謎（講談社）」「伊勢神宮の暗号（講談社）」を基に女帝について考察し、その後、神宮について考察する。

(1) 女帝とは

女帝（女性天皇、女系ではない）は男性天皇の中継ぎ、あるいはシャーマンとしての中皇命（ナカツスメラミコト）であり、神意を受け、お告げによって人間としての天皇（スメラミコト）が政（まつりごと）を行う、というのが一般的な考えである。以下が女性天皇である。（Wikipedia 参照。）

- ・ 第 33 代・推古天皇（第 29 代・欽明天皇の皇女、第 30 代・敏達天皇の皇后）
- ・ 第 35 代・皇極天皇（敏達天皇の男系の曾孫、第 34 代・舒明天皇の皇后）
- ・ 第 37 代・斉明天皇（皇極天皇の重祚）
- ・ 第 41 代・持統天皇（第 38 代・天智天皇の皇女、第 40 代・天武天皇の皇后）
- ・ 第 43 代・元明天皇（天智天皇の皇女、草壁皇子の妃）
- ・ 第 44 代・元正天皇（草壁皇子の娘、生涯独身）
- ・ 第 46 代・孝謙天皇（第 45 代・聖武天皇の皇女、生涯独身）

- ・第 48 代・称徳天皇（孝謙天皇の重祚）
- ・第 109 代・明正天皇（第 108 代・後水尾天皇の皇女、生涯独身）
- ・第 117 代・後桜町天皇（第 115 代・桜町天皇の皇女、生涯独身）

6 世紀から 7 世紀末に至る、即位を要請された 6 人の女性（ここには記載されていない女性も含めて持統天皇まで）はすべて先帝あるいは前帝の皇后だった。これは、万が一の場合、女帝として即位しても、元皇后として天皇の代わりをするという意味合いがあった。しかし、持統天皇の次に登場した元明天皇の代から前帝の皇后ではない者が即位し、場合によっては外戚の妃との間に生まれた女子も即位が可能となった。これは、外戚として権力を振るうようになった鎌足一不比等の策である。

もし、女帝が単なる中継ぎだとしたら、説明できないことがある。例えば、第 25 代・武列天皇には男子が無く、そのため、越から応神天皇の 5 世孫がヤマトに連れて来られ、第 26 代・継体天皇となった。（あくまでも正史に於いて。）この時、武列天皇の皇后（春日大娘、カスガノオオイラツメ）や娘が即位してもおかしくないが、そうしなかったのは、女帝が単なる中継ぎではないことを意味している。

上田正昭氏に依ると、既に 3 世紀の段階で、巫女王の系譜が特定の宗族に固定化されていたという。成清弘和（ナリキヨヒロカズ）氏に依ると、古代日本では、血縁の基本ラインが父系・母系に偏らず、男女の地位が対等に近かったという。大津透氏に依ると、奈良時代、天皇の正装は神祭りのための帛衣（はくい、白の練衣）と決まっていたが、平安時代になると、神事のみ用いられるようになった。しかし、女帝の正装は、平安時代でも帛衣だった。これは、女帝の本質が神への奉仕であり、男帝よりも祭祀との関わりが強かったことを意味する。つまり、男帝が祭祀だけではなく政治も司っていたのに対し、女帝は基本的に祭祀専念ということである。

沖縄では、女性の霊力によって兄弟が守護されているというオナリ信仰があり、かつて本土にも存在していた。特に、巫女的役割を果たしているのがノロとユタであり、その名残が青森のイタコであることは<日本の真相 3>で記した。このオナリ信仰は神話にも見られ、それは倭姫命と甥の日本武尊の関係である。日本武尊は神宮の倭姫命から草薙神剣を頂き、焼津などでも身を護られるが、伊吹山へ行く時には熱田の宮簀姫の下に置いて行ったので、神の毒気に当てられ、能褒野で死んでしまった。このような女性の力を“妹（いも）の力”と言う。これが神話の中に、しかも三種の神器に関わる話として登場している以上、極めて重要な事項である。

また、仏教導入時にも最初に得度したのは女性（尼）だった。これは、当時の考え方として、女性には高い霊能力が具わっており、神を祀るのは女性の仕事である、という認識だったのだろう。

関氏は、天照大神は元々男神だったが、持統天皇が女神にすり替えてしまった可能性が高い、と言うが、天照大神の亦名、大日靈貴神が“大いなる日神が

降臨する巫女”という意味であって、“日神である女神”ではない、ということとは<日本の真相 4>で記した通りであり、元は天照国照尊で、日神とされる卑弥呼と共に祀られ、天照大神とされたことはこの資料で詳しく述べてきた通りである。関氏が言うことは、秦氏が創り上げた神話に於いてである。以下、重要な女帝について考察する。

(2) 推古天皇

正史上の初の女帝は推古天皇である。推古天皇の和風諡号は豊御食炊屋姫尊（トヨミケカシキヤヒメノミコト）で、豊受大神とトヨの“豊”と神の食事“御食”に関わることを暗示するが、それ以前に類似した名前があった。それは、ニギハヤヒが結婚した長髓彦の妹、三炊屋媛である。5: (1)で記したように、“炊屋”という名称は御撰に関わるから、豊受大神を象徴する。そして、祭祀を司る役目は、卑弥呼やトヨといった、特定血統の女性にしか許されていなかった。ならば、冒頭にも述べたように、推古天皇という漢風諡号は“古を推し量る”という意味で、卑弥呼とトヨが原型にあって、祭祀に深く関わっていることを暗示しており、推古天皇は海部氏の血統で神祭りを行っただけではなく、女王としても君臨したのである。

推古天皇は蘇我派とされているが、これまでに見てきたように、蘇我氏は海部氏・尾張氏の別名あるいは同族、あるいは婚姻などの極めて血縁の深い一族と考えると良く、“正史”に登場する蘇我氏は海部氏・尾張氏の系譜を象徴している。蘇我氏は糸魚川周辺で採れるヒスイに固執したが、これは最高の“玉”であり、最高の王権の象徴だから、蘇我氏は海部氏・尾張氏の系譜の象徴と言える。特に、6世紀末から7世紀にかけての蘇我氏全盛時代には、“豊”を冠する名称で溢れている。推古天皇の兄の用明天皇は橘豊日天皇（タチバナノトヨヒノスメラミコト）、用明天皇の子の聖徳太子は豊聡耳（トヨトミミ）、蘇我蝦夷あるいは入鹿の別名は豊浦大臣（トユラノオオオミ）、推古天皇の宮は豊浦宮などである。他に、蘇我氏とは見かけ上血縁が薄い皇極天皇も天豊財重日足姫（アメトヨタカライカシヒタラシヒメ）、孝徳天皇も天万豊日天皇（アメノヨロズトヨヒノスメラミコト）といった具合である。

敏達天皇の時代、蘇我氏は仏教導入を進めたが、簡単にはいかなかった。敏達天皇が崩御すると、大物主神の末裔とされる三輪逆（ミワノサカウ）が隼人に命じて殯庭（もがりのにわ）を警備させていた。逆は敏達天皇の寵愛を受けていたのである。穴穂部皇子は敏達天皇とは腹違いの兄弟だったが、立場的に弱かった。そこで、穴穂部皇子は殯宮に忍び込み、敏達天皇の皇后だった炊屋姫皇后を犯そうとしたが逆に妨害されて失敗した。その上、逆の非を説き、物部守屋と共に挙兵し、守屋に逆親子を殺させた。だが、穴穂部皇子らの陰謀は発覚し、最終的に穴穂部皇子と物部守屋一族は滅ぼされた。その後、炊屋姫皇后と群臣（蘇我氏ら）が推挙する崇峻天皇が即位したが、宮は何故か飛鳥から離れた倉梯に置かれ、蘇我の脅威に対抗していたような様相である。その後、天皇と馬子らの反目により崇峻天皇は殺され、炊屋姫は即位して推古天皇とな

ったのである。(以上、正史上の話。)

推古天皇はこのような皇位継承の渦中にあり、常に当事者だった。そして、即位後に混乱は収まり、あたかも炊屋姫を手に入れることこそが本来の目的であり、それによって初めて皇位を得ることができる、というような暗黙の了解があったかのようなのである。女帝が混乱を収めるための単なる中継ぎに過ぎなければ、ここまでのことは起こらないはずである。

推古天皇の幼名は額田部皇女(ヌカタベノヒメミコ)だが、日本書紀では天照大神とスサノオの誓約の際に誕生した神々の中に天津彦根命(アマツヒコネノミコト)がおり、額田部連らの遠祖となっている。古事記では額田部湯坐連(ヌカタベノユエノムラジ)となっている。つまり、額田部とは朝廷に仕える職種の一つであり、湯坐とは皇族の御子の養育係のことで、言わば天皇家と同族的な氏族で格の高さを伺わせる。つまり、本来の皇統である海部氏・尾張氏を象徴していると言っても良い。

また、吉野裕子氏に依ると、“ヌカ”は“蛇”を表す語であるという。太祖・天照国照尊=大物主神は蛇神であり、これに矛盾しない。

よって、推古天皇の幼名、額田部皇女は天皇家と同族的な氏族であることを示唆し、“ヌカ”は“神蛇”を表す語ならば、そして、敏達天皇とは腹違いの兄弟の穴穂部皇子が殯宮に忍び込み、敏達天皇の皇后だった炊屋姫皇后=推古天皇を犯そうとしたことからすると、推古天皇はやはり海部氏・尾張氏系の巫女的存在であり、推古天皇を擁立する者こそが神威を授かることができると考えるべきである。つまり、推古天皇は“妹の力”そのものでもある。(海部氏の実態からすれば女祭司、女預言者である。)

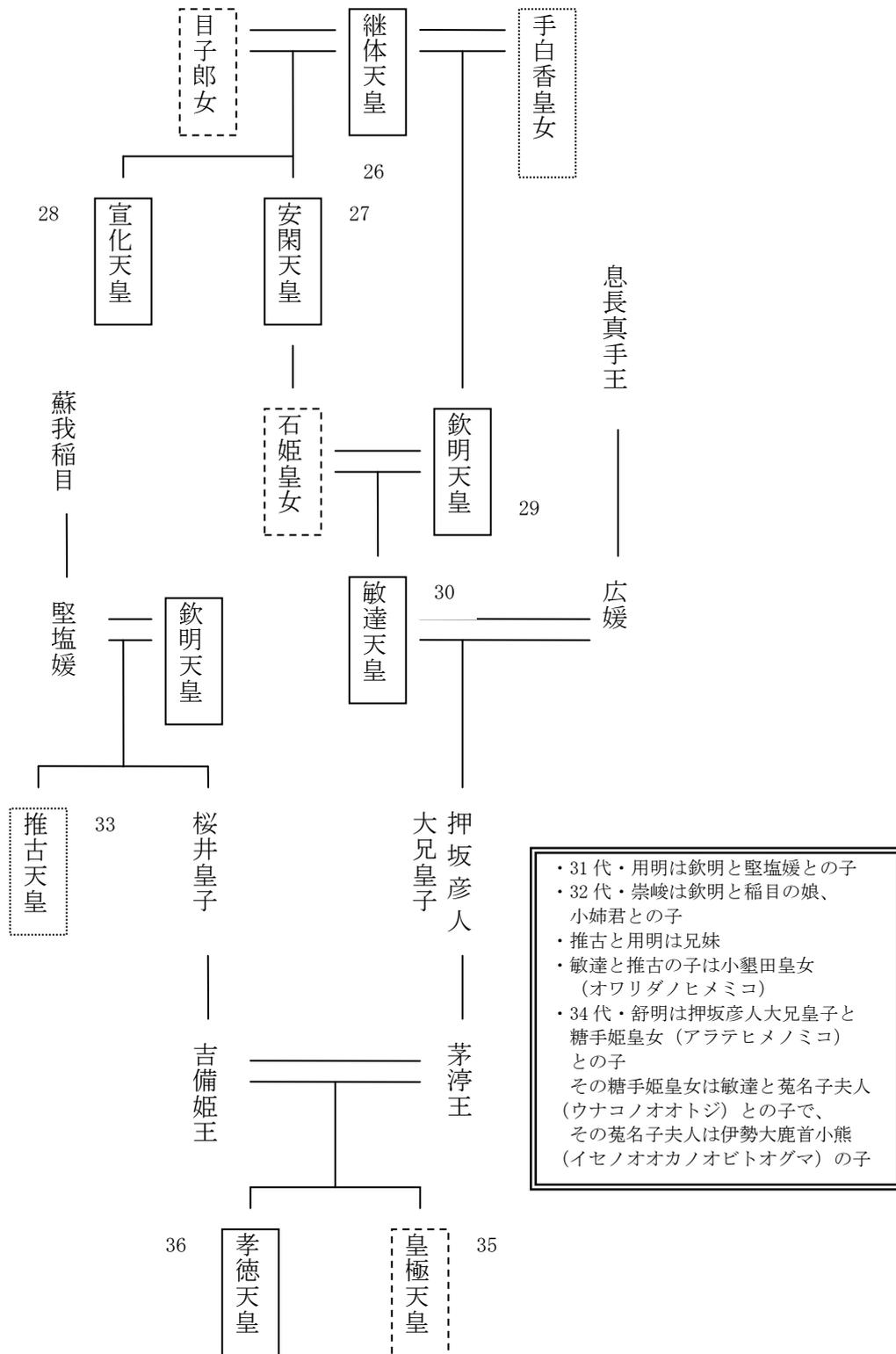
その推古天皇を推した蘇我氏については、日本書紀では、馬子が守屋を殺した、とか、崇峻天皇を殺した、とかあるが、物部氏の文書である先代旧事本記には、蘇我入鹿に物部の血が入っていることを誇らしげに記載している。

“小治田(おわりだ)豊浦宮に御宇天皇(アメノシタシラシメシシスメラミコト)の御世に参政(まつりごとあづかり)と為りて神宮(かみつみや)を斎奉る。崇我嶋大臣(ソガノシマノオオオミ=馬子)の妻と為りて豊浦大臣を生む。名を入鹿連公と言う。”

つまり、物部氏にとって、蘇我氏はとても重要な人物であり、敵対するような関係ではないことを示唆しており、日本書紀に於ける創作が伺える。そして、ここでも“豊浦宮”“豊浦大臣”など“トヨ”と“豊受大神”を示唆する“豊”を冠し、更に、“小治田”という地名で尾張氏との深い関係を暗示している。

(3) 皇極天皇

皇極天皇は推古天皇に続く女帝だが、重祚して斉明天皇になるという前代未聞の事件が起きている。皇極天皇もまた、海部氏・尾張氏の血統である。そこで、皇極天皇について考察する。系図としては次のように遡る。



・皇極→茅渟王→押坂彦人大兄皇子→敏達天皇→石姫皇女→宣化天皇→継体天皇（海部氏）、尾張目子郎女（尾張氏）。

①皇極天皇の“妹の力”

乙巳の変の後に即位した孝徳天皇（皇極天皇の弟）は即位後、即座に難波宮の造営を開始した。孝徳天皇は大化の改新を行い、鎌足派とされているが、例えば扶桑略記には蘇我入鹿の差し向けた軍勢の中に、即位前の孝徳が加わっていたとされ、親蘇我派を思わせる。また、陵墓は奈良と大阪にまたがる磯長谷（しながだに）とされているが、ここは用明天皇、推古天皇、小野妹子ら親蘇我派の人物を弔った場所として知られている。難波宮は後の都と遜色無い規模と規格性を有し、律令制度の基礎となったほどのものである。それを、不比等が編纂させた日本書紀では、老人たちが次のように言っている。

“春から夏にかけてネズミが難波に移動していたのは、今思えば、遷都の前兆だった。”

これは、“ネズミ”の移動が乙巳の変よりも前であり、入鹿存命中に遷都計画があったということを示唆している。大化の改新が虚構で、実は蘇我氏が整えた律令体制を鎌足―不比等が横取りして“大化の改新”として仕立て上げたのなら、また<日本の真相4>でも記したように、中大兄皇子や持統天皇が蘇我・天武系を謀殺していた事実からすれば、遷都を開始しようとしていた蘇我一族を“ネズミ”と称するのも納得のいくものである。

そして、難波宮がこのような規模のものであるならば、むしろ孝徳天皇の晩年に、中大兄皇子が都を飛鳥に戻しましょう、と提案していることこそ、おかしいことである。中大兄皇子、いや、鎌足―不比等は親蘇我派の母（皇極天皇）を蘇我政権から引き離すことが目的だったのだろう。そして、重祚させて斉明天皇とし、非蘇我系の始祖とさせたかったのではないか。蘇我馬子の娘、法提郎女（ホテイノイラツメ）の産んだ子が古人大兄皇子（フルヒトノオオエノミコ）で、舒明天皇の第一子だが即位せず（できず）、皇極天皇が産んだとされる中大兄皇子が即位したことが、それを裏付ける。

日本書紀では皇極天皇のみが神に通じていた＝神通力があつたと強調している。皇極天皇が即位した年（AD642年）、日照りが続いたので、村々の祝部（はふりべ、地域の神職）は牛や馬を殺して諸々の神社の神々を祀り、雨乞いしたが雨は降らず、蘇我入鹿が仏教で祈祷しても駄目だった。しかし、皇極天皇自身が明日香村の南淵の川上で四方を拝すると、5日間雨が降り続いたという。これは巫女ではなく祭司の姿であり、神官や仏教の力よりも、女帝の権威・靈威が勝っていたことを示している。また、牛や馬を殺して神々を祀ったことは生贄を神に捧げたことであり、この時代にはユダヤ教の影響が色濃く残っていたのである。

斉明天皇と孝徳天皇は難波宮から再び飛鳥に遷都するという中大兄皇子の提案に反対していた。それにも関わらず、結果的に飛鳥に移動したのは、無理矢

理再び即位（重祚）させられた上、飛鳥の岡寺（難波宮から遷都後の飛鳥岡本宮）に幽閉されてしまったのだろう。これは、皇極天皇のみが神に通じており、中大兄皇子の“妹の力”として必要不可欠だったためだろう。それにより、本来、皇極→孝徳→蘇我の皇子と続くはずの皇位が、斉明→中大兄皇子＝天智と続く反蘇我系・親鎌足－不比等系に変えられたのである。

この飛鳥の岡寺は義淵（ギエン）という僧が建立した。彼は天智天皇の庇護の下、岡宮で草壁皇子（天武天皇の子）と共に育てられ、皇子の没後、この宮を賜って寺にした。天智が天武の子を養育したことは謎だが、義淵が鍵を握っている。義淵の姓は市往（イチキ）であり、大和国高市郡市往岡（飛鳥の岡寺所在地）に由来すると言うが、真相は異なるだろう。徐福の亦名は徐市とも言われ、それに因んだ地名として“市来（いちき、鹿児島など）”がある。市来＝市往だから、市往はまさしく徐福を象徴しているに他ならない。そして、徐福一団の末裔は葛城氏となり、蘇我氏もその末裔と考えられ、蘇我氏が本拠地としていたのも飛鳥一帯だから、義淵は徐福一団を象徴している。また“西の葛城”を徐福一団の末裔が、“東の纏向”を尾張氏が治めていたのだから、この草壁皇子と義淵の逸話は、このような邪馬台国の真相を暗示しているのである。

つまり、義淵一族は百済の明王（メイオウ）の子孫ということになっているが、実は徐福一団の子孫なのである。親百済派の天智天皇に庇護されたから百済系にされてしまったのであり、徐福一団の末裔の中でも始皇帝の縁者だから王の子孫ということにされたのだろう。

では、何故、皇極天皇はこのような“妹の力”を具え、神祭りが可能だったのだろうか。皇極天皇は再婚しているが、最初の夫は高向王である。“高向”は4：で記したように、建振熊宿祢が海部の姓を賜った若狭の木津高向宮を暗示しており、ヤマトの“纏向”に通じる重要な王宮だった。高向王は用明天皇の孫とされているものの、父は不詳となっており、極めて不可解である。つまり、高向王は海部氏一族だから父が隠されていると考えられる。

また、皇極天皇の和風諡号は天豊財重日足姫で“豊”を、更に日神を暗示する“日”も冠し、海部氏の血統であることを暗示している。

皇極天皇の父は茅渟王（チヌノオオキミ）だが、“渟”は（勾）玉のことで海部氏との深い関係を暗示し、その父の押坂彦人大兄皇子は“押坂日子人”とも書け、海部氏に関係の深い“日子”を冠する。そして、押坂彦人大兄皇子の父方を遡ると海部氏系の継体天皇に辿り着き、母は海部氏と同族の息長氏の娘だから、押坂彦人大兄皇子は明らかに海部氏の血統と言える。茅渟王と押坂彦人大兄皇子はいずれも即位しておらず、海部氏の血統故に、即位させられなかったと考えられる。

皇極天皇の母は吉備姫王（キビヒメノオオキミ）で、元を辿ると蘇我氏に行き着くが、ここで“吉備”となっている以上、父の桜井皇子が吉備氏と結婚し、その娘が吉備姫王と言える。その桜井皇子が即位せずに推古天皇が女帝として即位しているのは、桜井皇子が吉備氏に婿入りした可能性を伺わせる。そして、吉備氏と海部氏は同族だから、吉備姫王には海部氏の血が流れている。

よって、皇極天皇には父方、母方共に海部氏の血統であり、それ故に、神祭

りが可能なのである。これこそが、皇極天皇が神に通じており、“妹の力”を最大限に発揮できる所以なのである。

②漢皇子の正体

前述のように、皇極天皇（天皇になる以前は宝皇女）は最初に高向王と結婚したが、高向王との間に漢皇子（アヤノオウジ、アヤノミコ）を産んだ。その後、舒明天皇と結婚して中大兄皇子と大海人皇子（他に間人皇女）を産んだ。通常ならば、即位せず、父親の素性も明らかではない高向王を正史が記載する必要は無く、その子、漢皇子もその後何か事績を残したというわけでもない。尚更、この2人を正史に記録する必要は無い。しかし、敢えて記載してあるのは、記載せざるを得ないほど、重要な人物だからである。つまり、海部氏の血統で、この時代に大きな事績を残した人物の真相がここに隠されている、ということである。

この時代は皇極天皇が重祚させられて斉明天皇になるという前代未聞の事件が起き、それは蘇我系と反蘇我系の皇位継承者争いで、皇極天皇を重祚させて斉明天皇とし、非蘇我系の始祖とさせることが目的だったことは、前述の通りである。その渦中にいたのは、中大兄皇子と大海人皇子である。中大兄皇子は反蘇我派・親百濟派、大海人皇子は親蘇我派・親新羅派であり、大海人皇子は実は海部氏系であることは<日本の真相4>で記した通りである。ならば、2人の父は舒明天皇、母は皇極天皇とされているものの、実際には大海人皇子の父は高向王であり、漢皇子が大海人皇子＝天武天皇だったと考えられる。だからこそ、高向王と漢皇子は正史上、無視できない存在なのである。そうすると、中大兄皇子は大海人皇子の弟ということになり、正史とは逆の関係になり「合わせ鏡」である。通説でも、この兄弟は年齢的におかしく、実際には天智の方が弟だったのではないか、などと言われているのも、このようなカラクリがあることを知れば、納得できるものである。

更に、天智天皇の諱（いみな、実名）を葛城皇子として、あたかも古代に天皇家と婚姻関係により血縁を結んでいた葛城氏の血統であるかのように見せかけ、古代から連綿と続く正統な王家の血統であることを主張している。藤原氏が中臣氏を乗っ取ったように。これにはまた、葛城氏の正統な子孫だ、と主張していた蘇我氏を排斥する意味も込められているのだろう。

(4)持統天皇

正史が編纂され、新生伊勢神宮が造営されたのは、持統天皇の時代である。そして、持統天皇は海部氏系の天武天皇の後だが、天武系と天智系の様々な謀殺に関わっており、鎌足－不比等の傀儡とも見なせる。そこで、持統天皇について考察する。

①吉野行幸の真相と天香具山

持統天皇の夫、天武天皇は蘇我氏との結びつきが強い。しかし、持統天皇は天智天皇の娘であり、日本書紀の編纂は天武天皇が崩御した後、不比等らによ

って成された。天武、持統、天智の関係は<日本の真相 4>で記した通り、天智天皇は百済派で鎌足―不比等ら秦氏の大王、天武天皇は新羅派で海部氏・尾張氏の大王という真相を、そして本来の皇統は海部氏・尾張氏だという真相を隠してしまったのである。ならば、天智天皇は藤原系の傀儡（あるいは血統）と言えるだろう。<日本の真相 4>で記したように、天智天皇に至るまでは海部氏・尾張氏が外戚として天皇家を守り、ある意味、権力も保っていたが、天智天皇の時代から鎌足が布石を打ち、天武天皇の時代になって不比等を嚆矢として秦氏が外戚となり、政治は藤原氏、神道は鎌足が乗っ取った中臣氏の血統が現在に至るまで、権力を握っているのである。そして、仲睦まじかったとされている天武天皇と持統天皇の関係も、天智系＝鎌足―不比等の秦氏による虚構であり、親しく天武に近付いた持統は天智側のスパイだったとも言える。

天武天皇崩御後に、持統天皇が詠んだ“夢のうちに習ひ給ふ御歌一首”は、持統天皇が夢の中で習い覚えた歌を天武天皇に語り、天武天皇がその意味を解釈したものと指摘されているが、これは、巫女の口から発せられた神託の意味を王が解釈した、ということであり、持統天皇には巫女的性質があることを示している。果たして、そのような性質は、元来、持統天皇に具わっていたものなのだろうか。

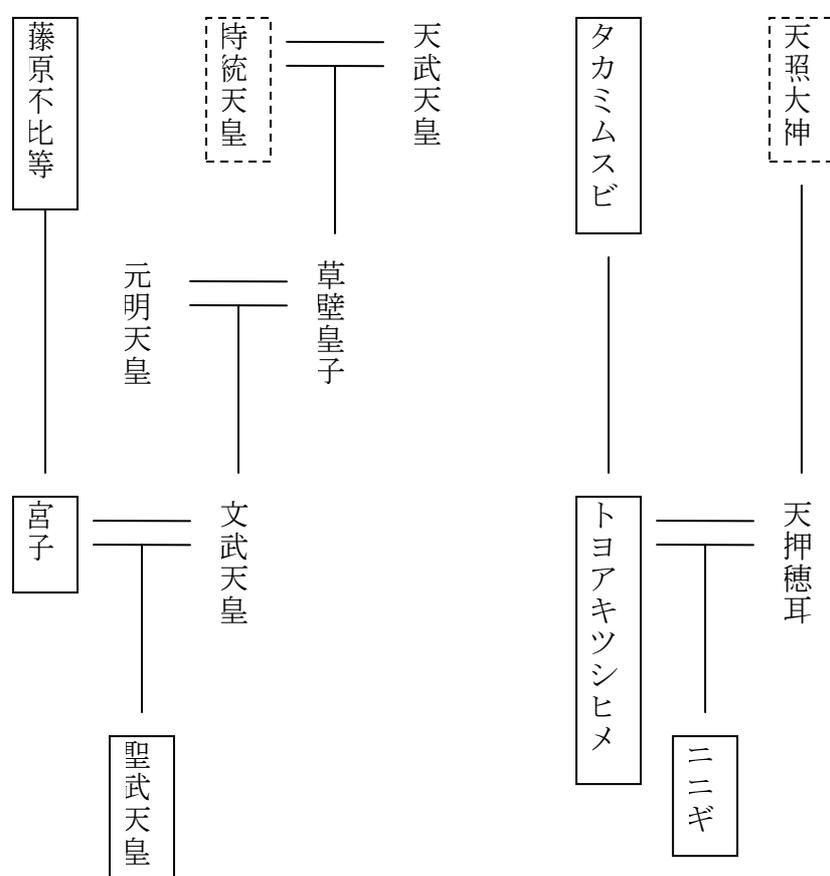
持統天皇は、吉野の聖地、宮滝（吉野宮）へ異常なほど足繁く行幸している。吉野は鷗野讚良（ウノノサララ、後の持統）が大海人皇子（天武天皇）と共に身を隠した地であるが、遺跡の発掘から、縄文時代から既に人が住み着いていたことが判明しており、積極的に弥生式文化を取り入れた地域である。吉野宮と考えられている場所から 5 世紀の土器が出土したので、雄略天皇の吉野宮は実在したと見なされている。吉野の宮滝は背後に山、前面に川、東西に道が延び、南に円錐形の山がそびえ、風水の理想に敵っている。そして、4：で記したように、吉野では豊水富命が巫女として“天押穂井の水”と豊受大神（天照国照尊）を祀っていたので、吉野は古代に於ける重要な聖地である。その地が風水の理想に適っているということは、支那のカッパーラの使い手、徐福一団が深く関わっていたことを示唆しており、鎌足―不比等ら秦氏による後世のものではない。

持統天皇は海部氏系の天武天皇の後だが、不比等らの傀儡で海部氏の血統ではなく、神祭りはできない。故に、巫女を兼ねた女帝として君臨するために、邪馬台国ができる以前の聖地、吉野に何度も行幸し、巫女としての性質を兼ね備えていった、あるいは、何度もヤマトの祖神の下に許しを請いに行ったと考えられる。

また、持統天皇の和風諡号は、最初は大倭根子天之広野日女尊（オオヤマトネコアメノヒロノヒメノミコト）だったが、後に高天原広野姫天皇（タカマノハラヒロノヒメノスメラミコト）という諡号も加わった。“高天原”という 3 文字を諡号に冠する天皇は持統以外にはおらず、自ずと女神としての天照大神と重なってくる。

そこで、神話の系図を見てみると、天孫ニニギは天照大神の血は勿論のこと、

高皇産靈尊の血も受け継いでいるが、神々の系図が持統・不比等の系図と重なって聖武天皇がニニギに重なり（代数的には文武となるが草壁皇子を無視すれば）、不比等と持統天皇の正統性を誇示しているかのようである。そして、天武の子である草壁皇子が即位していないのに、孫の文武を即位させていることは、“天孫”神話とだぶらせて正当化していることに相違無い。つまり、諡号に“高天原”を冠することにより持統天皇を女神としての天照大神になぞらえ、文武天皇の正統性を証明しようとしたのと同時に、不比等がタカミムスビとして高天原に君臨する権力者であることを誇示しているということである。



よって、天照大神を女神にすり替えたのは天武天皇ではなく、持統天皇であり、不比等である。このことを裏付ける持統天皇の歌が万葉集・巻 1-28 にある。

“春過ぎて 夏来にけらし 白袴（しろたへ）の 衣ほすてふ 天香具山”

天香具山は聖なる山のはずなのに、洗濯物が干してあることなどおかしい。天香具山の土が重要な呪具として用いられ、神武東征時に天香具山の土で天平瓮などを作り、天神地祇を祀り、敵を呪ったところ、敵は自ずから平伏した。つまり、天香具山を手に入れた者がヤマトの王になれたのである。これは、2：(10)で記したように、天香具山＝天香語山の土はヤマトの国の物実で、ヤマトの国の魂そのものだからである。その原型はシュメールで、王権のあった場所は聖別され、その土に、エンリルが“天空のように明るい物体”を埋め込み、それが転じて“輝く玉”となり、玉が王権の象徴となったのである。

また、神聖な山に関わる“衣”で思い出されるのが“天の羽衣”である。2：(8)では天女の衣について述べたが、その衣＝“天の羽衣”は天上界の力の象徴であり、それを身に纏うことにより、神と直接対峙して神祭りすることが許され、天子の威霊を体得するのである。

だから、この歌では衣を干したのではなく、実は“豊受大神の天の羽衣を奪う”ことを宣言していたのであり、ここで詠われている“衣”とは“天の羽衣”のことなのである。言い換えれば、王権の象徴とも言える天香具山の土を手に入れ、神祭りが許される“天の羽衣”を纏うことにより、名実共に祭司王となる野望を詠っているのである。

持統天皇は吉野行幸を繰り返すことにより、巫女となると同時に、自らが太陽神となることによって、秦氏＝藤原氏による新たな王家＝皇統を創り上げようとした、あるいは、八咫鳥によってそのようにさせられたのである。それ故、当時編纂された日本書紀で女神の天照大神が日神とされた。しかし、日神を祀る大日靈貴神の名でも登場させることにより、祀る側から祀られる側に変えられた変遷を暗示しているのである。

その大元は、ヤマトに於ける太祖・天照国照尊と、日神で祖先であり、初の女王だった卑弥呼をトヨが祀ったことである。しかし、このような神話の創作により、海部氏・尾張氏は、神話的にも秦氏によって押さえ込まれてしまったのである。

②持統天皇と日本武尊

日本武尊の陵は何度か鳴動し、その度に国家の大事の前兆と考えられ、朝廷では恐れられた。持統天皇はことのほか、日本武尊の怒りを恐れた。続日本紀に依ると、大宝2年(AD702年)8月8日に日本武尊の陵が鳴動し、朝廷が使者を遣わして祀らせた、とある。同年10月には持統天皇が東国に赴き、行幸先の田租(でんそ)を免除したという。そして、三河、尾張、美濃、伊勢、伊賀を経て都に戻ったという。持統天皇はAD645年に(即位ではなく)誕生したとされているから、AD702年は58歳(数え年)となり、当時としては相当高齢である。その老体に鞭打ってまで行幸したことは、相当な意味、すなわち、日本武尊の真相が隠されている。

日本武尊の実態は、4：で考察したように、9世孫・置津世襲命＝瀛津世襲命と思われ、“不老不死、永遠”をも象徴していた。そして、この時代に太陽神＝

天照国照尊を象徴する鏡と剣が神宝とされ、銅鐸の信仰から鏡への信仰という極めて大きな祭祀形態の変化があり、王権の象徴たる玉が勾玉となって三種の神器が揃い、“不老不死、永遠”を願う祭祀基盤が9世孫・日女命＝卑弥呼によって整えられた。

また、この命の東征はヤマトに近い尾張地方や伊勢地方のことを指しており、邪馬台国連合とは、尾張・伊勢地方まで含んだヤマトということである。ならば、持統天皇の行幸先はまさしくこの東国そのものであり、日本武尊＝瀛津世襲命が平定した国に他ならない。そして、その時の大王は9世孫・意富那比命＝大海宿禰命＝武内宿禰で、祭司女王は9世孫・日女命＝卑弥呼だった。

ならば、日本武尊の陵で象徴されるのはこれら9世孫のことで、歴代の海部氏の中でも最も重要な時代の象徴である。これはまた、正史で度々崇っている大物主神＝天照国照尊にも喩えられる。故に、日本武尊の陵の鳴動は、大物主神＝天照国照尊の祟りとして恐れられ、その度に国家の大事の前兆と考えられたのである。とりわけ持統・不比等らにとって、正史を乗っ取った以上、これ以上の恐怖は無いのである。

しかし、その後の桓武天皇の時代に、“武”で象徴される海部氏系＝天武系天皇は完全に歴史から抹殺された。天武系が断絶した後に即位した桓武天皇は平安遷都したのだが、“桓”は“目印の木”というのが本来の意味で、四方の領土を武力で平定した人物を意味する。しかし、他の意味もある。“棺を墓穴に降ろすための4本の柱”であり、ならば“桓武”とは、“武を冠するヤマト本来の皇統を葬り去った”という暗示が込められている。前述の、草壁皇子を無視すれば聖武天皇がニニギに重なることは、秦氏の本格的皇統が桓武天皇から始まったことを暗示しているのである。

思えば、“武”を冠する日本武尊も、最後はヤマトを夢見ながら（＝海部氏が皇統に返り咲くことを希望しながら）、能褒野で潰えたのである。

③持統天皇の弟・建皇子（タケルノミコ）

持統天皇の弟、建皇子は謎が多い。斉明天皇の孫で、天智天皇と遠智娘（オチノイラツメ、父は蘇我倉山田石川麻呂）の子とされているが、言葉を話すことができなかつたので斉明天皇は不憫に思い、溺愛したという。しかし、日本書紀では持統天皇の弟だと言っておきながら、一書では兄だったり、あるいは兄弟ではなかつたかもしれない、などとしており、持統天皇の同時代史である日本書紀がこのように記していることは、極めて不可解であり、存在自体が怪しまれる。皇子が聾啞だったという話は、同じく日本書紀に登場する。

“垂仁天皇の子・菅津別皇子（ホムツワケノミコ）で、30歳になって八握髯鬚（やつかひげ＝長いヒゲ）を生やしているが、言葉を発しなかつた。ところがある日、宮の上空に白鳥が飛んで来ると、皇子はそれを見て「あれは何でしょう？」と言葉を發した。喜んだ天皇は白鳥を捕まえるよう命じ、出雲で捕らえた。”

古事記にも同様な話が登場する。

“天皇は尾張の国の二股に分かれた杉で二股船を作り、それを運んできて、市師池、軽池に浮かべて、皇子と共に戯れた。ある時、皇子は空を飛ぶ鵠（くぐい、白鳥）を見て何かを言おうとしたので、天皇はそれを見て鵠を捕らえるように命じた。鵠は紀伊、播磨、因幡、丹波、但馬、近江、美濃、尾張、信濃、越を飛んだ末に捕らえた。しかし、また言葉を発することができずにいると、垂仁天皇の夢に神が現われ、「我が宮を天皇の宮と同じように整えたら、皇子は言葉を発するだろう」と告げた。天皇が占うと、それは出雲大神の御心だということが判明した。”

誉津別皇子は狭穂姫の子であり、狭穂姫も実は丹波系であることは4：(1)で記した。ならば、誉津別皇子も丹波系と言え、それ故、聾啞という異形にされている。

日本書紀と古事記で共通しているのは出雲で、日本書紀では白鳥が出雲で、古事記では越で捕らえられた。4：(1)で記した通り、出雲も越も古代丹波王国だったので、やはり丹波の話である。特に古事記では、出雲神の御心により聾啞だった、とあり、出雲神は大国主神で、その和魂が大物主神である。その大物主神の御心により、崇神天皇の時代に疫病が流行ったことと類似している。大物主神＝天照国照尊であり、記紀では出雲とされてしまった丹波の神だから、やはり出雲神の御心、ということになる。

また、“白鳥”は尾張氏に関わりの深い日本武尊を連想させ、“建”は海部氏・尾張氏系に冠する文字である。そして、播磨、因幡、丹波、但馬、近江、美濃、尾張、信濃、越と飛んで行った経路は、海部氏・尾張氏王国である。“尾張の国の二股に分かれた杉”というのも、尾張氏との深い関わりを暗示しており、尾張氏に対する海部氏、ということだろう。

更に、大人になっても言葉を発しなかったことは幼児を連想させ、海部氏・尾張氏由来のスサノオは大人になっても泣いてばかりであり、やはり幼児性を象徴し、共通している。

つまり、神祭りを行う女帝、斉明天皇は海部氏の血統を象徴し、斉明に溺愛されたが、存在自体が怪しまれている建皇子は海部氏の血統であることを暗示している。その建皇子が聾啞で、神話上も皇位を継いでいないことは、海部氏一族の中の王となる資格のある者が、秦氏の策により皇位を継がせてもらえなかったことを暗示している。

(5)天照大神の性別

これまでに見てきたように、女神としての天照大神の原型は卑弥呼であり、男神・天照国照尊と共に祀ったトヨの姿まで投影されているが、根本的には男神・天照国照尊である。史料によっては、それを裏付けるものがある。

大神神社の神宮寺・平等寺の中興の祖、慶円上人に依ると、伊勢に祀られる

天照大神と三輪山の大神主神は一体であり、大日如来（密教の最高仏）が化現（けげん）したものとされている。室町時代の能楽「三輪」ではその大神神社について語られている。三輪の里に住むという女性が烏帽子を被り、裳裾の上に狩衣を着て現われ、“女姿や三輪の神”と語り掛け、自らが三輪の神で男神であることを明かす。そして、天照大神が天岩戸に隠れる神話を語り、“思へば伊勢と三輪の神、思へば伊勢と三輪の神、一体分身の御事、今更何と磐座（いわくら）や”と言い、伊勢の天照大神と三輪山の大神主神が同一であることは当たり前で、今更何を言っているのだ、ということをはっきりと明らかにしている。天照大神は天照国照尊であり、大神主神でもあるから、当時の人たちもこのような認識があったのだろう。ましてや、大元の三輪での話である。また“磐座”というのも、籠神社の奥宮にある磐座を暗示している。

通海参詣紀（つうかいさんけいき）には、斎王の寝床には毎朝必ず蛇の鱗が落ちていた、という話がある。伊勢の神は男神で蛇神と思われていたのであり、伊勢の神＝大神主神だから、倭迹迹日百襲姫命と大神主神の話と一致する。

他にも、日本書紀の雄略天皇14年正月の記事には次のようにある。

“身狭村主青（ムサノスグリアオ）らは、呉国の使者と共に、呉の献上した才伎（てひと、技術者）の漢織（あやはとり）、呉織（くれはとり）と衣織（きぬぬい）（いずれも衣を縫う職人）の兄媛（エヒメ）と弟媛（オトヒメ）らを率いて住吉津（すみのえのつ）に留まり、3月には衣縫の兄媛を大三輪神に奉った。”

衣を縫う渡来系の技術者が大三輪神に奉仕するようになったのは、三輪がヤマトに於ける太陽信仰の中心地であり、衣を縫う女性は日神を祀る巫女だったからである。記紀でも、女神・天照大神は神に捧げる機を織っていた。その神とは、本来の日神で主神の天照国照尊で、女神としての天照大神は日神を祀る巫女だった。それが、女神としての天照大神の亦名、大日靈貴神で表され、“大いなる日神が降臨する巫女”という意味であって、“日神である女神”ではない。そして、ここからも大三輪神＝大神主神＝神宮の天照大神と言え、神宮ではなく三輪に奉っているのは、三輪が神宮の大元だからに他ならない。これは、2：(10)で記したように、倭姫命世紀にも書かれていたことである。

また、日本書紀では、実は日神と天照大神を厳密に書き分けている。大日靈貴神はその一例だし、他にも日神の御座所は“天”“天原”“天上”“天国”であるのに対し、女神・天照大神の方は“高天原”となっている。そして、“実際に輝いていた”と書かれているのは日神であり、天照大神ではない。更に、用明天皇は即位するとすぐに、“（伊勢の）日神の祀りに奉（つかえまつ）らしむ”として、娘の酢香手姫命（スカテヒメノミコト）を伊勢の斎宮として派遣しているが、ここでも“日神”であって“天照大神”ではない。景行天皇の斎王以降、その後の斎王たちは、“日神を祀った”とか“伊勢大神に侍った”と記され、必ずしも“皇祖神としての女神、天照大神”と特定されているわけではない。つまり、謎を解く鍵としている。

天照大神の宮、神宮で最も重要なのは心御柱である。御柱の周囲には天平瓮（あめのひらか、平たい土器）が 800 枚積み上げられており、これを祀ることができるのは大物忌という童女だけで、天牟良雲命＝天村雲命を祖とする海部氏・尾張氏と同族の度会氏（外宮禰宜）の童女だけだった。そして、齋宮も天皇の未婚の娘だけだった。更に、特別な新嘗祭である大嘗祭に於いて、神宮と同様の役割を果たす童女が造酒童女（さかっこ）で、やはり未婚の女性である。ならば、祀られる神は男神であると言える。それが、持統天皇と不比等の時代から女神にすり替えられ、あたかも持統天皇が女神としての天照大神のモデルであるかのようにされてしまったのである。その代わり、本来の祭神を本殿の床下に隠して心御柱とし、密かに祀り続けてきたわけである。心御柱には、このような意味も含まれている。

7：神宮

6：では、神祭りが可能なのは特定の血統の女性であり、女帝は基本的に海部氏の血統でなければならないが、持統天皇（裏では秦氏、八咫鳥）がそれを覚えてしまったことを述べた。持統天皇は吉野行幸を繰り返すことにより、巫女となると同時に、自らが太陽神になろうとし、女神としての天照大神のモデルとなったのである。

その天照大神を祀る現在の神宮は天武天皇と持統天皇の時代に造り変えられた。ここでは、関裕二氏の「伊勢神宮の暗号（講談社）」を基に、神宮について考察する。

①神宮鎮座

天照大神の御遷座は三輪から丹波、近江、美濃を経て伊勢国に至ったとされているが、日本書紀の垂仁天皇紀に登場するこれらの国名の書き方は、国郡設置後でなければならず、垂仁天皇紀自体、後世の創作であることが明白である。また、天照大神に対する祭祀が、神宮が創祀される以前の宮中内にあつたのなら、その痕跡が残されているはずだが見られない。それもそのはず、5：で記したように、外宮と内宮は雄略 21 年・丁巳の年（AD477 年）に籠神社から同時に遷宮され、それは原伊勢神宮と言うべきものであり、その後、天武・持統天皇の時代になって、現在の姿に造り変えられたのである。そして、正史に矛盾しないように、その祖神たる女神の天照大神の祭祀は、実際の神宮鎮座の AD477 年から 8 元＝480 年遡らせた BC4 年の丁巳の年とされた。

さて、天武朝に初めて禰宜職が置かれ、神宮の禰宜は海部氏・尾張氏と同族の度会氏とされた。また、蘇我氏全盛時代に中断されていた齋王の派遣も天武朝に復活している。このように、天武天皇と神宮の繋がりは強く、神宮の大元が海部氏・尾張氏であり、天武天皇が海部氏の血統だったからに他ならない。大海人皇子の時代にも、吉野から東国に逃れる際、迹太川（とほがわ、朝明川）から天照大神を遥拝した、と日本書紀にも書かれているが、これなども、尾張氏に関わりの深い日本武尊が、東征中のこの地で夜明けを迎え、朝明川の水で

口をすすいだことに重ねられている。(なお、天武天皇は晩年、信州に副都の造営を計画していた。それは、信州と言えば安曇氏であり、安曇氏は海部氏と同族とも言えるからである。)

しかし、天武天皇崩御後、持統天皇は度会氏を外宮の禰宜へと追いやり、内宮の禰宜は秦氏の荒木田氏に変えられた。持統天皇の裏には不比等がおり、扶桑略記には不比等の私邸を持統が宮として使っていたことが記されており、言わば2人は一心同体であり、すべて八咫鳥の策である。

そして、持統天皇が即位した頃から、朝廷は東国に通じる3つの関を閉じるという三関(さんげん)固守を始めた。4:で記したように、鈴鹿の関から東が関東で東国であり、とりわけヤマトに近い尾張地方や伊勢地方のことを指しているから、これは、壬申の乱で活躍したが、天武天皇崩御で封じ込まれ始めた尾張氏の勢力を恐れてのことである。(その後、尾張氏の勢力が増大する度に潰されているのは<日本の真相4>で記した通りである。)そして、鎌足らと対立していた蘇我氏の名前に“蝦夷”“武蔵”など東国の名称を冠することにより、秦氏にとって東国が脅威であることを暗示すると同時に、本来の脅威となる尾張氏のことを隠している。

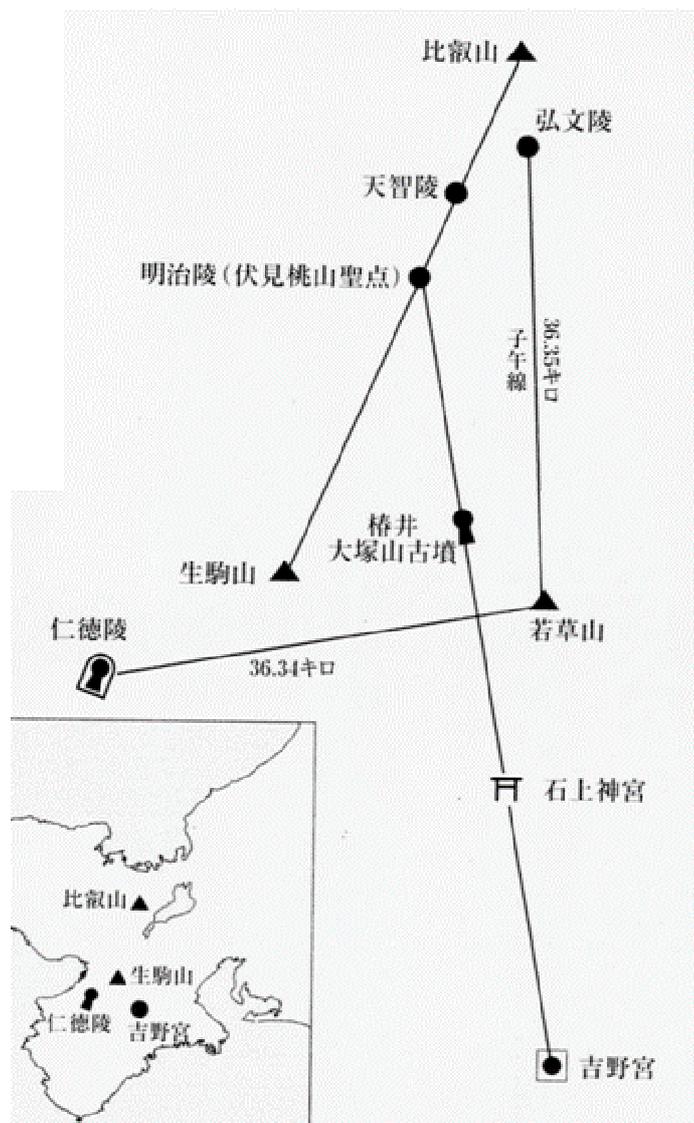
そうすると、神宮は秦氏が敵視する東国の地に鎮座する宮ということになる。皇祖神が祀られているならば、都の近くに存在しなければならないので、このような鎮座はおかしい。つまり、神宮が東国の地にあるということは、朝廷の守り神や直系の皇祖神ではないことを暗示し、封じ込めた、怒れる東国の神を鎮めるための宮と見なすべきなのである。その神とは、天神から国津神に落とされ、太祖神から御撰神に落とされた豊受大神=天照国照尊=大物主神である。更に、単なる出雲神=大国主神に落とされ、故に、何かにつけて崇る出雲神、という構造ができてしまった。だから、天皇にとって最も重要な即位の礼と大嘗祭は神宮で行われないのである。

しかし、海部氏の皇統も祀らないと崇られるから、古代に於いて特に重要な2人の女王、卑弥呼とトヨをそれぞれ内宮と外宮で祀っているのである。

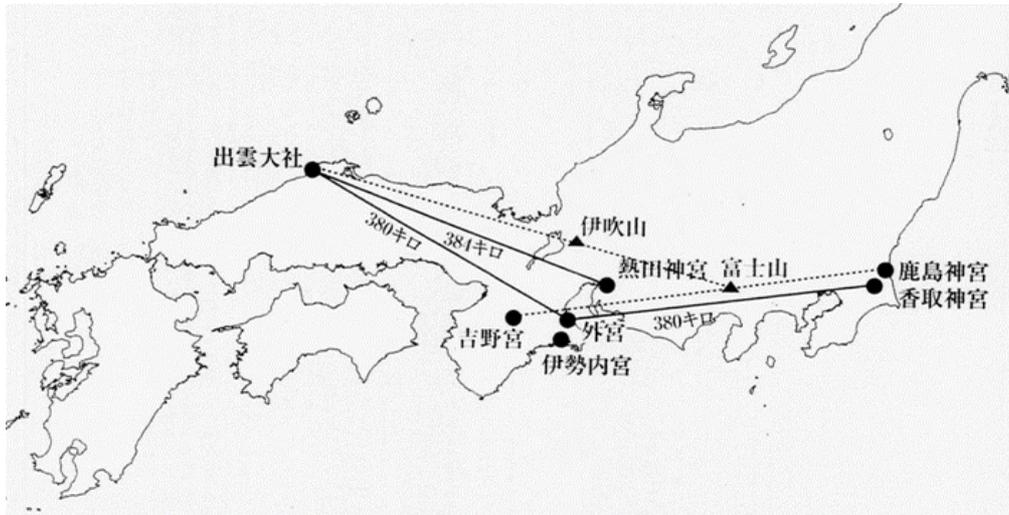
②聖定

神社や古墳などはバラバラに配置されている場合もあるが、何らかの意味があるかのように配置されている場合がある。そのような配置を“聖定”と言う。明治天皇陵を例とすると、明治天皇陵は吉野宮-石上神宮-椿井(つばい)大塚山古墳の延長線上にあり、生駒山-天智天皇陵-比叡山のライン上に造られている。椿井大塚山古墳は最初期の前方後円墳で、最多の三角縁神獣鏡32面が出土した古墳であり、古代に於いて重要な木津川の右岸にある。(Wikipedia 参照。)吉野も古代の重要拠点で、石上神宮は物部氏の武器庫だった。ならば、吉野宮-石上神宮-椿井大塚山古墳は古代の皇統=海部氏を暗示し、生駒山-天智天皇陵-比叡山は秦氏の皇統を暗示していると考えられる。その交点が明治天皇陵だということは、明治天皇の時代から、いよいよ真相公開に向けての時代が始まったと解釈できる。明治になってから様々な宗教改革が行われたのも、

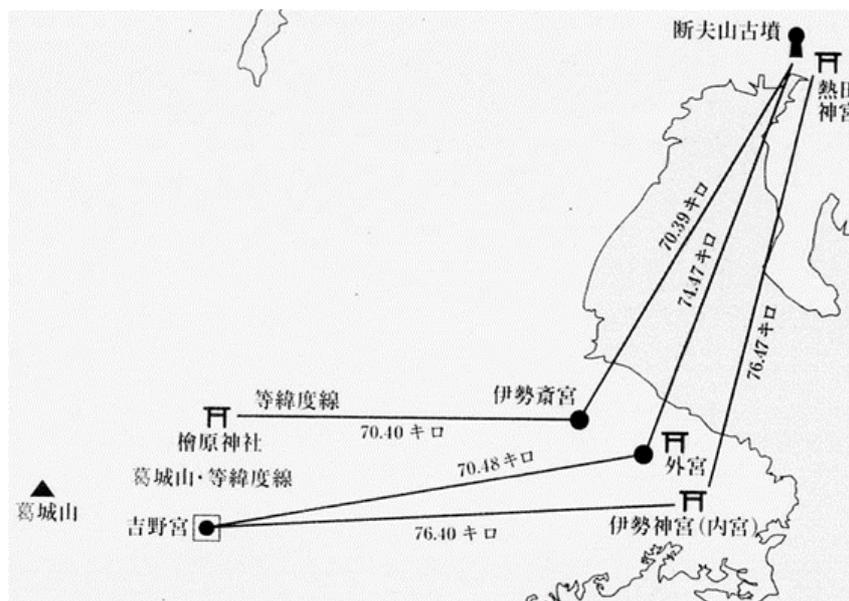
その一環だろう。



他にも興味深い例は、吉野宮－富士山－鹿島神宮は一直線上にあり、富士山－伊吹山－出雲大社もまた一直線上にある。吉野は豊受大神と鏡、鹿島は武甕槌神と剣を象徴し、間に富士山＝不死山＝蓬莱山を入れることにより、日神の不老不死、永遠の日神を象徴している。出雲（杵築大社）も剣だが、元は熊野大社で、“熊”は“日前（ひのくま）”の“クマ”で日神を象徴しており（2：(5)）、伊吹山は生命の伊吹だが日本武尊に縁が深く、やはり剣を象徴し、富士山と合せて不老不死、永遠の日神を象徴している。



このような聖定は、実は神宮にも見られる！例えば、外宮と出雲大社、外宮と香取神宮の距離はいずれも 380 キロで、外宮を頂点とした二等辺三角形を成す。出雲は剣で香取はマナの壺の象徴であり、剣とマナの壺が「合わせ鏡」の位置にある。また、出雲大社から熱田神宮までの距離が 384 キロであり、出雲大社を頂点として外宮と熱田神宮で二等辺三角形を成す、と関氏はしているが、ここでは外宮と内宮の距離（約 6 キロ）を考慮すれば、むしろ、出雲大社を頂点として内宮と熱田神宮で二等辺三角形を成すと見なす方が良いだろう。そうすると、内宮で象徴される卑弥呼と熱田で象徴されるトヨが「合わせ鏡」となる。



また、檜原神社（最初の遷宮地）と齋宮はほぼ同緯度に、葛城山頂と内宮もほぼ同緯度であり、それぞれが同じような役割を思わせる。すなわち、齋宮は天照大神を祀る齋王が侍り、檜原神社は倭姫命が天照大神を初めて宮中外で祀った場所で、倭姫命は後の齋王の大元となったことから“齋王”繋がりである。また、葛城山の麓には一言主大神が祀られる葛城一言主神社が東向きに鎮座しているが、4: で記したように、一言主大神は秦氏系天皇の渡来する以前の国津神で、ある意味、大物主神の亦名でもあった。それが東を向いて鎮座していることは太陽神を象徴し、内宮は太陽神を祀るから“太陽神”繋がりである。

関氏は、持統天皇は齋王を派遣せず、自らが頻りに吉野に行幸したので、檜原神社－齋宮は天武天皇のライン、葛城山－内宮は持統天皇のラインで、持統天皇は自らが日神となって、檜原神社－齋宮の代わりとなるラインを造った、としているが、そうではないだろう。

その檜原神社－齋宮は 70.4 キロ、齋宮－断夫山古墳は 70.4 キロで、齋宮を頂点とした二等辺三角形を形成する。また、吉野宮－内宮は 76.4 キロ、内宮－熱田神宮は 76.5 キロで内宮を頂点とした二等辺三角形を、吉野宮－外宮は 70.5 キロ、外宮－断夫山古墳は 74.5 キロで外宮を頂点とした二等辺三角形を形成する。4: の 13 世孫で記したように、断夫山古墳は卑弥呼を象徴していると思われるが、ここで改めて考察する。

熱田神宮が祭神で豊受大神と籠神社を象徴するのなら、名称的にもトヨを象徴していると思なされるので、それと対を成す（＝「合わせ鏡」である）断夫山古墳は卑弥呼の象徴と思なすのが妥当である。そうすると、檜原神社は女神としての天照大神の最初の御鎮座の地で、女神としてのモデルの原型は卑弥呼だから、齋宮＝トヨを頂点として卑弥呼が対称の位置にあると思なせる。あるいは、檜原神社は女神としての天照大神が最初に祀られた場所なので、女神としての天照大神の原型である卑弥呼を最初に祀ったトヨの象徴と思なすなら、齋宮を頂点として檜原神社はトヨ、断夫山古墳は卑弥呼を象徴して「合わせ鏡」の関係となる。

そして、吉野はヤマトに於ける大元の地だからここを起点に考えると（豊受大神）、外宮がトヨ、内宮が卑弥呼の象徴なので、等距離関係の吉野宮－内宮－熱田神宮は豊受大神－卑弥呼－トヨ、吉野宮－外宮－断夫山古墳は豊受大神－トヨ－卑弥呼という関係になり、両方で卑弥呼とトヨの関係が「合わせ鏡」になっており、更に外宮（西）－内宮（東）はトヨ－卑弥呼、断夫山古墳（西）－熱田神宮（東）は卑弥呼－トヨとなり、それぞれが「合わせ鏡」の関係となる。

言い換えれば、このような聖定により、外宮はトヨ、内宮は卑弥呼、熱田神宮はトヨ、断夫山古墳は卑弥呼を象徴していると言える。

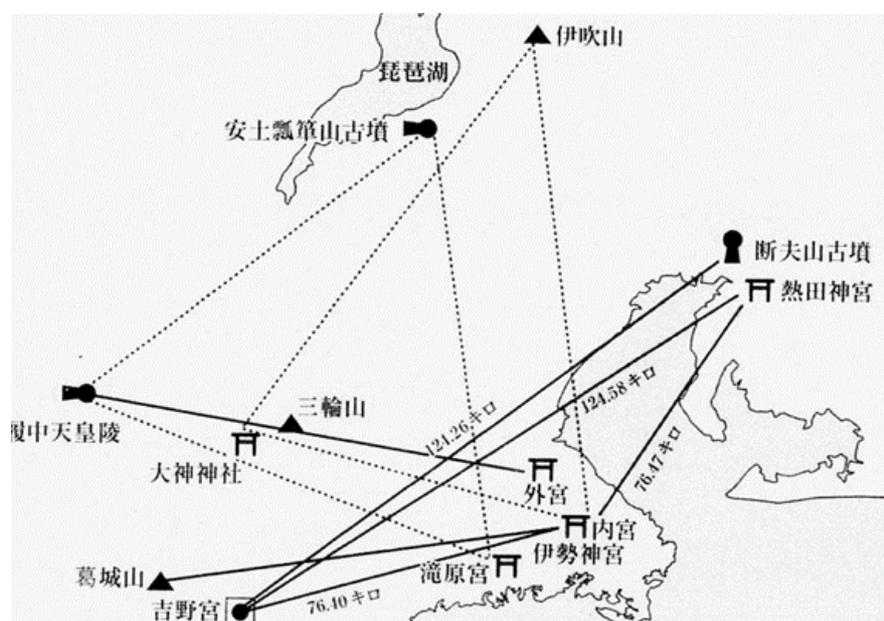
更に、吉野関係では吉野宮（豊受大神）から箸墓古墳（トヨ）を結ぶ延長線上に孝謙天皇陵と神功皇后陵（卑弥呼）が存在し、女帝繋がりである。孝謙天皇は重祚して称徳天皇になっており、重祚した 2 人目にして最後の女帝である。そこに、卑弥呼とトヨの 2 人が投影されていると見て良い。

また、吉野宮（豊受大神）と三輪山（天照国照尊）の延長線上に、前述の椿井大塚山古墳（鏡）が存在する。椿井大塚山古墳は木津川のほとりにあり、海部氏がヤマトへ入ることになった重要な拠点であり、そこと三輪山（天照国照尊）を結ぶ延長線上に、豊受大神を祀る吉野宮が造られたのだろう。

他にも、伊吹山（劍）を頂点とした大神神社（日神、鏡）、内宮（日神、鏡）を結ぶ二等辺三角形や、外宮（豊受大神）と三輪山（天照国照尊）のラインの延長線上に履中天皇陵があり、その履中陵と滝原宮、安土瓢箪山古墳を結ぶと正三角形を形成する。履中天皇は仁徳天皇の子で、母は葛城襲津彦（カツラギソツヒコ）の娘、磐之媛（イワノヒメ）であり、葛城氏は海部氏と同族で、磐之媛は神話的に石長姫に繋がり、海部氏との深い関わりを暗示する。その履中天皇の孫は飯豊青皇女で、豊受大神を暗示する“飯”“豊”を冠する。つまり、履中天皇は水を象徴することになる。また、滝原宮は内宮の別宮で、水を象徴する。安土瓢箪山古墳は滋賀県最大級の前円墳で、“宮津”があり、北西には“江頭”の地名が残っていることから、古代には陸上及び海上交通の要衝で、特に水上交通が重要だったから、水を象徴する。

(http://www.bell.jp/pancho/travel/oumi/azuti_hyotanyama.htm 参照。)

よって、履中陵－滝原宮－安土瓢箪山古墳を結ぶ正三角形は“水の正三角形”である。



以上のような聖定は奈良の古墳群でも顕著だが、それについては次回の資料で考察する。ここでは、外宮はトヨ、内宮は卑弥呼、熱田神宮はトヨ、断夫山古墳は卑弥呼を象徴していることが解れば良い。

8：出雲と徐福

7：で見たように、出雲は神宮に関わる聖定の重要ポイントである。また、4：では海部氏の各大王について考察したが、その中で、出雲に深い関わりがある大王がいた。それは、16世孫・大倉岐命（大楯縫命）で、桑田郡の大蛇を退治したことが八岐大蛇退治の原型となっており、この命の亦名に因んでいると思われる地名が出雲の楯縫郡である。そして、出雲とは、実は広大な古代丹波王国の一部だった投馬国のことである。日本書紀に依ると、そこで神宝を管理していたのは出雲振根だが、飯入根と甘美韓日狭、鷗濡淳が容易に朝廷に献上してしまい、振根によって入根は切り殺されてしまった。これは、古事記に於ける倭建命＝日本武尊の出雲征伐の話と同じであり、結局のところ、丹波国での権力移譲話が元で、日子坐王の子、伊理泥王が入根に該当し、容易に神宝を秦氏に渡した功績により（実際には渡していなかったであろうことは5：(3)記載）、伊理泥の子孫は後に出雲を与えられ、それを記紀では「合わせ鏡」により、最後まで抵抗していた出雲、という構図に書き換えたと考察した。故に、伊理泥王の血統は海部氏と同族とは言いながら、母の血統が婚姻関係を結んだ同族で、極めて重要な一族であり、徐福あるいは始皇帝縁者の血統、もしくは、海部氏と共に渡来してきたフェニキア人のどちらか、というところまで推定した。

この件に関しては、蘇我氏とも密接な関係があると思われるので、改めて関裕二氏の「出雲大社の暗号（講談社）」を基に、出雲について考察する。

(1) 出雲の祭祀

① 祭祀と逸話

出雲の祭祀については<日本の真相4>で記したが、ここでも簡単にまとめる。

出雲国風土記では、出雲に於ける大社は杵築大社（現・出雲大社）と熊野大社であり、熊野の方が格上とされている。出雲国造家が当初に祀っていたのは出雲杵築大社ではなく、意宇（おう）川上流の熊野大社で、AD798年に意宇から杵築に遷されたのが、現在の出雲大社である。その熊野の根源は籠神社であり、籠神社から豊受大神が外宮に遷されたのと同様に、出雲でも熊野大社が杵築大社へと遷された。つまり、出雲大社の大元は籠神社であり、出雲国造家も海部氏と関わりが深い一族である。

出雲大社の拝殿は南向きだが、その中の神座は実は西向きで、それは住吉大社と同じ向きであり、海部氏由来のスサノオが檀国＝新羅に関わりが深いことを象徴していた。出雲大社では竜蛇（りゅうじゃ）が西の海岸に辿り着くことを重視しており、海から現われたのは大国主神の和魂である大物主神で蛇神だが、これは天照国照尊に他ならず、スサノオとして象徴されている。

また、ヤマトの国造りだけではなく、出雲の国造りもスサノオの子孫の大己貴神＝海部氏と少彦名神＝徐福によって成されたとされている。

しかし、出雲の逸話を記したとされる出雲風土記は他に見られない記述があるものの、重要な神器、草薙神剣に関わる八岐大蛇退治の話は無い。また、出雲国造の出雲臣広嶋の位階が約2年で7階上昇しており、これは異常な昇進で

ある。すなわち、“出雲の逸話を記した”とは言うものの、実は朝廷の意向に沿って編纂されたのであり、それ故の昇進と考えられる。ここにも、朝廷＝秦氏の意向に素直に従った出雲、という構造が見える。

つまり、素直に秦氏の意向に従った出雲、というのは、伊理泥王が容易に神宝を秦氏に渡したという構造と同じであり、伊理泥王と出雲の深い関わりが見て取れる。それを記紀では「合わせ鏡」により、最後まで抵抗していた出雲、という構図に書き換え、他にも注連縄の向きや“神在月”など、出雲は他とは逆とされている。

②味耜高彦根（アジスキタカヒコネ）

大己貴神と少彦名神以外の系統で、出雲に深く関わる神々がいる。それは、天稚彦（アメノワカヒコ）と味耜高彦根である。そこで、この二柱の神について考察する。日本書紀には次のようにある。

“天孫降臨の際、最初は天穂日命が遣わされたが、出雲に媚びて帰って来なかった。続く天穂日命の子、大背飯三熊之大人（オオソビノミクマノウシ＝武三熊之大人、タケミクマノウシ）も帰って来なかった。

天穂日命と大背飯三熊之大人の後には、天稚彦が天鹿兒弓（あめのかごゆみ）と天羽羽矢（あめのははや）を授けられ、派遣された。しかし、天稚彦も大己貴神の娘、下照姫（シタテルヒメ）を娶り、帰って来なかった。派遣した高皇産霊神は雉に様子を伺わせたが、天稚彦は授けられた弓と矢で射、雉は瀕死の状態の高皇産霊神の下に帰った。高皇産霊神は天稚彦が国津神と争っていると考え、矢を投げ返すと、新嘗祭を執り行っていた天稚彦に命中し、亡くなった。妻の下照姫の嘆きは天上界まで届いたので、天稚彦の亡骸を天上界に上げ、殯（もがり）をした。

地上で友人だった味耜高彦根は知らせを聞き、天に昇って天稚彦を弔った。しかし、味耜高彦根は天稚彦に生き写しだったので、天稚彦の親族が、まだ生きていた、と勘違いした。味耜高彦根は、死者と間違えられたことを汚らわしく思って怒り、喪屋を切り倒してしまった。その喪屋は美濃国の藍見川（あみがわ）の川上にある喪山に落ちたという。”

出雲は国津神とされ、海部氏の象徴であり、“穂”は稲穂だから、“穂日”で豊受大神＝海部氏を象徴していることは<日本の真相4>で記した。

天稚彦＝アメノワカヒコの名称は、2：(6)で記した天の少宮＝アメノワカミヤと同義である。すなわち、天香語山＝天香具山＝須弥山にある神々の宮殿で、結局は天照国照尊、あるいは天照国照尊を祀っていた海部氏を象徴する。海部氏は本来の天神族だが、ここでは国津神である大己貴神の娘、下照姫（“下界＝地上を照らす”）を娶ったとされ、“天照国照”の様相である。

その天稚彦が新嘗祭を執り行っていたが、新嘗祭は葦原中国の王が行う神事だから、天稚彦が葦原中国＝ヤマトの祭司王だったことを暗示している。しかし、高皇産霊神の投げ返した矢によって天稚彦は死んでしまった。高皇産霊神

は6：(4)で記したように、正史に於いて不比等と重ねられ、不比等が高天原に君臨する権力者であることを誇示した象徴である。ならば、海部氏・尾張氏の皇統が不比等によって絶たれたことを暗示している。

そして、味耜高彥根が天稚彦に生き写しだったことは、皇統がそっくりそのまま、秦氏に移行したことを暗示している。また、天羽羽矢はニギハヤヒとニニギにも与えられたものだが、最初に降臨したのがニギハヤヒで、その後がニニギである。この場合のニギハヤヒは天照国照尊と習合されたニギハヤヒで物部氏の象徴であり、ニニギは秦氏の象徴である。この関係が、高天原から使わされた天稚彦＝ニギハヤヒに代わって、地上で友人だった＝本来の天神ではなかった味耜高彥根が天に昇ったことにより天神になった、という構造に反映されている。

しかし、日本書紀の一書では“味耜高彥根の装いは立派で、2つの丘と2つの谷間の間に照り輝いていた”とある。ここでは、下照姫が味耜高彥根の妹となっており、次のような歌を詠っている。

“天なるや 弟織女（おとたなばた）の頸（うな）がせる 玉の御統（みすま）の穴玉や み谷 二（ふた）渡らす 味耜高彥根神”

天の織女の首に掛けられているいくつもの玉よ、そのように麗しく、谷2つに渡って照り輝く味耜高彥根神よ、という内容である。谷は神蛇の長さを意味し、“2”が強調されているのは蛇の輝く目だからである、と吉野裕子氏は言う。日本書紀では、雄略天皇が三輪山の神を見たいと言いだし、大蛇を捕獲してくるが、その目がランランと輝き、恐ろしくなって山に返した、という逸話がある。その三輪山の神は大物主神であり、大物主神は出雲の沖で大海原を照らしていたから、海照＝天照である。ならば、この味耜高彥根神の姿は大物主神に重ねられ、妹が下照姫で、兄妹で“天照国照”となる。

また、織女は天神に捧げる機を織る女神の天照大神を象徴するが、その原型は卑弥呼とトヨで海部氏の女王であり、玉も海部氏の象徴だった。

すなわち、この場合の味耜高彥根は海部氏を象徴していると言える。そうすると、前述では、味耜高彥根が天稚彦に生き写しだったことは、皇統がそっくりそのまま秦氏に移行したことを暗示している、としたが、ここでは天稚彦の蘇りが味耜高彥根で、ヤマトに於ける不老不死伝説の大元、海部氏を象徴していると言える。

このように、天稚彦は海部氏・尾張氏で一致しているが、味耜高彥根は秦氏の象徴になったり、海部氏の象徴になったりしている。では、味耜高彥根はどこで祀られているのだろうか。そこに、本質を知る手掛かりがあるのではないかと。

味耜高彥根は葛上郡（かつらぎのかみのこおり、現在の奈良県御所市）の高鴨阿治須岐託彦根命（たかがもあじすきたかひこねのみこと）神社＝高鴨神社で祀られている。その由来は以下の通りである。

(http://www.genbu.net/data/yamato/takagamo_title.htm 参照。)

“祭神は味耜高彦根命（大国主命の御子神）である。本神社をもって延喜式に記載の「高鴨阿治須岐託彦根命神社四座」にあてている。「出雲国造神賀詞」の中に「大穴持命の申し給はく、皇御孫命の静り坐さむ大倭国と申して……己命の御子阿遲須伎高孫根命の御魂を、葛木の鴨の神奈備に坐せ……皇御孫命の近き守神と貢り置きて……」とあって、国津神である。大田田根子の孫、賀茂積命がこの神を奉じて、代々、賀茂（鴨）氏が祭祀に当たったが、続日本紀の天平宝字 8 年（AD764 年）11 月の条に「昔、大泊瀬天皇（雄略天皇）葛城山に狩し給ふ。時に老夫ありて、毎に天皇と獲を争ふ。天皇これを怒りて其の人を土佐の国に流す。先祖の主る神、化して老夫となる。ここに放逐せられる」という経緯があったが、子孫の賀茂朝臣田守と兄法臣円興の奏言によって、淳仁天皇の同年月の 7 日に、再び土佐から戻して再興されたと伝承されている。葛城系の神は荒ぶる神である。本神社は別名として拾篠社・上津賀茂社とも言われ、また本神社を高鴨、葛木御歳神社を中鴨、鴨郡波神社を下鴨とも呼んでいる。”

「出雲国造神賀詞」には、“大穴持命＝大己貴神の御子、阿遲須伎高孫根命＝味耜高彦根命”とある。そして、大物主神を祀った大田田根子の孫が味耜高彦根を祀ったのが創祀だから、結局、味耜高彦根は大物主神系＝海部氏系なのである。

また、4：(2)で記したように、古事記では雄略天皇が葛城山に登った時、天皇に対して「私の一言で吉事と凶事も決まる葛城の一言主大神だ」と言い、天皇は臣下の刀や矢、衣服を献上して拝んだ、とある。この一言主大神は大物主神＝天照国照尊であるが故、天皇は拝んだが、ここに登場する“老夫”は天皇と獲を争い、追放されてしまった。海部氏系は異形の者とされることが多く、大物主神も荒ぶる神だから、この“老夫”も海部氏系、大物主神＝天照国照尊と見なし、祀られている阿治須岐託彦根命は大物主神である、と見なすことはできる。

しかし、“鴨”とされていることからすると、ニギハヤヒ＝徐福が天照国照尊と習合されてしまったように、ここでも味耜高彦根が大物主神と習合されてしまっている可能性は十分考えられる。それは、味耜高彦根という名称が暗示している。4：(1)の猿田彦で記したように、天照国照尊＝大物主神と同一の場合、“大神”と称せられ、別格であることを象徴しているが、“味耜高彦根”にはせいぜい“高”が含まれるだけであり、他に何か強い証拠（象徴）が無い限り、天照国照尊＝大物主神と同一と見なすことはできない。“葛城系の神は荒ぶる神”ということで、一見、大物主神と一致しているように見えるが、記紀の記述に合わせた作為である。葛城には、徐福系もいたことを忘れてはならない。

このように、祀られている神社の由来を見ても、秦氏による作為が大いに疑われるが、葛城との関わりが伺われ、徐福系が絡んでいる可能性がある。そのため、味耜高彦根の真相については後述する。

なお、味耜高彦根と天稚彦はそっくりだったが、そっくりだった人物が関わる逸話としては、他に武内宿禰の話がある。武内宿禰は弟の甘美内宿禰（ウマシウチノスクネ）の策略により、応神天皇に讒言された。そこで、天皇は武内宿禰を殺そうとしたが、彼にそっくりの真根子という人物（“真似”であることは言うまでも無い）が代わりに自殺し、武内宿禰は朝廷で身の潔白を証明できた。これなども、海部氏と関わりの深い（大王）武内宿禰と瓜二つの人物が宿禰を救ったのであり、話の構造は同じである。そして、甘美内宿禰は甘美韓日狭に通じ、彼が兄の出雲振根を裏切った構造が、甘美内宿禰が兄の武内宿禰を裏切ったことと同じである。どうやら、この甘美韓日狭、そして飯入根、言い換えれば、伊理泥王が容易に神宝を秦氏に渡したことが元になっているようであり、それは①の結論と一致して矛盾しない。

また、一面、不老不死伝説をも象徴しているが、大己貴神と少彦名神の話でも不老不死を象徴しているものがある。それは、伊予国風土記逸文だが、少彦名神が亡くなってしまい、大己貴神は湯を浴びせて蘇生させた、とある。これは、大己貴神＝海部氏が不老不死に関わっていたことを暗示するものである。

(2) 葛城とカモ

出雲の話が葛城の話となってしまったが、実は出雲にも直接“カモ”の足跡（そくせき）があり、出雲風土記では“葛城の賀茂の社に坐す阿遲須枳高日子命（アジスキタカヒコノミコト）の神戸（かんべ）があり、それ故にこの地を“鴨”と言い、後に“賀茂”に改めた”とする。つまり、葛城と出雲は味耜高彦根で繋がっているのである。これは、葛城と出雲がいずれも海部氏の領地だったことからすれば、何の矛盾も無い。

では、何故、秦氏の中核である“鴨”とされるのか。古事記には、味耜高彦根神が迦毛大神（カモノオオカミ）とも呼ばれていた、とあり、“カモ”は元々は“鴨”ではなかった。“カモ”は古語としては“カム”と同義で、アイヌ語などからも“カム＝神”だから、カモ族とは神族のことで、本来の天神族＝海部氏のことである。それを、秦氏に乗っ取られてからは“賀茂”とされ、乗っ取った秦氏は鳥の“鴨”であり、八咫鳥である。あるいは、鳥族の八咫鳥に因んで“鴨”としたとも言える。だから、“葛城の賀茂の社に坐す阿遲須枳高日子命の神戸に因んで“鴨”と言い、後に“賀茂”に改めた”というのは逆で、真相は“賀茂”から“鴨”にされたのである。これなども、出雲が他とは逆である一例で、「合わせ鏡」である。

(3) 蘇我氏との関係

このように、出雲と邪馬台国の葛城は味耜高彦根で繋がっており、神話上では、出雲も葛城も抵抗勢力として描かれている。それは、出雲が海部氏一族だからに他ならない。しかし、海部宮司は、出雲は容易に国譲りした功績で扱いが良い、と言われ、事実、出雲国造の位階が約2年で7階上昇しており、朝廷＝秦氏の意向に素直に従った出雲、という構造が見える。それは、4：(1)⑫で記したように、日本書紀の飯入根が海部氏一族の日子坐王の子、伊理泥王に該当し、容易に神宝を秦氏に渡した功績により、伊理泥の子孫は後に出雲を与え

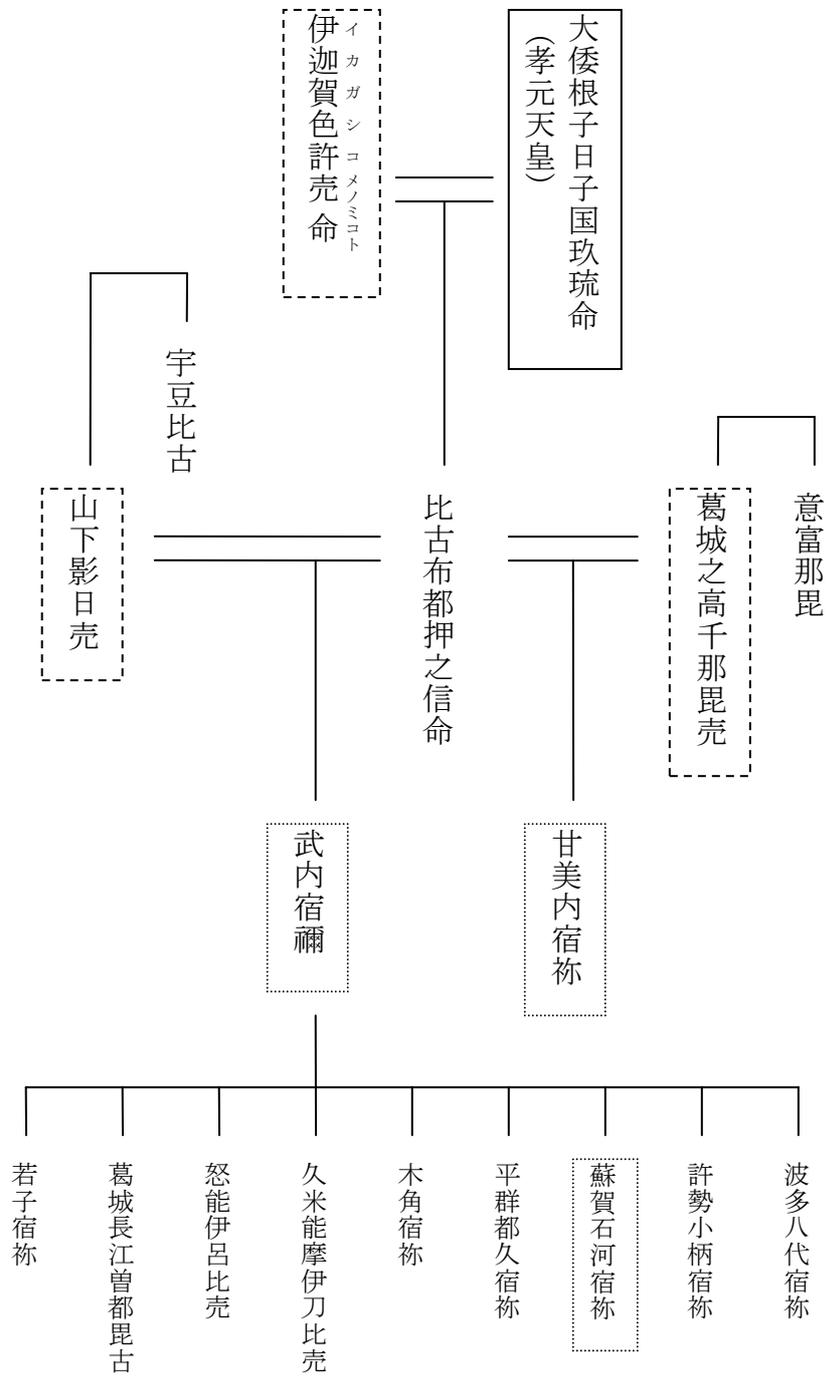
られたと考えられるが、ここで更に詳細に考察する。

味耜高彥根の話は武内宿禰とその弟、甘美内宿禰の話に類似しているが、弟の名に“ウマシ”がある。飯入根の弟は甘美韓日狭でやはり“ウマシ”を含む。伊理泥王の娘は丹波阿治佐波比売命で“アジ”を含み、味耜高彥根は“アジ”を含む。どうやら“味が旨い、旨い味”と掛けているようであり、それは食事のことで、御饌に他ならない。伊理泥王＝飯入根も“飯”で御饌である。ならば、豊受大神の象徴である。そうすると、甘美韓日狭の子の鷗濡淳に“ウカ”が含まれることも同義である。つまり、味耜高彥根、武内宿禰、飯入根、そして伊理泥を結ぶ“ウマシ”“アジ”という言葉は、豊受大神を象徴する重要なキーワードであり、いずれも海部氏を象徴しているのである。

特に、武内宿禰と甘美内宿禰の系図上の関係は興味深い。正史では異母兄弟とされ、孝元天皇の子、比古布都押之信命（ヒコフツオシノマコトノミコト）の子とされている。武内宿禰の母は山下影日売（ヤマシタカゲヒメ、兄は宇豆比古）、甘美内宿禰の母は葛城之高千那毘売（カツラギノタカチナビメ、兄は意富那毘）だが、5：(3)の最後にまとめた本来の皇統からすれば、真相は意富那比命＝武内宿禰で、妹が葛木高千名姫命である。そして、意富那比命の亦名は彦国玖琉命だが、孝元天皇の諡号は大倭根子日子国玖琉命で、すなわち、意富那比命に他ならない。つまり、正史の系図は創作であることは言うまでも無いが、卑弥呼が存在した9世孫の時代を暗示しているのである。だからこそ、武内宿禰が卑弥呼をモデルとした神功皇后に仕えたことにされているのである。

さて、物部氏の伝承を記録した先代旧事本記に依ると、“ヤマト建国後、王家の儀式などはニギハヤヒの子の宇摩志麻治命（ウマシマチノミコト）が定めた”とあり、ここでも“ウマシ”である。天照国照尊を隠すために秦氏によってニギハヤヒが天照国照尊と習合されてしまったことからすれば、この宇摩志麻治命は、神宝を朝廷に渡した甘美韓日狭を象徴していると考えられないだろうか。ヤマト（大和朝廷）建国後に王家の儀式を定めたということは、物部氏の中でもそれなりの限られた血統であることを暗示し、容易に朝廷に従ったからこそその見返りである。それに最も該当するのは、王家の儀式＝祭祀を司ることができる血統、すなわち、海部氏一族でありながら、容易に朝廷に従った飯入根、甘美韓日狭、鷗濡淳の血統に他ならない。これは日本書紀で出雲の話とされているが、系図では伊理泥王とその兄弟として暗示されている。（ならば、ニギハヤヒは日子坐王に相当し、ここでも“習合”により海部氏の血統が隠されることになる。）そうすると、秦氏が確立した大和朝廷の中枢部に、王権を剥奪されたはずの海部氏一族がいたことになる。

これは、5：(4)で記したように、秦氏が海部氏から王権を奪った後も、大陸は未だに丹波王国の王を倭王と見なしており、天智・天武に至る時代まで、鎌足一不比等の秦氏系大王と、海部氏系の大王の継承争いが続いていたことと矛盾しないどころか、裏付けることとなる。



その大和朝廷を取り仕切るようになったのは鎌足一不比等だが、それまで中枢で政治の実権を握っていたのは明らかに蘇我氏である。中でも、見えない聖王、推古天皇を補佐して栄華を誇っていた蘇我馬子こそ、当時、大陸から倭王と見なされたアメタリシヒコの正体で、聖徳太子のモデルとされた。大和朝廷初の女帝たる“推古”とは“古を推し量る”ということで、卑弥呼の時代と同じような状態であることを暗示する。それは、卑弥呼と男弟の関係であり、卑弥呼は姿を見せず、実質の政治は男弟が執り行っていたことで、推古は姿を見せず、政治はアメタリシヒコたる蘇我馬子が司っていたことと重ねられる。

その蘇我氏は、系図上では武内宿禰の子孫とされており、前述のように味耜高彦根、飯入根、伊理泥との関わりを暗示する。また蘇我氏自身は、葛城氏の子孫だと言っているが、＜日本の真相4＞で記したように、葛城氏は徐福一団の系統であり、中でも徐福直系あるいは始皇帝の直系あるいは縁者系と考えられる。そして、4：(1)⑫では意祁都比売命＝袁祁都比売命という伊理泥の母方の血統は純粋な海部氏・尾張氏ではないが、極めて重要な一族であることを暗示しており、徐福あるいは始皇帝縁者の血統、もしくは、海部氏と共に渡来してきたフェニキア人の一族と考えられた。ならば、伊理泥の母方の血統が徐福あるいは始皇帝縁者の血統であり、伊理泥もしくはその兄弟の末裔が蘇我氏であれば、すべて辻褃が合ってくる。

よって、蘇我氏とは、海部氏の大王家に徐福あるいは始皇帝縁者の女性が嫁いで生まれた子、すなわち、伊理泥もしくはその兄弟の末裔と言える。先に示した正史に於ける系図では、武内宿禰の子として蘇賀石河宿祢が挙げられているが、“蘇賀”であり、それが転じて“蘇我＝我、蘇る”となったのだが、それは取りも直さず、蘇我氏の祖は“不老不死＝復活”の妙薬を求めてヤマトの地にやって来た徐福一団を象徴していたのである。

この伊理泥兄弟は秦氏によるヤマト乗っ取りの際、抵抗することなく容易に従った功績により、出雲を与えられ、子孫は朝廷で政（まつりごと）に携わることができた。（この際、実際に神宝を渡したのではないであろうことは、5：(3)で記した通りである。）

また、正史の系図では、伊理泥王の娘、丹波阿治佐波比売命が伊理泥王と兄弟の大筒木真若王と結婚し、その何代か後には神功皇后となっている。神功皇后は秦氏の初代天皇である応神天皇の母である。つまり、容易に秦氏に従った功績により、正史に於ける系図上で天皇家の祖であることを暗示されているのである。

そして、蘇我氏と出雲の関係は、実は出雲大社に隠されている。解るところに堂々と隠すことが、カッパーラの常套手段である。出雲大社本殿の背後（北側）には、大国主神の父あるいは祖神のスサノオを祀る素鷲社（そがのやしろ）がある。古代に於いて、漢字は当て字だから、読みが重要である。ならば、これは“蘇我”を暗示している。本殿は容易に国譲りした大国主神、その裏の素鷲社は本来の出雲の祖神であるスサノオを祀るが、これは、容易に国譲りしたのが実は素鷲社で象徴される蘇我氏（の祖）であることを暗示しているのであ

る。それは飯入根、甘美韓日狭、鷗濡淳の血統であり、正史の系図では伊理泥王の血統に他ならない。

このように、蘇我氏は海部氏に徐福あるいは始皇帝縁者の女性が嫁いで生まれた伊理泥もしくはその兄弟の末裔と言えるが、そのキーワードは“ウマシ”“アジ”であり、豊受大神＝海部氏を象徴する。6：(2)で記したように、蘇我氏が擁立した推古天皇の和風諡号は豊御食炊屋姫尊で、豊受大神とトヨの“豊”と神の食事“御饌”に関わること、すなわち、トヨが祀った豊受大神を暗示する。そして、推古天皇という漢風諡号“古を推し量る”という意味と共に、卑弥呼とトヨが原型にあって、推古天皇は海部氏の血統で、祭祀に深く関わっていることを暗示している。他にも橘豊日天皇（用明天皇）、豊聡耳（聖徳太子）、豊浦大臣（蘇我蝦夷あるいは入鹿の別名）、推古天皇の宮は豊浦宮、天豊財重日足姫（皇極天皇）など、蘇我氏全盛時代には“豊”を冠する名称で溢れている。

つまり、容易に秦氏に従った海部氏一族の伊理泥王の血統は蘇我氏となって牽制を振るったが、裏切ったわけではなく、祭祀としては海部氏のものを連綿と継承していたのである。海部穀定氏は、外国に対抗するための中央集権国家確立、と言われているが、秦氏と一時的でも協力し合わなければ、せっかく統一されたヤマトは再度分裂の危機に陥り、容易に外国勢に攻め入られたことを危惧してのことである。それは、王権は秦氏が取り仕切っても、古代から続く祭祀を司ることができるのは特定の血統で、海部氏一族でなければならなかったからである。故に、容易に従った伊理泥王の血統＝蘇我氏を重鎮として扱ったのである。

しかし、このような扱いは、抵抗していた海部氏一族に対する暫定的なものであり、最終的にはすべて秦氏が牛耳るよう、計画されていた。そして、鎌足－不比等により、その計画は達成されたのである。日本書紀は不比等によって編纂され、蘇我氏は宿敵だった。通説のように、蘇我氏が渡来系豪族ならば、その祖を明示して不比等らは罵倒したであろう。しかし、そのような記述が見られない、言い換えれば、それができなかつたことは、蘇我氏が“書くことを躊躇されるほど正統な一族”だったからに他ならない。蘇我氏の祖を明示すれば、不比等らが政権を奪うことなどできなかつたからである。

そして、海部氏一族は抵抗者、横暴な者、異形の者などとして陥れられ、天神から崇る国津神へと落とされ、導き者とされ、豊受大神＝天照国照尊と卑弥呼、トヨを祀る神宮は、都の管轄外、関所の外に出されてしまったのである。

国造りの話に於いても、海部氏・尾張氏は貶められている。それは、大己貴神と少彦名神の話である。播磨国風土記では、大己貴神と少彦名神が争ったといい、荷を背負って遠くへ行くことと、糞をせずに遠くへ行くこととどちらが辛いかを競ったという。“糞”と言えば、思い浮かぶ話が2つある。1つは、海部氏由来のスサノオが高天原で糞を撒き散らしたこと。もう1つは丹塗り矢伝説で、三島湊咋（ミシマノミゾクヒ）の娘、勢夜陀多良比売（セヤダタラヒメ）が川で大便をしている時に、大物主神が変身した“真っ赤な丹塗り矢”が陰部を突き、持ち帰って床の間に置くと、夜になって矢が元の姿に戻り、大物主神

と勢夜陀多良比売は結ばれ、後に神武天皇の皇后となる富登多多良伊須須岐比売（ホトタタライススギヒメ）が生まれたことである。大物主神は海部氏の象徴であり、いずれも海部氏・尾張氏が“糞”として貶められている。

(4)伊理泥王の時代

では、伊理泥王の時代とはいつのことなのか。正史では日子坐王の子になっているが、勘注系図で日子坐王＝彦坐王を亦名に持つのは13世孫・志理都彦命である。この命の次の世代は14世孫・川上真稚命で、亦名が彦田田須命である。正史に於いて伊理泥王と腹違いの兄弟に丹波比古多多須美知能宇斯王がいるから、この丹波比古多多須美知能宇斯王が14世孫・川上真稚命のことであり、よって、この命の時代の可能性が濃厚である。そこで、その妥当性を検討する。

4：(1)⑬で記したように、13世孫・志理都彦命の時代に海部氏と尾張氏に分家し、14世孫・川上真稚命の時代に海部氏が格下げされてヤマトから移動させられ、その後の15世孫・丹波大矢田彦命の時代には祭祀もヤマトから丹波へと遷され、同族の尾張氏は16世孫・尾綱志理都岐根命＝尾綱根命の時代（AD353年よりもやや後）に尾張に移動させられたことからすると、既に14世孫の時代には徐々に秦氏が渡来してヤマトに入ってきて来たことになる。そして、天孫本紀尾張氏系譜の本来の皇統が12世孫・建稲種命で切られていることが示すように、本来の皇統はそこまでで、13世孫・尻綱根＝志理都名根命＝志理津名根命の時代に秦氏が渡来し始めて、影響を与え始めたということを暗示している。

つまり、秦氏に依る“国譲り工作”は13世孫・志理都彦命の時代に始まったのである。

そうすると、秦氏に依る“国譲り工作”に加担したのは、ヤマトに残っていた葛城氏ということになる。葛城氏は徐福の系統で、純粋な海部氏の血統ではないから、そのようなことができたのである。徐福は秦の始皇帝の命を受けて渡来した。秦帝国は失われた十支族、あるいはバビロン捕囚後にペルシャに残って移動した南ユダ王国の末裔、あるいはその両者の混合と考えられるが、同じ“秦”を名乗る秦氏の正体を知ったことにより、容易に改宗して従ったのだろう。そして、物部氏から秦氏になったのである。10世紀半ばに成立した義楚六帖（ぎそろくじょう）という書物にも、徐福の子孫は蓬萊の地に留まって秦氏となった、と記されていることは、このことを意味している。

その時の葛城氏の長が、伊理泥王として象徴される人物なのだろう。そして、その子孫が蘇我氏である。蘇我氏が、葛城氏の子孫だ、と主張していたのは、こういうことなのである。

正史では、飯入根の時代に神宝が朝廷に献上されたことになっているが、実際に献上されたわけではなく、秦氏への権力移譲を暗示していることは5：(3)で記した通りである。ここで見方を変えれば、神宝＝息津鏡・辺津鏡がヤマトから丹波に移動したことを暗示しているとも解釈できる。それは、15世孫・丹波大矢田彦命の時代である。では、飯入根＝伊理泥王の時代とは、13世孫・志理都彦命～15世孫・丹波大矢田彦命のどの時代と見なすのが適切なのか。

14 世孫は“川上”という姓を名乗らされ、大王だったものの、ヤマトではなく丹波に葬られたから、この時点で既に秦氏がヤマトで権力を振るい始めていたことになる。ならば、神宝の献上＝秦氏への権力移譲は、やはりそれ以前の13 世孫の時代に始まった、と見なすべきである。

以上のことから、伊理泥王の時代とは、13 世孫・志理都彦命の時代である。

(5) 勘注系図に於ける徐福

① 勘注系図に於ける徐福

蘇我氏は海部氏に徐福あるいは始皇帝縁者の女性が嫁いで生まれた伊理泥もしくはその兄弟の末裔と言えるが、そのキーワードは“ウマシ”“アジ”であり、豊受大神＝海部氏を象徴する。そうすると、勘注系図で天香語山命の弟とされる可美眞手命（ウマシマデノミコト）に注目しなければならない。この命は、前述のニギハヤヒの子の宇摩志麻治命のことで、日本書紀に於ける名称である。古事記では宇摩志麻遲命、先代旧事本紀では宇摩志麻治命あるいは味間見命（ウマシマミノミコト）とされている。その先代旧事本記に依ると、“ヤマト建国後、王家の儀式などはニギハヤヒの子の宇摩志麻治命が定めた”とあり、これは徐福系の伊理泥王から蘇我氏へと至る系統であった。ならば、その大元と思われるこの可美眞手命こそ、徐福だと思われる。

記紀が言うところのニギハヤヒとは、天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊のことだから、本来は天照国照尊と饒速日尊＝徐福に分解される。天照国照尊を後に創り上げられた“ニギハヤヒ＝天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊”と見なせば、確かに可美眞手命はニギハヤヒの子と見なすことができる。見る立場を変えることによってこのように見なすことができるのだが、これを混同してしまうと、ニギハヤヒ＝天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊＝徐福＝可美眞手命となり、親のニギハヤヒと子の可美眞手命が同一となる飛鳥氏流の多次元同時存在の法則となってしまうので、要注意である。このように、天香語山命の弟とされている可美眞手命こそ徐福＝少彦名神と思われる。

しかし、可美眞手命＝徐福の渡来は海部毅定氏が言われるように、天村雲命の降臨の後だった可能性も否定できない。それは、後に徐福がニギハヤヒに、ニギハヤヒの子が宇摩志麻治命に、ニギハヤヒと天照国照尊が習合されたことに連動して、勘注系図も可美眞手命＝徐福を天火明命の子とした可能性は十分考えられるからである。4：(1)で記したように、勘注系図は江戸時代に丹波国造本紀を基に編纂され、国司の印が押されているため、秘伝とは言っても、ある程度公にできるよう、情報が錯綜しているように見られる部分もあるので、解釈には十分な注意が必要である。現に2：(11)c)で記したように、海部毅定氏も、ニギハヤヒの子の宇摩志麻治命が天香語山命の弟とされていることも間違い、と言われている。ならば、どのように考えるべきか。

飛鳥氏の聞いた八咫鳥の秘伝に依れば、徐福は最初に丹波に上陸した後、一旦秦に戻り、次は九州に上陸したという。ならば、徐福の最初の上陸を天香語

山命と言ひ、二度目の上陸を天村雲命と言っているようにも思える。

しかし、2：(4)で記したように、天香語山命とされるエフライム族のレビが先発隊として丹波に上陸し、適切な山を見出して、それを天香語山と見なし、太陽神である天照国照尊を祀る準備を整えた。その後、神器としてのアロンの杖を携えた大王が日向に上陸した後、丹波へと移動して合流し、天村雲命となったのである。だから、天香語山命と天村雲命の話は、徐福のことではあり得ない。

エフライム族の王権の象徴であるアロンの杖があったからこそ、徐福が最初に丹波に上陸した時点で、エフライム族の王族が既に渡来して来たことを確実に理解でき、それを始皇帝に伝え、再度渡来したと考える方が、よりすっきりしている。徐福は最初の渡来で海神と話をしたことになっているが、海神の象徴は言うまでもなく、海部氏である。“神”は皇帝よりも格上であり、それは取りも直さず、神器を携えたイスラエル人の王族が古代日本（丹波）にいたからに他ならない。

海部毅定氏は“ヤマトに於いて、天神の降臨が相次いで二度あった。最初の降臨は天火明命、天香語山命、天村雲命であり、少々経ってからニギハヤヒが降臨した”と言われており、天村雲命の重要性からすれば、おそらく、可美眞手命＝徐福は天村雲命の降臨後に、そして倭宿祢命がヤマトに移動する前に渡来して来たのであろう。そう考えるのが最も辻褃が合う。つまり、徐福＝可美眞手命は天村雲命の時代に渡来し、一旦秦に帰国した。その後、九州に再渡来した徐福は、狭義の意味（海部氏を除いて、という意味）の物部氏の大王ニギハヤヒとなって、一団を率いたのである。すなわち、最初に丹波に渡来した徐福が可美眞手命、九州に再渡来した徐福がニギハヤヒということである。

年代的には、秦は BC221 年に建国されて BC206 年まで続き、始皇帝は BC210 年に没したから、徐福は BC200 年代から BC100 年代に掛けて存在したことになる。その間に該当するのは天香語山命、天村雲命であり、年代的に矛盾しない。

しかし、このような“史実”が封印され、天村雲命の本来の伝を抹消すると同時に、天村雲命を祖とする大氏族＝海部氏・尾張氏の発祥を厳秘とされたことから、天照国照尊と饒速日尊＝徐福を習合して天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊とし、それに合わせて記紀を編纂、更に他の資料も改竄され、勘注系図では可美眞手命＝徐福が天香語山命の弟とされてしまったのである。

同様な系図操作は、熊野高倉下についても言える。海部毅定氏に依ると（2：(6)）、天香語山命が紀伊国熊野邑に入ったという天孫本紀の伝は本来の伝とは認め難く、実は主として物部連等の祖、ニギハヤヒ及び高倉下についての伝であり、天香語山命と高倉下との間には、特に注目しなければならないほどの必然性は無く、丹波国造氏の伝では別神とされている。だから、高倉下が天村雲命と兄弟とされているのは、後の正史の記述に合わせた作為である。熊野高倉下は熊野の山中で神武天皇を助けたことになっているから、ヤマトに入って行った天村雲命あるいは倭宿祢命の世代に相当する徐福の系統で、その時既にニギハヤヒがいたから、徐福と同じ時代、天村雲命の時代だろう。

また、海部氏伝系以外では、宇摩志麻治命＝可美眞手命はニギハヤヒが長髓彦の妹である三炊屋媛（ミカシキヤヒメ）を娶って生んだ子とされている。これは、どう解釈したら良いのか。

“炊屋”とは食事を煮炊きする所で、この場合は御饌を準備する所、という意味として解釈しなければならない。また、兄の“長髓”という名称は異形である。御饌を供していたのは海部氏で、海部氏の血統である推古天皇の和風諡号は“豊御食炊屋姫”であり、海部氏はしばしば土蜘蛛や鬼などの異形の者として描かれているから、実は“長髓彦”と“三炊屋媛”で海部氏を暗示している。（なお、ニギハヤヒを天照国照尊と見なせば、長髓彦は先住民の縄文人で、海部氏が先住民に入り婿して友好を結んだとも解釈できるので、ここには二重の意味がある。）

この場合のニギハヤヒは習合された天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊ではなく、徐福と解釈される。すなわち、徐福が海部氏系の女を娶った、ということである。その女は、系図上で見ると天香語山命の妹の穂屋姫命と思われ、天香語山命の義理の弟になったようにも思われる。しかし、前述のように、可美眞手命が天香語山命の弟とされてしまったことは系図の作為だから、徐福が娶ったのは穂屋姫命ではない。つまり、この話は徐福の真相を隠すために成されたものと言える。

穂屋姫命の“穂”は稲穂のことで、最も重要な神饌を象徴する。故に、天香語山命を異形の長髓彦とし、そこに三炊屋媛という妹を設定して、その三炊屋媛を穂屋姫命へと変えたのである。そこに、徐福を可美眞手命とし、天香語山命の弟（あるいは義理の弟）としたのである。

では、徐福が娶った海部氏系の女とは誰のことか。徐福は天村雲命の降臨後に丹波に渡来した。そして、天村雲命の娘に葛城出石姫命がおり、葛城氏は徐福の系統だった。ならば、この葛城出石姫命こそ、徐福が娶った女だと思われる。天村雲命の娘だから、最初に丹波に渡来した時ではなく、九州に再渡来してから娶ったと考えられる。この詳細については後述する。

②海部氏と徐福一団の関係、葛城氏

ここまでは、海部氏に徐福一団が婿入りした、としてきたが、本当にそうなのだろうか。徐福は丹波に上陸した後、一旦秦に帰国し、数年後に九州に再渡来して物部氏の大王ニギハヤヒになったことからすると、秦に帰国する前に徐福自身が丹波で婿入りしたことは考えにくい。ならば、徐福は前述のように九州に再渡来後、天村雲命の娘、葛城出石姫命を娶り、最初の丹波渡来時には、一団の中の他の者が海部氏一族と婚姻関係を結んだと思われ、それなりの（極めて始皇帝に近い）血統である始皇帝の縁者の男子が婿入りしたのか、あるいは女子が嫁入りしたと考えるのが妥当である。ここで、最初は単に友好関係だけを結んだとも考えられるが、一団を率いてきた頭領である徐福が、その後一旦秦に帰国している以上、帰国前に婚姻関係を結んで密接な関係を築いたと考えるのが妥当である。さもなくば、二度と渡来しない可能性があるからである。その婚姻関係の手掛かりとなるのは、天村雲命の2人の妻である。

天村雲命の妻には日向で娶ったとされる阿俣良依姫命と丹波の生まれの伊加里姫がいる。丹後風土記では天村雲命と伊加里姫の間には倭宿祢命（兄）と葛木出石姫が、阿俣良依姫命との間には天忍人命、天忍男命、忍日女命がいる。勘注系図では直系の3世孫が倭宿祢命とされているところを見ると、母としては伊加里姫の方が格上である。また、徐福が葛木出石姫を娶ったことからすると、伊加里姫の方が格上である。更に、丹後国風土記に依ると、伊加里姫は海部直等が齋き祭る祖神である、とされているから、やはり伊加里姫の方が格上である。その伊加里姫の素性は“丹波の生まれ”としか書かれていないから、単純に考えると、純粋な海部氏の血統のように思われる。

しかし、2：(4)で記したように、海部穀定氏は“ヤマトに於いて、天神の降臨が相次いで二度あった。最初の降臨は天火明命、天香語山命、天村雲命であり、少々経ってからニギハヤヒが降臨した。これは、古代に於いて、両氏族が相当深い関係にあったことを暗示している”と言われている。この“相当深い関係”というのは婚姻関係に相違無く、その子孫が大王の系統だ、ということだろう。そうすると、伊加里姫の素性は次のように考えられる。

- a:海部氏の女と、婿入りした始皇帝縁者の間にできた娘。
- b:始皇帝縁者の女、もしくは（存在したとしたら）始皇帝の娘。
- c:徐福の娘。（存在したとしたら。）

天村雲命は日向で阿俣良依姫命を娶った後、丹波にやって来て伊加里姫を娶った。そして、徐福一団は天村雲命が丹波にやって来てから丹波に渡来した。aの場合、徐福の渡来から20年ほど経ないと天村雲命との結婚は成立しえず、そうすると、伊加里姫との結婚が成立した時点で天村雲命は20年ほど歳を取っており、かなりの年齢差である。また、天村雲命は阿俣良依姫命との間にできた天忍人命と天忍男命と共に大和国に遷り、真名井の水を奉って元初の大神を祀っていたことからすると（2：(6)）、伊加里姫との結婚は遅すぎるので、aは該当しない。

bは、始皇帝には多くの子がおり、大陸の風習である朝貢の点からすれば、朝貢では多くの美女が差し出されたから、極めて可能性が高い。ここでは、始皇帝に敬意を表して、入り婿ではなく朝貢の形式を取った可能性が高いと思われる。

cであれば、支那の歴史書の史記などに記されていても良いはずだが、そのような記述は見られない。日本での徐福伝説に於いても、妻子を伴って渡来した、という伝説も無い。また、徐福が大王ニギハヤヒと見なされている以上、徐福は九州に再渡来してからヤマトで結婚して子をもうけたと考えるのが妥当である。

よって、伊加里姫は朝貢によって差し出された、極めて始皇帝に近い血統である始皇帝縁者の女であり、存在したとしたら、始皇帝の娘の可能性もある。そうすると、その娘の葛木出石姫は母方が始皇帝縁者の血統、父方が海部氏の血統であり、徐福は始皇帝一族でもあるから、徐福が葛木出石姫を娶ったとい

うことは、かなり信憑性が高いと思われる。徐福は（狭義の）物部氏の大王ニギハヤヒとなったから、このような血統の女を娶ることは、大王として相応しい。だからこそ、物部氏の大王ニギハヤヒとなった、とも言える。そして、その子孫が葛城氏となったのである。これまでも、葛城氏は徐福の系統と見なし、矛盾は生じていない。＜日本の真相4＞で記したように、葛城は“桂木”とも書け、桂は支那では月に生えているとされる想像上の木であり、“月”は始皇帝の血縁も含む徐福一団の象徴であり、“月”を連想させる“桂木”の読みから“葛城”としたのであろう。そうすると、徐福は葛城出石姫命を娶った時点で、天村雲命と義理の親子になったわけである。大王家と親子の間柄という親密な関係になったからこそ、徐福は蓬莱の地で王となった、と史記に記されているのである。この場合の王とは、1つは王族たる海部氏のこと、もう1つは、秦から率いて来た一団の大王ということである。

なお、徐福は少彦名神でもある。少彦名神については、(1)②で記したように、亡くなってしまった少彦名神に大己貴神が湯を浴びせて蘇生させた、とある。これは、徐福一団が海部氏に婿入りして一族となることにより、不老不死の奥義を知った、ということに他ならない。

対する阿俾良依姫命は、天村雲命が日向で娶ったので、大王・海部氏の女、あるいは同じエフラム族でも大王家ではない女と考えられるが、日向という場所、後の本宗は伊加里姫の子の倭宿祢命が引き継いだことからすると、大王家ではない女と思われるが、その子孫が勘注系図で名前が記されていることからすれば、やはり大王家だからこそ、とも思われる。徐福・始皇帝系との関係が重視されたため、本宗はそちらになった、とすれば、やはり阿俾良依姫命も大王家の女なのだろう。

③徐福と味耜高彦根

ところで、前述の記載では味耜高彦根の“アジ”、甘美内宿祢の“ウマシ”、甘美韓日狭の“ウマシ”、丹波阿治佐波比売命の“アジ”は豊受大神と海部氏を象徴しており、“ヤマト建国後、王家の儀式などはニギハヤヒの子の宇摩志麻治命が定めた”ことから、これらと密接な関係がある蘇我氏こそ、海部氏の大王家に徐福あるいは始皇帝縁者の女性が嫁いで生まれた子の血統と考えられた。そして、ここでは可美真手命こそ徐福のことであると推察された。

つまり、徐福に関係している者は“ウマシ”や“アジ”などを冠しているのである。ならば、味耜高彦根は実は可美真手命のことであり、徐福を象徴していると考えられる。

(1)②では、味耜高彦根は秦氏の象徴になったり、海部氏の象徴になったりしており、実像が良く解らなかつたが、味耜高彦根を祀る高鴨神社の由来から、天稚彦は海部氏・尾張氏の象徴で、味耜高彦根は一言主大神＝大物主神のようにも思われた。

しかし、味耜高彦根の話は海部氏の伝系ではなく、正史での話である。正史は秦氏によって創られたが、それは海部氏の本来の伝を隠すためである。その

ために成された根源的な変革操作は、同じ物部氏ということで、海部氏の大元の神である天照国照尊とニギハヤヒ＝徐福が習合されてしまったことである。ならば、味耜高彥根が天稚彦に習合されてしまっても矛盾は無く、味耜高彥根を祀る高鴨神社の由来はそのように書かれたと解釈できる。また、物部氏は後に改宗して（させられて）秦氏になった。徐福一団が物部氏であり、物部氏が秦氏になったのなら、場合によって徐福＝味耜高彥根が物部氏（海部氏）の象徴になったり、秦氏の象徴になったりするのにも納得できることである。

つまり、徐福＝少彦名神＝可美眞手命＝味耜高彥根≠一言主大神（事大主神）＝大物主神＝天照国照尊ということである。

では、徐福＝可美眞手命＝味耜高彥根ならば、天稚彦は誰に相当するのか。天稚彦の“稚”は“子供”という意味である。“天”は“天照国照尊”を意味するから、“天照国照尊の子”ということで天香語山命に相当する。2：(6)で天香語山を中心とする神々の宮殿、元初最高の神々の宮殿を天の少宮と称することを記したが、“アマノワカミヤ”に対して“アメノワカヒコ”となり、天香語山との関係も矛盾しない。そして、変えられた系図では天香語山命と可美眞手命は同世代となっており、記紀の逸話と矛盾しない。また、記紀に於いて、味耜高彥根が天稚彦の“生き写し”とされているのも、系図の操作が成されて天香語山命と可美眞手命が兄弟のようにされてしまったからである。

他にも系図の操作が影響しているのは、少彦名神と大己貴神に依る国造りである。徐福＝可美眞手命＝少彦名神ならば、共に国造りを行った大己貴神は天香語山命になってしまう。これも、正史の記述に合うように勘注系図を変えられ、可美眞手命を天香語山命の兄弟とされたからである。大己貴神＝大国主神の和魂が大物主神だから、大己貴神は天照国照尊である。名に“大、神”を冠することが何よりの証拠であり、“大、神”の間に入っている“己貴”は“貴い己＝巳＝蛇”なのである。

④徐福と田道間守

正史に於いて徐福の姿は、不老不死の妙薬を求めた田道間守に投影されている。田道間守は不老不死の妙薬を求めて常世の国に出かけ、橘を持ち帰ったが、橘は日本に古くから自生する植物である。つまり、徐福が不老不死の妙薬を求めて日本に渡来したことを「合わせ鏡」で示しているのである。そうすると、<日本の真相 4>で記した内容も再考しなければならない。

“田道間守や天之日矛＝天日槍は海部氏の祖であり、天日槍＝天之日矛＝ツヌガアラントは新羅建国に関わった海部氏縁の脱解王の子孫、田道間守はその子孫である。これは、スサノオが高天原を追放された後、檀国に降臨した逸話に反映されており、海部氏一族の者が新羅に渡って脱解王となり、その子孫である天日槍がヤマトに戻って来たことを象徴している。”

脱解王は新羅の第4代の王（在位はAD57年～80年）で、生年は不詳だが、没年はAD80年であることが判明している。（新羅という国の建国はAD356年とさ

れているから、この場合の新羅とは、BC2世紀末からAD4世紀にかけて存在した辰韓のことである。)だから、脱解王は倭宿祢命～建田勢命の世代の誰か(おそらく傍系)、ということになる。(ここでは、これ以上の手掛かりが無いので詮索しない。)また、5:(3)②で記したように、天之日矛は建田勢命以前の人物で、天村雲命もしくは倭宿祢命の時代に相当した。そして、田道間守＝徐福＝可美眞手命は天村雲命の時代である。そうすると、年代的には田道間守→天之日矛→脱解王となり、正史で記されているのとは逆の順番になり、これも「合わせ鏡」である。

- ・新羅国王－天之日矛－多遲摩母呂須玖－多遲摩斐泥－多遲摩比那良岐
－多遲摩毛理(タジマモリ)(正史での順)

つまり、新羅建国に関わった海部氏縁の脱解王の話が、高天原を追放されたスサノオが檀国に降臨した逸話に変えられ、更に脱解王の祖である田道間守や天之日矛は新羅王の子孫とされてしまったのである。正史に於いて、天之日矛が渡来したのは垂仁天皇の時代である。垂仁天皇の治世はBC29年～AD70年で、新羅という国は建国されていないから、天之日矛が新羅の王子ということはありません。

このように見てくると、天之日矛も脱解王も徐福が関係している可能性がある。再考しなければならない。なお、垂仁天皇の在位がAD70年までで、脱解王の在位末年とほぼ同じなのは、新羅から渡来したとされる天之日矛に関連付けて脱解王を暗示していると思われる。

⑤徐福と天之日矛

<日本の真相4>では天村雲命は天之日矛を連想させ、同一人物のようにも考えられた。

- ・天村雲命が降臨した高千穂にある天逆矛は「生命の樹」の象徴だが、“天への矛”ということで海部氏の祖である天之日矛＝天日槍を連想させる。天之日矛は海部氏一族であり、その姿はスサノオにも重ねられ、名に含まれる“槍、矛”は武器であり、スサノオが天照大神に献上した草薙神剣も武器で、同じ武器としての剣を象徴する天村雲命と大きな関連がある、あるいは同一人物とも言える。
- ・日本書紀では天之日矛＝都怒我阿羅斯等は但馬国の出石に至って定住したされているが、天村雲命に葛木出石姫という子がおおり、出石は丹後に近いことから、天之日矛と天村雲命の共通点が見出せる。
- ・天之日矛＝都怒我阿羅斯等が娘を追ってヤマトまでやって来たが、一説に依ると、娘は豊国の国前郡(大分県東国東郡姫島村)に行つて比売語曾社になったともいう。

ここまでの考察で、徐福は天村雲命降臨以降に丹波に渡来し、一旦秦に帰国した後、九州に再渡来して、天村雲命の娘、葛木出石姫を娶つたと考えられる。

そして、徐福の妻が葛城出石姫命ならば、“出石”に注目しなければならない。

天之日矛は娘（あるいは妻）を追ってヤマトにやって来たが、但馬国（の出石）に至り、そこで現地の娘、前津見（あるいは麻多鳥）と結婚した。これは、天之日矛を徐福、出石あるいは現地の娘を葛城出石姫命と見なせば、極めて辻褄が合う。また、天之日矛は7種あるいは8種の神宝を持参したとされているが、それらはいずれも海上の波風を鎮める呪具とされ、その中の奥津鏡＝息津鏡と辺津鏡は海部氏の神宝だから、天之日矛は海部氏に極めて関係の深い人物である。そして、これらの神宝は物部氏の十種神宝を象徴するから、正史で物部氏の大王とされているニギハヤヒ＝徐福が持つべきものでもある。このように、十種神宝という観点からも、天之日矛を徐福と見なすことは矛盾しない、どころか、見なすべきである。

すなわち、天之日矛は徐福であり、天村雲命ではない。天之日矛＝徐福が天村雲命のようにも思えるのは、天村雲命の時代に渡来し、天村雲命の娘を娶ったからである。また、徐福＝ニギハヤヒの東征が神武天皇の東征に似ており、徐福こそが神武天皇である、という説も、同じ理由に因る。天之日矛の逸話の“出石”と“神宝”こそ、天之日矛の真相を解明する鍵となっていたのである。そして、最初に丹波に渡来した徐福は田道間守、九州に再渡来した徐福は天之日矛として象徴されている。

やはり、正史に於ける天之日矛→田道間守という渡来順番は、実は田道間守→天之日矛という順番で、「合わせ鏡」で逆転されていた。ならば、元の新羅王とされている人物も徐福その人、あるいは徐福系＝葛城氏の子孫と推察されるが、新羅王に関しては海部氏の秘伝があった。それは、新羅建国に助力したとされる瓠公と、新羅王になったされる脱解王である。＜日本の真相4＞で記したように、三国史記では瓠（ひさご＝ひょうたん）を腰に下げて海を渡って来たことから瓠公と言われ、天のヨサヅラ（瓢箪（ひょうたん）＝瓠瓜の褒め言葉）に真名井の御神水を入れて供えたので、籠神社奥宮の古名の1つが“瓠宮”とされ、瓠公を象徴している。また、脱解王は“多婆那国”の出身とされ、これは丹波国＝邪馬台国の転じたものである。いずれにしろ、徐福の渡来時期と脱解王の年代から、瓠公と脱解王は倭宿祢命～建田勢命の世代の誰かである。天之日矛＝徐福は新羅の王子とされているから、脱解王は徐福の系統で、葛城氏であろう。瓠公は新羅王とはされていないから、海部氏であろう。

また、4: (1)⑫で日子坐王の勢力範囲は天之日矛のそれと良く一致しており、日子坐王と袁祁都比売命との間に伊理泥王がいる、と記した。この日子坐王は天之日矛＝徐福を意識していることは間違いなく、その系統に伊理泥王がいるということは、やはり伊理泥王は徐福系＝葛城氏だったのである。そして、その末裔は蘇我氏である。

秦氏に最後まで葛城で抵抗していた高尾張氏は尾張へ、海部氏は丹波へ移動したが、葛城氏＝徐福一団の中樞はヤマトに残った。そして、徐福一団＝物部氏は改宗して秦氏となった。天之日矛が秦氏と見なされることが多いのは、天

之日矛＝徐福だからである。徐福伝説のある所、秦氏の痕跡が多い。例えば、嵐山の桂川一体は秦氏の総本山だが、近くにある大酒神社には、秦氏の首長としての秦酒公、秦の始皇帝と共に弓月君が祀られているが、それは始皇帝の血縁も含む徐福一団の象徴であることは<日本の真相3>でも記した。これは、容易に従った徐福一団が秦氏になったことにより、後から渡来した原始キリスト教徒の秦氏が徐福縁の地に赴き、同じ“秦”を冠する始皇帝に縁を関連付けたためだろう。それは、徐福が求めた“不老不死”をイエスの“復活”と重ねたからであり、物部氏の真相、とりわけ海部氏の真相を隠すためである。

物部氏の真相を隠すのは、物部氏が多神教の影響を受けたユダヤ教徒、秦氏が原始キリスト教徒で、イスラエルの全支族が日本に集結しているから、というのは飛鳥氏の説で、これはある意味、正しい。しかし、すべての根源はシュメールにあること、そして、万世一系とされる皇統が、実は途中で変えられていることが本当の理由である。

ここまでの成果を踏まえ、再度、本来の皇統と年代を一覧表にまとめ、その後、これまでの内容をまとめる。

正史に於ける皇統			本来の皇統=海部氏系譜				
代数	直系	年代(誕生-崩御)	実年代	代数	直系	兄弟姉妹	傍系
-	瓊瓊杵尊	-	-	-	-	-	-
-	火遠理命 (日子穗穗手 見命 山幸彦)	-	BC300年以 前?	祖神	天照国照尊 (皇受大神 天之御中主神 国常立神 彦火火出見 彦火明命=天火明命 大物主神 天照大神 スサノオ 大己貴神 一言玉大神 彦田彦太神) 天香踏山帝 (武位起命 天稚彦)	-	-
-	涿限建鸕草 薮不合命	-	BC200年 代?	1世孫	-	穗屋姫命	-
初代	神武	BC711 - BC585	BC200年 代?	2世孫	天村雲命 (天五十稻命 天五多愿命)	徐福=可美真手命 (田道間守 天之日矛=天日槍 ニギハヤヒ 味耜高彥根 少彦名神)	(熊野高倉下)
第2代	綏靖	BC632 - BC549	BC100年代?	3世孫	熊宿祢命 (天御降命 珍彦=字豆彦 糠槌彦彦)	葛城出石姫命 (夫:徐福) →葛城氏の祖	天忍人命 天忍男命 忍日女命
第3代	安寧	BC577 - BC511	紀元元年~ 100年	4世孫	笠水彦命 (字分水彦命)	-	天登目命 (天忍人命の子) 建鸕草命 (天忍男命の子) 建登米命 (天登目命の子) 建簡草命 (建鸕草命の子)
第4代	懿德	BC553 - BC477	紀元元年~ 100年	5世孫	笠津彦命 (字分津彦命)	-	-
第5代	孝昭	BC506 - BC393	紀元元年~ 100年	6世孫	建田勢命 (建田背命 清日子 玉手見命)	宇那比姫命? (天造日女命 大倭姫 竹野姫 大海靈姫命 日女命)	建田小利命 (建登米命の子) 葛木高田姫命 (建登米命の子)
第6代	孝安	BC427 - BC291	100~200年	7世孫	建諸隅命 (建日淵命)	大海姫命 (豊玉姫命 大倭久遠阿禮姫命)	-
第7代	孝靈 (大日根子 彦太孁尊)	BC342 - BC215	100~200年	8世孫	倍得魂命	大倭姫命 (倭迹迹日女千々姫 天彥姫命) 葛木高千名姫命 (建真若姫命 屋宇止女 八坂振天伊呂逸命) 乙彦命 日女命=卑弥呼 (倭迹迹日百襲姫 日織) 玉織山背根子命 若津保命 瀧津世襲命 (日本武尊)	-
第8代	孝元 (大倭根子日 子国玖瓊命)	BC273 - BC158	248年 卑弥呼没	9世孫	意富那比命 (大海宿祢命 意富那比命 彦国玖瓊命 武内宿禰)	大海宿祢命 (倭迹迹日女命) 豊船入姫命 八坂振天其津命)	-
第9代	開化	BC158 - BC98		10世孫	乎縫命	大海宿祢命 (倭迹迹日女命) 豊船入姫命 八坂振天其津命)	安波夜別命 (乙彦命の子) 大原足尼 (豊津世襲命の子?)
第10代	崇神 (御間木入彦 五十瓊殖 御尊国)	BC148 - BC30	237年~ 297年	11世孫	小登與命 (御間木入彦命)	日女命=トヨ (稚日女命 小登姫命 豊原姫命 豊秋津姫命 宮宮姫命 日神荒魂命 玉依姫命)	-
第11代	垂仁	BC69 - AD70	237年~ 297年	12世孫	建福稚命 (彦太孁尊命)	(宮宮姫命)	-
第12代	景行 (大足彦忍代 別)	BC13 - AD130	237年~ 297年	13世孫	志理都彦命 (彦坐王 大足彦命)	尻綱根命 (志理都名根命) 尾張志理都岐刀彦命 高原張氏	伊理洞王?
第13代 第14代	成務 仲哀	AD64 - AD190 (成務) AD ? - AD200 (仲哀)	300年~ 413年	14世孫	川上真稚命 (川上麻須命 道主命 彦田田須命 大難波宿祢) AD615:丹波へ移動	竹野姫命 (川上麻須姫女 大倭姫)	知加麻彦 (尻綱根命の子)
第13代 第14代			300年~ 413年	15世孫	丹波大矢田彦命 (朝廷別王)	川上出石別命 川上日女命 (日靈新姫 竹野日女命 大甲日女 八小止女 大海姫)	古利命 (知加麻彦の子)
			300年~ 413年	16世孫	丹波国造大意岐命 (大捕殺命) AD353:大蛇退治	-	尻綱志理都岐根命 (大意岐命の弟) 尻張へ移動
第15代	応神 (実尊の妻氏 初代天皇)	AD200 - AD310	413年~ 428年	17世孫	丹波国造明国彦命	-	尻張連弟彦、他 (尻綱志理都岐根命の 子 or 弟) 尻張氏
			428年~ 451年	18世孫	丹波国造建德熊宿祢 海部直へ降格 玉稚移護	-	尻張金連、他 (尻張連弟彦の子)

- ・カモ族とは神族のことで、本来の天神族＝海部氏のことである。それを、秦氏に乗っ取られてからは“賀茂”とされ、乗っ取った秦氏＝八咫鳥が“鴨”族である。
- ・“ウマシ”“アジ”は味耜高彦根、武内宿禰、飯入根、そして伊理泥王を結ぶ、豊受大神を象徴する重要なキーワードであり、海部氏と婚姻関係を結んだ徐福一団の系統＝葛城氏を象徴している。その大元は可美眞手命＝宇摩志麻治命＝味耜高彦根＝徐福である。
- ・蘇我氏は、海部氏の大王家に徐福あるいは始皇帝縁者の子孫の女性が嫁いで生まれた子、すなわち、伊理泥王もしくはその兄弟の末裔であり、伊理泥王の時代とは、13世孫・志理都彦命の時代である。
- ・蘇我氏は牽制を振るったが、海部氏を裏切ったわけではなく、祭祀としては海部氏のものを連綿と継承していた。
- ・出雲大社の素戔社は大國主神の父あるいは祖神のスサノオを祀るが、実質は容易に国譲りしたのが蘇我氏（の祖）であることを暗示している。
- ・天村雲命の渡来後に徐福が丹波に渡来した。この徐福が田道間守である。その後、一旦秦に戻って九州に再渡来した徐福は、ニギハヤヒと名乗って物部氏の大王となり、天村雲命の娘の葛城出石姫命を娶って葛城氏の祖となった。この徐福が天之日矛である。つまり、徐福＝田道間守＝ニギハヤヒ＝天之日矛＝少彦名神＝可美眞手命＝味耜高彦根である。
- ・葛城出石姫命の母、伊加里姫は極めて始皇帝に近い血統である始皇帝縁者の女であり、（存在したとしたら）始皇帝の娘の可能性もある。
- ・味耜高彦根に対する天稚彦は天香語山命に相当するが、それは系図の作為に因る。
- ・瓠公と脱解王は倭宿祢命～建田勢命の世代の誰かで、瓠公は海部氏、脱解王は葛城氏であろう。
- ・徐福一団＝物部氏は改宗して秦氏となった。天之日矛が秦氏と見なされることが多いのは、天之日矛＝徐福だからである。容易に従った徐福一団が秦氏になったことにより、後から渡来した原始キリスト教徒の秦氏が徐福縁の地に赴き、同じ“秦”を冠する始皇帝に縁を関連付け、徐福が求めた“不老不死”をイエスの“復活”と重ねた。

9：かごめ歌

このように、古代日本の真相が明らかとなった以上、再度、かごめ歌について見直さなければならない。〈日本の真相3〉では次のように解釈した。

<かごめ歌>

かごめ かごめ

籠の中の鳥は いついつ出やる

夜明けの晩に 鶴と亀がすべった

後ろの正面 だあれ

- ・かごめ：籠目紋は籠神社と伊雑宮の御紋。
- ・鳥：秦氏の象徴で、神宮の心御柱＝聖十字架。
特に、聖十字架の罪状板が封印されている、真鶴で象徴される伊雑宮。
また、籠神社に到着した聖十字架。
- ・鶴：秦氏＝失われていない二支族の象徴。
- ・亀：物部氏＝失われた十支族の象徴。
- ・すべる：統べる。
- ・後ろの正面：後ろ向きのアダム・カドモン＝神。

“奥義を守り抜いてきた日本の真実はいつ公開されるのか。その最たるものは、天照大神＝イエスの名が記された罪状板であり、聖十字架並びにユダヤの三種の神器がすべて日本に存在し、それを守り抜いてきたのが日本という国である。そして、物部氏（＝失われた十支族）の御神宝である草薙神剣が秦氏（失われていない二氏族）の最大にして最高の御神宝が封印されている伊雑宮の心御柱となって三種の神器がすべて伊勢神宮に揃った時、それが印となり、天照大神が降臨する。その時、誰もがその御姿を拝見することとなる。”

これは、聖十字架こそがすべて、という観点に基づいて考察した結果である。しかし、この解釈だけでは、何故、草薙神剣が伊雑宮に戻されて心御柱にならなければならないのか、と言う説明が弱い。確かに、本来の神宮が伊雑宮だから、とも言えるのだが、草薙神剣が木の杖だからという理由だけで、心御柱となり得るとは言えないだろう。また、飛鳥氏が聞いた海部宮司の発言を振り返ってみると、本来、かごめ歌は籠神社の隠し歌で、日本の国家成立に関わる重大な秘密が暗号として隠されているという。また、かごめ歌に登場する鶴は伊雑宮であり、亀は籠神社のことだという。そして、今回、ようやく心御柱の真意が判明し、古代日本に於ける大王家の真相も明らかとなったので、再解釈する。これまでの解釈と異なる点を記す。

・鳥

籠に囚われた鳥は自由が利かない。籠が籠神社の象徴ならば、鳥は籠神社に封印された極秘伝＝真相である。つまり、籠から羽ばたく鳥は、籠神社が明らかにする古代日本の真相である。また、その鳥は籠神社の藤祭り＝不死祭りが

暗示するように、不老不死の象徴、フェニックスの象徴でもある。その根源はイナンナである。

・鶴、亀

鶴が伊雑宮の象徴で亀が籠神社の象徴である。鶴は伊雑宮の由来に登場する、稲穂をくわえながら鳴いている真鶴のことで、亀は亀甲紋＝籠目紋で籠神社と伊雑宮の御紋である。いずれも海部氏の象徴だが、海部氏が最初から持っていた御神器はアロンの杖こと草薙神剣である。ならば、“鶴と亀がすべる＝統べる”とは、本来の神宮である伊雑宮に、本来の心御柱である草薙神剣＝アロンの杖が戻されて、アロンの杖が伊雑宮の心御柱となり、本来の神宮が復活するということである。また、それにより籠神社には息津鏡・辺津鏡が、伊雑宮にはアロンの杖があることになり、天照国照尊を祀るためにアロンの杖が奉じられた祭祀の原型も復活することになる。

よって、かごめ歌の正しい解釈は次のようになる。

“籠神社に封印されてきた日本の真相はいつ公開されるのか。公開され、世界に新たな光がもたらされる前、すなわち、新しい世界の夜明けの前に、本来の神宮である伊雑宮に、本来の心御柱である草薙神剣＝アロンの杖が戻され、アロンの杖が伊雑宮の心御柱となり、本来の神宮が復活する。これは、息津鏡・辺津鏡とアロンの杖が揃い、太古の神祭りの原型が復活することを意味する。それが印となり、天照国照尊＝シュメールの神々が降臨し、誰もがその御姿を拝見することとなる。”

秦氏に依る十字架の解釈は、後付け的要素に過ぎない。

10：その他の著書

今回調べたことを確認するために籠神社を訪れようと思ったが、忙しくて予定が立たない、とのことで、お会いして話を伺うことは適わなかった。しかし、本を2冊紹介して頂いたので、その概要を記す。

①中丸薫著、「日本人ならぜったい知りたい十六菊花紋の超ひみつ（ヒカルランド）」

内容は三部構成で、第一部はアミシャブのラビ・アビハイルらとの対談、第二部は自称・明治天皇の孫で牧師の小林隆利氏との対談、第三部は聖書研究家の久保有政氏のユダヤ関連記事そのものである。中丸の著書なので、内容的には如何なものか、とお尋ねすると、中丸の話はどうしても良いが、小林氏との対談内容の中で重要なことがある、と海部宮司は言われた。

小林氏は明治天皇の内親王、仁（しのぶ）の長男として名古屋で誕生したとされ、マルクス哲学を学んだ後、ナザレン神学校第一期生として卒業し、牧師を歴任している。現在は天皇家ユダヤ民族研究会の主宰である。しかし、公式

な記録には“仁”という内親王は存在していないこと、そもそも内親王が男子に名付けられる“仁”の字を関すること自体おかしいこと、そして、共産主義思想のマルクス哲学を学んでいることから、インターネットなどを調べてみると、やはり、詐欺師だのペテン師だの言われている。

海部宮司に依ると、この小林氏は中丸とは違って、正真正銘、明治天皇の孫だというのである。そこまで言われるのなら、この際、小林氏の真相は別にして、とりあえず購入して読んでみることにした。以下、その対談の中で重要と思われる事項である。

- ・明治天皇が天皇という立場で調べさせた結果、神道はユダヤ教の流れであり、後に入ってきた原始キリスト教に習合されたということ、母から散々聞かされていた。神宮はイエスを祀る。
- ・稲荷の元字は“伊奈利”である。“伊”は天地を繋ぐ人、“利”は人を利する＝高めること、“奈”の“示”にある“丁”は祭壇であり、その上の“一”は祭壇の上の生贄で、両脇の点は祭壇から滴り落ちる血を示している。そして、“大”は元々“木”という字で、それが省略されたものである。つまり、“奈”とは木に掛けられた生贄より流れる血が、祭壇の上の贖いの座に滴り落ちていた様を表した字である。つまり、十字架上のイエスである。
- ・南ユダ王国のユダの王族の一部とベニヤミン族の一部、エルサレムの祭司の一部すなわち中枢のレビ族の一団が、ソロモン・フェニキア船団によって大挙渡来した。

神道の元はユダヤ教で原始キリスト教に習合されたことは飛鳥氏も述べているが、ほとんどのキリスト教徒の場合、まして牧師という立場の人で、“原始”ということを使う人はまずいない。ならば、やはり秦氏は原始キリスト教徒と解釈して間違いないだろう。そして、“伊奈利”にも漢字のカッパーラとしてこのような意味が込められており、神宮にイエスが祀られているのなら、やはり十字架は存在するに違いない。何よりも、海部氏・尾張氏は最後まで抵抗したが、それは宗教の面での抵抗である。そこまでの抵抗というのは、秦氏の持って来た宗教が既存のもの（シュメールの影響を受けたユダヤ教）に対してかなり異質だったからであり、だが証拠となる物証があったからこそ、やむなく国譲りしたと考えるのが最も妥当で辻褃が合う。

注目すべきは最後の事項で、ソロモン・フェニキア船団によって大挙渡来したことである。海部宮司は、おそらくこの点を指摘されたのだと思われる。しかし、“ユダの王族”というのは間違いだろう。それはエフライム族であり、＜日本の真相 3＞では北イスラエル王国の王族のエフライム族がフェニキア人と共に海のシルクロードを通して渡来してきたのが海部氏だ、ということを書いた。北イスラエル王国はサマリアにあり、サマリアはフェニキアと隣り合って南側で様々な交流があり、言語も古ヘブライ文字はフェニキア文字とほとんど

同一だった。そして、フェニキアの語源はフェニックスに由来し、フェニックスは不死鳥フェニックスとイナンナの好物で「生命の樹」の象徴となったナツメヤシのことである。沖縄の遺跡に残されたフェニキア文字はフェニキア語とフェニキアの航海術に長けたエフライム族が海路で渡来したことを暗示し、フェニキアの語源たるフェニックスは“不老不死”を象徴しており、それが支那の東の海にある“不老不死の国”とされたのである。

そのエフライム族の王権の象徴はアロンの杖であり、草薙神剣として熱田神宮で祀られている。神器は特定の氏族にしか扱うことはできないので、草薙神剣＝アロンの杖が尾張氏の下にあるということは、尾張氏・海部氏がエフライム族だからに他ならない。そして、フェニキア人は海人族となり、その代表的な氏族が 4：(2) で記したように安曇氏である。同じ“カイジン”でも、海部氏は海神族で、海神＝アマカミ＝天神だから、本来の天神族である。

②久保有政著、「日本とユダヤ運命の遺伝子（学研パブリッシング）」

ユダヤと日本の関係についてである。およそ、これまでに述べてきたことと同じであり、その中で最も重要と思われるのが、天皇家にはエフライム族の血が流れている、という記述である。

久保氏は日本神話の系図とユダヤの系図から、ウガヤフキアエズがエフライムに相当するので、天皇家にはエフライム族の血が流れている、と主張している。これは<神々の真相 2>でも記した、ウガエフキアエズノミコトがユダヤの系図でエフライムに相当することである。しかし、それは現在の皇統のことではない。神武天皇は秦氏創作の初代天皇なので、ウガヤフキアエズはそれ以前の皇統の象徴と見なせる。すなわち、秦氏渡来以前の皇統＝海部氏はエフライム族だった、ということである。秦氏によって変えられた現在の皇統がエフライム族だとしたら、アロンの杖こと草薙神剣は、秦氏にとって最重要の下鴨神社や松尾大社に祀る必要があるわけだが、そうではなく、押さえ込んだ海部氏と同族の尾張氏の宮で祀られていることは、これを暗示している。

この 2 冊以外で興味深いのが、ホツマツタエの解説書である。

③池田満著、「ホツマ縄文日本のかたち（展望社）」

記紀編纂以前に伝わるホツマツタエという古文書の解説書である。これは海部宮司から紹介されたものではないが、興味深いことが書かれている。

・古代日本を治めていたのはアマカミと呼ばれ、第 8 代アマカミは男神アマテルカミである。父はイサナギ、母はイサナミで、(禊ではなく)イサナミから誕生した。妹はワカミヤ、弟はツキヨミと言う。

*ヤマトの基盤を確立した、勘注系図に於ける 8 世孫・倭得玉命のことと思われる。アマテルカミ＝天照神であり、本来の天照大神が男神だったことを示唆している。また、イサナギ＝イザナギ、イサナミ＝イザナミという名称を記紀に先駆けて使っている。

・アマテルカミの祖父はトヨケと言ひ、アマテルカミは丹波に祖父のトヨケを遣わした。その後、死期を悟ったトヨケは真名井で祠を掘り、自ら入滅した。

*トヨケとは豊受大神のことである。祠を掘って入滅したことは、祠にイエスが葬られたことを暗示している。

・アマテルカミは富士山から伊雑宮に遷都した。そして、滝原を禊の場とした。その後、アマテルカミの子のオシホミミは再び富士（箱根）へ遷都した。かつて、不老不死の植物は富士山にあったが、噴火で消失した。

*富士を中心としていたのは宮下文書などにも見られるが、蓬莱山ということで、そのようにしてあるのだろう。ここでは、神宮の始まりが伊雑宮だったことが重要である。

・太陽、地球、月は球体で、太陽は軽い星、月と地球は重い星である。太陽はとてつもなく大きい、月と同じぐらいの大きさに見えるのは、月が近く太陽が遠いためである。

*地動説が唱えられる以前から、このような天体に関する知識があった。シュメール由来だろう。

・宇宙の中心にはアモトという柱があり、そこから万物が生成した。その周りに9個の光が回っている。

*心御柱の根源と思われる記述である。

・大嘗祭の悠基殿は天、主基殿は地を表す。

*海部毅定氏の主張と同じである。

・オオクニヌシはアマテルカミに従わなかったが、オオクニヌシの子のオオモノヌシはアマテルカミに従った。

*オオクニヌシ＝出雲は海部氏に従わなかった、すなわち、秦氏にすんなり国譲りしたということである。あるいは、オオクニヌシは秦氏に従ったが、オオクニヌシの子のタケミナカタは秦氏に従わなかったということの「合わせ鏡」である。

つまり、記紀編纂以前のもので、記紀編纂後に改竄されているが、一部、古代の真相を暗示する記述がある。しかし、これだけを読んでいては、まったく解らない。

参考著書：

- ・海部毅定著、「元初の最高神と大和朝廷の元始」、桜楓社。
- ・安本美典著、「古代物部氏と「先代旧事本紀」の謎」、勉誠出版。
- ・熱田神宮文書、熱田神宮宮庁。
- ・熱田神宮朱鳥会（しゅちょうかい）記念誌編集委員会、朱鳥（あかみとり）
- ・熱田神宮文化講座資料「日本武尊—白鳥伝説—」、辻村全弘氏。
- ・荊木美行著、「古代天皇系図の世界」、燃焼社。
- ・石野博信著、「邪馬台国の候補地」、新泉社。
- ・仁藤敦史著、「卑弥呼と台与」、山川出版社。
- ・金久与市著、「古代海部氏の系図」、学生社。
- ・伴とし子著、「ヤマト政権誕生と大丹波王国」、新人物往来社。
- ・伴とし子著、「卑弥呼の孫トヨはアマテラスだった」、明窓出版。
- ・関裕二著、「「女帝」誕生の謎」、講談社。
- ・関裕二著、「伊勢神宮の暗号」、講談社。
- ・関裕二著、「出雲大社の暗号」、講談社。
- ・学研ムーブックス、ネオ・パラダイム ASKA シリーズ。
- ・中丸薫著、「日本人ならぜったい知りたい十六菊花紋の超ひみつ」、ヒカルランド。
- ・久保有政著、「日本とユダヤ運命の遺伝子」、学研パブリッシング。
- ・池田満著、「ホツマ縄文日本のかたち」、展望社。

初版：2011年7月

改定2版：2012年8月

改定3版：2013年1月